川柳塔

川柳塔

川柳雑誌・川柳塔創刊90周年記念句集

序

「川柳を始めて、まだ日の浅い私が伝統ある川柳塔の合同句集に参加してもいいのだろうかと迷っていましたが参加させていただきました」これは今回初めて参加して下さいました方の、お便りの一節です。先輩柳人の「私も参加しますからご一緒しませんか」という熱い一言が背中を押してくれたとの事でした。そして「七月の発行がとても楽しみです。私の宝物が一つ増えます」と結んでおられました。

私は、このお便りを拝見して、十年ごとの節目に発行する合同句集「川柳塔」の重さ、意義を改めて実感することが出来たのでした。

川柳雑誌・川柳塔創刊90周年記念合同句集「川柳塔」には、全国各地から七六〇名という大勢の皆様からご参加をいただきました。自選15句の重さは、未来永劫輝きを放ち続けることと私は信じています。

雲の峯という手もありさらばさらばです　路郎

大正13年2月に「川柳雑誌」を創刊した麻生路郎は、昭和40年7月に逝去、今年、祥月命日の7月7日に開催する路郎忌句会は50回忌にあたります。

路郎は、大空からいつも川柳界、川柳塔を厳しく、あたたかく見守り続けておられるのです。

川柳雑誌・川柳塔創刊90周年という、大きな節目の年に、合同句集「川柳塔」第六集を多くの皆様に支えられて発行出来ることは、本当に有意義なことだと心から感謝しています。ご参加戴きました皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成二十六年（二〇一四）五月　吉日

川柳塔社　主幹

小島蘭幸

もくじ

序　小島蘭幸…2
同人の部……6
一般の部……358
索引……779
おわりに　西出楓楽…780

同

人

西宮市

秋元てる

キャラメルは今も四角で老いも春
美学とかロマンとか男可愛らし
先ず窓を開けよう風が呼んでいる
何も彼も流れに任す花筏
石が好きゴロッと裸でそこに居る
カタカナはみんな英語と思ってた
花が散る亡き子を土に還す朝
母にとってありふれた死などは無い
笑うしかないから笑ってやり過ごす
縋り度い藁まで放射能汚染
とんがって見ても卒寿の金平糖
ロスタイムこの上望むものは無い
卒寿越え脚色なしで過去が言え
川柳が暮らしの横に居て呉れた
そこまでと友を送れば星流れ

弘前市

浅田隆樹

定年後御伽草子の旅に出る
定年を越えて広がる海と空

ふきの葉はきっと妖精知っている
竹の子の皮に誠意が試される

雑草の根っこ無事を訴える
りんごもぐひとつひとつの幸祈り

曲り角何かが変わっていてほしい
折り紙の山折り谷折り家族でき

錠剤がひとつふたつと余ってる
無意識に出るから訛り味がある

バス無言路線の秘密知っている
雪しんしん春の明かりも少し持ち

雪解けの水は素直な鎮魂歌
教会で七五三するよき日本

神仏に祈らぬ自分のことだから

高石市

浅野房子

しんがりを行くわたくしに敵はない
寄らば大樹されど雷には弱い
かもしかのような足なら組みなさい
ゆうゆうと遊び竜頭蛇尾となる
おわら風の盆なつかしい人みなあの世
ゲームする子供泥んこにはならぬ
この薬みんな止めたらどうなるか
百人一首覚えていると自慢する
わたくしの生家にもいるでかい蛇
お名前は出てこないけど元気かな
ハッピーな夢見た今朝は元気です
プロ野球みんな仲良くガムをかむ
塔まつりお声かけられ嬉しい日
朝蜘蛛がさっと上った瑞雲だ
ピアニッシモやがて私も消えて行く

西宮市　**足立　茂**

俺の手を刺したら虫が二日酔い
五百円サッと拾えばビンの栓
削られて脇役になる花がつお
食うものも食わずに貯金して寝込む
お前もか首が回らぬ扇風機
女性の歳ばっちり当ててにらまれる
盗るものがなくて隣へ行く空き巣
中トロが干からびていた四周目
言葉にも化粧しなさいお嬢さん
美人だからきっと私は早く死ぬ
拾うもの見つけておいてから転ぶ
呑ん兵衛と下戸の会話がすれ違う
呑み助と会うなと医者の処方箋
セレモニー汗はかかない胸のバラ
手加減があった昔の子のケンカ

枚方市

安達忠央

敵のない君に味方が作れない
クラス会きめてた席がごちゃごちゃに
たまたまの出会いからもう五十年
親離れした子無心に来てくれた
別居中ふと道で会い子の話
二十年ぶり再会したがまだ綺麗
旧友と会えば仕草で名前出る
会長の威厳ざわつきぴたり止み
肩書きがとれてゆっくりした気分
平和ボケ顎の骨から緩みだし
怒りたいことばっかりと今日も飲む
雨宿り恋が始まりそうになる
腹決めて押す連帯の保証印
どこまでの無理をするかのさじ加減
この辺で空気を読んで妥協する

橿原市

安土理恵

口紅が明るいですね恋ですね
花びらのまだはしゃいでる吹き溜り
うれしくて哀しくて買う花がある
引きだしの釦甘いの塩っぱいの
満開の春に私の場所がない
流刑地へつながれていく花筏
葉ざくらと逢う約束があったのに
ねじ花のねじれ拍手をしたくなる
淋しい日壺いっぱいに猫じゃらし
冷や二合一刻天下無敵なり
萩はこぼれてひとつの時代しめくくる
裸木もわたしも待っている　やがて
上向いていこうよ七十歳のちぶさ
どの色を足しても白に負けている
水は水色　気位はまだ捨ててない

奈良市

阿部紀子

久し振り逢ってとまどう梅雨晴れ間
歩道橋しか渡れない向こう側
金婚に個性豊かな孫五人
母が手を握り返してほっとする
川柳に出会い真摯に世を見つめ
るんるんと生きてる様に見せている
おしゃべりをピンポン出来る人が好き
本心を言えばどんなに楽だろう
黙々と働く父を見て育つ
アメリカの仕掛ける絵本目を瞠る
真心で人を愛したマンデラ氏
同じとこ笑える人が決め手です
ドラエモン百年先へ連れてって
活火山新島を産み親超える
玉三郎可憐妖艶藤娘

豊中市

安藤寿美子

生きてるかうんまあという電話口
決めるのは私責任はあんた
書きながら腹立てているお詫び状
反省はした事にして生きている
年金の成る木夫を撫でさすり
お小遣いやれやれ又かと声に出し
こいびとと割り勘で飲む昼の酒
間違うているけど楽しい答やね
葬式はケチっておけと言ってある
後追うて来たけど風が吹くばかり
化粧品売場でいつも無視される
プラス方向に向いた痛みだがまんする
日向ぼこ世のうつろいにかかわらず
不覚にも涙孫らにいたわられ
ひょっとしてここもうあの世やないやろか

鳥取市

池澤大鯰

貧乏ゆすり思考のリズム顔を出す
気が満ちるまでは動かぬ大鯰
伸びきったゴム紐はもうお役済み
お土産を配ってやっと旅を終え
素人の手造り細工頑丈だ
履歴から汚点が一つもう消えぬ
五百羅漢あなたのモデルどこにいる
頭越しされ俺は関係ないと不貞
腰掛けと言われた頃の椅子にいる
歌わないだけど聞くのはとても好き
百薬のひとつ晩酌つづけてる
古い殻脱いだら離婚したくなり
モロヘイヤ　オクラ納豆わが粘り
神社でも寺でも見れば手を合わす
人真似は嫌だいやだと智恵を出す

豊中市

池田純子

空き箱に合った余生を入れてやる
傘になるあなたは確か言った筈
粋なんて言われてみたい丸い顔
頬染めることだってある更年期
ペタンコの靴で心もリラックス
よかよかとあの人いつも暖かい
サングラスかけて怪しい人になる
祝い膳鯛も踊って焼かれてる
母親になって備わる底力
いいお顔撮ってるママもいいお顔
おっぱいとママが大好き六ヶ月
毎日のおーいはーいのある暮し
このハサミ頑固な父の音がする
日帰りで行ってみたいな亡母の日
生きるとは何よりスリルあるゲーム

出雲市

石倉芙佐子

逢いに行く雪はきららに一筋に
お正月きゅっと塩瀬の帯をメめ
つい先が見えない吹雪が悩ませる
春になったら獅子舞が来る小道
友一人あの東京へ行ったきり
朝日に夕陽出雲大社は神々し
咲いて散る命美し桜花
紋白蝶ひらひら何時でも一緒
子供のようにさらさら落す白い砂
金襴緞子の花嫁さんが泣いている
八十路今戦火の昔を夢に見る
お兄さんと呼んでた人は遠い空
くずし文字どこで止めよう筆の先
かな文字に上手に踊らされて居る
斐の川の水に流そう女の意地

橋本市

石田隆彦

偏差値で揺れた十五の初挫折
ときめきを求めて今日も一万歩
感動の台詞飲み込む一人旅
過去すべて洗い流して空の碧
生き方の自分らしさを問うお金
振り返る道にチャンスの枯れた跡
甘えたくてちょっといじわるする孤独
閃きが絞った知恵とけんかする
小遣いで自分労う縄のれん
伝統の味を守っている重石
十指みな豊かな語彙で語る手話
幾何学を学んだような蜂と蜘蛛
行進の手足直角甲子園
あの川がぼんやり見えた癌告知
まっすぐに生きて恥じらうものはない

鳥取県

石谷美恵子

ふる里の軸は日本海の幸
嬉しくて今日は違って見える海
神さまの情で少しずつ惚ける
餅を撒くまでは並んでいたモラル
存分に泣けと包んでくれた霧
刺したかも知れぬトッサに出た言葉
錯覚でないホラ花びらの数も合う
明暗へ神は無慈悲な賽を振る
生きている八百長らしきこともして
子を生んだ力が芯にまだ残る
黄金虫歌ほど金は貯まらない
出る幕のない勢いをもて余す
毒が効き心が痛まなくなった
許せない縄がすこしずつ緩む
いつもキラキラ心に海をもっている

松江市

石橋芳山

本棚の奥にたくさん並ぶ首
直立のままです羽を閉じてます
透明な話に色を塗りたがる
蹲いたようでガギグゲゴが刺さる
こんな時映画だったらぎゅっとハグ
向日葵の咲くころ俺はやや多情
どうしても目が行く薄暗いエロス
バンダナの中に淫らを包み込む
方法はどうあれファスナーを下ろす
屈辱に耐えて腐ってくるバナナ
足跡をたどれば袋綴じの中
狼を辞めて短く爪を切る
さてどれにしようか明日からの顎
分からない言葉に溺れてる金魚
実直に蟹の甲羅は耐えている

三田市

石原歳子

太らない菓子だと聞いて安堵する
長生きをしたくて今日も腹八分
故郷の訛こころの子守唄
子に負けて幸せ満ちる老夫婦
峰に着くまでにすることたんとある
黙もくと夫の掃除ありがとう
墓参りすみましたかと彼岸花
手探りでこども大事にして育て
年賀状の絶えたやさしい友思う
昼寝から覚めると田植終ってた
成り行きに任せ気持が楽になり
行くと言う返事に心ときめかせ
亡き夫が支えてくれていたと知る
梅林へ登って見入る瀬戸の島
心からお待ちしてると手紙書く

竹原市

石原淑子

はなびらの恥じらうように露天風呂
雛めぐり世紀を越えた佳いお顔
竹の街卒業証書竹の紙
魂の彩ぬりかえる草いきれ
噴火地震津波　地球の怒りおさまらず
惨状をうつすニュースに凍り付く
原発の怖さヒロシマの戦慄
ガンバレ日本　世界の熱意受けとめる
これからとことだまはがき　ひさいちから
放射線量添えて真心梨届く
生きづらい宙がえりでもしてみよう
再生紙夫へ恋文書いている
母の字の哀しいほどのむつかしさ
秘密保護五歳の口に戸を立てる
開けたら閉める出したら仕舞う母の声

神戸市　伊勢田　毅

五十年僕の太陽妻だった
祭壇の妻がやんわり釘を刺す
雨の日は遺影の亡妻と長話し
亡妻に似た後姿に従いて行く
妻が逝き最後を描けぬ白い画布
ファスナーの反抗老いが持て余ます
老いひとりコロッケ二つ持て余ます
まな板のくぼみ専業主婦の自負
百歳が老後不安と貯金する
拉致の母祈りは深い誕生日
虫眼鏡白寿が今日も株価追う
妥協策なるほど雑魚は雑魚の知恵
飲み友の電話に揺れる休肝日
ピエロの恋本気を誰も信じない
合掌の手からこぼれる罪の数

堺市

板尾岳人

キリンの死通天閣は毒舌だ
人間が怖くて空気食べている
冗談を焼いて食べるとずっと朝
水を入れると神秘な海になるコップ
おい乳房もう帰ろうか日が暮れる
じゃがいもの怒り八月十五日
人間を馬鹿だと思う人力車
ユーモアのわからぬ猫と棲んでいる
開けないで捨てて下さい火の手紙
悲しきや象に踏まれたリンゴの死
母の膝から区間快速発車する
長い長い塀の向こうで咲く薊
恋人の小さな乳房から便り
母からの手紙に川の音がする
ぼくをははうんこのように生んでくれ

橿原市　居谷真理子

つないだらカサリと母の手の軽さ
消えそうな母と大きな虹を見る
ホスピスをあたためようと陽が昇る
ジングルベル母がこの世にいてくれる
絶対という冷めたさよ亡骸よ
太きもので繋いで今日は母を焼く
お亡父さん今かあさんを送ります
天上の白は母なる人の骨
冬になる介護ベッドをかたづけて
お月様親なしっ子になりました
サワルナッ　コレハワタシノカナシミダ
死者の品格無駄な涙はこぼさせず
延命拒否これでよかったのね母さん
居士大姉父母がならんで見るこちら
化けてきて下さい月が綺麗です

可児市　板山　まみ子

目覚めたら先ず一回目ドッコイショ
とりあえず肝は大きくするつもり
考えはまとまらないが腹は減り
二年たちまだ仮設です三十万
飲兵衛の子には継がせぬ事にする
ひと言がまだ尾を引いてにらみ合い
五十年過ぎても夫宇宙人
最期の日物知りだとて解らない
年寄りは肉を食べよと言うテレビ
晩酌の一杯達者への褒美
愚痴言って少しの晴れと後悔と
富士山はビッグになって行きにくい
オリンピックきっと儲かる人がいる
百歳は楽しいだろか万歩計
ヤバイとはグッドの時もあるらしい

尼崎市

市坪武臣

お帰りと響く故郷の寺の鐘
満天の星が近くに居る故郷
相談事妻の意見がよく光る
四度目は私も首を横に振る
つり橋を渡った後に来るチャンス
ギブアップしない粘りが実を結ぶ
自慢げに梅雨の紫陽花七変化
蝉時雨今日も生きると鳴き叫ぶ
大車輪で働く蟻の冬支度
友の死を黙祷で知るクラス会
用済みの捨てるに惜しい千羽鶴
銀舎利は死ぬまで飽きることはない
人間の終着駅は軽い骨
ふる里に未だお袋が居る至福
富士よりもやはり故郷の桜島

藤井寺市

伊藤アヤ子

新しい暦に変えて待っている
除夜の鐘ついて御神で初詣で
予定表今年も生きるつもりです
そわそわと時計みつめる待ち合せ
昨日と違う今日が訪れる
口実が浮かばないまま家に着き
田舎から旬の野菜が届く頃
今頃は偉くなったか髭が生え
道端の花を摘んだら罪ですか
首並べ謝罪をすれば済みますか
パトカーが止まれとまれと追いかける
ワインなら少し飲めます私でも
謝ってすっきりとした胃のつかえ
柿ですよ仏様にもお裾分け
御近所のトラブルだけは避けたいね

大田市

伊藤寿美

試歩の杖陽の喝采に向き直る
哀しみを吊すやさしい樹を探す
雪柳うつむく癖がなおらない
口裏を合わせ同んなじ雨に濡れ
裏側のその裏側も濡れている
耳寄りな話が好きな蛇苺
苔むしてやっと一枚岩になる
心臓の周りで百舌が鳴いている
白萩の揺れる庭から逃げられぬ
去年より広いと思う庭を掃く
耐えている風の無い日の風車
マヨネーズもわたしも後に戻れない
傘立てにわたしの杖も入れてある
痛い程握り返してきた右手
ふところに切り札入れたまま笑う

出雲市

伊藤玲子

一色の闇の凄さを好きになる
スロースローあなたに解けてゆく時間
どじばかり深目の帽子欲しくなる
恋文のようなネクタイさしあげる
泣き笑い追いかけっこの男と女
あっさりと許して丸くなる氷
退屈なステッキ誘い浜辺まで
ふるさとは足の先まで癒される
青空になるまで絞り出す絵具
いくつもの柿を笑わせ陽が沈む
競うこと忘れだんだん色褪せる
思い出をたくさん置いて鳥が発つ
何ごともなかったように夜になる
黄昏れて振り返ること多くなり
片足で立てなくなったフラミンゴ

弘前市

稲見則彦

道化師の影は苦虫噛んでいる
所作よりも手首の輪ゴム気にかかる
料理教室おしゃべりの味笑い添え
青虫と折り合いつける半夏生
瓦礫から大樹たらんと発芽する
保護色になってぴったり妻のあと
よく笑う膝と仲良くする散歩
ラッパ飲み一度はしたい砂時計
ふる里の風を土産に差しあげる
嘘泣きを知っても母の手は温い
母と子の絆絵本の森にある
半解凍された言葉が喉を刺す
会釈され記憶の隅をつついてる
廃校の部屋から漏れるポロネーズ
缶切りがご用済みかと聞いてくる

守口市

井上桂作

なぜ生きるこんな毎日くりかえし
世界一老人国になりました
新しい老人像を大切に
美しく年とるように心掛け
長生きが歓迎されぬ世となりぬ
温暖化レコードばかり恐ろしい
朝夕の温度差なぜか多すぎる
雪まつりそれは昔のお話で
この寒さご老体には命とり
御堂筋銀杏並木吾が誇り
排気ガス人間様も多すぎて
ＴＰＰ誰が為になるこの会議
安倍イズム景気は如何物あがる
クリミヤを国盗りロシア今もなお
尖閣をロシアに習い盗るつもり

神戸市

井上じろう

男ってつらいよなただただ無言
男気が見て見ぬふりはできぬもの
もしもから花が咲いたり萎んだり
一日をおろそかにして楽隠居
憧れた晴耕雨読身につかず
初恋の娘は玉子顔お下げ髪
ただ一度父と鯉釣吾亦紅
へそ曲げてテコでも動かぬ山の神
薬より枝雀の話呵呵大笑
なにもかも水に流そう流したい
アイピーエス間に合う人と合わぬ人
ショットバー昔馴染みが消えてゆく
雲間から喪中葉書がやってくる
白骨に食わせてもらうドラ息子
一桁はびんた食ったが国背負う

高槻市

井上照子

知恵の輪がとけて安堵の胸なでる
忘れては娘に教えられ日を過ごす
薬また増えてみつめる生命線
川柳をねたに詐欺師の口上手
英語力ずば抜け国語話せぬ子
嫁姑愁眉開いてきた絆
災害の気ままに耐えた渡月橋
向学の青年時給の皿洗い
逆風に挑むランナー気骨みえ
土曜日を生かし学力高め度い
道問えば案外優し強面
検査入院生きる願いの麻酔薬
伝統の文楽よくぞ守られる
疑似針にかかる魚の目がうるむ
食器洗浄機奥さま趣味の絵筆とる

亀岡市

井上森生

孫たちが爺と崇める果報者
孫がアンパンマンなら爺はお釈迦さま
元気一杯武者震いして喜寿の春
しっかりと技術に生きた技術畑
頑張った昭和今ではエイリアン
体細胞六十兆の大神秘
日に一つホクホク気分に成る仕掛け
老熟の元気を創るのは馬力
念力かボケか不思議な明日がある
歩く快　天保山も富士山も
子育てが出来る良い国トキに雛
自分から褒めて元気になる仕掛け
憧れは泳ぎ続ける五月鯉
大空を力一杯呑むやる気
脱皮する蛇ならいつも新天地

高槻市

指宿千枝子

菜の花や比良のお山は雪帽子
銀髪に似合う帽子を買いました
足取りも軽く帽子と旅リュック
ゆっくりと古希の坂ゆく春帽子
目白きて梅の小枝でおらが春
脱皮して蛇は消息不明です
風を迎え風を見送る盆まつり
衣替えしたい猛暑のカラスです
秋夜長虫にも調子はずれが居
てっぺんから食べてにっこりモンブラン
りんご噛む入れ歯の値段高かった
御馳走は罠でも食べることにした
心配を止めたら羽根が生えて来た
臆せずに歩く自分の道がある
極楽はこんなものよと日向ぼこ

京都市

今井弘之

春ですねすらりと嘘が出て来ます
ひらひらと花びらのごと降る音符
娘三人コロコロ石も転げます
道端の石は賢い角がない
墨汁はへとへと紅葉の色が出ぬ
ダイヤの網に一つ幸福行きがある
グリム童話甘みを足して童歌
何色に染まりましょうか白い秋
街は暮れ苦い言葉を着て帰る
夜が更けて写真の父と語り合う
ヒーローは背中に台詞描いている
逃げ道を塞いで加齢追ってくる
ひそひそとそしてクスクス枯葉舞う
落ちるのは掟だろうか滝の水
そして秋長い話が始まった

八幡市

今井万紗子

落ち込めば自分に熱いエールする
被写体が決まったレンズ拭き直す
古傷は遥か宇宙に捨てて来た
元気かね福の神からくるメール
ゴールド免許夫を上手に捌けます
秋は悪戯母恋う虫がチチと鳴く
同窓会ちょぼちょぼに生き笑い合う
養命酒持って花見の客となる
桜舞う恋が始まるピンヒール
納豆の糸老人力を試される
六月の日めくりのまま母の部屋
おもちゃ箱に一つや二つあった夢
ピンセットで抓む程度の恋でした
万一に二　三個の顔洗っとく
今が華腕いっぱいに抱きしめる

大阪市

井丸昌紀

口だけは達者な母の背の丸さ
夕されば水も我慢し待つビール
迷い道頼む生駒は雲の中
酒ばかり達者になってゆく句会
歩を横に動かす人に敵わない
居酒屋に行ったとこまで覚えてる
短いが一番怖い黄信号
笑う時しっかり笑う事にする
毒少し混ぜてあります美味い酒
春の宵全部ピンチに見えてきた
禁煙は成功しかし五キロ肥え
大きい声出るかときどき確かめる
回らない独楽が一番よく喋る
帰り道だけは忘れぬ酔っ払い
春の宵書き出してみる母の恩

熊本県

岩切康子

鍛えれば元気になると信じてる
滝の音朝の散歩をかきたてる
参加者は減っても和む三謡会
夢実現伴う友の有難さ
髪染めて救急介護受講する
ハンドルが助けて呉れる楽人生
発表があるから作品熱が入る
突然に外食誘う愛ならん
一週後植えよと畑許可が出る
会いたがる危篤の友にプラン変え
頑固さと親切さ持つ親ゆずり
コスモスの囁きゆらら癒される
山の濁り黄砂の程度決める朝
検査後の夫の顔色見落せず
初詣で共に喜寿なる記念塔

岸和田市

岩佐ダン吉

体中の汗出し切っておりますか
水すらも作れぬヒト科核兵器
核のゴミ　ヒト科よ甘えすぎないか
ヒト科消すたった百個の核兵器
襟正し彬苦闘の日を思う
火を継ごう彬の句碑の前に立つ
前線の私はいつも傷だらけ
反省はするが俯いたりしない
まだ誰も歩いていない道を行く
人生の主役私と決めている
今ひとりやがては道になるだろう
ひとり言最後に笑うのは私
四面楚歌僕に失うものはない
振返る道真っすぐと思ってた
荒波は覚悟しっかり手を上げる

鳥取県

岩崎和子

プレゼント友から真赤バラの花
亡き友の手作り花瓶バラと合う
此の年でこんな疲れに亡母想う
ありがたい入浴できる夫と居る
笑ってよ今夜もきっといいお風呂
北国の九十二歳姉の声
鴛鴦の名にぴったりの二人集
句集読み夫婦のどかに時過ごす
猫二匹今日も家族の椅子を取る
二人共しばし長閑に猫と居る
草を抜くみみず蛙と仲良しに
草取りも済んだ広いね塀のなか
川柳塔まつり行きたい夢も消え
何故なのか容器に残る薬たち
飲んだのか飲まぬか忘れ夜になる

大阪市

岩崎公誠

ロボットの人工声はかしこまり
広い顔自慢で名刺ワイド版
軽々に許すというもひとつの手
弁解のささやき声にパワーない
長老の一語一語はいぶし銀
花の偉大天下をぱっと春にする
二次会をハーフで抜けてああしんど
何であれ明日もすぐに過去となる
ときどきは大声出してガスを抜く
世界遺産全部見たいとプラン樹て
人生はやがてやがての空回り
右脳は挑み左脳はまだ迷い
甘言を防ぐ耳栓持ち歩き
この続き会って話すという手紙
とは言うが人間脱皮難しい

竹原市

岩本笑子

愛は小出しに今日はミカンむいてあげ
縄電車いつか一人となる夫婦
車椅子の友が休みなさいと言う
花いくさ蝶々も蜂も隔てなく
二本目の虹を仕入れに行く所
命ふわふわ停留所から歩く距離
藍は藍なり川柳道という微熱
体重計まずポケットの小銭出し
病院へ行くバス一番先に乗る
満月を浴びるとかぐや姫になる
薔薇が咲いたから安心して眠る
タバコ税酒税夫は納税者
ふらり来て亡父は時計のネジを巻く
魔法使い一人位は知ってます
人生いろいろお金はあった方がいい

奈良市

岩本浩二

満月を千切り露天の湯に溶ける
お銚子の三本までが良い薬
バッカスと固い握手の嬉しい日
八十路越え五欲煩悩冷めやらず
傘寿過ぎまだ生臭い夢を見る
初夢はペガサスに乗り天翔ける
老い二人ピンコロ祈る初詣で
賀状来ぬ友に若しやの胸騒ぎ
葱刻む今朝のリズムは低気圧
親不孝悔いて位牌に詫びている
生き甲斐は優しい妻と趣味に酒
恙無く労り合って八十路坂
プライドがどっかと座る胸の隅
恙なくただ凡々と凡々と
記憶から消したい過去が離れない

和歌山市

岩本美智子

痛み痺れの苦行に耐える夜の底
眠剤の浅い眠りに母と逢う
スタスタと私が歩く夢の中
もうちょっと跳ねたかったよじゃじゃ馬は
クリスマスだった一人で苺食べ
入道雲よ隠れん坊はもうよそう
コーヒーの香りが甘い部屋にいる
亡夫にも新春(はる)を小さい鏡餅
送り火のゆらぎ夫の影を見る
椿ポトリ花の命が掌に重い
フリージャー咲いてわたしの春が来る
仕事した証しにしよう染みと皺
来てほしい来てほしくない友一人
小鳥舞うような琴の音春を待つ
終戦を忘れていないオスプレイ

三田市

上　垣　キヨミ

招福の神が宿っている胎児
春の音黄色い花の笑う声
小春の蝶も舞いくる乳母車
実る日を信じて明日の種を撒く
揉め事は馬耳東風にして平和
年金日以外は暇な貯金帳
ほんわかなニュース待ってる両の耳
母さんはカーネーションより娘の集い
薬より歩けと医者の処方箋
新米の尊い汗を盛る茶わん
夫逝ってから一本の強い芯
中心で旗振る母の道標
箸文化世界遺産のおもてなし
気休めはせめて師走の募金箱
平凡に生きて忘れぬありがとう

和歌山市

上田紀子

方円に従う水の優しさよ
はんなりと生きてみたくて香を焚く
生きてゆく平均点を貰うまで
一盛りにされた雑魚から這い上がる
童歌どの音符にも里景色
年金が生きているかと問いにくる
揺れる日も唯黙もくと皿洗う
こめかみに笑いの種を飼っている
水の音火の音動き出す今年
百歳が健康法をまだ学ぶ
花占い花は納得しましたか
投げ出した三日坊主を笑えない
翔ぶ勇気奇跡の風が背を押す
期待には及ばないけど出た勇気
腹の虫なだめ男のコップ酒

羽曳野市

宇都宮　ちづる

鶯も発声練習する陽気
満開の日に逝った母京女
絵手紙の礼状にするラ・フランス
滑走路閉鎖したのは鳥一羽
特上の笑顔でやって来る一歳
孫達が帰った後に風邪をひく
いつだって真剣ですよ親だから
子等の目が光るメロンの五等分
無口でも二人でごはん食べてます
足腰鍛えよう拝殿は遠い
百均で散歩私の暇潰し
据え膳が何より嬉し温泉地
古希までにボディースーツを買ってみる
目標を小百合に決めて磨く古希
なんやかやあっても終り良けりゃいい

八尾市

内海幸生

忠実な鏡にすこしも罪は無い
穏やかに今日も暮れたり幸せか
遠花火　株が暴落したそうな
何も彼もうまくいったら憎まれる
一遍は怒鳴って妻の言う通り
両掌からそれそれ今がこぼれるよ
一枚のハガキに貰う走馬灯
呑めぬなら死んだがましと言うた筈
足踏みをしても遮断機自若たり
神具買い値切る人がありますか
浮雲を眺めて飽きず考えず
昔むかし空気はタダで吸えました
額縁がすこし歪んでいる安堵
何のため生きているのと聞かれても
仏教のこころに遠く陽が沈む

紀の川市

宇野幹子

涅槃まで光り続ける好奇心
黙祷の両手に愛は無尽蔵
てっぺんに真実だけが辿りつく
前向きな花は大きな実をつける
生一本昭和の森が出られない
華やかな過去が浮いてる水たまり
人生のおごりは知らぬ野辺の花
煮崩れたカボチャよ母の失語症
泥ンこの両手で掴む宝物
通帳を揺すって明日の米を買う
かたつむり歩いた跡がしかとある
抜かりない加齢の鬼とせめぎあう
嘘八百書いても母は透視する
実が熟す紆余曲折の果ての果て
団塊の森がじわじわ枯れてゆく

大阪市

江島谷　勝弘

昭和史は美空ひばりが締めくくる
モミジの手アンパンマンに首っ丈
一度だけ当たってほしいジャンボくじ
生中は五杯が僕の限度です
あぶないぞ7を超えてる尿酸値
骨太ではないがよく太ってる
顔も手もお尻も皺が増えてきた
弱虫で泣き虫ですが本の虫
資本論学んだおかげ世が見える
電力は自然のエネに頼りたい
全力を出さぬアトがしんどいから
あほやなあ想いながらも火の中に
反論へ間合いを計る深呼吸
エイままよ裏か表で決めてやる
古稀ですが大器晩成信じてる

日の出

大阪市　榎本

百歳へ生きるつもりの好奇心
警官が居眠りしてる町に住み
幸せな国で質素に暮してる
長生きの秘訣時どき破ってる
これ以上飲めば尻尾が顔を出す
粗大ゴミの中にかくれているわたし
足の裏健康だけを先に知る
スッピンのママが天使の台所
本当の歳を知ってる影法師
どの色も青い空には無視される
ゆっくりと煮込めば母の味になり
句作りが長寿社会を造り出す
平凡が身につき磨きかからない
叱るよりほめる言葉を武器にする
あの世への土産と思う一行詩

大阪市

榎本舞夢

百貨店しみじみ惨めなる財布
流行の先端を行き風邪を引く
ピンチの時母さんヒョイと顔を出す
一遍に変るものなら変りたい
誘蛾燈のように衿を開けている
夢かしら数え切れない薔薇と金
宝籤お得意様に当らない
勉強が楽しいという変な孫
オーイお茶コップ差出すオママゴト
しがらみを上手に泳ぐ処生術
何事も素直引き受け寝込んでる
空席を目がけて座り周囲の目
たっぷりと可愛がられて花開く
この峠越えると私変ります
船降りてからが私の人生よ

枚方市

海老池 洋

筆洗う明るい明日を描くために
明日という味方が僕にいてくれる
幸せを刻んでいたい古時計
何時までも青くありたい影法師
温かい心で垣根低くする
本分を忘れて甘い唐辛子
玉葱の芯のあたりにある本音
雪の日は雪の心でいる余生
合掌の指から抜けていく迷い
故郷に時効にできぬ風がある
だんだんと祈る姿になる老後
水漏れのだんだん増してきた余生
もう殻に戻る日もないアブラゼミ
走馬灯すぎゆくものは風ばかり
戻れない道をどんどん来た夕日

豊中市

江見見清

ありがとうと言うならデカい声がいい
戦争の無い世を偶然に生きる
呑み込んだ言葉が意志を固くする
未来での想定外が嘲笑う
まれにしか起きない事だ我慢する
二度目からゆっくり読めるラブレター
監督をトイレに行かす凡プレー
正論が言える一兵卒だから
パッチワーク女の歴史ちりばめる
雪残る枝でウグイス鳴いてみる
投げてみたい石はあるけどもう捨てる
中立が孤独の閨で揺れている
八月は孫にイクサの事も言い
足の着く深さとわかり泳ぎだす
血に染まる遺品は残らない知覧

香芝市

大内朝子

一本の柱集うて編む句集
まん丸い石は苦労を語らない
淋しいと本音言うたら崩れそう
玄関を出るともう一人のわたし
心にもない毒舌を吐く孤独
福引きの欲を笑うてスカが出る
軽そうに重荷負っている笑顔
子を守る母の気迫に底がない
真心を贈るとまごころが返る
正直を軸にくったくない笑顔
ひたすらな努力で咲かす汗の華
ほんのりがやがて炎となる予感
老いてゆく鏡に耐えている試練
私とわたしが競い越えた山
生涯の友川柳よよろしくね

大阪市

大川桃花

化粧してやっとスイッチ入る朝
お出掛けのたのしみが減るまとめ買い
外からは見えぬ我が家の火の車
似たような日が続いてる日記帳
しゃあしゃあと言い訳できる歳になり
傷心の旅もあるだろエアポート
へそくりは背表紙見せぬ本の中
明日咲く蕾をもって母見舞う
もっと撫でてやれば良かった子の頭
手をつなぐ人居ないけど街に出る
おばちゃんが三人怖いものがない
ほらきれいと言えるからいい二人連れ
みたらしいへ顔突き出している晴着
好物も足りぬぐらいがちょうどいい
かけらでも心に浸みる思いやり

奈良市

大久保　眞　澄

泥臭く生きた余生はすんなりと
子に見せる背にアカンベとでも書くか
人間ドック元気な人の行くところ
本人がいた陰口の輪のうしろ
私にも流れてたんだイケズの血
ぜいたくは承知であたたかい便座
悪いことは悪い子供も年寄りも
けったいな人とゴチャゴチャして暮らす
文楽の余韻タコ焼き食べながら
活断層に原発勇気ある国だ
饅頭をチビチビつつくダイエット
運は天に家事は夫に任せよう
ふる里は戦争放棄した日本
服従はごめん並んで歩きます
手の甲が若作りからもれている

堺市

大隅克博

ひょっとして君が四つ葉のクローバー
日本人らしいおかずが減っている
アルコール抜けてる朝がほんまもん
水引きの色にあわせて化粧する
酒が酒飲む頃合に席を立つ
二度目から楽に出てきたこんにちは
日記には反省手帳には希望
拭く人の心も磨くお身拭い
書いてまた消したところにある本音
満たされぬ心を覆う欲の皮
ぽんと背を叩かれ正す前屈み
すまんなの気持を妻の背に注ぐ
腰痛が治ってからにしてよ咳
張替えは伝い歩きが済んでから
自転車に空気を入れて孫を待つ

吹田市

太田昭

日記にも嘘をちょっぴり書くお洒落
片意地を張って余生が削られる
人生の長旅の傘折りたたむ
母に言えぬ傷引き出しにしまい込む
あいまいな返事で子らを遠ざける
介護ロボット今から使い慣れておく
盲導犬言いたい事があるだろう
儲かると大阪弁が派手になる
五百羅漢なにを信じて鎮座する
母の背で春の日差しがあくびする
お互いにガタが来たなと酌み交わす
コーラーを飲むと戦後が漏れてくる
げんこつの中に鼓動を閉じ込める
ピンチには真っ赤な服を着て挑む
煩悩が消え寂しさに攻められる

藤井寺市

太田扶美代

髭ぼうぼう喋りたくない日がたまに
遺失物置場に父のこころざし
もう一度会っておかねばならぬ人
胸の奥そのまた奥も今日は雨
時計屋へ残り時間を買いに行く
パックから皿に移してうちの味
切ってやらねば喋りつづけているラジオ
いい天気隣りの犬にジャレている
薄物を纏い春を刺激する
目を閉じるずっと信じていたいから
初恋を何度も経験した椿
明日こそ明日こそはという灯り
自分の掌が汚れて見える眼を洗う
その日まで女でいたい薬指
影法師八頭身にしてくれた

吹田市

大谷篤子

この命賭けた主治医と生きている
地図のない人生ユニークに生き
急がずにローカル線で花咲かす
止まっては風を味方に歩き出す
笑い皺足して伸ばしてゆく寿命
しみじみと自分に腹を立てている
自分なり挑戦の欲ゆるめない
日本画の目刺し肴にワイン飲む
追い風にふらふら自分見失う
月も亡夫も覗いてくれる窓を拭く
レモン一切れ冬の時間を遊ばせる
なるようになると呪文で今日終る
星空を見上げて木馬夢を追う
登り坂誰れかが押してくれている
躓いてひょいと覗いた別世界

砂川市

大橋政良

カタカナ語ならべて親を煙に巻き
口紅の色を気にするお婆さん
この地図の裏に隠してあった疵
ライバルと妥協の風が甘くなる
品のいい老女と歩く風の街
てっぺんで支えてくれる人が居る
箸二膳酒がおいしい夕茜
土いじり土が私を呼んでいる
道を聞く少し訛が出てしまう
風の絵の中に心が描いてある
過去がまだ残っていますちぎれ雲
神ほとけ悪い奴ほど目をかける
忠告をされたところに灸をする
退化する心の疵が黒かった
この椅子に坐ってみたい貧乏神

西宮市

緒方美津子

休刊日金魚も口を開けている
杜若やさしき亡父の佇まい
栗の飯湯気も供えて亡母に秋
病気して夫黒子にしてしまい
泥水も気長に待てば澄んでくる
いいもんですね脱ぎ捨てた冬木立
青鷺が動くと命一つ消え
右膝を庇うとおこり出す左
長寿国裏で支えている入歯
マンションの四十階を買う若さ
托された達磨目を閉じてはならぬ
器量よしずんぐり肥えた芋かぼちゃ
免許証を返しあわててウォーキング
又来年きゅっと秋茄子濃紫
席あけてくれたお方がやっと下車

弘前市

岡本花匠

鞘当てのおとこを試す向かい風
花ごころ妻心得た花鋏
今日を謝し明日を祈り暦剥ぐ
永らえてこころの襞がまた増える
電話ボックスある路歩む万歩計
被爆者証保持で本音を語る友
乳母の傘きずなを太く耐えている
夕陽おがみ瞼の父母へ抱く慕情
ちちははの貌に似せてた筆ごころ
人生坂支えた影に内助の功
仏飯へ生きる真意を湯気に問い
雑魚なりに生きた至福の道歩み
延命の追い風と生き恵比寿貌
梅干しは我が家の宝津軽味
長寿考うまい食育皆笑顔

田辺市

岡本昇

三世代てんやわんやの一つ屋根
極楽へヒッチハイクで行くつもり
久し振り医者に手土産持って行く
飢餓の子がしっかり掴む割れ茶碗
ひたむきにウキを見つめる釣りロマン
リフォームに大黒柱邪魔になる
思い出を捨てかねゴミの中で住む
シンプルな笑顔私のおしゃれです
的を射て呼び名を変える四季の雨
世渡りに初心者マーク付けたまま
おいそれと立ち止れないピンポーン
亀だって池の中では抜き手切る
泥つけて返してくれた貸した顔
指先の勘で一ふりシェフの塩
おおらかに生きてこっそり逝くつもり

松江市

小川注湖

千人針母も昭和も遠くなり

憲法二つ時代を分けて生かされる

改憲論昭和史読んで夜が更ける

九条の光を捨てる論議聞く

昭和史に日本の進む道がある

ママの手で抱いて泣き止む子の五感

お節料理一番後にママの箸

洗濯機子どもの元気洗ってる

ミニスカート水着写真も持つ八十路

豊かさと競争してるダイエット

大福餅主治医が上に座ってる

腹八分言葉も八分いい管理

チャンネルを黄門合わせ待つ八十路

女房のスカート少し踏んでやる

その癖に慣れて許して共白髪

高知市

小川てるみ

笑顔っていいな鏡に褒められる
欲しいなあチンパンジーの記憶力
葱刻むリズムも主婦の自負がある
胎動へ空の青さを疑わず
産道の闇をくぐってきた天使
夢の中ふる里行きの汽車が出る
阿波踊り恋の余熱がまだ残る
逢うまでは胸の炎を眠らせる
笛吹けど届かぬ距離にいる絆
地に還る命をそっと抱いている
どうしょう腑抜けのままで喪が明ける
これからの話へ風もきて座る
程ほどの面子が老いの杖になる
いささかも恥じることない足の裏
終章の下絵はすでに描いてある

西宮市

奥田みつ子

雲と遊び風と語った恋いずこ
白牡丹白に徹して迷いなし
乾いた胸にみなの優しさ沁み透る
手捻りの亡兄の湯呑みのあたたかさ
ひとりの椅子高からずまた低からず
光より影のドラマに味がある
人いろいろ人面白し人怖し
生かされてさくら色にもブルーにも
独りにもみんなと同じ陽が昇る
花の道光る師の恩友の恩
陽に抱かれ風に抱かれて生きんかな
命ある句は出来たのか持ち時間
成るように成ると木が鳴る風が鳴る
残照見事生きるべし笑うべし
たおやかに舞い納めたし終の道

鳥取市

奥谷彩子

七十億の旅人乗せている地球
子が巣立ち開いたこぶし無をさとる
蕎麦の花男のロマン実を結ぶ
六根清浄野心を捨てて山登る
スランプを抜け出た毬がよく弾む
とても重いいのち壊れぬように抱く
結び具合たしかめ合っている絆
向い風選って翔び立つ子の宇宙
子に見せる背中だしっかりと磨く
いい予感にっこり笑顔すれ違う
何もかも許して丸い月が出る
惚け防止卒業のない米を研ぐ
人生パズル解く楽しみのある余生
薄紅葉人生秋にひと休み
草千里夫婦二つの点となる

堺市　奥　時雄

言われてストレス言えないでストレス
ウェットな僕だと誰も見てくれず
良心は小さくノーを叫んでる
当方も相席したい訳でない
ご近所の人と整骨院で会い
こっそりと来た人で混む泌尿器科
頼まれた方が難儀な安楽死
死んだなら酒のせいだと言われそう
明けぬ夜はないからと酒注ぎ足され
そろばんの塾だけだった良き時代
上の子に続いてみんな村を出る
ふるさとの柿は落ちるがままだろう
勤務地が終の棲家の里となる
千枚田拓いた人も見た夕日
着いたかと聞かれ歳暮の礼を言う

三田市

尾﨑一子

お月様人のこころも丸がいい
満開も散る桜にもある気品
たっぷりの人情継いで母になる
母になる幸せ色の妊婦服
初歩きしかとふんばる未来の子
抱きしめる抱きつく命温いこと
泣くたびに親子になっていく絆
震災の絆繋いでいく灯
里帰り母を彷彿さす姉妹
もう一度育ててみたい子沢山
やんわりと愚痴の相手も出来る歳
人間の正義と情を探る神
あれこれと欲は言うまい寺参り
朝もやの冷気さやかに吸う命
里山の大気に抱かれ眠る夫

高知市

小澤幸泉

不器用に生きて上手に死ねますか
主の前の絵踏み私は何者ぞ
手をかざし生きているなと確かめる
喜びも悲しみもまた主に仕え
生きてきてすべてを赦すデスマスク
雪深し老母のメールの幾度か
人生は今日に始まる未来形
十字架に神のユーモア見つけ出す
何処に生れここに死なんと我思う
ミスノンで消しても罪はすけて見え
終りなき今日を生きると歩き出す
人生は忘れるようにできている
空っぽな心に何が入るだろう
途中下車できぬ昨日を振り向かず
背いてもなお追いかける神の愛

札幌市

小沢　淳

好きなもの大事なものはそっと置く
発芽させ育たぬものを持て余し
僕の来た道を辿ると湿地帯
輪廻転生落葉は風を待っている
親の描く絵を抜け出した三輪車
吊り革に揺られて僕の現在地
とも角も屋根ある家に住んでいる
いくばくの道に肩の荷重くなる
理想論つぎつぎ生んだ無精卵
天界のリズムで四季が巡り来る
面白いこの世たやすく手放せぬ
人生のいくさに飽きた影法師
捨て切れぬものに埋もれていく余生
八十路には八十路の覚悟薬飲む
冬が来る長い手紙になりそうだ

横浜市

小野句多留

頑張れというから手術こわくなる
あの頃の妻は後ろにいたっけなあ
句にならぬ鉛筆ばかり尖らせる
家で呑む酒代なんかたかがしれ
無縁死にうかうかのってたまるかい
この橋は落ちると雪にいったはず
頭髪はどうなぞっても透きが出来
昼だけは外で食べてと言われてる
家事こなす安心ですのうちの人
安ければ飛びつく金はあるんです
大晦日なにもしないと笑う老い
認知症ボクに似ている点がある
暴飲暴食長生きしてる人もいる
一人居でくらせる今はまだましよ
没句にも句の魂は生きている

尼崎市

加川靖鬼

天国が透けて見えます絽の衣
ビフィズス菌肚の黒さも融けますか
一切れのレモンで丸くなる紅茶
寝ころんで流れる雲に乗った夢
青虫が試食してます無農薬
わたくしを三文判が保証する
成らぬこと成らぬと父の言うルール
背いても何時か目覚めるブーメラン
胎児からモーツァルトに慣らされる
赤ちゃんの握り拳にある未来
クリスタルガラスに詰めてある余白
昭和史に敗戦という断面図
関節が錆びてきたのか軋む音
丸い石静かに過去をふり返る
妻の掌の中でのびのび生きてます

堺市

柿花和夫

大口を叩いて酸欠に耐える
新聞の怖さ知ってる戦中派
昭和史の恥部に平和のキーがある
直線の国境に見る侵略史
街の灯をしみじみと見る負け戦
古里の土塀にもたれたい疲れ
空振りのジョークに浮輪投げてやる
取って置きのギャグに生徒が笑わない
一病と引き分けながら明日を編む
生き方と死に方習う友の通夜
生も死も一度限りという不思議
温泉に生首さらし生き返る
透明になるまでこだわりを洗う
引き際の美学に羨望の拍手
にっこりと妻が破った花名刺

寝屋川市

籠島恵子

さくら咲く平常心でいられない
春の下絵にいつも桜が咲いている
さくらからさくらで歳をとっている
文豪の泊まった宿で見るさくら
ひらがなで咲きひらがなで散るさくら
麦秋のころだったねと妹と
菖蒲園またこの人とここにいる
半夏生過ぎて漂う無常観
国境に感情線が二本ある
いつからかあなたの海が深くなる
ふるさとで拾った自分史の欠片
一線を引かれてわかる現在地
しあわせのかたちは汗をかいている
影法師ちょっと曲った影になる
ありがとうで躱しまたねで躱される

東大阪市

笠井欣子

川柳と言う武器もって元気出そ
ダイヤ婚で貰った湯呑み淋しげに
墓石が元気出せよと光ってる
喪のハガキ赤いポストに入れづらい
アイラブユー遺影に一寸おべんちゃら
なんば迄一寸旅行の気がします
積んどくがだんだん増えてつかれ気味
ハワイから来いと言われて若返える
大好きなお酒かかさず供えます
秋雨がなにか淋しい夕餉どき
杖なしでトイレ洗面行ける幸
ダイヤ婚済ませあの世へ早々と
葬送は自我の詩吟に送られて
大雷鳴知らずに眠り笑われる
白黒にこだわり三十路まだ一人

大阪市

笠嶋恵美

生きている明日の風が好きだから
念ずれば亡父の机がしゃべり出す
日に当たり風にも当たり老い磨く
反抗期私の中の小鳥たち
正直に生きて誰にも褒められず
贅沢に慣れて踵が返せない
ひとりでは妙にわびしいお弁当
カメラさんシワもきれいに写してね
終活に挑み景色が変わり出す
甘えるにもブレーキが要るギアも要る
後ろめたい介護まかせて行くツアー
現住所ここが私の理想郷
声がききたいメールは肌に合いませぬ
喜寿傘寿金婚生きて無事通過
ふわふわと生きてぼかしの色で咲く

河内長野市

梶原弘光

値切られて弱る伝統工芸士

怒ってる妻のうしろに虹が出た

ホームでも粋を演じていた親爺

バラバラの意見まとめて串に刺す

余りにも優しくされて怖くなり

幕が降りすっかり別の顔になる

教科書を避け弁当に飛ぶチョーク

美味しくはないが微妙な味と褒め

空泳ぐ夢を見たのでいい気分

小吉を引いて頷き合うふたり

長考のとどの詰まりは楽な道

育ジイを四人の孫が振り回す

旨いなあ一肌脱いだあとの酒

野良の手を休め飛行機雲を追う

稲刈りが済んで足向く散髪屋

和歌山市

柏原夕胡

尖って人を嫌いになっている
閉ざされた心にパーを出してみる
かさぶたがあちこちにある心です
元気出さなきゃと朝日を浴びている
笑ったら楽しくなるんだねきっと
わたくしを育ててくれた無駄なこと
ぽわーんと浮いて心を休ませる
サクラサクラわたしの春も遠くなる
これで良かったのか咲いてきたけれど
死ねるほど人を愛したことがない
女の翳りだろうか勘が鈍くなる
さみしい人おいで一緒に泣きましょう
ジャンケンポン何を出しても負けている
たっぷりと箍を緩めて生き延びる
どんな色にも染まらぬ白にならなろう

堺市

加島由一

ボクのいる場所が宇宙の芯である
どうしても地球を星と思えない
天の川借り切り君と月の舟
寄り添って覗く茶碗の大文字
身体には悪いが生きる価値はある
慕われるええ年寄りの修業中
まだ死ねぬ花もあなたも美しい
おしゃべりな恋人に似た金魚草
アウィーナに胸のときめく美女が来る
身勝手に思えてならぬかぐや姫
武闘派の嫁白馬から旗を振る
青くても檸檬は既に熟してる
路地奥におとぎ話の店がある
太陽と月の如くに妻と母
人は古希花は蕾の頃がよい

富田林市

片岡智恵子

軽く見た杭一本に泣かされる
戦車にはなるなと念じ払う税
大海に出たくて鼻を打つ金魚
許す気は無いのに溶けてゆく氷
言葉は刃　癒されるのも言葉
水がめが涸れて自然を振りかえる
柱にはなれぬが杖にならなれる
我を捨てて空気をもとの彩にする
疑えば輪廻の渦の輪が解けぬ
酸欠の街で孤独がすれ違う
順調な老化納得して生きる
悲喜こもごもあって人生フルコース
ひびかない拍手だきっと義理だろう
失敗を重ねてついてきた度胸
十月十日（とつきとうか）泳いだ海のものがたり

高槻市　片山　かずお

若い娘を見たくてフラリ街へ出る
まず眼鏡さがして次へ取りかかる
よく似合う似合うと赤を着せられる
物差しの違いを認め合い夫婦
ケンカした後の間合いが難しい
失意の日場末で飲んでみたくなる
自惚れの耳にお世辞が心地よい
譲られて背中を丸くして坐る
夫婦げんかでもしなければ間が持たぬ
限りある日日を楽しむのが務め
言うとおりしてくださいと妻の指示
ひと間だけ片づけ客を待っている
遊んでるときは足腰痛くない
なるほどと思わせたくて喋り過ぎ
挨拶が遅れて気まずさが続く

西宮市　片山　忠

おぞましい願望だけは今もある
服役をすればスリムになる体
国産をひいきにすると高くつく
ほめるのもほめられるのもうっとうしい
見え見えの嘘は知見が足りません
女々しさを叱れないから困ります
人情の廃れた街とぐちり合う
鬼だって優しさごっこなら出来る
ノーコメントそれしか言えぬ恥知らず
居酒屋で僕を観察する上司
免疫になるまで貰うそでの下
為政者に常に優しい高齢者
一口で野暮が飲み干すブランデー
不細工を自認しているから恐い
がんばってみよう私が見えるまで

鳥取市

加藤茶人

定年へスローな針の腹時計
俺浮気妻はへそくり秘密保護
酒タバコ小遣い仕訳妻エステ
妖怪がオバケがなんだ怖い妻
円満の秘訣は逃げるこれに尽き
見て嗅いで触って四季の日本好き
ふるさとのとうふちくわでまあ飲めや
回復の度合いが判る口達者
ついそこに居てて不思議な物忘れ
我が家にもあった三十八度線
主婦としてタイムセールは金メダル
昔恋今は介護の手を引かれ
弁当も子のおさがりで今日豪華
ストレスで妻は太って僕は痩せ
無理するな持病が俺の羅針盤

犬山市　金子　美千代

デッサンがこんなに違う男の目
ステテコで白馬の王子くつろげり
盛り上げたピエロを褒めてやる鏡
花マルを付けて浮き立つカレンダー
幸せな手帳明日を信じきり
肩張っているなと思う独りの灯
悲しみを隠す笑顔をふり撒いて
過ぎ去りし日々へ大事な落し物
思い切り泣いてしっかり過去にする
今のとことても仲良し嫁姑
停止線時々越えてみたくなる
踊り場で逆立ちしたら落ちたウツ
腹帯にされパスポート蒸し上がり
ポジティブになれる私の玉手箱
生と死を見つめしっかりごはん食べ

大阪市　神夏磯　典子

年賀状友が沢山いてくれる
どの角度から見ても母は美しい
あれこれと飲んだが薬より笑顔
お月さんと話せばとてもいい答え
抜けがらの私に愛猫来て坐る
長電話やっと元気になりました
一日中財布と喋るおばあさん
歯の治療おいしいものが顔を出す
洗いざらい喋って不眠症治る
美しい蟬の抜けがら習いたし
日の流れ水の流れを見ています
何の心配もないのが恐ろしい
北風が嫉妬している花予報
一心同体と思っていた答え
天の句を追いかけいちにちが終る

西宮市

亀岡哲子

虫となりリンゴの中で眠りたや
桜いろの卵で春をポンと割る
真っさらの心で母乳吸っている
転ばぬよう走るサンタも高齢者
キラキラと乱反射して夢の数
てんてこ舞いしながら女磨かれる
人間の特技みんなで笑い合う
トレーニングされて真っすぐ歩く蟹
褒められてうす桃いろに萌えている
知と哀があって人間いとおしい
ワルツならまだ踊れます支え合い
遠くからひょっこりやって来た記憶
寒いなあ寒いですねと言い和む
代われない命一人に一つずつ
泳ぎ着き月と命の話する

藤井寺市

鴨谷瑠美子

春の野に好きがいっぱい咲いている
自画像は手に一杯の赤い薔薇
やはり女で愉しい彩の組み合わせ
あの人の答が届く五月晴れ
同じ夢見られるならば引き返す
分相応この楽しさもうれしさも
てのひらを合わせ余計な欲すてる
ひたむきなわたしを見つめている鏡
逆算をしてます恋は秋だった
銀杏の葉拾う恋しているのかな
秋の便りで攻めてゆこうかしら一度
群れて咲く野菊語れば長くなる
秋探しベストセラーの一冊と
活気があってせかせか歩く音も好き
気のきいたことも出来ずに十二月

奈良市

加門萌子

まだ亡母に聞きたいことがたんとある
シベリアを語ればつきぬ亡父だった
万物が果す命の順送り
行き違う心鎮める一行詩
人生もクイズ丸バツくぐり抜け
少年は父と対話がしたかった
捨て犬に飢餓の子達の眼がだぶる
或る夜ふとちちろが止んで命知る
夢遥か逃げ水追って来た月日
年々歳々花に思いが深くなる
見事だね起承転結するさくら
無事の日は月もきれいに冴えて見え
平凡という退屈なすぐれもの
沢山の過去が沸ふつする深夜
ふるさとを唱和ほろほろ里ごころ

大阪市

河井庸佑

一石を投げて器量を試される
控え目な態度で風を確かめる
訳あって渋渋乗った泥の舟
名刹と味覚楽しむ古都の四季
家族寄る狭い茶の間にある温み
適量を越えた嬉しい日の手酌
折衷案折り合い付ける年の功
程程と思った趣味へ嵌まり込む
過ちは咎めぬ広い心持ち
雨宿りつい長引いた縄のれん
同じ山歩いて老いを自認する
成り行きに流れ自分を見失う
負けて勝つ事を身に付け世を渡る
反論を謙虚に聞いている余裕
磨いたら光る石だと見込まれる

和歌山市

川上大輪

ハッピーになれるすべてを忘れたら
グーチョキパーどの手もみんな欲がある
指紋だけ残して今日は帰ります
膨らんだ蕾そろそろ反抗期
続編で少し揺らいできた柱
水を入れると太平洋になる器
すぐ緩むネジだ私に似ているな
愛されていたんだボロボロの表紙
にんげんを語る人間面をして
踊ってるうちに尻尾が生えてきた
予定などないから今日も忙しい
鉛筆があればどこでも道になる
生きているから葬儀屋に狙われる
定型を破る窒息せぬように
言うことは無いがと話まだ続く

東かがわ市

川崎ひかり

安住の地と決め墓地も買いました
光るものはずし介護の手にもどる
雨の午後おでん煮ながら読むリルケ
句読点打って呼吸を楽にする
守護神のようにケイタイ離さない
此処にある筈を探して小半日
おっとりとしている人の七変化
舞い落ちるまでのドラマを演じ切る
まん中で父が威張っていた昭和
白旗は挙げぬ仲間が居てくれる
人様の全て知らない方がいい
目標は今この時を輝かす
募金箱善意を試す位置にある
頑なつぼみも春の陽に笑う
熱燗で飲みたい愛が見えない日

堺市

河内月子

安心を手の平にのせ寝てしまい
何ひとつ極めないまましゅうとめに
酔わせたら敵か味方かすぐ分かり
原点は誰も真っ白だったはず
一発の勝負だ情はひっこめる
なんべんも泥をかぶってへこたれず
折り返す旅だゆっくり行くとしよ
天才も腕に磨きをかけている
始めたらひつこい性質で続けてる
じっくりと煮詰めて叱ることにした
見る度に鏡いじわるばかりする
力抜く技を磨いているところ
にっこりとして父ちゃんに金出さす
毎日が変りばえせぬけど楽し
花咲いて真白き心ちと狂う

堺市

河内天笑

天国はたぶんこの世にしかないぞ
いちにちのご縁で忘れ得ぬ人に
走り方よりも大事な止まり方
先走る僕とゆっくり目の妻と
自分は変われる他人は変えられぬ
一所懸命の結果が喜劇でも
ぼろのちょん貶してくれる有難さ
相談をしたら勇気が萎えてくる
火だるまになろうとも橋渡るべし
恥をかく勇気をいつも大切に
風通しよくなる喧嘩していますたましいが赤くなるまで悩んだよ
杉木立いま満月をさし上げる
生きてゆくその日その日のあみだくじ
ふところにバラと銀河とエンピツと

大阪市

川端一歩

カレンダーに徳利書いている達者
痛み分けいう案ならば受けようぞ
投げ出した右手を左手が叱る
ユーモアを腹いっぱいに食べて寝る
文豪に囲まれているボクの城
凹むなよ口では言わず肩たたく
高くとも山は黙して語らない
お話も少しひかえた味がよい
飛角より歩兵が一つ欲しい時
オカリナで聴いたら泣いた千の風
満月を枕に今宵眠らんか
メイドインジャパンが好きで米の飯
席譲る少女が頬を染めている
秋夜長水府千松読み返す
モナリザの広いひたいは謎めいて

松江市

川本畔

巣の中に卵がなくてうろたえる
野良猫も私を見る冷たい目
古老がくれた山の彼方の吊し柿
わたくしも少女も独りけんけんぱ
色褪せた箸は哀しい美しい
幸せは途中の橋にありました
ペン先の回り戯れ合うロマン
パンの耳ぽろぽろ賞味期限だね
約束をころり忘れて蝶遊び
なるようになるさと袋閉じている
ときどきは疎むことあり血の濃さよ
噛みころす哀しみ誰もわかるまい
血縁と聞けばいとしい芋の蔓
日だまりのお零れ貰う猫の背
ポケットに握りしめてる春の鍵

横浜市

菊地政勝

好況の裏を見てきた再生紙
年金を貯金にまわす夢を見る
五時からの元気しっかり貯めておく
同期会スタミナ切れの貌も来る
末席が正論を吐き波紋呼ぶ
ハワイから帰った妻の英語熱
勢いの怖さ記録を塗り替える
行き摺りの恋へ足湯の御膳立て
駄目元の行為が当る運の良さ
チンで済む暮らしにひとり慣らされる
矢印へ進んでみたい好奇心
健康で老いの特権考えず
私の辞書から削除痴呆症
お人好し貧乏神と仲が良い
根っからの善人うらは読めません

広島市　岸本　清

初対面名刺代わりに笑顔見せ
善し悪しをそれぞれ持って仲間達
ライバルに次の一手が決まらない
言い切って自問自答のにがい酒
酒パック非常袋に三日分
居酒屋を往復すると一万歩
匿名にすると真相見えてくる
決着は無口な人のひと言で
常識があれば個性も生きてくる
口下手は頷きだけで会話する
見晴らしを買ったが老いて坂に泣く
風に乗り聞こえる街の息遣い
老いてなお若さを保つ好奇心
凡人と悟ってからの身の軽さ
行く末は人様よりも介護ロボ

鳥取市

岸本宏章

妻や子が凭れてくれる壁になる
正直に生きているからよく迷う
節約は美徳でしょうか総理殿
先生と呼べば誰かが振り返る
貧乏に耐えても孤独には負ける
万病に効きます愛というくすり
ロケット発射僕の算数ではできぬ
弁護士が付いて事件が曲げられる
パンチよりもっと厳しい後ろ指
見返りを期待するから愚痴になる
黄砂来る逆なら文句言われそう
自由には自己責任が付いている
正当化すれば原爆でも持てる
日本は廃炉技術を売ればよい
屋根という大きな傘を子に渡す

鳥取市

岸本孝子

いい人生だったと二人して言おう
真正面向いてお願いごとをする
人様の花道作る役が好き
欲張ってみたってたかが両の手だ
すっかりと忘れてみたい金のこと
幸せの尺度は夫婦でも違い
自慢することがないから隅にいる
金欠病よりも恐れる認知症
なるようになると気持を切り替える
急ぐときどの信号も赤になる
表札にはち切れそうな家族の名
墓洗いながら聞かせる孫のこと
五体満足美人でなくていいのです
ダイエット一生わたし苦しめる
惚けられぬラストダンスを踊るまで

和歌山市　喜田准一

諍いを伏せる互いの知恵がある
僕だけが一人気取っている写真
スクラムを組めば力が湧いて来る
正義感強くて本社遠くなり
秒読みに胸が高鳴る宝くじ
ふる里の旬を新聞紙に包む
飲み込めぬ固い理屈を噛み砕く
箸使いひとつに育ち覗かせる
とろとろと煮込んで味のあるお方
一坪の店が温もり売っている
世渡りのアップダウンがきつ過ぎる
艶話ちょっと混ぜてるティータイム
悔しさが広げて呉れた人の幅
てのひらで握り潰した怨み節
人生の森にも絡む蔦葛

三田市

北野哲男

六畳へ持ち寄ったのはハートです
還暦は男盛りであったよなぁ
一合で詩人二合で宇宙人
火の車押した惰力かまだ達者
ロボットの手伝いに行く通勤者
利子よりも高い切手で来た通知
居酒屋で洗って帰る擦過傷
手を添えて心さすっている介護
愛と言うガラス細工が美しい
花が舞う我が子巣立った日の様に
訃報欄つい年齢を見てしまう
支え合う人と言う字の良い角度
手を合わす時間の長さ子は知らず
春ララララ遊気リンリンまだ傘寿
死ぬ時はキリストよりもお釈迦様

東大阪市

北村賢子

朝の顔今日もガッツで生き延びる
子育てと家事へキリリと束ね髪
ほころびかけた蕾いっぱい陽を当てる
流された町に星降る陽が昇る
欲全て捨てますいただいた命
三・一一風化させまい凪の海
変わり行く地球で同じ月を見る
濡れてまいろう言うてられないゲリラ雨
気合い入れ真っ赤な服で行く歯医者
チロチロと燃えるものあり生きられる
わたくしの素顔に耐えている夫
ストレスを溜め込まぬよう生やす羽根
出がらしのような二人であたたかい
折折を糸と紡いで来た絆
食べて寝る暮らしを変えた塔の灯よ

紀の川市

北山絹子

春うらら心の中が蝶になる
気紛れな風が花粉を連れてくる
一匹の鬼とグラスを傾ける
羽繕い何時か私も風に乗る
早合点修正液に救われる
ボス猿のような男を飼い馴らす
こっそりと起きてこっそり家を出る
七人の敵に素顔を見せつける
乱視です月も二重に見えてくる
白昼夢宇宙に建てたマイホーム
これだけは捨てるに惜しい衣更え
ちぎり絵へ和紙が奏でる四季の彩
父さんの決意香水買っている
変貌の時代へ花の種を蒔く
生きている限り楽しい夢を追う

豊中市　(故)

橘　高　薫　風

父ありき生々世世に母ありき
瞬息の間を生き抜いて生き余す
三ヶ日カウチポテトもキムチ風
これやこの酒に誉れと礼智信
日本酒洋酒いずれなりとも路郎の忌
散る花に二人の孤独重ならず
愛国忌男一匹泣く日あり
酒行脚そないに遠く行かいでも
老いの酒明日もあらず明日もなし
物みなの腐る早さに人もあり
老いぬれば狼の尾を巻くごとし
夕桜右大臣より年を取り
老いらく夢油然と万華鏡
佳き年の後ろ姿へ除夜の鐘
水濁り火も汚れ行く世紀末

吹田市

木下敏子

善人にされて毎日忙しい
思い出はいいことばかり花菖蒲
冷えた手を包んでくれた大きい手
肩の荷をおろし静かな脈を打つ
からませた指はなるほど覚えてた
七坂を越えた笑顔の土踏まず
夢のある絵を書きながら老いてゆく
無と言う字いっぱい書いて無になれず
ちぢんだらあかん背伸びをもう一度
難しく考えないで手を合す
大阪弁飴なめながら丸くなり
唇にやさしい歌詞を口ずさむ
子は親を選べない子に見守られ
ゆっくりと噛んでゆっくり歳をとる
燃えつきる花火は丸くまるく落ち

河内長野市

木見谷　孝代

宮参り母の形見を着て偲ぶ
悔しさを枕のシミは知っている
ご機嫌な絵筆と遊び日が暮れる
五十円の絵手紙が釣るでかい鯛
リフォームへ思い出生かす裁ち鋏
また一人愛しい人の逝く故郷
故郷へ生命洗濯しに帰る
焼き餅を焼くのは未だ脈がある
ノーサイドの笛まで余生楽しもう
突然の不幸へ助け舟を出す
決断を鈍らせている背負うもの
姿見の猫背にはっと身を反らす
頼みたい時には弾むお賽銭
嫁姑の仲を心配する指輪
手間かけた野菜だ心してお食べ

神戸市　(故)

木村貴代子

元少女小学唱歌声が合う
ベランダのパセリを添えて生きる皿
漢字パズル自信ついたりなくしたり
ゴミ出しを金木犀に迎えられ
寅さんの録画失敗ふて寝する
いつの日もあなた思って灯をともす
天からの賀状あなたに似てる雲
亡き父のコピーを産むと嫁ぎゆき
今つぼみ孫よ自分の色に咲け
次男坊やる気きかん気全開で
亡夫の血流れる孫を抱いている
赤ちゃんの笑顔に誰も勝てません
バスに乗るうれしきことが一つ増え
はなやかさなかったけれど幸せで
天が呼ぶ日まで笑って生きてゆこ

和歌山市

木本朱夏

寒月光まといて母が還り来る
夢に遇う父は機械油（オイル）の匂いして
くるぶしに父母の嘆きを引きずって
ちちを降ろしははを降ろした縄電車
影踏みをせんとや月の出を待って
月光で影を洗ってから眠る
彼岸花泣けば泣くほど家遠し
旅の途上で手紙ばかりを書いている
後悔の数だけ雨が漏っている
コンビニの明かりを目指す漂流者
林檎齧る我らカインの裔なれば
ふいに来てふいにかえってゆく蛍
想い出がこころの襞に咲いている
みんな夢灼けてころがる蝉の殻
いまは昔の話をしよう花の下

和歌山市

楠見章子

体重計にまだを毎日載せている
麦飯で内からアンチエイジング
おひとり様食事はコンビニで済ませ
ストレスをポリポリ噛んでいるテレビ
伸び切ったゴムのほほんと欠伸する
古寺の空気を蝉がまぜかえす
ヌッと出す小指が温いから困る
赤い糸ピンと張ったら飛んでった
太い絆の所々がむず痒い
余命表キャッシュカードがくしゃみする
サックスの音色が毛穴から沁みる
干上がらぬ様にボジョレー補給して
腕時計外した旅もしてみたい
アップテンポの曲に望みを賭けている
庇うてくれた嘘がきれいに咲きました

三田市　久保田　千代

フィナーレを飾るスピーチ隅に居る
私から腕を組んだの待てなくて
わたくしが凭れかけてもよろしいの
幸せの鍵は握っているつもり
年金の枠の中にも青い鳥
目立たない場所でしっかり舵を取る
盆栽の構図と語る至福時
レールから食み出ぬ蟻の旅続く
クイズ解くように生きたら楽しかろ
オイとハイそれでもウフフ血が通う
並ぼうか向い合おうか椅子ふたつ
人集うところにあった玉手箱
唇が尖ると寒い風になる
古顔の昔語りに寂がある
清濁をあわせ紡いでいく絆

大阪市　熊代菜月

秒読みに入る私の適齢期
大家族要に何時も母が居る
古希すぎてまだまだ弾むマリを持ち
かび生える脳に掃除機かけながら
赤丸の意味わからずに悩む朝
春彼岸亡夫の時計捻子を巻く
足踏みをしたまま一句巣立てない
携帯の亡夫の番号まだ消せず
前後ろ私の影に尾行され
川柳が私はげます登り坂
枯れるまで自分で居よう自我のまま
後戻りせずに歩けと影が言う
終焉は秋の木の葉の散るように
ジェラシーも欲も消えずに八十路
友からの便り嬉しい淋しがり

吹田市

藏田光子

春風に花散りぬるを案じつつ
虎落笛ねむれぬ夜のあれやこれ
四面楚歌ひとりで越える水たまり
旅半ば乗り継ぐ駅をまちがえる
夕凪のようなわたしの現在地
かくれんぼ小さな鬼が愛らしい
心配の種をこぼして子の寝息
ゆっくりと母の手を引く菊日和
ピンチには母の言葉を思い出す
上見れば切りがないので今を咲く
優しさを花に託して嫁の声
負うた子に教えられては励まされ
嬉しい時悲しい時も灯をともす
浮きうきと心安まる娘と旅路
さくらさく夢を叶えた子の笑顔

鳥取市

倉　益　一　瑤

さくら咲く人が死のうが生きようが
踊らねばならぬ緞帳下りるまで
てのひらに乗せるあなたの四コマ目
償いに鶴は必ずやって来る
運命線のところどころに岩がある
どんぐりの野心高下駄はいている
弁慶の脛を狙っている小粒
フィニッシュへこっそり力溜めている
バラ届く微かな毒の匂いさせ
煩悩の鱗なかなか落とせない
拝んでも拝んでもまだ生臭い
償いに背負った母が軽すぎる
人の面外してみたい時がある
大樹の下で大きな欠伸しています
寒風がわたしの貌を彫ってゆく

池田市

栗田久子

再会を約して帰るボランティア
もめんにもきぬにもなれる時を待つ
風紋にひとつ置きたい落ち椿
どんな子に育つのだろう初節供
お互いの気配り弱点に触れぬ
魂のさまよう域で出合う神
善人も身の半分に持つ邪心
混ぜないでそのままコーヒーはアート
美しい人と呼ばれてみたいもの
忘れても思い出せたらよいのです
節分の鬼はしきたり通り来る
浜に出て耳でとらえた音景色
信じてるあなたはきっと味方です
今という今をわたしは逃がさない
誰だろうびっくり箱をあけたのは

河内長野市

黒岩靖博

熊野古道が世界遺産で蘇る
訳あって養子に出され父二人
暇すぎて日がな一日過ごす囲碁
釣れすぎて近所に配る破目になり
お隣さんベンツ二台の若夫婦
クーパーの映画みたさにアルバイト
モンローの豊かな胸に踊らされ
教会で懺悔を済ませ身を清め
ボケぬよう六十からの英会話
目の前の空気と水に無関心
お前なら出来ると言われ大火傷
責任を取ると断髪丸坊主
几帳面波に洗われ円くなる
負け惜しみ言わず呑み込み糧にする
横書きを名刺にかえた三代目

西予市

黒田茂代

生まれたての春を探しに風の中
春の地図拡げて夢を追う旅に
マスカットふふむと命透きとおる
野に山に溢れる秋を食べ尽くす
秋が逝く深い憂いの彩溜めて
ふわふわと飛んでるうちに冬になる
冬枯れの林はモノクロのオブジェ
即興曲奏でる吊り橋のハープ
抱きしめるだけで百万語の会話
今日もまたしぐれ無題の日が過ぎる
言い足りぬ言葉を今も悔いている
生きた証の小さなケルンがまだ積めぬ
過去を探すと無くしたものの多いこと
パワーアップ飛翔への風待っている
まだ若いつもりで今日を咲いている

芦屋市

黒田能子

春風のノックこころを開かねば
のほほんと暮しLサイズになった
にこにこと四角い話丸くする
美味しかった賞味期限が切れていた
伝わっているのでしょうかレモンの香
まんざらでない長生きを楽しもう
ふっ切れて夜明けの風が動き出す
幸せな夢を見たくて眼鏡拭く
階段をトントントンと上れない
マシュマロの恋はふあっと溶けました
出会いとの同じ数だけある別れ
父の樹をいつかは越そう志
黒豆のふっくら煮える日の平和
歳を取ることもそんなに悪くない
思い切り枝をはらった身の軽さ

大阪府

桑田ゆきの

愚痴一つ拾ってもらう日向ぼこ
八十の手習い確と毛糸編む
真央ちゃんの笑顔が世界湧かしおり
一芸があって一家の人気者
反日があの手この手で攻めてくる
老いの背へ優しい言葉の聴診器
目と鼻がむずむず痒い森の風
黄泉へ行く土産沢山習い事
おみくじの大器晩成信じおり
耳貸して貸されて和む日向ぼこ
温泉で泳ぐ熟女のしたたかさ
一喝の梵語で修めるお水取り
うわべだけ笑顔心に錠を掛け
時々はスパイス掛けていい夫婦
ゆっくりと交す言葉の介護椅子

堺市

来原道夫

挨拶を返してくれる電柱よ
空き瓶の方が空き缶よりあわれ
うつくしい光の国のかたつむり
ウルトラマン一家が浴びている西日
同じことするの映画が終わったら
下敷を悲しませてはいけません
カスタネットで舌を挟んでいる遊び
恋をしているから雨の運動場
恋人の耳から垂れている雫
鉄橋を風が渡っているところ
カーブしながら海の景色が続くなり
燕から返信無用のハガキ来る
なさけなくなるまで泳いでいる金魚
キューピーとなら坂道を転げよう
渚にて人居て人の顔見えず

堺市

源田八千代

自由都市堺市民の心意気
日本の元気な時に何してた
蕉翁も賢治も記す　みちのくよ
薫風師に共感しきり島一つ
団塊の世代パワーへよいしょする
筋トレも脳トレもありストレッチ
フラメンコ炎となって舞うドレス
試着室私が穿くと長袴
赤裸裸に鬱憤はらす日記帳
善くもまあ御足とは言い得て妙だ
自然治癒信じた母の尊厳死
天寿全う肖りたいと皆の衆
真犯人あの世の人は知っている
マンデラ氏の融和と対話とこしえに
特種をクイックキャッチコネクション

明石市

糀谷和郎

生まれ出た時は無色であったはず
怒るまい器のサイズ見られてる
年輪をほどくと洩れる人間味
今日を閉じ明日の扉を開ける酒
無芸だがひとつ覚えの歌がある
割り勘でいつも分母にされる下戸
悪い日も良い日も酒がしめくくる
贅沢な悩み今日することがない
アリバイを聞かれやむなく貝になる
長生きは神のボーナスだと思う
その笑顔明日も見せてと妻に酌む
落ちる日を拾い明日への道点す
衣食住極めたあとは繭になる
嘘ひとつついて気付いた空の青
自らが敷いた線路に悔いはない

大阪市

古今堂　蕉子

地球が大家　人類は店子です
幸せの扉は自動ドアでない
熟成発酵待つのも親の仕事なり
バーバの愛かくし味になって生き
力抜く事を覚えたほんまもん
仕切られて助かり仕切られて怒る
磨きすぎ子が微粒子になりました
まだまだとももうあかんとも思う顔
落こんだ日に渋すぎるアドバイス
開けたら閉めて私の心風邪を引く
言いわけの余地なし堤防は切れた
ぬるま湯を旅立つノラも白蓮も
立くらみ私を探す旅に出る
最後の運使い果して目を閉じる
うまいこと逝きはったなと終りたい

竹原市

小島蘭幸

入道雲よ挑戦状は受け取った
愛子さまと同じ絵本を買ってくる
座禅組む急ぐことなどないこの世
花吹雪ふたりの一歩しかと見た
おふくろも観音様もいい耳だ
バージンロードをヨロヨロ歩く僕でした
団塊のひとり的にもなりましょう
春霞島は観音様になる
打ち上げ花火ドーンと還暦になった
野の鼠いい眼をしてるではないか
間違い電話だった美しい声だった
千手観音　私を抱いてくれますか
しじみ舟見て来た朝のしじみ汁
墓掃除してたら弟が来たよ
恐ろしい人がいっぱいいいた昭和

出雲市

小白金　房子

母の舵朝の空気をかるくする
一生を泥とくらして来たモンペ
箸もてば今日の決断わいて出る
裏切らずわたしの影がついてくる
過去未来脳裏をよぎる風の音
名刀へ魂打ちこむ神の里
迷うてはならぬひとりの米を研ぐ
袋おび解いて疲れの渦に立つ
押されても動かぬ芯をもっている
真実を通す心は狂わない
本棚に見習う古書が積んである
生かされて日々誕生のありがたさ
嘘のないくらししっかと大地踏む
晴天へ家族の鎧陽に晒す
藁屋根の頃はよかった子の育ち

海南市

小谷小雪

羊水のなかに水かき置いて来た
いつの日も一ページ目に母がいる
ため息のスピードで読む子の絵本
わたくしの脱皮を急かす春キャベツ
目力をつけようニンニクを刻む
ほどほどの美人になれる夏帽子
時どきの定型外が面白い
看板は耐える力としておこう
コオロギの家宅侵入なら許す
命日に触れて芍薬ものがたり
とてもダンディーわが家の後期高齢者
熟成してくるまでごそごそ混ぜる
笑ったら発光体になる目玉
三日月が鋭い明日は吉日だ
手のなかの朝日あなたと半分こ

大阪市

小谷集一

手の平に乗る幸せが丁度よい
親馬鹿を描くとわたしの顔になる
意地張ってみても本音が出る背中
日向ぼこ昔白馬の騎士でした
長生きをしても一人じゃつまらない
命より先に貯金が目減りする
自己主張年金という武器を持つ
ときめきは恋だけでなし趣味の道
虚も実もみんなまぎれもない私
子に渡す地図に迷路も書いておく
正と邪の真ん中辺に陣を張る
腕振って歩けばきっと来る明日
平凡な日日を重ねて行く非凡
傘寿から卒寿わたしの熟成期
二度と来ぬ今日をしっかり生きておく

松山市

古手川　光

雑草が嗤う日本の自給率
追い風に乗ると忘れていく初心
ふる里で変らぬものは鐘の音
プライドという袴を着て孤独
労って住もうスペアが無い地球
それなりに幸せですとカスミ草
逆らわず流れを掴む生き上手
ふり返る猫ユーモアを知っている
真っ赤な夕陽に学ぶ人生終い方
笛上手く吹いたら鬼も踊りだす
骨拾う人間たったこれっぽち
十二月誰かアクセル踏んでいる
九条に三〇〇万の人柱
子が決めた道だ信じて押してやる
知らん振りも友情そっとしておこう

米子市

後藤宏之

待つことの方がのんびり気持いい
背負ってることを承知のおつき合い
しがらみを抜けたところが今の場所
おしのびがテレビに写る砂かぶり
負けは負けあっさり認め次を待つ
よく笑う父をしっかり撮っておく
ご先祖が草が伸びたと訴える
この頃は尻に敷かれて楽になる
ささやかな違反ここまで生きのびる
悪行に善行を交ぜ旅をする
ほめられた弁当実は自作です
電線でカラス作戦会議中
浮雲のような男にホッとする
魂が戻ったように蝶が飛ぶ
妄想が鐘ではじまる座禅堂

米子市

後藤美恵子

すきま風我が家は愛の目張りする
農魂を戸板に載せる無人市
煙硝の臭いは花火だけでいい
消しゴムが走るエンピツたしなめる
浅い色重ねて染めた夫婦色
夫が逝き不要となった角仕舞う
頑張れる喜ぶひとがいる限り
ぽたん園今日一日は蝶になる
不発弾抱いた私は火を避ける
イケメンのお手をどうぞに宙を舞う
喜寿祝う子らの嬉しい応援歌
若ぶって杖はバッグに折りたたむ
死ぬ日まで好きな表札掛けている
保護色にだんだん変化する余生
葬式のクラスは梅と言っておく

鳥取県

小西雄々

大山で見る御来光年あらた
駆け足できた如月へ雲走る
プライドを保つ微笑か黄水仙
誰が食う一万円の松葉蟹
バッカスと今夜も帰る虚ろな眼
炬燵にも上座があって父の席
ご注意を聞くうち耳が垂れてきた
未完の大器メトロノームは狂わない
ダービーに勝ち雄叫びを二度三度
ボーナスが欲しい余生の灯が揺れる
アンカーの私に何時も向い風
生き抜いて死は思わないエンドレス
わが家には縁遠いもの宝船
両隣お向いさんも高齢者
還らない兄へ七十年過ぎた

枚方市

小林わこ

満点のきつねうどんがまだできぬ
七色のメガネ下さいトンボさん
指ぎつねあなたが好きと鳴いてます
開けっぴろげの笑顔に魔法かけられる
本物の青が足りない絵の具箱
オーイすずめ迷い子一人知らないか
初蝶まだかつくしんぼうが呼んでいる
宇宙から桜満開見えますか
知らなくてよいこと結構あるのです
ふる里に一つの鍵を置いたまま
川の川右岸左岸におく微罪
大好きになって周りが見えません
追伸に点滅させるラブ信号
逢えそうな予感水たまりが消える
母さんの風はときどき頬を打つ

弘前市　今　愁女

フクシマを迂回してきた渡り鳥
なにもなかったかに北三陸の海の凪
彷徨うは魂　帰る家もなし
竜巻という脅しが一つ多くなる
ほどよい雨の台風ならば待つ農家
改憲で先祖返りは許さない
原発ゼロ地球無蓋も気にかかり
世界遺産われもわれもと山開き
廃れ家でも更地にできぬ訳があり
散りぎわも色艶失せぬ柿落葉
いつの日か神の使いの寿命札
ふたたびのオリンピックを健やかで
命長らいインフル予防欠かさない
第九聴く楽しみありて年の暮
夜桜と逢い引きをする妖艶さ

大阪市　近藤　正

九条を守り続ける草の根に
辺野古基地止めてジュゴンを泣かさない
真夏日に異彩を放つ彬の碑
フクシマと二重写しの原爆忌
逮捕理由あとでつくれる秘密法
大阪を蝕んでゆく維新病
被災地に癒し届けよ除夜の鐘
北斎の富嶽の絵には基地が無い
一パーセントの守銭奴が生む貧困者
児のミルクまで消費税かけないで
消費税上げたら店を閉めてやる
日本一危険な基地にオスプレイ
脅威論追い風に舞う核の傘
坂の上の雲の下にはしゃれこうべ
古希過ぎてまだ叩いてる減らず口

鳥取県

斉尾くにこ

青空ののっぺらぼうへ雲の絵師
しばらくは無風わたしは昼下がり
絵空ごと寝ごと人ごとしゃぼん玉
窓ガラスふっとこころが透けそうで
許されていますやさしい雨のなか
笑うツボちょっと違えてまた笑う
ひとつ出てひとつ入ったのに軋む
温めをしますか　わたくしをですか
眠りましょう夜は飛ばない青い鳥
名を付けて名もなき人を呼んでみる
しあわせのカタチかみあわないカタチ
ほろ酔いになったら水を得た金魚
ゆっくりと記憶の駅を過ぎてゆく
くぐもりを月のエステでかぐや姫
朝の陽とあなたのための鮭二枚

大阪市　坂　裕之

いっぱいの夢と期待の始発駅
園児らが真面目に遊ぶ活きいきと
金魚鉢メタボが増えて狭そうに
飾りっけない先輩について行く
都合よく話合わせるのが嫌い
都合よく忘れることで輪が丸い
失敗は自分の所為とやっと知る
忙しい方が体の調子いい
心配は後に回してまず動く
責任がないから軽く人を褒め
我が道を来て不足などありません
花付けた草踏まれずに生き残る
怒鳴っても聞かんやんちゃへ母そっと
相棒と培ってきた花が咲く
笑顔まで捨てると何も残らない

箕面市

酒井紀華

手を開く運命線がまわりだす
好きな人みな逝ってしまった冬銀河
短い足どっしり地球をささえてる
名刺の裏はみだしているライセンス
凛として虚勢はってる冬のバラ
足の爪カラフルに染め自己主張
秋深し決断せまる爪が飛ぶ
窓際で絶景ながめ社史作る
姫鏡台裏も表もお見通し
姫かがみ魔女のわたしを知っている
この嬉しさ知られたくない胸の中
わたくしも桜も狂う春の夢
菊いろいろ墓地が息づく春うらら
もしかして君は私の守護神か
生きねばならぬ昨日はきのう月仰ぐ

篠山市

酒井真由

万策が尽きたタンゴを踊ろうか
ひとすじの道が愚直にのびている
歓楽の巷で熟れてゆくメロン
チルチルとミチルは今も森の中
獅子王も男も牙を抜かれ老ゆ
飄飄と枯野の道を来るひとよ
いつか来たこの道丸木橋わたる
ひとりずつ跳んでたのしい水たまり
水の辺の茶房木の椅子木の扉
吐息ただよう五重の塔のてっぺんに
父島の海よ水族館の鱏
特別な日がある愛が降ってくる
桜散るときめきながら舞いながら
私にも歴史があって桜さくら
運は天にひいてみますかあみだくじ

河内長野市

坂上淳司

愛でられてより艶やかになる桜
少子化に眩しいほどのマタニティー
母子手帳と臍の緒持たせ嫁がせる
平手でと孫が挑んで来る将棋
優しさに出逢い優しさとり戻す
沸点が近いぞ妻が無言劇
みじめさが確とこたえた妻の乱
後味を楽しんでいる千鳥足
飲兵衛が銚子の口で遠眼鏡
戦績を付けて碁敵から賀状
玉などに誰が混じるか俺は石
避けていた筈の親父と同じ道
引き際の美学椿に憧れる
逝く時はやはり畳の上ですなあ
通り抜けして決めました樹木葬

和歌山市

坂部紀久子

人生と言う花道へ撒く笑顔
雑草の不滅を知っている大地
まだ針に糸が通って一人住む
成り行きを確かめて縫う返し針
やる気満々鉛筆を尖らせる
私からごめんなさいと言えば済む
正直が折れるポキンと澄んだ音
ストレスを丸い器に入れ替える
字余りを許せぬ人で肩が凝り
友達は宝互いに磨き合い
平凡から抜き出た時に怪我をする
どんな事あっても慣れていく怖さ
一つまみの塩と相談しています
原点に童謡がある母がある
暗闇の中を泳いできた昭和

唐津市

坂本蜂朗

生きている恋もお酒も手が届く
百円の判子が僕を保証する
群れの中流れ可もなく不可もなし
塞翁が馬と泣いたり笑ったり
恰好いい老いを演出した疲れ
いい人と言われ箱から出られない
暗い世を遊び心で包み込む
理髪師が耳にゴシップ流し込む
いい医者だちゃんとこっちを向いている
口論の不貞寝に蒲団かけてある
通院へ妻強引に付いてくる
濃い愛でしょうか薄い塩加減
預けてる寝首を妻が洗ってる
サポートの妻の口調が進化する
結婚をすれば魔法が解けてくる

東大阪市　佐々木　満　作

きらきらとダイヤのようないい笑顔
おはようと笑顔で妻としじみ汁
身形より気性に惚れて添うて来た
育てよう人の痛みが解る子に
磨くほど玉と知性はよく光る
無駄だとは思わずやってみる勇気
介護する命の鼓動受け止める
戸惑いを隠せぬ突然の告知
反省を重ねて脱皮する明日
声明が心の垢を浄化する
信念を曲げずに生きた父の背
積年の誤解がとけて胸撫でる
レモンティーほっと一息春うらら
川底に人間のエゴ捨ててある
草の根の小さな善意が実を結ぶ

大阪市

佐藤忠昭

年頃は灰汁を集めてニキビ面
保険金僕が払って妻貰う
ビタミンが通販サプリに追い出され
海水浴ノコノコ参加荷物番
今朝の冷えネコの温みが有難い
わが国に欲しい大きな道しるべ
キャバレロの華麗なタッチラブソング
太陽は酷使に耐えて無給なり
野点席今日の正客揚げ雲雀
月二万僕の小遣いガラス張り
ピッコロが鳴ってマーチはラデツキー
子は山手親は海抜ゼロに住む
句は若葉車ゴールド酒天位
咳き止めて土筆の坊や探す午後
やんわりと惚れた女房の風に乗る

堺市

澤井敏治

ヴィヴァルディの音符が跳ねる春の川
玩具箱風を入れると虹が出る
よく育ちかぼちゃは馬車になりました
雪だるまおしゃべりになる雪の夜
信仰の原点にある母の影
柔らかいあれは父の樹母の森
大切な薔薇一輪を守り抜く
自然体陽が沈んだら飲んで寝る
頬なでる道頓堀の風の私語
胃カメラの無罪判定風は青
惜しまれて逝くか憎まれ憚るか
老眼鏡しても筆順見えてこず
彬忌に昭和の闇を思い知る
迷っても渡ってならぬ核の道
憎しみの石は四角い波紋呼ぶ

大阪市

澤田定子

始業式女性校長ひきしめる
賀状のみ付合いになり五十年
ＰＭ2.5マスク姿の急ぎ足
童謡を流してゴミ収集車
商店街百円ショップまた出来た
子が巣立ち出費もゴミも減りました
一年生歩く仕草も微笑まし
日本一ノッポビル建つあべの筋
離職後の会話の中は笑い減る
ほろ苦い蕗の煮物祖母の味
町会の婦人部喫茶閑古鳥
着地してほっと安堵の航空機
老夫婦言った言わぬとゆずらない
盆踊勇気を出して輪の中へ
忘れもの脳の老化の所為にする

堺市(故)

志田千代

ホテルですオイ朝刊と言われても
母となる日から祈りははじまった
今声をかけたらふんばれる
昨日からごめんなさいを抱いたまま
試着室笑いこらえている鏡
ミーちゃんは生んだ覚えのないムスメ
婆ちゃんは大好きだけどママと寝る
ユニークな子が揃っているBクラス
負けた選手勝った選手に母があり
会話へり背中ばかりをかかされる
焼餅も目刺もうまく焼く妻だ
お喋りは大好きなのに人見知り
続編はあなたのいないラブストーリー
一番に年始まわりに来た雀
ガラクタを仰山残して死ぬつもり

茨木市

島田誠一

開演のベルが作ったプロの顔
こだわりの蕎麦屋は無愛想も売り
図面等要らぬ匠の節くれ手
妻忘れ子忘れやがてみな忘れ
尻馬に乗った出世でよう揺らぐ
町工場油まみれの手は寡黙
送別会過去形語尾が追い立てる
幸せという寸法が測れない
バランスで呼ばれただけの燕尾服
終着駅着くまで夢を見たい窓
引き金を地球に向けている愚か
埋まらない溝へ諭吉が橋を架け
白黒をつけた矜持がほろ苦い
釘一本打って厳父は背で許す
末席の門外漢が的を射る

高槻市

島田千鶴子

原点はあの日貰った褒め言葉
編みかけのセーター恋の忘れもの
畦道で蛙行く末思案する
ため息は未練笑顔は希望です
やさしい嘘あとからぐっと効いてくる
煩悩の海を必死に掻き泳ぐ
地図にない道はスキップして通る
夕暮れて遊び心も連れ帰る
ペンペン草自由を求め屋根の上
会いたくてあなたに合わす周波数
燃え残る夢のかけらを仕舞い込む
待つ人がいる幸せな靴の音
この先は無題で生きることにする
せっかちになった夫にぬるいお茶
渋滞を避けて青田の道を行く

富山市

島　ひかる

春うらら一期一会の花衣
雪の中仏と分けるさくら餅
嫁からの心遣いを亡母に見せ
断捨離も出来ず娘に叱られる
年金の暮らしで青い鳥を飼う
登山口帰らぬ人を待つ車
尋ね人肝に銘じた登山口
シャクナゲに父想い出す甲武信岳
銀舎利をほうばり想う鶴彬
心配な人が居るから生きられる
百万の一人に成ったサポーター
認知症の人と心が通じ合う
生と死の狭間で神の匙加減
つば広の帽子へ忍び寄る晩夏
故郷の山へ今年も木を植える

高槻市

初代正彦

青空が動いて見える逆上がり
金槌に力抜くコツ教えられ
勢いで上げた拳が下ろせない
日の丸の何とも言えぬいい余白
面白いお人のようで凄い方
体操で一番好きな深呼吸
タンポポの意地踏まれても踏まれても
忘れてたごめんアホかで済む夫婦
真夜中にまさかと思う良い知らせ
お互いの心をつなぐいい笑顔
風向きが変わってもすぐ動かない
冷や飯も仲間がいれば食べられる
下駄箱の隅に昭和の赤い靴
お開きとなってそれから出る本音
このチャンス神が呉れたとやってみる

神戸市

白川淑子

独り居の窓に小雀親すずめ
生きること切なかったねおかあさん
笑顔しか思い出せないあなたです
化粧水パチパチ叩く歳の数
ポカポカと食べて浮かべてみかん風呂
巻き寿司とロールカステラ端が好き
町中の猫がウインクして通る
ETもゴーストも居た遊園地
あかんとこ一つ見つけて好きになり
ロマンチストあんたもうちも淋しがり
十センチ程浮いてます春だもの
神様に数え切れない借りが有る
困ったな長生きしそう金が無い
円熟期などと坊さん言うけれど
夕焼ける終の住処にある祈り

鳥取県

新家完司

おもしろい空だいろいろ降ってくる
本日も愉快だったと太く書く
念仏がうまくて蝿が寄ってくる
着古した肌着のような街の風
腹立てていると聞こえぬ春の音
花の下ぼくは割り箸配る役
トトロとかポニョになろうよぼくたちも
宍道湖のさざなみほどの片想い
こころにもコオロギがいる鳴いている
飛んでいる形でトンボ死んでいる
混浴は足湯でさえも恥ずかしい
七十歳あたりで分かる砂の味
おもしろい今が百年ほど欲しい
こっそりと死んで行くのはむつかしい
あきらめたとき美しくなるこの世

高槻市

杉本義昭

味のある話はあとで光り出す
逆転へスイッチオンになる闘志
蛇行してやがて大樹になる予感
満天の星ですなでしこが輝いた
アンパンマン乗せて寂しくない車輪
大根の太さよ嫁のたくましさ
今声を出すところです梅の花
椿落つすとんと本音吐きながら
初恋は語ればいつも美しい
凛として香る机上の寒椿
一直線ペダルギィギィ漕いだ父
欲一つ捨てれば軽くなる余生
運命は時に厳しく明と暗
疑わぬ気軽な妻と住んでいる
千年の大樹支えている根っ子

藤井寺市

鈴木　いさお

Gパン Tシャツまだスキップも踏める古稀
七十路の入口辺り迷い人
知りたがり喋りたがりで淋しがり
どうせならとことん愚直貫かん
喝采はなくてもボクの夢舞台
年金で目立たぬ様に生きてます
喜怒哀楽みんなあなたと半分こ
カッコ良く年取ることがむずかしい
飾らない人だ話してみたくなる
旅先でひょいと出会ってからずっと
一人生きる準備を妻がし始めた
幸せを妻と演じているのです
いつ見ても退屈しない妻の顔
マザコンと言われようとも母が好き
ほのぼのと生きほのぼのと黄昏れる

鳥取市

鈴木一弘

先達の辿った道を傘の杖
無人駅こぼれる程のナナカマド
散り紅葉掃いて捨てたくない廊下
街かどのカーブミラーは知っている
奥ふかくこだまがかえる父の森
マイペット奇妙なけものなまけもの
長い旅終えて安堵の村の道
雪だるま春が小雪を連れてきた
大砂丘月の夜には浮いている
居ごこちのいい中程の座がほしい
風紋をらくだの舟で月がゆく
振りむけば空席目立つ指定席
風評が小耳に痛い寒晒し
谷あいに良心捨てたゴミの山
竹トンボ遠くへ飛ぶな日が暮れる

鳥取市

鈴木公弘

鬼は外豆のことなど考えず
橋脚を刺されて島はいつ眠る
奥の間をまだ無視できぬ咳払い
煽ってはみたが気のない男だな
八百長の下は迷路になっている
過疎はまた一人旅立つ坂しぐれ
団塊の倒れる音の耐えがたし
ネジ一つ緩んで骨が締まらない
豆炭の炬燵ぬくぬく死んでゆく
大騒ぎして泥沼を深くする
酷暑厳冬この国は住みにくい
口あけて寝ている妻よありがとう
神主が酔うて神さま出られない
太鼓打ったら雷が落ちてきた
年金を貯めて新婚旅行する

吹田市

須磨活恵

筋道をキチンと通す老眼鏡
躓いた石にガツンと意見され
門を抜くと本音が迸しる
美しい夕日も一度信じよう
うっとりと騙されました万華鏡
人間が大好き泣いたり笑ったり
沈む日にある決心を迫られる
探してた答をくれた父の墓
天国の亡母へ書きたくなる手紙
赤貧の詩人は月を噛むばかり
よく転ける私を笑うカタカナ語
届かない思慕が熟れてる蛇苺
どちらにも言い分がある海と山
無駄骨を仰山折って生きている
五分五分の喜怒哀楽で生きている

犬山市

関本かつ子

育メンのお手本見せている野鳥
真ん中で撮られるようになって老い
着陸はエコノミーでも一緒です
夫婦仲まで書いてないプロフィール
被災地を走るカメラに色がない
老いたねと言われてやめたダイエット
一息をつかせてくれる句読点
どしゃぶりの雨に洗車も任せてる
許すのが妙薬らしい胃の痛み
ケンカした顔を鏡に叱られる
他人にはもうなれません箸二膳
男にも嫉妬あるのに女偏
思い切り走れる足があって古希
拍手も合わせ二人のお正月
好きだった人とも終る年賀状

富田林市

関　よしみ

耕した心をいつも持ち歩く
廻り道して正面へ畏まる
発想を変えて見ればと逆上がり
置いてきた影が透明になった
大河へと流した胸の石一つ
ある日見た夢の欠片が起き上がる
迷ったら斑猫の後ろに続く
夢抱いて飛び立つ青い滑走路
半割の白菜にある強い意地
沙羅双樹無垢に還ってゆく命
好きだよと言えずラムネの栓を押す
墨の香で一気に夏を書き上げる
むらさきの薩摩切子と月を飲む
消しゴムがゆとりの文字を消しに来る
ロングブーツでやさしい深みにはまった

吹田市

瀬戸まさよ

波の花お湯に漬かれば日本海
焦燥を拾ってくれた流れ雲
コーヒーが冷めて話も沈みがち
山型のトーストコーヒー今日も晴
一本もよし千本もよし桜
咲くときは一二三で咲く桜
大正の律儀私もその一人
色褪せたシクラメンには歌がない
幼稚園好き先生は美人です
ヨーコとレノン夫婦愛人パートナー
古帽子庭の手入れに生き返る
目覚ましがそれぞれにある共稼ぎ
端っこに座れてホッとする電車
バスの窓パントマイムで通じ合い
花ふぶき生の終わりもかくあらん

高槻市

左右田　泰雄

川風を軽くいなして猫柳
沈丁花匂う路地行く午下がり
喜んで貰える事の嬉しくて
して欲しい事してあげる思いやり
やわらかい視線がのぞくチャーミング
無理をせず無駄なく無事に日を過し
逆らわず寄る年波に身をまかす
くたびれた心を洗う若葉風
クレパスでゆったり画くあるがまま
老いてなお食欲だけは意気盛ん
うたた寝の夢をこわしたドアチャイム
平凡がいいなと思う冬日向
人生の余白に咲いた返り花
寝不足を絵にしたような生あくび
何故かしら心に響くハプニング

黒石市

相馬一花

肩書きが重くて巧く歩けない
認知症妻を忘れる本格派
髪型を変えて駆け出すハーモニカ
丸齧りするりんごにもある色気
種馬の歎きを知らぬ飼葉桶
怪しげな電話に怒鳴る津軽弁
混浴でおとなしくなる手長猿
黒白をつけろと凄むマタニティ
寝た振りをして外濠を埋めさせる
臨終の声にむっくり起き上がる
ガム噛んで死ぬまで生きる心意気
バイアグラ知らぬ男の力瘤
劣情を秘めて今宵も行く飲み屋
偽造した胸でマグロを釣り上げる
蛇蝎より忌み嫌われる天の邪気

大阪市　田浦實

さまざまな事消え浮かぶ旅の窓

愚直さは昔尊敬されていた

赤ん坊のくしゃみは神のおくりもの

生駒山河内音頭とハモってる

愚痴こぼせる相手いるって幸せだ

パンの耳で舞ってくれますユリカモメ

納めるより税金食らい威張ってる

優しい笑顔自然と人に移ります

職人の卒業式は腕次第

伊能忠敬四千万歩老いに喝

ツイッターすべる舌まで止められぬ

円空さん木から仏をひょいと生む

風に乗り河内音頭が窓たたく

窮即変変即通の古希なかば

鏡見てよそいき顔に切り替える

京都市

高島啓子

コロッケを揚げるあいだに散るさくら
手にとれば古いノートは目を覚ます
定年の夫が話しかけてくる
強い子にならなくていい柏餅
お日様は元気カレーは辛いめに
夏帽子リボンを変えて飛ぶつもり
ウクレレを弾いて輝かせる銀河
ミニラーメンの湯気秋の夜の長さ
衝動的に開くのは月見草
晴れた夜の月は地球を従える
甘露煮になっても鮎は美しい
毒草の本を黙って読んでいる
学校を覆う大きな病垂れ
目の端に山の高さを入れておく
大根サラダ金婚へあと少し

八尾市

髙杉千歩

楽園の来世を目指す白い画布
今日もまたノホホンと生き日記綴ず
放っといて欲しい日もあり老い気まま
お元気そう言われ嬉しい筈がない
することが一杯あって老い佳境
充電の効かない脳で鶴を折る
戦争を生きて時世に流されず
釣銭を貯めた余裕のあった頃
暗算の出来る範囲で暮らしてる
執着はないが勿体ないのです
余命など知る術もなしルージュ買う
形違っても戦ですこの世
浅いとこ選って彼岸へゆるゆると
両の手に溢れる愛に支えられ
存分に生きて米寿の絵具筆

弘前市

髙瀬霜石

お先にどうぞぼくは制限速度以下
闇に目が慣れてしまってからの闇
傾いていてもどうにかぼくでいる
ビールには泡　地球にはオゾン層
棒切れを自覚してからよく眠る
ちぎれ雲ばかりがぼくの筆箱に
歯ブラシにだけは本音を打ち明ける
治るがん治らぬがんのクジを引く
弦たらんときどき独りぼっちでも
しあわせのドアには「押す」と「引く」がある
弱肉強食　だけどこの世は面白い
おしぼりのような助言ができたなら
少年に翼をくれたのは　涙
ひとりは強いひとりは弱い　抱きしめる
本を読む発光体であるために

寝屋川市

高田博泉

灰皿は朝のまんまで置いてあり
泥棒が去って安心して吠える
落書きを消すのが惜しい名文句
大の字に寝てる大物かも知れぬ
山降りた猿は方向見失う
板前の包丁さばきを食べに行く
切り札をもっているから慌てない
血色の良いのが医者の門くぐる
化粧せぬ女になってから多忙
天国に続く線路は敷いてない
散歩して今日のつとめを終えた犬
「鯛の目がにらんでいる」と箸をとめ
真ん中に父が座って今日も無事
賽銭の音を神様聞きわける
白紙にはさせぬ女の意地がある

藤井寺市

髙田美代子

やっと冬弾けて春の中にいる
82円貼って届けてもらう文
知らなくていいのよと吹く空っ風
四捨五入しないで欲しい時もある
一生をピエロであった気もするが
何となくだるい私は花ぐもり
タネ蒔いてあるので楽しみな花壇
風の吹く度に靡いて落ち着けぬ
見ていようその内屹度尻尾出す
けいたいもスマホも友達になれず
金婚の今だからこそ愛百話
美しい嘘だ聞いといてあげる
税務署へ家計簿持って泣きに行く
なる様に成らないいらいらが続く
皇后様の帽子は何もおっしゃらず

合志市

高野宵草

排ガスを撒いて森林浴にゆく
父の日を持って来たよと孫が呉れ
ナースだけ若い待合室の風
最高の己れで逝きたし今日を研ぐ
妻病んでのびのび育つ庭の草
不便さに耐えて地球に優しいぞ
達筆で堂々と誤字書いて呉れ
撫でた掌で吸ってやりたい児の痛み
臨終の心を学ぶ数珠を持つ
泣き涸れた脱皮で強くなりました
蚯蚓でも助けてやったいい気持
慕われる祖父だぞ惚けてなるものか
介護する立場の幸と優越と
末期の血吸わせてやって蚊を叩く
容赦なく地球は廻る怠惰心

松山市

髙橋宏臣

深呼吸且つシリウスの伸び縮み
夢のへり歩きアラビアあたりまで
朧夜の天に帆船地に破船
春嵐の孔雀無数の目を開き
アマゾンを食べてきました丸木舟
入り口にしてはもらえぬ非常口
ニーチェ読み夜の韃靼揺らすなり
だいこんの花よ歌わぬ日が多い
地に鳴るは雨の音なり薊咲く
ランプの芯取替え読んだごんぎつね
裏窓のドラマ夜となく昼となく
ひと房の葡萄の無口買ってくる
黙秘権画鋲の穴は動かない
一念化生古着の紐が付いてくる
少年佇てりブランコのない遊園地

出雲市

多久和　敬子

あっさりとこってり同じ屋根の下
時々は味方になってくれる山
波に乗り動き始めた影法師
山のようなストレス呑んでくれた海
風の色知ってゆとりを取り戻す
靴下の穴から笑いもれてくる
主翼にはならず尾翼で舵を取る
笑ったり泣いたり山もわたくしも
淋しさと玩具残して鳥が発つ
いい風に触れてハートもほっかほか
今日の恥笑いの中に消しておく
これからはもう迷わないシャボン玉
いつの間に夫の前を歩いてる
ばあちゃんと呼ばれ段々小さくなり
満ち足りた暮しの中で鍋磨く

鳥取市

竹口清信

捨てられた悔しさバネに咲いた花
日の出だけ拝んでおけば安心だ
生と死の岐路で麻酔がききはじめ
手術台ゴールになるかスタートか
法律を知らなんだでは済まされぬ
控え目に生きてもいずれ灰になる
人間を生かしてくれている緑
痛い目に合って人間強くなる
その内にどうにかなるさ放っておけ
胸中の火種誰にも明かさない
九条も世界遺産にして仕舞え
美しい花はピークを知って散る
横向きに歩くが蟹も一筋だ
羨むと鏡のように跳ね返る
本当の強さは人をいじめない

出雲市

竹　治　ちかし

子にかざす母の日傘の右左
都合良い時だけ確かめる絆
人間の忘れたことを猿に問う
沢山の付箋を貼って見失う
黄信号気付かず神に叱られる
ぞろぞろと出てくるにわか評論家
昨日のウロコを貼っておく日記
妻や子がからむと解けぬ死の美学
足して二で割って夫婦の日が暮れる
幸せが女坐りで傍に居る
見る人の色に染まっている墨絵
手を合わす神の言葉が聞きたくて
こだわりの訛に慣れて地に染まる
旬という季節知らないまま熟す
頂いた命磨いてから返す

鳥取県

竹信照彦

暑くてもカレーは熱いうちに食う
胃カメラを呑んで酒飲む許可もらう
搗き手より捏ねる婆さんいなくなる
あるじ無き梨は廃園田は放棄
老化にはつける薬が無いという
雲だっていい雲わるい雲もある
買う方が安い野菜を作ってる
ギプスした足が欠席電話する
山陰はやっぱり山の陰である
晩酌は手酌肴は有りあわせ
元気だから行けるお見舞いお葬式
目と口と涙をセットして喜劇
大誤算妻が老婆になってゆく
ピリオドがどんどん降ってくる師走
日本の未来ゆがめてなるものか

米子市

竹村紀の治

何事も無かったように風になり
強がりも淹れてコーヒーひとり飲む
二度三度起きては朝を確かめる
朗らかになれる薬を持っている
煮て焼いて二切れの鰤昨日今日
遺されたレシピで作るふたり分
孤独死のニュースにそっとミカン剝く
谷間にも分け隔てない青い空
競りの鐘聞いて子牛は目を瞑り
告げ口をお待ちしてます投書箱
雨宿り飲める店まで濡れてゆく
毒になるころから旨くなるお酒
有りっ丈言わせてくれる友と飲む
いい歳をしてと言われることが好き
寂しくは無いと強がるカップ麺

和歌山市

武本碧

まごころはガラスケースの中にある
おろそかにせぬ下敷のうらおもて
破調でもいいと自分の音で鳴る
シャボン玉インスタントな恋だから
無になれば風が後押ししてくれる
騙されておこう五十歩百歩なら
欲少し削ると川が流れ出す
蝶よ花よと世間知らずに育つ罪
あなたとの出会いが生んだマグマです
例外もあるとすすきの穂が笑う
妥協癖ついて締まりの悪い窓
紙芝居ほどのジャンルで生きている
百歳のベストカップル賞狙う
犬掻きの一生で良し共白髪
一日を丸い笑顔で締めくくる

芦屋市

竹山　千賀子

湯煙の中へうっぷん捨ててくる
筍を供えて春を分ちあう
願い事多くて悩む天の川
ここだけと話す電波はよく走る
メール浸けあなたの声も忘れそう
ルビーより軍手が似合う母の指
子育てのベテランだった母を抱く
千円で私流のお洒落する
まごまごし認知症だと仕分けされ
頑張る手さぼる手みんな私の手
雑学を拾って帰る縄のれん
逢わぬようそらした道であう不運
目に見えぬ良心に日々裁かれる
水割りに愛を一滴プラスする
友が逝き交換日記以下余白

枚方市

伊達郁夫

温かい話に発芽する私
譲られた席に落ちてたサロンパス
老木も同じ花びらつけて咲く
晩酌の一合ほどの夢を見る
うれしさを書くと字体が丸くなる
染ってはいけない人の色を着る
褒めなくていいよ一人で咲いてます
忘れたい酒が逢いたい酒になる
雪の日は雪の白さと会話する
一冊の出合いに明日が光り出す
過去捨てた心の部屋が広くなる
自分への弔辞を書いた昼の月
ふるさとへ帰る錦を織っている
あなたにも笑顔送った罪がある
介護する母健やかに病んでいる

宝塚市

田中章子

プラネタリウム神の世界を見るような
楽な方楽な方へと行くリズム
コスモスが待ちくたびれて皇太子
とりかぶと野にある時は美しい
絵手紙の外までこぼれでる愛よ
夕焼けを見渡す好きな場所がある
ブランコがゆらゆら千の風と知る
軽い嘘だまされておくことにする
形より中味で勝負ラ・フランス
十秒ではずれとわかる宝くじ
ちゃんと診て歳のせいではありません
今日の妻電池切れです無口です
母と見た桜笑ってくれました
ギブアンドギブそういう人になれるかな
言霊を大事にいつもありがとう

鳥取市

田中一眸

正しさに息が乱れてくる夜更け
反撃を狙って柳雪を負う
亡父の声聴いたか鮎が遡上する
無題でも父の生きざま学びたい
工事中だれも知らない幕の中
酒を断つけじめの酒が美味すぎる
笑うこと忘れていたね雨あがり
息止める限度を知っている強み
指先をピンクに染めて春を待つ
抱擁がちょっと苦手な針ネズミ
引き下がることのできない昼の月
歯を磨く今日一日を生きるため
どこか負けねば球児の夏は終わらない
たまご持つように遺骨を抱いている
トップから落ちても命だけはある

河内長野市　谷　久美子

産声が景色を変えた夜明け前
シグナルを見抜けぬ親と子のあわれ
先先の国を背負ったランドセル
子が歩く地図は自分で選ばせる
悪いとは知りつつ野心捨てられず
世間との繋がり乾く高齢化
ぽかぽかの心温もる介護の手
ゼロからの夢を育てて来た昭和
あいまいになって和らぐ老いの日日
私より怖い奥さんいたはった
溜息と思案に曇る窓ガラス
通帳を睨み余生を考える
呆けたかと言われいっしょと言い返す
げんこつをゆるめ笑顔を取り戻す
身の程のセンスでうまく暮してる

大阪市

谷口義

クロワッサンこの世は捨てたものでない
天高く女にもあるダンディズム
とり散らかしておりますがどうぞ　秋
尖りそうになると梅干を食べる
入院したかったのに日帰りの手術
今日一日はふっくらとしてました
五百円硬貨貯めているおばあさん
住み込みの神さまを探しています
五十年同じ所に布団敷く
好きだった川の匂いのする男
女らしく水を飲むのはむつかしい
あり合せの紐で括ってある覚悟
おとなしく生きているのも一仕事
おっとっとっとおばあさんにも明日がある
素揚げして蜂須賀小六は別冊

和歌山市

玉置当代

トレードマーク誰にも負けぬ笑い皺
生きねばと頑張るママの薬づけ
満天の星に姉いる娘いる
札幌の夜景に酔うたフルムーン
幸運を祈る娘たち渡米
久々に母と遊んでいる介護
大勢の人と出会った小商い
煎餅割るようにガラスを切る匠
紅葉晴れあずさ五号で柳友と旅
気がつけば私提灯持ちでした
食べて寝てこの腰痛を何とせん
帰国する娘夫婦を待つ不況
スキップのリズム狂った骨粗鬆
控えめに生きて損することばかり
ど忘れが増えて不安になってくる

枚方市　丹後屋　肇

病妻に掻いて貰っている背中
へとへとの老々介護噛い合う
サンダルにアートネールの自己主張
ブーメラン　愛してくれていたんだね
完全試合野望を砕く足の先
叛逆の鉢巻青春メモリアル
天神さんおおきに届きました　春
スマートフォン昭和をセピア色にする
桜前線追いかけて遭う猛吹雪
一皮が剝けぬ作句のじれったさ
人間と異常気象がコラボする
コップより両手が旨い岩清水
コントロールされているのか汚染水
いつまでも抱き締めている朝のベル
千の風僕に向かって寄せてくる

紀の川市

辻内次根

味噌ラーメン男ひとりの封を切る
ひたすらに耐える形になる猫背
イメージは花野胃壁を補修する
迷ったら鏡の前に立ってみる
冬に咲く花の図鑑をあけて見る
鬼さんのいない一人の鬼ごっこ
自分との闘いである喧嘩四つ
人間に信仰が要る冬の部屋
深呼吸しますわたしに還る時
絵の中に男の遊ぶ基地がある
時々は強く揺すってみる暮らし
非常口探す静かに眼を閉じて
思い出の品のところで手が止まる
目盛りから少し多めに注いだ欲
いい天気春が生まれている空き地

藤井寺市

津田シルク

化粧して春と遊んで見ませんか
カニ缶が家出したらし水屋から
胃の中へ春爛熳のちらし寿司
侘び寂びの国へ黄砂は容赦なく
かけ算の九九が聞こえてくる風呂場
治安の良い国に生まれて隙だらけ
寸志程の愛を地球の裏の子に
桟橋の途中で決心がゆらぐ
腹割って話すに何んで酒が要る
聞いたはず脳が知らぬと横を向く
道草も楽しや古稀の好き勝手
見知らぬ人の中で生きてる子の臓器
連れ合いの寝息たしかめ床につく
お金では買えないものが要る老後
体調不良どの科が診ても齢のせい

和歌山市

土屋起世子

タンポポの綿毛乗る風乗れぬ風
指切りをしたのに港夕陽だけ
樹に凭れわたし充電しています
断捨離をします遺影裏向けて
一人住む壁に娘の注意書
一日を笑って暮らす策たてる
ごはんですよ誰かに呼んで貰いたい
病んでから上手に言えるありがとう
気兼ねする人もいません宵寝する
独り暮す喧嘩相手のない辛さ
まだ老いぬ五欲しっかり肚にある
手摺りある方が私の進む道
本番になると地声が小さくなる
不器用な息子家業守ってる
返したい恩ある人も家族葬

松江市

恒松叮紅

いい気分昔の唄が口に出る
卒寿越え文芸といういい味方
いい知恵は出ぬかと暦めくってる
声だけは若いですねとからかわれ
ペン立てが佳い句作れと言っている
新しい事にはついて行けぬ杖
文芸の中に抱いてる夢がある
親切が伝わってくる杖の先
折角の話を塵にしてしまう
大正のゲートル巻いた足も痩せ
血筋かな老いても好きな土いじり
指先は元気ですよとペンが言う
まだ欲があるから老いの小さな夢
もういいかい昔遊んだ友も老い
年のこと考えなさいと石が言う

大阪市

津村志華子

健康で幸せですと言う笑顔
元気よく跳ぼうよ空は無限大
遠い日の苦いページは閉じてある
メモ帖に歳を忘れたスケジュール
忠告を受けて頷くことばかり
本心を突かれてグーの音も出ない
リハビリを待って居る間に肩が凝り
ほどほどの程がわたしを悩ませる
ひとりにはひとりのいくさ風に立つ
オムレツがふんわり母の詩になる
ファスナーもわたしも鈍くなりました
ゆったりとしよう余生に限りある
せせらぎも蛍の歌も風の中
母さんはどうしてるかな雨しとど
さくら咲くまだまだ生きていたくなる

大阪市

津守柳伸

ねんねこの温み忘れぬ子の絆
ご好意は素直に受ける処世術
生かされて春夏秋冬めでる幸
デュエットは幻だった流れ星
いたわりの言葉は愛の潤滑油
月一度命洗濯する湯宿
バイキングならせっかちもご満悦
腰低くジュニアに習うメカ音痴
マラソンの余裕ベテラン無の世界
一年の早さは脳を置き去りに
働いた汗報酬に無頓着
かたくなに拒んだ父もジェネリック
ぼんぼんは嫌い嫌いが身を焦がす
反核の狼火世界に咲かす花
振り上げる拳九条消費税

大阪市

鶴田遠野

初恋を無色無臭で秘めている
自惚れを三面鏡に睨まれる
ぶれぬよに心にレール敷いておく
アルバムにいない貴方を貼るハート
風船が萎む男の更年期
胸襟を開けば女逃げてゆき
十年の重さ軽さを子で想い
誤算でした妻にもあった反抗期
人生読本戸惑いながら読んでいる
夏よりも冬にひまわり咲きたがり
悲しみ捨てに辿り着いたら故郷の駅
心暖め幸福感を抱いて生き
老いてまだ振ってる子への応援旗
最高の神のジョークで生きている
にこやかな顔を選んでいる遺影

箕面市

出口セツ子

マニュアルの通り育てた子の弱さ
良い明日になるとは思えない政治
神の愛だろう次々来る試練
明日の米あって魂売らず生き
優しい子二人居るから無敵です
税に鈴つけて調べてみたい使途
日本の明日を語ると熱くなる
心まで貧しくならぬよう笑う
生きる疑問シミにならないうちに拭く
今日の悔い終電へ捨てて明日へ翔ぶ
言葉より涙を武器にする女
悲喜愛憎透明になり老いてくる
還暦を過ぎて自分の色で咲く
車間距離適度保っている親子
終章へ落しどころを模索する

大阪市

寺井弘子

サービスデーメロスの様に走る妻
アドリブの過ぎたスピーチ白けさせ
衿元に落葉一葉小さな旅
良妻の仮面を剥いで楽になり
ライバルの祝電粛粛と受ける
広い空ゆっくり命ふくらます
頬杖をつくと聞える春の音
我が家では妻も野菜も規格外
マナーまで学ぶ野点のおもてなし
花筏流れる川と語り合う
マッチ棒しゅっとこすって昭和の灯
カラフルにすっとひと刷け少女羽化
筆冴えて金の一字を輝かす
寂しさを叫ぶ谺は返らない
囁きの言葉をポケットに仕舞う

枚方市

寺川弘一

ふくらんだ蕾の中に明日がある
蕾が開くいのち万歳するように
やがて散る美学の為に桜咲く
正直に自分の彩で花が咲く
枝伸びる無限の空に誘われて
青い鳥見逃しやすい青い空
青い塗料を買いに来たのは青い鳥
水たまり泥が澄んだら青い空
躓いた石も私の運らしい
自力では動けぬ石の長い旅
寂しさの数だけ石を投げる池
これから先も沈黙だろう石仏
一度しか通らぬ道のため生きる
蝸牛到達点は動かない
深山の落葉静かに土になる

海南市

堂上泰女

偏差値と全く違う倫理観
偏差値にピントを合わせ逃がす幸
欲望へダイナミックになるカード
相槌へ伸びる天狗の痒い鼻
青い鱗研ぐ少年の耳ピアス
甚六の夫にしっかりさせられる
青春の若さダイヤに気付かない
お互いの気儘に添うて夫婦独楽
コスモスが揺れる待ち遠しい返事
生きているつもりで予約みな受ける
聞く耳を持たず自分で作る壁
不惑の子にまた笑われた老婆心
アルプスで鍛え小山で蹴躓く
唇に歌ひたむきに生きている
砂山で探す思春期のカケラ

篠山市

遠山可住

城のある町でお祭り好きになる
日の丸が一番似合う秋の空
梅干しで時どき日本人になり
オートバイ十台続く春の音
可愛い子に旅をさせたら帰らない
町の子は帰って来ない吊し柿
わらべ歌お地蔵さんと生きる里
泥くさい手だ温かい血が匂う
妻という手だけが届く痒いとこ
満願の坂登り切るいい眺め
夕食へ笑い袋を一つ盛る
産声へいのちが一つ過疎守る
熱いのがごちそう味噌汁がうまい
平凡という幸せが来て米寿
青い星ここで白寿へお邪魔する

堺市

遠山唯教

一心に母がとけこむ子の瞳
つつましく生きて理想をはなさない
朗らかな顔が大きな輪をつくる
尽くしても四恩の底にとどかない
欲少し抱いて人間らしくなる
つつがなく暮らすも欲にきりがない
正座してしつこい欲に立ち向かう
筋道を立てた本音が蛇行する
間違いがあるから人はいとおしい
充たされていれば忘れる水の味
わずかでも旅の荷物はかるくする
賭けるものなくして知った家族愛
厄介にならぬ程度に距離をおく
地獄まで落ちて仏の目に出会う
断酒して遠く見守る男親

羽曳野市

徳山みつこ

サクラガサイタヘイタイハススムナヨ
おばさん鈴なり松平健の腰
よく喋りますが演説できません
ソクラテスの妻にはちょっとだけ負ける
ドルもっと落とせとウインクするモアイ
わたくしの寝相見ないでお月さま
ご自愛を祈って花の切手貼る
おふくろの味へ男の漂流記
爆弾に化けるでないぞ消費税
霊魂が諭しつづけるてんでんこ
持ちあげてやればあっさり開く鍵
不揃いを合わせて石垣の見事
ひっそりと貯めてドサッと出す財布
百万円札はメモ用紙でした
不死鳥となって貴方はわが胸に

京都市

都倉求芽

代々の親バカ子バカ梅匂う
能面がかすかに笑う春の宵
合併で秘湯も市内になりました
うっかりと怪我した息抜きの部屋で
力関係なんと悲しい言葉だろ
裏側は見せぬ月にもある事情
私には同じ地動説天動説
返盃にしびれ薬を入れといた
充電の相手をいつも変えている
積んどくの中に内緒の本もある
文化とや世の中すべて割れガラス
身に覚えないのに違反したらしい
自分の声があとで聞こえた吹きだまり
影よりも先に老いたくないつもり
もの好きですませぬ　これからのいのち

鳥取市

土橋螢

葬送の曲はゆっくり海ゆかば
生も死も夢幻の中にあり
夜ごと見る夢に女が現われる
カーナビに案内されて北へ行く
荒城の月　尺八を吹き鳴らす
おめでたいメール春には母になる
金持ちに学んだ銭の使い方
学んだように猫の子が顔洗う
ボランティアする人　金をもらうひと
美しいこころを抱いて薔薇真っ赤
悪人が仏の道をまっしぐら
勝つことが難しいから負けてやる
男にも女にもある春の色
光るもの抱いて笑った仏さま
露となり北斗七星から落ちる

生駒市　飛永ふりこ

曙を目指し馬の直走り
迷ったら海が私のセラピスト
体罰などまことの愛は染み透る
生きているエキスしたたるシャンソンよ
移された欠伸ミントの飴いかが
半音を下げて迷いが深くなり
ラッキーと叫ぶ悪魔に振り向かれ
探られぬように貸金庫に入れる
一呼吸おけぬ若さがもめさせる
濃淡のみどり私の牙を抜く
奥歯にある悔しさ綿菓子がしみる
親しげにメタボの鯉が寄ってくる
曲がるたび蛇も狐もお出ましに
雲海の秋から戯言がもれる
終焉の夢は八重桜の化身

高槻市

富田美義

人はみな明日を信じて時きざむ
学ぶ事タップリあると春の靴
近所では弱い女で通す妻
四面楚歌の位置でも妻の応援歌
心配をかける妻あり生きる幸
どん底で翼をくれた妻の奇智
住所録消された二本線の濃さ
喜寿傘寿エールが来ない長寿国
リハビリは妻の涙が杖だった
口車に乗った男の破裂音
爽やかな風に揺られて残り道
捨てきれぬ夢は下絵のままに錆び
年の暮れ困った顔をして置こう
川柳を愛し遊ばれ時きざむ
散る桜この世にかかる雲はなし

高槻市

富田保子

愛と忍まん中に置く箸二膳
一つなり地球も夫も命とて
目の合図すぐに介護の手が拾う
回る寿司絵柄も見ずに元気な子
突き放す強気の裏で手を合わす
添えた語が女心を泡立てる
義理を欠くこれが意外と勇気いる
サプリかな女の長い無駄ばなし
慰めの言葉が無くて褒めてやる
本心は化粧の裏にかくれんぼ
ドッコイショ言うたび若さ削られる
爽やかに揺られ眠りの里に着く
忠実に生きて心は傷だらけ
老々介護運ぶ一匙ずつの愛
クレマチスこの世に残す思いなし

出雲市

富田蘭水

太陽を拝んで恥じぬ日を送る
大吟醸米寿の五月待ち続け
大遷宮観光出雲もり上げる
色々な顔に出合って強くなる
真っ白な雪の心に勝てぬ悔い
傘寿すぎ哲学が持つ読みごたえ
リコピンの赤いトマトが笑ってる
凛として絆がつくる明るい世
梅つけると亡母の思い出ありがたく
神在りの月に稲佐の浜は冴え
二度とない今日の日記は光ってる
砂風呂へ旅の顔してひたってる
小包の旬がつないでいる師弟
体重計ぐるっと回るすごい秋
負けまいぞまだまだ余命生かすまで

寝屋川市

冨山　ルイ子

夕焼け空仰いで今日もありがとう
懸命に生きどうどうと胸を張る
希望まだ捨てぬ明日も陽が昇る
怒った顔見せず生きてきて傘寿
紙屑に涙の痕のメモ用紙
どうぞどうぞ貰うのも好きあげるのも
やさしさを貰いおいしさ倍にする
約束は重くて軽いのは命
さわやかな付き合い続きますように
きっと長い付き合いになる友を知る
なんでなの皆が大事にしてくれる
太陽の恵み春には春の花
思い切り地球が拗ねた大津波
たくさんの友を待たせてある黄泉路
二十年本社出席知らぬ間に

鳥取県

鳥越鬼一

ヒロシマ　ナガサキそしてフクシマ
沢山の夢も砕いた大津波
連想が負の方へ向く去年今年
何ごともなかったように年が明け
人工の妖怪ですね原発は
原発はいらぬと風車回ってる
咲かせたい脱原発はまだ蕾
反原発ほのかな希望託すデモ
ただいまと言えば応える人がいる
アレアレと言えば答えてコレですか
老犬と老人二人侘び住まい
ありがたや玄関先にまた野菜
それぞれの波瀾万丈鶴と亀
土下座中あかんべしてはなりません
あしたがあれば未来はいらない

堺市

内藤憲彦

定年日賞味期限と違います
空の虹楽しんじゃえと言っている
同居でき少うし父母に恩返し
橙が大きすぎます鏡餅
三回転真央ちゃん真似てさくら舞う
世話のかかった娘きれいに咲きました
えんぴつをなめたあとある祖母の文
正体がすでにお顔に書いてある
鈍ですが筋を通して生きてます
桜咲き一粒種が正社員
初孫が生まれ思わず指鳴らす
ドロップを口に含むと母の顔
いい旅だったとキーホルダーを買う
ペアウォッチときどき時間合わせする
自分史に妻の苦労も書き添える

富田林市

中井アキ

スキップで赤いきっとに逢いにゆく
ときめいて見上げた空の青いこと
哀しみを薄める様に霧が降る
失恋のひとつをアクセサリーにする
あかね雲誰かを愛し始めたね
それぞれの冬に絆が雫する
懸命に埋れ火吹いている余生
告白をした日金魚はクリスタル
その時はきっとあなたを呼ぶだろう
或る日ふと勝ったと思う吾亦紅
ブラックコーヒー観点を変えてみる
薔薇匂う部屋で向き合う見つめ合う
鍵穴で女ひらりと裏返る
病院の廊下とてつもなく長い
生年月日ひとつコトンと落ちてゆく

大洲市

中居善信

生きている証は顔に皺がある
底の浅い袋ばかりを持っている
芋食って育った僕に骨がある
足の鎖を解かねば自由やって来ぬ
やや左歩いて怖いものがない
疑いを持たない母の目は恐い
内緒だが石に何度も躓いた
片ちびた鍬にも父の握り癖
転んでも起きても土の上である
雨だれの同じ音を聞いて喜寿
ほろ苦い思い出ばかり麦の飯
探してる同じ匂いをする人を
明日の飯それは心配していない
器からはみ出す個性だと思う
忘れないでください僕のいたことを

大阪市

中井崩

ゆっくりと歩く大空見たいから
萎えかけた夢を引っ下げマイウェイ
生き甲斐が膨らむ孫の声変わり
隙見せてほぐれはじめた肩の凝り
いい人が住んでいそうだ赤い花
すっぱりと未練断ち切る花鋏
地団駄を踏んでごまかす万歩計
二人居て進化の果てにある透き間
満面の笑みにかすかな胃の痛み
一人では背負いきれない森の闇
口笛を吹いて十五のレモン水
穏やかに過ごせた日には○印
嫁の役ここで降板ひとり旅
飛びなさい戻って来れる巣は守る
欲捨てた頃に運気が歩み寄る

大阪市

長井善純

命ある限り忘れぬキノコ雲
秘密法時代が変わるかも不気味
プライドを捨てたら増えてきた笑顔
パソコンといつも喧嘩をして元気
鈍いなと責めるもう一人の私
ポケットの中の本音が暴れ出す
底辺を歩いた汗が生きる糧
年の差を感じさせない飲み仲間
自分史にちょっぴり嘘も混ぜてある
時よゆっくりと願う今日この頃
私より高い服着てますペット
奥さまの広い心でまだ夫婦
川柳のお陰ストレス減ってきた
飲み会も川柳と書くカレンダー
全没でも懇親宴はど真ん中

富田林市

中﨑深雪

雨の夜ポチは一人で逝きました
犬と晩さんしてはった青テント
踏まれても刈られてもタンポポの黄
オーイみんな春だ春だと鳥の歌
み仏へ詫びの多さよ古希の坂
み仏の笑顔おもって手を合わす
気がついて良かったですと仏様
陽炎のような望みに賭けている
わたくしの素直試しに来た病
疼痛の海に投げられワラ探す
リハビリの足を見守る草の花
ままならぬ体でさがすアリガトウ
あなたからの便り心に鈴が鳴る
春だよと土を持ち上げ蕗のトウ
一日をねぎらうように夕焼ける

岸和田市

仲谷弘子

広い空を亡夫の御霊も千の風
性善説信じ生きてるお人好し
飛んでますかトンボや蝶が震災地
少子化で学舎閉鎖涙する
米寿の師迎え傘寿のクラス会
炎の画家ゴッホ糸杉が燃えてる
オルセーで心美人になった旅
坂の上の雲真之が好き兄も好き
長電話癒されている不整脈
長寿国薬が支えてる命
読書好きお一人様も楽しめる
飽食の世でも悲しい餓死ニュース
さらさらと記憶こぼれて行くこわさ
私きれい錯覚しなきゃ生きられぬ
子が巣立ち夫が逝っても続く旅

尼崎市

長浜美籠

生かされてジグソーパズル埋めている
街角もいま銀杏散る画布の中
ああこの世三文オペラ見る如し
時間差で来る嬉しさと淋しさと
過去形になると痛みも懐かしい
ダイナミックに夢を見させる遠花火
シナリオに無い人と逢う北野坂
深い吐息残して花水木は散った
文箱から母といた日が香り立つ
独り居もよし遠雷を聞いている
キャンバスの余白に寄せる波の音
いとおしい秋に爪先まで染まる
あたたかい雨です鳩の住む街で
未来図の修正をする冬の底
あと一息結び直すか靴の紐

米子市

中原章子

他人にはあなたの背中掻かせない
テレビ見て泣けばティッシュがすっと出る
愛された心根胸の奥深く
悪役の帽子一番似合ってる
速い脚先祖は飛脚だったかも
満たされて無い物ねだり娘が欲しい
新しい名刺我が子の顔を知る
威張らないなめられないと唱えてる
頑張れと言わず気楽にいけと言う
五十年経って人柄丸くなり
失った若さの代わり知を溜める
身辺に落ちてる愚痴を拭いている
ハイウェーばかりではない小道生き
忘れても良いんだ思い出せばよい
晩年の中身苦笑の種ばかり

奈良県

中原比呂志

金銀銅レアメタル以上の合格証
百枚を壊し一枚飾る床
玄関は出船入船転覆船
四捨五入きわどい線の浮き沈み
決断へ波攻めてくる引いていく
誠実に生き片側の靴が減る
逆転の発想たまご割ってみる
グーばかりよく出す癖で鬼の役
あの瞬間風化させない鐘をつく
変えるのにまだためらいのある鏡
三人の智恵を絞って逃げる道
絶対のピンチペットは横を向き
悪者にも条件出さぬ弥陀の膝
以交会引き継ぎ生きる地下句会
卒業の証書は死んでからあげよう

鳥取市

永原昌鼓

でこぼこの道には笑顔敷き詰める
向かい風　程々あって湧くファイト
雑魚だっていつかボクもと辞書を繰る
夢を追う靴は老いてもよく弾む
回り道きっと役立つ時が来る
義歯入れて暫し踏んばる老いの坂
汗かいて通った後に花は咲く
老いてなお夢への努力惜しむまい
褒め合って老いた夫婦の潤滑油
まだ夢を追って買い足すスニーカー
明日開く蕾の笑い声がする
出発の春だ軽めの靴を履く
立ち枯れた枝にもあすの芽が宿る
介護の手　空いて緩んだ老いの箍
ゆっくりと歩こう先はしれている

鳥取市

中村金祥

一日一句父母に伝えることがある
ストレスのガスが抜けてく青い空
ゆがんだら笑顔の花を咲かせよう
生きて行く誓いに柿の種をまく
喧嘩した後で反省して学ぶ
禿げそうで禿げぬ頭へ老い忘れ
訂正は絶対しない大自然
まぜくると平和の海が濁りだす
苦しさに耐える偶像から学ぶ
成仏へ七つの欲が捨てられぬ
命日を忘れないのも孝行だ
ありがとう素直に言える子が育ち
今日の日がおいしかったと言った孫
ときめきもないが平らな日が暮れる
下手でいい卒寿記念に句を残す

鳥取市

夏目一粋

青空は薬のように効いてくる
禁酒していたら出世はしていない
浪費にはもう会う機会ないだろう
灰汁がぬけきってつまらぬ人となる
いじめてもいじめられても母は泣く
アメとムチ夢があるから鞭をとる
帰りゆく母とぼとぼと点になる
逆鱗に触れて左遷地さまよった
芋の子を洗うと少子化を思う
にんげんに化けてうろうろしています
ぜいたくもなんだかつまらなくなった
生きるとはこう言うことかまたゆがむ
貝殻を拾い集めて供養する
にんげんの砂漠の中で目が回る
共感を呼ぶアピールが慕われる

米子市

成田雨奇

赤ちゃんがこの世に飽きて大あくび
見ていろと子に言う独楽がまわらない
豆粒の自分と知って腰すわる
花よりも酒を喜ぶ父に花
楽観の隣に無知が棲んでいる
主義もなく思想もなくて気楽人
塀のない家に育って塀がない
親を見て親とは別の方に行く
自分という重い荷物を持っている
女子の影踏むおっぱいはこのあたり
ぼくと一緒に笑ってくれてありがとう
一万円貸した男が来たそして
諦めが肝心便座立ち上がる
過去形のもしもは悔やむ事ばかり
ひたむきにちゃらんぽらんを追いかける

川西市

西内朋月

徳利を握ると悲しい音がする
焼酎が今日一日の締めくくり
尿検査も酒を飲むのも紙コップ
飲まないと辛い話は切り出せず
善人の目線で見ると騙される
正解が無いかも知れぬから難儀
リサイクル出来ない僕の脳回路
困ったら爪を噛み切る癖がある
揉めていて三途の川を渡れない
終焉がゆっくり迫るから焦る
胃袋がないのに腹が空いてくる
他人から見れば気楽なひとりもの
祈るよりほかに手がないから祈り
醒めた目で見ている僕が別にいる
いらんこと喋って悔いがまた増える

鳥取市

西川和子

痛くても笑顔でいよう松の内
詰め過ぎか袋に今が入らない
晩学の脳に入れてもすぐ消える
物言えば私の知識試される
よく光る星になりたいから励む
畑仕事僕の暦で動き出す
僕の都合で草の命をむしり取る
畑に恋をすれば野菜が良く笑う
助手席で手綱引いたり緩めたり
時どきは奥さまらしくひざまづく
ジョーカーを回しゲームはまだ続く
私もやがて群から消えて行く
穏やかな湾に抱かれている安堵
今日も又昨日と同じ絵で終る
嬉しさも怒りも哀も句に納め

西宮市

西口いわ忘

一・一七　十九年という月日
天災が悲しみ色に塗りつぶす
いっぱいに咲く未練などないように
美しくあらねばならぬバラの哀
野の花のように清くは生きられぬ
紙人形に顔は描かないことにする
いわし雲ふっと師の句を口ずさむ
ほろほろと苦いが好きな人の森
応分の幸せでいいみかん剝く
嬉しくて二十四時では足りない日
ひとときの幸せくれた勘ちがい
首の振り一つで決まる運もある
溶けるなら紫色に溶けようぞ
お許しを明日は悪女と決めている
青春が華なら老いは勲章だ

松江市

錦織禮子

振り向けば淡々と可も不可もなく
夜も更けておぼろ月夜は語り出す
わたくしを揺さぶって来た赤い傘
降って来たチャンス無尽蔵で受ける
旅の空丹頂鶴が舞い下りる
懐に入れたいような澄んだ湖
棟梁は我が子のように鉋抱く
みかんの木たまに逆立ちして欲しい
初々し18金が気を配る
ひらひらの刺身も入る桜(はな)弁当
相席の人豪快に蕎麦すする
褒め合ってさよならをする曲り角
老いては子そっと見守る昼の月
一生を楚々と咲きたい目立たずに
ひーふーみー紙風船の低飛行

鳥取県

西谷悦子

狂いなく喜怒哀楽を撥が打つ
こめかみがピタリと風を察知する
挫折した夢のはしっこ挿木する
ありがとう手を離しても大丈夫
ときめきを探して風と戯れる
わたくしの存在を問う椅子がある
一番もビリも皆汗かいている
日本の気品あふれる桜咲く
背伸びして砂の器が崩れ去る
修飾語要らぬさらりと生きてゆく
刺抜けてバラ花束の中にいる
スマイルにスマイル本音洩れぬよう
郷愁がフウッと投げる弱い顔
消えることないアジアへの侵略史
ときどきは絆を洗い確かめる

大阪市

西出楓楽

路郎薫風生涯追ってゆくつもり
生きるっていいなパン屋でパン焼ける
悪人は悪人づらをしてなさい
ため息を溜めて大きくなる乳房
糊代を多目にとっておく冬日
数え唄途絶えおんなの手暗がり
げんこつの中へ答を閉じ込める
オムレツがふわりと焼ける林住期
煮豆ぐつぐつ大人の童話語り出す
野に下る男の背なが暮れ残る
黒揚羽未完の恋の化身かも
誤解されているのか寒い背の辺り
扇風機の風に句読点ずれる
生きるとや毎日石を積んでいる
母の鈴響く昭和を語るたび

京都市

西村益子

今日の嘘枕カバーにへばりつく
特等席に自分の蒲団乾しておく
これなあに孫の疑問は無限大
遅咲きで良いよ元気なやんちゃくれ
親戚が多く留袖休みなし
わかるわよ私も介護してたから
長生きが悲劇だなんて言わせない
弁当にきのうの喧嘩足しておく
ブルドーザーに踏まれ大根痛かろう
思いやり贈られました誕生日
裏庭に愛が不足のナスキュウリ
からっぽでも献立だけは考える
雑魚だけど選挙で思い届けます
幸せは炊立て御飯解す時
一つづつ諦め生きるこれも老い

堺市

西村りつえ

酸欠の頭を冷やす青い空
ニュース毎人の怖さに身が震え
悲しみに涙も出ないドライアイ
ずっしりとパワー抱いてる八重桜
びくびくと小さな嘘を胸に抱き
膨らみに胸が高鳴る桜守
一年中笑って癌を蹴っていく
内緒話花野に撒いた千の風
雑談に何か掴んだ目の動き
饒舌にいつのまにやらした妥協
医者嫌い病に勝てず頑固折れ
全身で突き破りたい老いの壁
浮き浮きと春のリズムで進む恋
煮崩れて美味なカレーは母の味
永遠誓い君にまかせて揺れている

枚方市

二宮山久

春近し出番待ってるランドセル
加齢臭の男シャネルにガードされ
梅一輪心和ます祝い膳
定年後描いたシナリオ歩み出す
五線譜が我流ですネとハーモニカ
里の春並ぶ食卓笑みこぼれ
夕日落つベンチ寄り添う二人連れ
春近し庭の小枝につがい鳥
新春を祝う夫婦の旅の宿
里帰り昔ながらの鳩時計
露天風呂見知らぬ人に話しかけ
日溜りを求め散歩の老夫婦
秋晴れや遊び上手な旅の宿
読みかけの本そのままに秋の暮れ
故郷はみかん色づく瀬戸の海

枚方市　二宮紫鳳

欲少し捨ててゆとりが心地よい
棘一つ笑顔で包む花曇
おみくじに弾みをつけた今日のつき
拘りを捨てて身軽な老いの坂
雪が舞う肌にふわりと露天風呂
相づちで心和ます聞き上手
どの旅もウーマンパワーの花盛り
リハビリの夫（つま）にエールのおニュー靴
一病が効をなしたる共白髪
六十路坂自分の色が見え始め
春風にワルツのリズム芽吹き出す
日焼けした孫の寝顔にうちわ風
新米の命が光るにぎり飯
愚痴一つ夫婦で分かつ長い夜
老い風に歯止めをかけるスニーカー

唐津市

仁部四郎

赤ちゃんのニッコリ春の必需品
じいちゃんの芸は漢字の使い分け
はにかんだ顔で写った頃もあり
定年で一つ片づくねばならぬ
日替わりでがまんしてきて共白髪
てはじめに御用学者の説を聞く
錯覚も誤解も嘘もヒトの知恵
習俗の記憶入れ札という仕掛け
その昔遠慮が法を補った
法律がいいえ世間というケース
割り勘の精神なのだ消費税
名も顔も見ずにカードはカネを出し
減反の大豆伍長の墓囲む
八月に子と憲法を読みすすむ
武道館でいっしょに祈る十五日

日高市

根岸方子

三宮あの出合いから今日がある
智恩院ライトアップで見たい顔
チョコ食べて思考回路に活を入れ
香水を変えて主流へ泳ぎ着く
Gパンの手洗いだけはする息子
加湿器がおしゃべりにする外は風
民意聞くピント絞ったアンケート
休耕が目立ち田毎の月かける
募金には素知らぬふりの小金持
故郷の市史思い出の玉手箱
花粉症豊かな森をにらみつけ
たおやかな女性の素顔知りたがり
年知らぬ人が若いと世辞を言う
自画像はなぜかムンクの真似になる
背負う荷が変化してゆく誕生日

吹田市

野下之男

初恋がわざと外した雪合戦
誓うては笑われている壁の紙
父の日もカレーで良いか妻が聞く
山鳩の繰り言少し聞いてやる
秋風が吹くのを待つは週刊誌
日向には鳩も議員も寄って来る
赤紙も知らずに済んでこの平和
空ばかり見上げて美女と雨宿り
干天の慈雨が身に沁む年金日
中流で玉なす汗を忘れてる
パソコンが許してくれぬ楽隠居
これだけは皆仲が良い万国旗
嵐山何はともあれ深緑
焦らせては泣かせ上手な金メダル
米寿でも美人の横が良いらしい

大阪市

萩原大朔

手を延ばし撫でたいような里の山
変わる世に変わらぬ友が里にいる
城下町折り目正しいひとに逢う
夕暮れが人寄り添わす中之島
抱く子猫幼馴染みの温かさ
好きな子へ一目散の鬼ごっこ
家中が父の廃車にほっとする
死にたいと言いつつ今日もサプリ漬け
しゃしゃり出て貧乏くじを引かされる
二枚目のハンカチが出る詫びの席
優しげな笑みを味方と見た迂闊
盛大に送られすぐに忘れられ
妻が逝き壁にもの言う秋の暮
逝き妻に赤い薔薇より白い百合
ぼんやりと記憶の底に母の歌

弘前市　**波多野　五楽庵**

哀しみの深さへそそぐ月明り
雪しんしん恨みが少しずつ消える
雪女おぼろおぼろの月夜にて
罪のない人と訣れる花の雨
心にも雪降りつもる不倖せ
一期一会の草には草の佛さま
風花や少し騙して行った人
生きのびる約束があり水ぐるま
秋には秋の花がこぼれる道が好き
一枚の色紙の中の冬景色
夜桜の宴は月の眠るまで
足萎えてはずまぬ毬をもたされる
まほろばの我が自叙伝は風の中
笑ったら急に寂しくなってきた
ちちははと住んだ道あり山があり

愛知県

早川遡行

当てのない日曜だから当てにされ
するしない妻と介護の話など
マイカーは不便飲んだら帰れない
良い本を沢山読んでバカになろ
曇り後ところによって放射能
楽しくて飛んでる訳じゃないトンボ
所在無きいのち一つの置きどころ
ガタガタと昭和の音で開く雨戸
またやったバックしていてごっつんこ
自転車にボクの元気を見て貰う
ネコはもう飼わぬ別れが辛いから
山頂が晴れてきたのは罠である
山小屋は不便な山の中にある
また来ればいいさ天気のいい時に
頑張った人しか見えぬご来迎

米子市

林　瑞枝

負けて勝つ面を白寿は知っている
ブランコの二人幾何学的に揺れ
米朝合意どんなに変わる世界の眼
恋は盲目おしゃれ鴉の世辞を聞く
ははを追い続けて紫陽花の海に
美しい挽歌よヤツデの花が咲く
流木のように余生はおおらかに
旅人に点しつづける野の一樹
影武者のかたちで待つはスペアキー
雉子啼いて秋の聖書に紛れ込む
隣家とのえにしで枇杷の木が熟れる
電気毛布は亡母のてのひらかも知れぬ
ふと染まる耳のうしろにある花野
青い月わが表札に逢いに来る
ちちははの想い溢れる田の案山子

出雲市

原　章峰

日本列島心と読んで和むなり
庭の松いい質問をしてくれる
四つん這いうれしいことがたまにある
八十五歳おだやかな海になる
波間からひょいと米寿の誕生日
占いを大切にする漁師町
するすると眠気を引いていくさかな
凭れるとボクの気持ちのわかる窓
松茸山は神様の匂いする
千円札は大阪の匂いする
郵便受の海を毎日覗くなり
軍神になり損なった珊瑚かな
その辺りすこしおさえてさくら咲く
土にかえすか海に流すか決めてない
枯れぬよう水をたくさん飲んで寝る

大阪市

原田すみ子

太陽と月ほど違って夫婦です
ショパンから落語まで聞く暇つぶし
わたしだけ集中豪雨絶不調
今開く花も娘も美しい
乗り換えの見知らぬ駅にある旅情
身の内が空になるほど笑いたい
油断した後ろ姿は正直だ
大雨に身の内なにか荒々し
つながりをネットに捜すひとりの夜
夏祭り幟を揺らす呱呱の声
万華鏡くるり回して別の顔
ふだん着の愛はキラキラ光らない
妻や母脱いだわたしの背に翼
月以外誰も見てないラブシーン
幸せを少し刻んでおすそ分け

高槻市　原　洋志

始まりはマッカーサーのサングラス
話聞く一緒に雨に濡れてから
きつく抱く君の鋳型をとるように
立ち喰いそば男ばかりの失語症
ぬるま湯に独り芝居の正誤表
レスポンス少し遅れて老い進む
手の平と同じ温度にする手紙
想い出はスローモーション夏の海
引き継ぎに太田胃散も添えておき
キーレスキーちょっと世渡り急ぎすぎ
黄泉路までワンメーターで行ってくれ
端折れたページここまで父がいた
約款に触れず保険屋梅をほめ
回収車去ってカラスの捨て台詞
下馬評をちょっと横目にマイウエイ

鳥取市

春木圭一郎

天かける馬へ今年の夢託す
酒好きの人とはやはり馬が合う
運のある人に当たれば運が向く
人のため喜々と働く人目指す
まずは今自分のできることをする
どうしても相手変わらぬ自分変え
やり直しいつになっても遅すぎぬ
経験に無駄なことなど何もない
あの時の冒険きっと生きてくる
全時間やりたいことに使いたい
役に立ち笑顔をもらい生きている
前向きに生きるためにも体力だ
平凡な日々がこんなにありがたい
法律のすれすれうまみ浮いている
平均を越えて個性が光り出す

尼崎市

春城年代

カーテンコール今ひとたびを願うのみ
春の切符が老後を和らげる
出会っては困る人などいない町
申し分ないテンポで朽ちてゆく老後
記念日を話せる人はもういない
滝平の切り絵くっきり蜜柑剝く
渡り切ったら橋のことなど書き残そう
大祖母の木目込雛の慎ましさ
祖父の渋茶をとても越えられそうにない
スロースロークィックと今は昔のブルース
新築祝いの古い記念樹疲れ出す
右脳からたすけ船出る夏の終り
青梅が転がる朝の世迷いごと
からたちを巡らせているわが母校
人間の驕りよ種子のない葡萄

大阪市

板東倫子

スカイツリーに上り宇宙の夢を見る
戦への無知と風化が恐ろしい
ひとりでは行けぬ梅田の変りよう
昭和史を生き抜いて来た疲労感
なぜ急ぐ川内原発再稼動
褒めるのも叱るのも良し愛あれば
泣けば何故笑えば何故と探られる
亡き人の話題次々除夜の鐘
無気力と見せてファイトは隠しとく
遺言も年賀も同じ筆で書く
ひょっこりと赤ちゃん島が誕生し
それからの話は知らない事にする
家内中が七草刻む母囲む
賢いが扱い難いコンピューター
高笑いする政治家に嘘がある

富田林市

肥山一文

青雲の意志をかかげて船出する
ブレーキをかける間もなく古稀迎え
無理強いで飲んだお酒でいい機嫌
飲み過ぎて妻と胃腸に怒られる
せっかちな俺でも酒はゆっくりと
大勢の厚いご縁で生かされる
育児終え次は夫を鍛えてる
定年後今度は妻の追試験
何しても夫婦二人で一人前
迷ってる試着室から出て来ない
食い潰す財産もなし朝寝する
孫帰り犬もぐったり寝てしまう
山の辺を歩けば香るいにしえが
古稀過ぎて懐かしい友月の中
手を拡げ世界の人をお・も・て・な・し

鳥取市

平尾菜美

しょうないね渋い顔して生きのこり

追われてる牛がテンポをくずさない

くどくどは言わぬ邪心が募るだけ

いきなりの断射利苦戦しいられる

肩書きをひきずる名刺泥まみれ

満ちたりて言える努力にありがとう

死なないでみんな手柄と生き抜くの

ポジティブな心育む脳が好き

序曲というテンポ携え門を出る

投資する時間わくわく秋深む

やる気でるスイッチ今日も持ち歩き

明日知れぬ命残照追いかける

生半可趣味がなかなか煮えたたぬ

スイッチに灯がつく母のほめ言葉

鍵外し降りるふる里あたたかい

大阪市

平嶋美智子

錆させてならぬ被災地への思い
めぐりきて尚被災地に胸塞ぐ
被災地の子よ雪合戦をしましたか
ベランダの隅で育てている大樹
一張羅着た日ぐったりして帰り
煽られて気付く私と違う旗
上げた腕下ろしはできぬ自負がある
反論の厳しさ汗がポトリ落ち
賢人も普通の人も老いはくる
産声は家族のスポット全身に
亡夫へのサインは今日も元気です
さいならの後のブランコゆらゆらと
異常気象元気でいるか秋あかね
足元の雑草踏んで気をもらう
思い切ってはじけてみたら友が増え

宇部市

平田実男

冷や飯がやがて血となり肉となる
美人より十人並が先に嫁き
没句でも落してくれる脳の錆
仕合わせは喧嘩が出来る妻が居る
按摩より妻の言葉へほぐされる
骨拾う箸へ未練がからみつく
アルバムの剥がしたとこへあるドラマ
奥さんも花も隣は美しい
心まで素ピンにする里の風
お袋の味に計量器はいらぬ
赤字国債が家計簿にも欲しい
満点でないほうにある人間味
休肝日よりも淋しい休刊日
最年長だから座れた床柱
愛してるより好きだよのほうがいい

寝屋川市

平　松　かすみ

くしゃみして雪の仮設を思いやり
お握りのひとつに愛の栄養素
スカイツリー古代を活かす真柱
真っ黒になって真面目なガードマン
リストラはやさしい顔の案山子から
ふる里の野菜で洗う私の血
ばあちゃんをバレリーナにする戸棚
もらしたら直ぐに届いた電子辞書
一葉とお別れしますスーパーで
うちのひと勿体ないの教祖です
凡人の僕にもちゃんと税が来る
祖母乗せて安全運転してくれる
王様に尽すわたしの二十四時
頑張るよ見送る人がひとり居る
ドクターに合掌されぬよう歩く

和歌山市

福井菜摘

和を保つ陰に日向に母おわす
道しるべ手垢まみれの母の辞書
母の掌にいつも賑わう唄がある
道草も発見があるランドセル
追伸に渋い意見が書いてある
セールスの背なに冷たい鍵の音
真四角に生きて秘密のない両手
世の中の裏を見て来た目を洗う
重ね塗りしたのに過去が浮いてくる
マンネリの絵を抜けふわり風にのる
それからの流れを変えた咳ひとつ
こんがりと幸せいろにパンが焼け
レトルトに真心そえておもてなし
ポケットにいつも初心を持ち歩く
挫けまいまだ手付かずの明日がある

弘前市

福士慕情

津軽万歳吹く風四季の彩がある
一本の藁だが友が息をつく
片減りの靴が外反拇趾とあう
太陽へ近いお山に雪がある
みちのくの山の滴が海へ出る
胸張って言える故郷の岩木山
雪のんのん微罪は深い雪の下
雪回廊ブナの芽吹きを聞いている
春風を受けてご機嫌つがる凧
桜舞う風のまにまに世去れ節
木漏れ日を浴びて輪廻を継ぐ若芽
真ん中に気泡が来ない水平器
しらかみの車窓に嵌る大落暉
終章へ残り火燃やす一行詩
津軽残照やがて墨絵の冬景色

三田市

福田好文

心臓が生きろ生きろと脈を打つ
健診で一病見つけ安堵する
嘘ついた後は暫く良く喋る
妊婦かと思いメタボに席ゆずる
家計簿を開けると夫が席を立つ
振り向けば老いもぴったり付いてくる
取っときのサプリメントは恋心
レシートをチェックする目で僕を見る
貧乏性遊ぶと神に叱られる
正論に涙を添えて攻めてくる
添え木してあげたい母の折れた腰
ゴキブリが優しい人を知らず死ぬ
出来る子の親は静かな参観日
手術室命継ぎ足すメスの音
熟れている私にだれも気付かない

鳥取市

福永ひかり

哀しみを誘う瓦礫の中の花
反古になる約束さくら咲いたのに
ゴールまで皆で繋いでいく襷
支えられ支えて人という漢字
我儘をみんなまとめているタクト
口外のできない話肚で聞く
財産の一つに入れる幸福度
心眼は真っ正面に据えておく
順風満帆　船には怖いものがない
裸だと誰も言わなくなってくる
少しずつ汚れ大人になって行く
歯車が一つ狂ってからドミノ
踏み絵だとしても決心変わらない
念ずれば何かがフッと降りてくる
日が暮れて一日毎の句読点

鳥取市

福西茶子

一日一笑ネタは身近にたんとある
深呼吸ときどき妻も吸っている
お昼まで寝ますお日さま悪しからず
泣いた日の五倍笑って元をとる
持ち歩く笑いぐすりと胃ぐすりと
満月がきれいやさしくなれそうだ
忠太郎歌う私も泣いている
アクセルを吹かして今日も空元気
座っても立ってもモデルにはなれぬ
木漏れ日の下で咲くのが私流
一滴も飲めぬが踊り芸もする
百メートル走る自信のある七十
ユートピアとはこんなものかと隠居部屋
子よ孫ようちに産まれて幸せか
羽撃いています私のロスタイム

尼崎市

藤岡りこ

訪れる客あり今日は紅をさす
十薬を育てる老母と抜く私
すぐばれる嘘だからこそ言うてみる
雨の日の水琴窟はマーチ調
芽が出たよ命のバトン受け継いで
荒れた手に喜びくれる収穫期
日本語のハイはイエスかノーなのか
知ってるようで誰も知らない黄泉の国
少年は恥らいながら席譲り
ほのぼのと思い出拾う日記帳
天才も例外でない物忘れ
北方領土の争いよそに鶴渡る
緑青が時代の重み美に変える
耳よりな話トラの子巻き上げる
みつばちの鼻唄聞いて花ひらく

尼崎市

藤井宏造

潔く滝から落ちる川の水
おでん炊くこれで明日も大丈夫
添え文がくぎ煮の旨味引き立てる
金メッキでもよろこんだ頃の妻
動揺を見せないために目を閉じる
束縛が嫌で時計はしない主義
空蝉は祈る姿のようである
やわらかくなったが意地の力瘤
深海魚みたいなママのいるお店
日本が飛びかっている縄のれん
道幅をいっぱい使う千鳥足
丁寧に仏具の掃除秋日和
去る人に涙は見せぬ寒椿
寒月にどうだとばかり冬木立
海に囲まれた日本は孤独なり

松江市

藤井寿代

満月にハートマークをぶら下げる
純愛の途中微熱が下がらない
咲くときを秘かに待っている少女
懐に緑を抱いて今も旬
万華鏡のぞき未来は無限大
のぞみに乗って賞味期限を追いかける
単純な私に効かす塩麹
本心を三ツ折りにした頭陀袋
赤い花つけてもらって孤独です
担がれてたった一人のお立ち台
蹴飛ばした丸い石にも笑われる
熟柿の甘さは男の頼りなさ
オンリーワンの夫が作るオムライス
子に持たすおにぎり母がしたように
日向ぼこ誰のものでもない自由

豊中市

藤井則彦

定期より切符で乗るといい景色
ドーナツの穴へ悔しい独り言
能面の息弾み出す橋掛り
ユトリロの白と向き合う孤独な日
棚ぼたに逢えば明日もと待ち受ける
クレームにふと閃いたヒット作
呆けるなら地獄に行ってからにする
コップからはみ出た泡の空元気
直角に四つ辻曲る老博士
人の名を思い出せずにアイウエオ
鷹を生む鳶に悔しい過去があり
むしゃくしゃを解いてくれたシューベルト
お見舞の言葉に困るペットの死
おはようと妻に言われて畏まり
自分らしく生きてはみ出す天邪鬼

京都市　藤井文代

涙した量だけましな人間に
すれ違う男にふっと出た微熱
八月の風が先祖をつれてくる
人生の坂道で得た底力
吐き捨てた種敵陣に移り住み
わだかまり解けてすっきり湯につかる
起きた事あるがままにて受ける歳
口ひらく度に石段踏みはずす
気くばりも気づかれぬよう気をくばり
甘くみたか心の中に開いたすき
四つ辻が私にくれる思考力
線引きをすると意味なく孤独感
嬉しいこと嬉しく言える嬉しい日
母は偉大妻と女は怖いです
しなやかな敬語でせまる京言葉

茨木市

藤井正雄

リストラは蛇で蛙の社員達
ちとにがい漢方薬に似た情け
兄の恋少し意地悪する姉妹
愛の詩の点字読んでる指の腹
皆晴れ着留守番の祖父茶を入れる
朝ドラのテーマソングにパンが焦げ
スマートでないが大好きお母さん
共稼ぎパパも手慣れた哺乳瓶
二度の職薄い酸素を我慢する
蟻の列キャリアはいない炎天下
古里の原画脳裏に崩れない
妻よりも長い歴史のある仲間
新調の背広歩幅を広くする
風船の中に親子の息まじる
夏帽子リボンは海の青が良い

大阪市

伏見雅明

正直に生きて日向に遠くいる
煮えきらぬ夫の竹を妻が割る
夫より機転が利いて妻の鬱
信じてと言われるたびの不信感
言い訳をするほど締まる妻の罠
青い鳥追ってわが家に辿り着く
独りでに育ったような口を利き
悔しさのあまり地球を蹴っ飛ばす
片隅でこっそり払うたばこ税
才能に水やりすぎて根がくさり
拍手する音で目覚めたコンサート
訥弁の気迫にかぶと脱がされる
ちゃぶ台で覚えた漢字忘れない
遮断機が降りて電車の遅いこと
好き放題生きてさっさと風になり

枚方市

藤村亜成

涸びた骨にはちょうどよい梅雨だ
苛めた方がより深い傷を負う
人のこころ奇麗に見える目薬なら射そう
いつも愛していたい輝いていたい
神さまを何度も裏切る願い立て
こちらを向かぬから大きい声になる
別れてから足りないことば思い出す
言い訳の唇だんだん涸れてくる
どうでもよいこと覚え肝心なこと忘れ
傷心の流浪の島で摑む愛
苦労人の笑いに口説かれてしまう
しこり洗い辛うじて友情を保つ
個性の滾る教室はフラスコだ
多事多難染めて一日夕焼ける
目的のある足ない足千鳥足

豊中市

藤原桂子

どう風を読んでも釈迦の手のひらに
濡れたこと忘れさせてる虹の橋
月の光勝者敗者の隔てなく
さわやかな人生だった遺影笑む
一杯の水から今日が動き出す
促したようにあじさい色を変え
この歳でやっと自分が分かりかけ
寒のばら凛と生きよと背中押す
赤とんぼ秋を配っている安堵
終章は頼むと今を翔んでいる
願い事　仏を苦笑させている
ゆっくりと時を回してみたい日も
一日が元気であれば二重丸
思い出を着てる気がするペアルック
鼻歌は今も少女のままでいる

岩出市

藤原ほのか

天命と思いふんわり受け止める
自分史のページに華の色を足す
後の祭りにならないように種を蒔く
大声をあげて命をつないでる
予定表あっても途は決ってる
私を演じきりたい予定表
おおらかに過ごせば笑顔ふえてゆく
足跡に素敵な花を咲かせたい
バランスを考え今を生きている
終止符をうつと方向性が見えてくる
終章の余白を埋めるありがとう
結び目を理解しあって歩いてる
はかり売りして私の夢紡ぐ
遠い日の記憶辿れば母の声
エンディングノート今年も書き換える

姫路市

古川奮水

名曲をじっくり聴かせ銘酒熟む
金婚へ振り子時計がとき刻む
私の思索探りに来たお猪口
完敗の涙明日へ脱皮する
勿体ない癖がだんだん部屋狭し
頂点が吐いた言葉で風が起つ
泡盛の人気に清酒遠慮がち
優しさの言葉に涙もろくなる
太陽と風が奏でるきび畠
花ことば笑顔で活ける誕生日
義太夫に招かれ隅で舟を漕ぐ
欠勤の理由に男値を下げる
酔い冷めに機嫌伺う夜泣きそば
白旗を掲げると家中丸くなる
禅寺の正座に足を奪われる

和歌山市

古久保　和子

足の爪切ろうか猫と遊ぼうか
雑巾を絞るときにも左利き
ドーナツの穴へ介護のバスがくる
がんばってます逆立ちのマヨネーズ
まちぼうけ化石になった恋抱いて
送られることが苦手で振り向かぬ
エンピツで時間を食べているのです
リンゴより地球の芯はやや斜め
クレーンもキリンの首も夕焼ける
絵手紙のかぼちゃの種を蒔いてみる
どんな小さな橋にも名前あるように
青梅をカリカリ生きているリズム
本の山譲りたい人募集中
砂に書く方程式がまだ解けぬ
強がりの手紙を母に書いている

竹原市

古田太虚

生かされる限り筆持ち墨をする
墨色よ年の数だけ枯れてみろ
妙法に照らされている心かな
筆供養心の錆を流します
侘助の自己主張する紅ほのか
筆にぎり締めて自分の影を見る
聞き役はオモトの縞か覆輪か
円を描く心にトゲが出ぬように
真実が透けても見える墨をする
スタートに最上級の筆を買う
踊れ踊れ妖精のよう筆の先
なにげない笑顔に心洗われる
損してもいい人でいます仏様
程よい夢よ仏も後おししてくれる
母に似た顔をさがしに羅漢寺

大和郡山市

坊農柳弘

年頭の誓い初荷で届けます
見て聞いて食べて五感を遊ばせる
聞き耳を立てれば噂のど真ん中
死に金は出さぬ浪速のど根性
根回しが過ぎて小石に躓つまずく
人間の脆さを包み込む夕日
しがらみを裏漉しにして風を詠む
懺悔する写経の筆は皆無口
風紋の戯れに酔う風の私語
露草の心ね青のひと滴
覚えてますか愛を誓った冬銀河
思惑を見透かされてる誘い水
自分史に自己陶酔の絵空事
運否天賦酸いも甘いも紙一重
残照に約束がある除夜の鐘

さいたま市

星野育子

縁あって七十億の中にいる
感動の数だけ人が好きになる
一通の手紙にある生きる力
募金箱素通りする電子マネー
いつだって初めてがある今日明日
嫁妻母という広い守備範囲
御御御付けと言う美しい日本語
切干しの日向の匂い味のうち
菜の花を描いて空に白を足す
鰯雲今日の予定はありません
てにをはを使い分けして生き上手
戦争を知らない世代の九条
安息と厄介もある家族愛
無期限のいのちの切符ある限り
何度も書き直すエンディングノート

鳥取県

細田裕花

お元気ですか遠い青春振り返る
写メ送る故郷の空は濁りなし
二人分のレシピになった台所
産声の未来わくわく抱きしめる
大笑いして空っぽになっている
引き出しにひょうたん島の歌がある
四十年添えばマンガになる夫婦
極楽の入口ですかホタル湧く
年金もビールの泡も不確かで
月光に洗ってもらう眼の汚れ
しなやかな猫になりたしストレッチ
母さんと呼ばれ妄想から覚める
平凡な構図でよろし夫婦の絵
落石注意そんなこの世を通過中
晩学の森をわくわく歩いてる

和歌山市

堀　冨美子

流されぬ意地は私の奥にある
風に遭う度強かになる私
母の所作私の芯に浸みている
わたし色ポリシーしっかり抱いている
暗闇を這い出て会った青い鳥
突然の来客裏を着てしまう
満ち足りて今日のペン先よく喋る
ひと言のエゴラップして和を保つ
リサイクルされた臓器がよく喋る
焦らされた辞書が私を離さない
風向きを知った私の無言劇
これ以上捻ると笑い出す右脳
どの子にも新品着せた母の初春
わたし色長いスパンで染めあげる
これ以上愚痴を零せば泡になる

三田市　堀　正和

羊羹が厚い大事な客らしい
もう少し長生きします悪しからず
安いのがいい母さんは哲学者
金で済む話と聞いてなお困り
さてどこへ片づけたのか日章旗
テキパキと働く方がパートです
結局は値段で決める昼ごはん
三合の酒で治ったから浅傷
年齢の詐称歴なら二　三回
鶴を折ることしか出来ぬ民である
札束を手にするまでは反対派
パトカーが鼠捕りしている平和
酒代と同じくらいか化粧代
大吉が出て賽銭を追加する
最後には主役になれる焦らない

大阪市

前　たもつ

罪いくつ積んで聖書に辿り着き
餌さがす小鳥は今日も守られる
一本ずつ花の声聞く通り抜け
手術如き何狼狽えるゲッセマネ
持病まで聞いて下さる歯医者さん
一千号の隅に小さく名を刻む
贅沢はお城を巡る土の道
プライドを捨て見えないものが見えてきた
この国がどこに行くのか恐くなり
ずる休みしてもお腹がすいてくる
心に満ち言葉になって口をつく
出番などなくてやさしい風といる
この世の欲卒業しました宝くじ
魂を映す鏡をみがいてる
傘寿とややっと自分の道が見え

鳥取市

前田楓花

何処で咲きどこで散るかは子に任す
丸餅を丸める母のまあるい手
しまったと思った時は終ってる
同じ日は二度と来ないと津波言う
円満は吐き出す妻と飲む夫
大変と思わなければ軽い日々
人間の表と裏にある笑顔
ダメダメと言われ続ける子の悲劇
大切に程よい距離で恋をする
病む彼と同じ時代を生きた恋
哀しみを乗り越えられたのは時間
慌てると次の一手が出てこない
厳かな菊の御紋で伊勢が沸く
あの世から私を見てる人ばかり
気づけない一番傍の人の愛

東京都

まえで　とよこ

麟太郎のふるさとの川花ざかり
はじめてきた朝顔市にひとの渦
あさがおの苗にも日本産のふだ
大声でよき苗を買うおもしろさ
あさがおとふうせんかずら絡む朝
あさがおの咲きつづくころ終戦日
海あおく小菊こんもり咲きそろう
台風一過かなしみのこる伊豆の島
そろりそろりスコップおろす捜索隊
駅前のてんぷらうどんのえびの名は
ボスポラス海峡に日本人の汗ながれ
ハンカチとヘヤピン買えば孫の顔
歩行者天国いつもの空がひろくみえ
うしろからベビーカーきて追いぬかれ
ビルのかなたに富士山仰ぐありがたさ

倉吉市

牧野芳光

美しいクモの巣　誰も褒めぬけど
人間を描くと輪郭ぼけてくる
暇があるから妄想が湧いてくる
妄想を絡めてクズの蔓伸びる
恋をしていたのかキャベツひび割れる
とんがって私の方に振り向かす
蜜蜂も妻も逃亡癖がある
恐妻に追われ山男になった
ぜんざいを食べる程度の男です
頭の中の雑念を見てほしい
マシュマロになって私を消しておく
知っていることも目を見て聞いておく
カレイとヒラメ裏に寂しいものがある
地球より重い一日だってある
夕焼けを見て目の底を乾かせる

西宮市

牧　渕　富喜子

目の前にいつも見習う父母がいる
それなりのプライド捨てることはない
大丈夫影がしっかりついてくる
曇り空それに合わせる用がある
どくだみの花の十字架何裁く
火葬場の庭のさくらが咲いている
途中から行き先き聞かぬことにする
捨てがたきものを急かせて蟬が鳴く
むかしはとちょっと言いたい時がある
うやむやでいいではないか夕辺くる
裸木になって始まる無言劇
深いところで繋っている無口
すれすれの所で残り現在地
長生きも試練と思うさくら散る
シクラメン長い電話がまだ続く

米子市

政岡未延子

母校から消えた私の水呑み場
同じ根を持ってて互い庇い合う
合格の机を少し労ろう
切れそうな縄をみんなで押している
じゃんけんのぐーの中には夢がある
手伝って笑い袋を開けてやる
破られることに意義ある包み紙
情熱昇華ただ飄飄と生きている
断捨離に亡母の着物がひっかかる
柚味噌のゆずがなくても生きられる
林の風と同じ父親持っている
曼珠沙華ふたたび逢えぬものは朱
母の掌を出て行く春の逃亡者
富士山を見てから人と争わぬ
神だったひとが独りで食べている

藤井寺市

増井ヨシ枝

白桔梗母の面影抱いて咲く
切り干しの大根甘く亡母偲ぶ
老母逝って住む人もなく柿すだれ
団扇風亡母がそばにいるように
縁側の日向我が家のおもてなし
絵手紙の西瓜で夏を迎え撃つ
あちこちが歪みながらも生きている
地を染めてなおも人恋う紅椿
死ぬまでに逢うておきたい人一人
裏表みせて落葉も人も散る
便箋に花の香があり女文字
携帯の向うでポチは留守まもる
元気かと亡夫の友が犬に聞く
猫だって誉めるとウインクしてくれる
宇宙のチリ払う箒を買いに行く

大阪市

升成好

背を立てて書く人間の詩を書く
残塁の数なら負けておりません
たしなみに変えてお酒の良さを知る
頷いて七面倒に蓋をする
一本道でまごついてばかりいる
相槌に愚痴が勢いづいて来る
添いとげて今や血よりも濃い絆
大抵はやる気があれば片がつく
飲みすぎに注意と瓶に書いてない
ふと飢餓を考えさせるペット缶
ひらめきが浮んで散歩引きかえす
問診のような母への長電話
神様がくださった朱夕茜
さわやかな笑顔に負けたなと思う
浅からぬ縁で妻の背掻いてやる

京都市

桝本宏子

咲き出して初めて知ったあら桜
桜きらいさくら大好きみな遠く
やんわりの妻の感触あれは夢
遷宮と昔のままの五十鈴川
妻の椅子じわじわ自立する気配
少年には遠い遠い喜寿の冬
サッチモのリズム流れるレクイエム
アメ玉で修めるわたし悪い癖
めまいするほど暑い夏寒い冬
おいでおいでする酔っぱらいチューリップ
まだおんなノックしてみて下さいな
余生とは静かで暇なはずだった
指輪抜きおとこ束の間風になる
白い地図持って自立の子にエール
少年の痛み気づかぬまま秋に

藤井寺市

俣野登志子

半分は篩にかけて聞く噂
紫の袱紗に包む義理と見栄
リタイヤ後土の匂いのする夫
アップテンポの曲に庖丁も忙し気
勝ち負けはいつもあいまい二人老い
お人好しが御節介になる瞬間
やる気根気無くした時は幕を引く
負けるが勝ち握り拳が震えてる
ひと口で無くなる小芋剝いている
キッチン磨く自己満足も一瞬の
内証ばなし口よりも目がよく喋り
亡母の小指紅をちょこっと付ける指
言い訳けを胸に納めて米を研ぐ
自分でも意外こんなに怒りんぼ
もうこれきりと追伸でやっと書く

河内長野市

松岡篤

日が沈み暖簾くぐれば敵も友
カウンター奥に長居の馴染み客
お銚子を覗いて見ても空は空
血圧と妥協しながら中ジョッキ
酒も可と医者から言われ心配に
退院と酒飲めるのは別ですぞ
水割を薄くするのも妻の愛
居酒屋のハイテンションは姫の声
酔っ払い隣家のチャイム鳴らしてる
酔っ払い自分の影を踏みに行き
酔っ払い辻褄合わぬ武勇伝
古き良き昭和が残る立ち飲み屋
邪魔だなあ帰りの道の立ち飲み屋
混んでいる方が落ち着く立ち飲み屋
立ち飲みと勝手が違うお茶の会

豊中市

松尾美智代

好きな事コツコツコツと石を積む
相棒はもう手放せぬ電子辞書
友と言う大切な師を持っている
古希の坂スイッチバックして登る
毎朝が戦争だった日も遠く
孫生んでくれた娘にありがとう
母の手は何でもこなす調理器具
アルバムを繰れば思い出溢れます
思い出の中で消えない旅の虹
小さな旅サプリメントにして元気
こぼれ種もう戻れない莢の中
塞がれて研ぎすまされてゆく五感
私を晒しつくして黄昏れる
極めると赤は夕日の色になる
実りある人生でした木守柿

大阪市

松尾柳右子

妥協して気楽になった青い空

旅プラン次を考え夢つなぐ

青空にジェット機尾を引き過ぎて行く

カラオケに行ってつかれを取り払う

カラス鳴く余り良い気はしない空

新鮮な野菜パリパリ楽しそう

立冬の雀が遊ぶ道を行く

左手でフライパン振る母の腕

幸せな空見上げれば昼の月

雨の音リズム正しく窓の外

青天に干した布団は身は軽く

ぜいたくに馴れて肥満を案じてる

ふき掃除終えて畳へ大の字に

毎食をおいしく食べてるありがたや

郷里が恋しくなるね夕焼けが

和歌山市

松尾和香

熟成のストレスうまい山歩き
十年の旅路女神に巡り合う
理に勝って落ちる損にも救いの手
一円の命　私の始発駅
すっぴんで表も裏もないわたし
人生の海に癒しの種をまく
老いの道あれこれ急ぐことばかり
泣き笑い人生だったまだ続く
生きがいは蒔いて育てる実りの日
川荒れる人も魚も旅に出る
年金でつなぐ暮しの自然体
自分史の影も映している鏡
過不足の人生まとめ今日生きる
生き甲斐をこっそりくれた亡夫の風
ノーメイク夕陽が染めてくれました

鳥取県

松川行男

恋って何だ故郷知人消える町
わらべ歌空屋で歌う風通し
勝る子に諭す孔子は寝込んでる
出雲の神はお札でくるよ世話人と
押し切られ暦を伏せた古い母
プロポーズ言った聞かない記録無し
子守唄くしゃみがでそう止めにする
紙おしめ生まれ逝くまで世話になり
爺婆の出合いの秘密縄電車
あれそれに服従するか妻の位置
一円五円起こして今日の消費税
オーナーは世間の風に投資する
歯ごたえの無い暖簾にも冬の風
居残りは肩書重く三次会
影薄く遠景になる終りかた

和歌山市

松原寿子

雪哭いて樹海を白く埋めつくす
胸の火を奪い流氷去って行く
響き合い秘かに風も加速する
おだやかな海へ心の紐を解く
樹々も野も萌えてわたしははじけ翔ぶ
人間を愛し心の灰汁をぬく
騙されてあげる瞳がまんまるい
受け流す言葉が底で渦になる
心ひらいて重たい石を取り除く
図太さはかけらもなくて泣き虫で
突然の告白薔薇に秘めておく
針のない言葉うれしい鞭だった
心の充電たっぷり眠ることにする
ご破算にして真っさらなドラマ描く
回り切るまでタッチ許さぬ独楽の芯

豊中市

松村里江

踏まないでまだ息してる紅椿

被害届出せないハート盗まれて

好きだからＮＯが怖くて誘えない

ジ・エンド　ヒロイン気取りネオン街

酔って候(そろ)女のまつりひいなの夜

ゴールインたで食う虫とめぐり合い

ストレスもとけてバスタブ小宇宙

飲めないが仲間大好きついて行く

父さんの留任決まり酌み交す

焼き加減ミディアムですかレアにする

Ｋ・Ｏシーン他人(ひと)事だからたのしめる

看護り終え延命拒否書サインする

肉筆のデッサン私若いまま

老いても女慕情秘かに抱きしめて

気兼ねないおひとり様はいいもんだ

松江市

松本知恵子

半島の秋を鬼太郎電車行く

汽水湖の淀破らぬしじみ舟

春蝉の声も癒しのぶなの森

再生紙　過去は忘れた顔になる

月に傘あすの約束止めましょか

転び方覚え人生秋がいい

反骨の言葉呑んでる嫁の癖

石地蔵願いひとつの夏がゆく

コンビニの煮っころがしはきれい過ぎ

引揚(ひきあげ)船記した父の若きペン

行動派母にもらった心意気

帰ろうか故郷ほおずき赤くなる

じゃあねって歩き出します秋の天

三・一一方丈記出し読み返す

雑踏の中で微かに聞く晩鐘

青森県

松山芳生

合掌を解くと両手の忙しさ
紙風船ぎっしり詰めた子守唄
過疎の村物干し台に影がない
ちゃんと手を洗う握手するために
第一印象は斬られ役である
もやもやが解けたら古希になっていた
結局は父とおんなじ道をゆく
逝く雲は還らず妻は五回忌
道の駅ベンチに風が来て休む
折り鶴のどの折り目にもある祈り
だんだんとカレーが甘くなっていく
茹でたまご割る気力なら持ち合わす
もう一人の僕に弱点握られる
地吹雪へこころが痩せる過疎の森
北の冬耐えた五感を忘れない

札幌市

三浦強一

コルク栓上手に抜けた乾杯だ
酒飲みを観察してるウーロン茶
居眠りの妻は埴輪の口をして
妻だから鼻毛出てると言ってくれ
昭和一桁妻は二桁時代の差
終活を急かせる妻が怖くなる
内緒だが僕にも舌が二枚ある
男気を出して得したことがない
オルガンで習った唱歌忘れない
自転車で足りる老後の守備範囲
親バカの付けた名前に負けている
本名と雅号戒名ややこしい
周辺は脳梗塞や癌手術
善人の仮面だんだんひび割れる
東京五輪見る約束の喜寿傘寿

松江市

三島淞丘

波に乗り波に揉まれて今がある
ペン先で胸のしこりを抉り出す
夕凪の海で明日の風を読む
老いてなお薔薇一輪のロマン持ち
おしゃれして少しワルして老いを生き
ライバルはジェット機僕は竹とんぼ
出る杭がだんだん打たれ強くなる
飴玉をくばる私のテリトリー
千鳥足帰る港は忘れない
先頭の蟻はうろうろなどしない
鈍行が似合う二人のフルムーン
がむしゃらに来た人生だ傷だらけ
少しずつハードル下げて跳ぶ余生
人生の余白を埋める酒と詩
今ペンを置けば未完のまま朽ちる

河内長野市

水谷正子

車椅子ゆっくりと押す菊花展
人赦す事を忘れたバラの棘
審判に吠えてる方がアウトです
ハガキ一枚でゴタゴタ片が付き
私の手よく働いていじらしい
演技する夫婦茶碗はこわれない
顔色をよみとる猫と暮らしてる
月天心妻の鼾が聞えない
あこがれの名医に三分診て貰う
三人が退院ベッド空いたまま
夕映えに菊人形も酔いました
ハイヒールの下迄ころぶ五円玉
扨て書くとなれば書けない遺言書
窓口で毒程くすり渡される
夢を追う男と暮らし粗衣粗食

豊中市

水野黒兎

無の境地知らずとうとう古稀過ぎる
踏み込めば自然がぼくを抱きしめる
ちりめんじゃこひとつひとつに目がふたつ
葬送のさくら吹雪は地から舞う
体温を丸ごと抱く児の寝息
野いちごは赤く酸っぱく里を恋う
パラソルに夏の余韻を折りたたむ
ほおずきはもう鳴りもせず里は過疎
キャベツ刻み秋の白さを音にする
ひこにゃんと握手近江路秋うらら
記憶薄れどこかで過去とかくれんぼ
亀の鳴く四天王寺に永い刻
天と地を真っ赤に結ぶ彼岸花
父の忌の雨　野ぶどうは色を増す
妻という取説のない貴重品

松山市

宮尾みのり

謙譲の美徳へ嘘も塗り込める
ゴム紐の程度を許容範囲とす
決断の時は独りと言い聞かす
普通列車にしよう夕日に遇えるから
吹っ切れて飾りを一つずつ外す
ケーキ二個食べてあなたを忘れます
平熱に戻ってからの自己嫌悪
突き詰めてみれば私も下ごころ
卵とじ少しの自我と諦めと
虎の尾も踏まねば視界開けない
性善説たとえ甘いと言われても
無為な日を過ごした過去を思うまい
袈裟懸けに未練断ち切る片乳房
小康という神様の贈りもの
引き際の良さをせめてのプライドに

海南市

三宅保州

青空も買いたいフリーマーケット
得をした気がする第五日曜日
たとえればランチョンマットほどの幸
四つ這いになれる気がする森の中
ご自由にご覧下さい夕日です
蛍火と闇の深さに堕ちてゆく
風車気持が揺れたこともある
歩くのが何よりという処方箋
介護する身もされる身も耐えている
うららかな日も救急車霊柩車
焼香の列に並んでいる故人
飢餓の子も飽食の子も地球の子
新聞に今日もまさかが載っている
生きていることが錯覚かも知れぬ
生きている限りは活火山である

京都市

三宅満子

書いて消し消しては書いた家族の絵
この道で良いかまだまだ迷う古希
会いたい人来ないし欠席にマル
英語よりきれいな日本語が先でしょ
オリンピックどこで見てるか七年後
脇役に満足母は演じ切る
メールより話がしたいてんこもり
命がけで産んだ子供に羽根が生え
届きそうで夢にいつでも逃げられる
就活の息子の靴をまだ磨く
ありがとう聞けばパワーが出る介護
これからは妻のタクトで踊ります
まっ先に白旗揚げて楽に生き
眠れぬ夜銀河へぶらり一人旅
ひたむきな青さがまぶし甲子園

八尾市

宮　﨑　シマ子

ひと休みするならお菓子の森がいい
ご自由に尻尾はちゃんと握ってる
鬼の目に涙　妻の目にもなみだ
泣いてへん一人で帰るほっといて
軽そうに持たぬと母が気をつかう
祖父ちゃんの笑いに乗って上げましょう
死んでから百点だったと思う人
妻がにんまり笑うと意地悪が動く
逃げてきた三丁目にも鬼が居た
皿洗いぼくは我慢でやってるよ
凄い鯛だったと釣竿だけ戻り
一言に意外な妻の怒りよう
冴えた頭でオカメの方を嫁にする
松茸を焼く路地裏の罪つくり
握り鋏米寿の母の針仕事

貝塚市　宮園　射月芳

酒飲んで毎晩天下取っている
休日の姿で父は値踏みされ
手も足も動く私は幸せだ
だし昆布の奥ゆかしさは僕に似る
師を真似てやがて師を越す恩返し
どっちでも良いから賛成しておこう
約束は守るピエロと言われても
近くから女の顔は見ぬように
青い背広で恋をしたのは昔
出世はせなんだが正直という宝
最善をつくしたしかに負けました
砂浜で童にかえる土踏まず
悲しみに負けてはならぬ深呼吸
大根の白さで過疎は黄昏れる
迷いから醒めると空が突き抜ける

八尾市

宮西弥生

移植したいのちで書いたありがとう
地下街を抜けると現実真正面
渇きっぽい世に巡礼の旅に出る
モカの香に集えば彩りなくてよい
人はみなひとりではない神のみ子
友達のままで走って来た潔さ
一冊の詩集くじけぬ日に新
形よく生きる女の方程式
椿ぽとり長い緊張解く吐息
3・11祈りの記事はおごそかに
公園の温度はひとを差別せず
鱧料理皮を剥いだら夏ぎらり
やつれなど吹飛ぶ河内野のワイン
コーヒーと夜明けが好きな魔女の部屋
人も木も光る　一日今日一生

堺市

宮本かりん

視野ひろしこだわりひとつ捨ててから
立ち止まる小さな花の手招きで
口下手が明るく話す聞き上手
猫もわたしも伸びをしている昼下がり
仲違いじっと見ていた丸い月
衝突をしながら丸い石となり
わらべ唄胸のしこりが溶けてくる
見返りは思わぬ母の律義な手
やんわりと本音包んでいるジョーク
差し引いてみれば人生プラスだな
一枚の写真が時を止めている
アルバムを閉じるとみんな老いていた
しなやかに反らせて苦言やり過す
彷彿と浮かんだ過去が美化される
茜雲今日一日を締めくくる

羽曳野市

三好専平

なんでやと問われて困ることばかり
ポイ捨ての世に人間も屑になり
曲がってることが嫌いで外される
カチューシャに恋した戦後の青春譜
よく噛んで食べるとまずいものはない
ペンペン草になってゆられてみたい風
げんげ田に水引くこともなかりけり
介護にもコネとカネとがものを言い
四の五のと言わせぬ監視牙をとぎ
行ってくるあてもないのに行ってくる
くりかえすことが奇跡を生んでゆく
太陽に吠える真紅のバラとなり
あゆむ人みな美しい石光寺
あこがれた暇を今ではもてあまし
山の上に山　川の下に川

堺市

村上玄也

人間に戻った鬼が認知症
仮縫いのままで社会に出る学徒
他人から見れば羨むような愚痴
逞しく生きる力を持つ雑種
休みたいと思った頃が懐かしい
親切が奇妙に思われる世情
窮すればみじめったらしくなる遁辞
熟考と言い開きする迷い癖
反省の弁から愚痴が漏れて出る
飄々としてて暗示にかからない
究極のお洒落は笑顔だと思う
悪態を吐く口の端にある未練
怠けさえせねば亀には勝つ兎
治癒しないうちに老化に追い越され
昭和もう昔のように言われだし

河内長野市

村上直樹

流れ雲いいなお前は風まかせ
夕茜必死に駆けてきた記憶
犬掻きで世の荒波もマイペース
気転など利かず愚直に生きた自負
自分史の伏せ字の裏にある懺悔
ピカソより燃えるゴッホがずっと好き
四季折々勇気をくれる山がある
弾痕のない戦後史よ胸を張れ
人も世も斬って徳利また追加
まだ燃える土性骨には芯がある
徒し世を半透明で生き延びる
一滴の善意つなげばもう大河
踏まれてもそこで芽を吹けこぼれ種
いい目覚め神がチャンスをまたひとつ
もういちど笛吹く夢をこって牛

大阪府

籾山隆盛

絢爛と花の散る頃薫風忌
想い出のページに光る花栞
光琳のえがく梅林匂い立つ
千の風千の祈りの中で舞う
春眠に年金の海のたりかな
どか雪が町のくらしに蓋をする
ブランドでわたしのすきま埋めている
五等分メロンきっちり配る愛
こっそりと妻のへそくり足しておく
目の毒を老眼鏡が追っている
鍵穴をのぞく人間万華鏡
神の手にいつかは返す生きた恩
持ち唄は妻が作った応援歌
あんたより一日遅く逝くという
誘われる仏さんいて恐れぬ死

寝屋川市　森　茜

歳月がやっと答えてくれました
寒椿ぽとりぽとりと自問する
無限大の価値赤ちゃんは丸裸
ほうき草まっ赤に髪を染めなくちゃ
鐘ごぉ～ん土蔵とながぁい話する
執着を抜いたかぼちゃの種乾く
ひとり来てデジャビュの古道そぞろゆく
うやむやを拾う師走の風の中
とりあえず頑固をしまう小抽出し
およめさんになりたいなんておままごと
木の我慢じっと見つめる宮大工
帰りたい人待つ軒につららする
どんぐりを拾って風の子になった
昨日より今日大笑いした蕾
一所懸命だったな十年日記閉じ

竹原市　(故)

森井菁居

縁の下の力持ちなら僕が買う
腎臓を病んで酒席と縁が切れ
天に運ゆだねてからのマイペース
人事異動あった昔を懐かしむ
物腰の低さは育ちかも知れぬ
血眼になってさがした握手です
放任のおかげで自立した子供
生き甲斐をあたため小さき秋の中
相棒がしゃんとしている強みかも
メールでは失礼手紙書いている
号令をかけるとついて来る家族
年長者立ててすべてがうまくゆく
人間に生まれて病気ばかりする
ライバルがころび私もころびそう
健康にカラオケが良し雨つづく

松原市

森　松　まつお

哲学者の顔で立ち読みして帰る
サラ金の爽やかすぎるコマーシャル
国会で暴れる人や寝てる人
あの歳でそこそこの欲持ってはる
まだ未練あるから鉾は収めない
真実を曲げると鈍い音がする
これからのプランに君はかかせない
よく響く太鼓を妻が持っている
小骨まできれいに取ってくれる妻
100点も10点の日もあり夫婦です
したたかに計算されていた涙
O型の血が適当にやれという
あの話実はこうだと酌ぎにくる
夕方になると自然にのどが鳴る
飽きもせず忠臣蔵を観ては泣く

阪南市

森村美花

特急「信濃」心やすらぐ旅路です
予定表ちょっと○だけする内緒
新緑を選んで旅に出るわたし
故郷の小径優しい風に逢う
散歩する小径に落ちているゆとり
夫婦の絆自分勝手を許し合う
シグナルに気づかなかった癌告知
海の青さ深さに大志もらう朝
心つなぐ君のでっかい文字が好き
ほんのりと貴方の声に酔うている
撫でられて苦しみ深くなっていく
心のゆとり海の辺りで拾います
暑い寒いぼやいて古稀になりました
蟹刺しがとろけ私もとろけそう
生きるとは努力しかない麻痺の指

交野市

森本弘風

怒鳴り合う会話が弾む老い二人
東照宮人人人の荘厳さ
四百段安土城跡上り下り
観光で世界遺産が泣いている
バーゲンへ勿体ないを買いに行く
土いじる妻キラキラと春の庭
時々はカーブを投げて確かめる
十円でコスモス一本摘み取られ
黒四に昭和の覇気をしかと見る
増えたネとゲラゲラ笑う体重計
静かだがやっぱり不便妻の留守
酒のこと医者に聞いてる回復期
きっちりと仕舞った物が見つからぬ
カーナビの指示がうるさい近回り
父の日にやっぱり酒が息子から

鳥取市

森山盛桜

原液に負けないほどの灰汁を持つ
どれほどの者か我が身を野に晒す
根こそぎに抜けば証拠は残らない
生きて行く節目グキリと硬い音
途中から逃げ出し自責点はゼロ
露払い太刀持ちどっちでも出来る
本心が透けそうなので下を向く
落ちぶれて瓦のヒビが気にならぬ
型枠を取ると崩れてくる理性
目立ちたいから振り回すプラカード
敵前に出てよたよたとしてみせる
伸び切った詰め放題という袋
天ぷらの衣で隠す絵空事
死出の旅だった深海魚の浮上
不作法というウイルスがいっぱいだ

米子市

八木千代

わたくしの居場所に水の匂いする
川を渡って行った仏の置手紙
戻りゃんせ　ここほど怖い道はない
振り向くとあぶなあぶなの足の痕
つつがなく賞味期を終えて候(そうろう)
お月さま僅かな刑でありがとう
銀という季をいただけてしあわせな
この先も案じてくれる　澪標(みおつくし)
椿守　今は椿に守られて
永らえて　桜こころの襞(ひだ)に散る
見送っていただけるなら　萩の道
あやとりのつづきはたぶん後の世に
椿　私かも男かも仏かも
ありのまま流れるとてもいいきもち
蛍死すまわりに明かり漂(ただよ)わせ

堺市

矢倉五月

愛の原点　母乳の匂
七十点さあここからをどう学ぶ
蝸牛みたいな学び方ですが
人間を造った神も嘆く核
気紛れで散ったわけでは無い椿
手を上げる人がいなくてあみだ籤
ゆっくりと枯れて新芽の糧となる
顔ぶれのひとりに女神様がいる
花の咲くテンポを読んでプロデュース
ポックリ死の父を見事という他人
衣みな脱ぎ捨て戻る無精卵
鮫小紋きりりと骨になる衣装
ひと粒の麦になればと書いている
吐き終えてしばらく眠る繭の中
シャボン玉軽さ儚さいじらしさ

高槻市

安田忠子

神神しい川柳塔の一千号
塔まつり思わぬ人と巡り会う
お茶席に招かれ知った美の心
少年の自転車風をひとりじめ
列島の絶景秘境つづく旅
雲上の悟空になった槍穂高
花びらを頭に一つ持ち帰る
さまざまなまさかが起きるこの地球
あの戦争娘は歴史だと軽く言う
つま先が地面にあたりつんのめる
満ち足りた毎日なのに物足りぬ
失敗を明るく返す照れ笑い
趣味三昧あぶはちとらずそれもよし
人の命新聞記事に見る軽さ
黄泉の住処桜の下と決めている

竹原市

山内房子

夕焼けに沈むお陽さま掌を合わす
あの角でいつも父さん手を振った
菊の花そなえ亡夫と話する
正信偈和讃亡夫の祥月ご命日
五七五は亡夫にもらった宝物
墓参り出来ぬお詫びの御仏前
幾山河こえた日記を読みかえす
粗茶ですと心のこもったおもてなし
ほっこりと娘の絵手紙にいやされる
コンビニで娘たくさん買って来る
なにもかも洗って干して娘は帰る
お互いに元気よろこぶ初句会
住みなれた路地のやさしさ温かさ
朝顔を描いて千代女の句を想う
植えかえた苗がよろこぶ今日の雨

河内長野市

山岡冨美子

絵蝋燭おひとりさまの仄明かり
背伸びした跡が外反拇趾にある
あんぱんのお臍に母と子の昭和
雨季乾季だんだん穴が深くなる
深読みをしすぎた傘がひらかない
追憶だけが揺れる冬のぶらんこ
鍵穴に野火の奔った跡がある
ラブソング全身の麻酔かけにくる
花曇り失くした恋はどの辺り
火達磨になった禁漁区のタッチ
転生のチャンスを抱いて花は散る
陽炎の辻で卑弥呼とすれちがう
雨の坂鎮痛剤がまだ効かぬ
自然体それがわたしの処方箋
西鶴の橋を渡って雨に逢う

川西市

山口不動

新学期ポニーテールの娘が通る
雨上がるまぶしき朝のレモンティー
文庫本頁を折って乗り換える
モナリザも妻の微笑も不気味です
終点で寝ている人を起こそうか
鍵かけた　いやかけてない引き返す
鶯の初鳴き聞いて豆ごはん
夕焼けるあんなところに鉄塔が
出欠の葉書で届く訃報あり
フィクションを少し交えた弔辞読む
両の手で温めてます我が余生
啓蟄におばさんが出て立ち話
蝉七日神が許したエクスタシー
裸木を見上げて過ぎる老夫婦
読みかけの本を落して今日終わる

神戸市

山口光久

まだ生きる力欲しくて辞書を引く
のり代があると思っていた不覚
怖いほど力があった崖っ縁
偉くなれ賢くなれと種を蒔く
淋しいと派手なピンクが着たくなる
反抗期親の意見も糠に釘
じゃじゃ馬を馴らしてくれたのはあなた
時刻表開くと旅の匂する
ライバルがいたから今の僕がある
世渡りへ欠かせないのが変化球
柵をすぱっと切って始発駅
ぜいたくが顔を出してるゴミ袋
悪人も汗を流して策を練る
反省を繰り返してる二日酔
ひこばえがきっと明日を実らせる

神戸市

山口美穂

遠い日の思慕ふとよぎる月清か
人が流れる駅で藻屑となるひとり
さざ波は立てない深い海だから
生き下手も死に上手へと掌を合わす
残高をゼロで長寿が終れたら
戦争に敗けた昭和史語り継ぐ
愚痴も笑いもいいな生きていることは
足踏みも足してウフフフ万歩計
嗤われないようにと老いは老いなりに
おみくじの凶御意のまま御意のまま
閑中忙疲れを明日へ持って寝る
やんわりとひょいと奥の手のぞかせる
余生にもまだ吹く追い風向い風
ロボットが話し相手をしてくれる
寒牡丹の前で思わず背を伸ばす

大阪市

山崎君子

胡蝶蘭彩をそえます雛壇に
誕生日祝ってくれるかボタン雪
駅伝に亡夫と歌う早大歌
世界は一つ尊い命守らねば
里帰り本家に貰う家族愛
陽の恵み宝の様な福寿草
義理チョコ廃止淋しい老院長
老母の部屋明治の雛はふっくらと
あかね雲　何処に平和があるだろう
ちぎり絵の里さみしくて星を画く
今日立冬こも巻き忙し男衆
剪定終る蘇鉄ふるえる丸坊主
連だこを一度見たいと父の里
阿蘇の春野焼き始る便り来る
アルバムに涙がポタリ逝った人

神戸市

山﨑武彦

ひたひたと沖から満ちてくる齢
一生を愚直に生きて反主流
微笑めばほほえみ返す車椅子
臥す母へ窓を開ければ春の音
木漏日と遊ばせている車椅子
まだ見込みあるのか妻ががみがみと
斜めから見ればまんざら悪くない
恋はもう懲りた筈だが男好き
大志より中庸がいい子の未来
添い寝して絵本の森に眠らせる
秘密など何もないわと淋しそう
怖いなあ妻がだんだん若くなる
まあまあの妻だと思うお茶の味
こんなにも小さい亡父の喉仏
風に身を任せておまけ生きている

鳥取県

山下節子

自分史の出発点は母子手帳
産声に天下とられたうれしい日
火種なら持っております風よ吹け
キッチンへ一礼をして今日終える
裁判官の口元じっと見つめてる
菩薩にも般若にもなる匙かげん
ありがとうございましたと棺おくる
子の地球（ほし）の介護　人間だけできる
太陽に勝る指揮者は無いだろう
一日の鎧を脱いだ寝顔です
パンドラの箱あいて仰天する地球
折々を百面相でのり切った
運動会世界の旗は手をつなぐ
お日様に後押しをされ今日終える
針箱に亡母の指ぬきはめてみる

尼崎市

山田耕治

美容院へ息子がついて来てくれる
叱る人もう誰もない夜爪つむ
土産などいらぬお前を待っている
あっさりとオーケー母を呼ぶ話
父と子が同じパジャマで坐ってる
授賞式この子一生やるだろう
登校の子等犬の背を撫ぜていく
自販機をならべ峠の茶屋無人
あの年の桜を思い出す桜
ワン公ならあなた見つけて尻尾ふる
一合か五勺か医者を笑わせる
ほんのりがよいと解ってきたお酒
もう忘れましたと逆のことを言う
相談がしたいと仏壇へ坐る
文学のつもり頭をかきむしる

長岡京市

山田葉子

自転車で行けるわたしの小宇宙
冬はそこ増やしておこう皮下脂肪
よれよれになっても見栄を張っている
手本にはされず見本になっている
古稀はそこパソコン居間のアクセサリー
好きだった靴音だけでときめいた
萎んだらあかん　わたしも萎むから
おやめあそばせテレビに野次を飛ばすのは
美人だったやさしかったと七回忌
気くばりを背中合わせで感じ合う
このあとは何とかせいと夫逝く
一緒だから疲れた川を振り返る
ペットなのに牙をチラッとのぞかせる
ずっとずっと共に歩いてくれますか
何もしないのがよかったと褒められる

倉吉市

山中康子

産声が天に弾けたその瞬間
無垢な眼にあやかりたくて子に習う
日本をひらく風の子育てねば
寝ころべばやっと私の小宇宙
捨てられぬ病気なだめてやがて春
限界を知った小銭が笑いだす
人間が一番好きで恐ろしい
捨て身でもいざ異変にはまごつくか
前頭葉しびれるような深い味
わたくしに鍵をかけてる用心棒
没頭というありがたい思し召し
母さんの笛にリードの覇気がある
しがらみを乗り越えカラフルな老後
通じ合う老いの広場で笑いたい
大会が終わってほっとする鏡

八尾市

山根妙子

繚乱に野の草までが手を挙げる
ランドセル爺や婆やの夢背負い
投稿のクイズに春の言葉添え
草の露少しもらって指すすぎ
蝉しぐれどこかに指揮者居るごとく
玉音に伏したあの日の雲の峰
隣り席ゆらぐ扇子のもらい風
霊地行く僧とジーンズ並ぶ秋
秋鯖に見つめられてのお買上げ
花茣蓙が急に冷たくなる秋日
耳もとで蚊に遊ばれて朝になり
乗り過し見られたように肩すくめ
気くばりは語らず習う母の背な
産声はみんな同じはずなのに
くどいけど母の言葉が日々の糧

富田林市

山野寿之

過ぎた手でもう傷口に触れないで
連結器愛の軋みを知っている
許すより許されること多くなる
薄紙の中で約束待ち侘びる
どん底を嘗めた男にある未来
肩で哭く嘘が溜まっている涙
経験を篩にかけてする自戒
五欲みな抱いたまんまで秋の坂
ゆっくりでいい丁寧にあすを生き
過去形を引き摺る癖が治らない
決断をして暫くはよく眠る
数珠つなぎ絆の端を切りたがる
コンビニの死角で屯する金魚
一粒の躾を拾う神の米
競売を斜めに切った鬼瓦

河内長野市

山室光弘

さじ加減有れば色づく人模様
法螺を吹く元気と色気残す老い
年金でへそくり貯めるすごいやつ
期待したドラマ無いまま一人旅
おちょぼ口それでも入る二枚舌
洗っても洗っても尚消せぬ傷
恋が着せ愛が脱がせる人の性
大口を小さな口でたたく人
老いの波頭に顔に足元に
背筋伸びお洒落ステキなおとしより
身の丈を超えた望みにけつまずく
人妻と混浴してる足湯旅
叱られた肥やしが枝に幹になり
とんがったこころまあるくするえがお
貧乏性やっぱり出るか下心

泉佐野市

山本蛙城

エコの夏飛燕にもらうさわやかさ
焦げ鍋をピカピカにして主夫初段
鉛筆を削り残り火起ち上げる
ドンキホーテと朝の鏡に会う卒寿
来た路は蟻だったのか蝶なのか
生きてやるアッツキスカの戦友の分
少年期田河水泡佐々木邦
出口マーク地震思えと言うように
吊橋にたらればの夢揺れている
読む前に編集後記読む儀礼
慰安婦と知っているから黙ってる
袋綴じ開けても何てことはない
大正生れロマンの櫂で憂き世漕ぐ
危な絵のストック誰に譲ろうか
小虫にも志あり毒もあり

吹田市

山本希久子

春は桜秋はもみじと降りる駅
夏ごろも恋の噂はすぐ乾く
晩秋のハート孤独の虫すだく
玄冬の魂　陽溜まりに置こう
てのひらのスマホに広い海がある
常識の程度に紙ヒコーキを飛ばす
七十年褒められたことない机
センター管理されてる私のＤＮＡ
下り坂の景色も捨てたものじゃない
簡単なカタカナ語にもけつまずく
歩き続けてやっと私の道になる
輪唱のテンポで君に従いていく
傾いたまま生きてます高齢者
半分は運で今日まで生きてきた
レモンの香今日ある命喜ぼう

堺市

山本半銭

湯に沈む女菩薩の形して
伽羅薫る独りの部屋の充足よ
三日月は師を偲べとて細くなる
如月や机上に鬼遊川柳集
滝壺を溢れて流れ動から静
花の雲紫と成り風と成る
星空と話してわたし透明に
加齢とは疎ましきこと靴選ぶ
自画像に眩しい白は使えない
眼鏡拭き己の位置を確かめる
年寄りに人を待つ贅残ってる
風花の舞う日は恋し父母の顔
白い絹少しかげって好きな味
のんびりを置いてけ堀に陽が沈む
迷い子にもならず静かに本を読む

寝屋川市　(故)

山本三郎

ハローワーク出てから泳ぐ人の波
発表は徐徐に詳しくなるテレビ
曲線も手を携えて夫婦旅
ドラマ見て深刻な顔してる妻
里帰り戸を開けはなち昼寝する
何もかも忘れて今は仏顔
徘徊の母を探しに出る夜半
ドッコイショ歩き疲れて腰下ろす
退院のカルテに感謝ありがとう
一喝を柳に風と受け流す
不便でも愛がカバーをする二人
自分史をマンガで書けば面白い
連休に元気いっぱい子の笑顔
空想を膨らませてる青い空
メモを持ちカードも持って市場かご

鳥取県

山本正光

まだ呆けぬ終点の無い趣味ひとつ
五十音別に句が載りいつもビリ
てきぱきが何だ足腰痛いのだ
報道が明るいことに飢えている
時どきは床下の壺たしかめる
我が家では俺がカポネさ偉いのだ
ロボットよお酒の味は分かるまい
核という字の重さには勝てないね
見てくれと言わぬ日の丸見て和む
竹島が手玉にされているようだ
三猿を演じてきしみだす背骨
馬鹿騒ぎするほど金は持ってない
素うどんのようなハートになった老い
浄土へも風はあたたか万福寺
日日暮らす家族の思い気付かずに

奈良市

山本昌代

甘酸っぱい孫と読書の昼下がり
音が無いゴホンと咳をしてみよか
手探りで動く情熱ぶらさげて
通り雨絆をひとつ生みました
日溜りで咲くおだやかな花の精
七十二子らの瞳の中に居る
いとおしい好きと言えずに散る椿
今は雨季しかと養生する期間
サッと来てこころのスキを突いた雨
にこにことやって来たのは請求書
人前でモンローウォークなど見せる
憚らず涙さぐりに来るすずめ
温いから手の鳴る方へ倒れます
母さんの小言も軽くなって春
そのままが好きだルーなど掛けないで

西宮市

山本義子

はしゃいでは豪雪の地にすみません
現住所のある細やかな幸せよ
ひら仮名がお人柄からにじみ出る
無口な父　背中にあった句読点
ゴミ出します三味も弾きます太い指
鳥獣戯画　闇夜はきっとさんざめき
いまここで崩れたら鬼笑うだろ
輪唱に調子はずれが楽しそう
落し蓋　雑学すこし煮つめとく
指切りからゆっくり広い川になる
ときどきはダイナミックに神戸肉
嬉しそうな彼のトリックに乗ってやる
古傷も逆らわないと淡いいろ
終章までこころ満ちるか紅椿
指人形わたしの手から小宇宙

岸和田市

雪本珠子

躓いたおかげで見えた青い空
泣き笑い人生まるで万華鏡
鮮やかに裏切られても断ち切れず
身に沁みて運命論を聞いている
幸せも色んな形あるみたい
空蝉のこころの声を聞いてやる
温もりの中で溜息溶けて行く
あの頃は貴方のこころ読めなくて
ありのまま自分の色で生きている
穏やかな時間流れる雨の午後
草花に生きるエナジーもらってる
いつからか心に魔女が棲んでいる
ジェラシーが胸に住み着き爪を研ぐ
嘘つかぬ猫と唯今同居中
焦らずに時代の波に乗ってゆく

鳥取市

横田春名

超然と在す仏像愚痴消える
親と子のけじめ見にくい道しるべ
母さんはいつも陽気な答え出す
ギャル御輿神もニタニタ笑い出す
徳積みの満期浄土と書いてある
元旦はやさしい妻の顔で居る
ごめんねと声に出したらホッとした
半数はあなたも荷物背負ってね
芝居跳ね無口な夫よく喋り
生涯を美化してくれる通夜の客
長生きへ神がカウント数え出す
よそ見する夫許せと姑は言う
もう一度締めたい帯の手入れする
鈍行に乗って行きます老いの坂
菓子折りの中身菓子だと思い込む

和泉市

横山捷也

ネギ刻む音激しくて妻の乱
いたわりが過ぎて女房に怪しまれ
妻が留守茶碗一つで済ます膳
稲光妻が幼い顔になる
独り言ブツブツ妻がそばに居る
衣食住足りてる妻のグチを聞く
土壇場でいつものように妻に折れ
切り札を持っていそうな妻の笑み
子をしかる母ボロボロと泣いていた
棚ボタと言うが努力はしています
四人掛けベンチに五人カップ酒
ほどほどの元気で医者をハシゴする
良い人と言われ肩の荷重くなる
物思いするには短かすぎた秋
正論を通してどっと出た疲れ

西宮市

吉井菜々子

あの世やら此の世やら炎天下に独り
のほほんと心配ごとがひとつあり
魔窟へと吸い込まれそう赤い月
セラピーをお探しですか長い夜
木枯らし一号きのうの憂い吹き飛ばす
ポケットにいろんなごめん溜め込んで
凩が交響曲になる枯れ野
白い息ため息なんてついてない
寒木の連なる空気吸いに行く
バイオリンの音色に弛緩して涙
ワイパーのように涙はさらり拭く
貝殻とよい思い出を拾いあげ
よりどころ何処にもなくてガムの味
叫ぶにはちょっと半端な缶ビール
ツキを呼ぶラピスラズリと籠りきり

大阪市

吉内タカ子

初日差し明るく動く両手指
投げられた石の刺激で出る勝ち気
元気かな声の絆で長続き
好きな町車道を覗く柿たわわ
ばあちゃんも政治不安の乱れ萩
メール依存ママよ頑張れ未来の子
七十億中の一人だ凛と立つ
前向きの趣味を味方の好奇心
三食を美味しく食べる二個の梅
世渡りに灰汁を上手に使い分け
青春の思い出きっぷは褪せもせず
早とちり笑いの種をまきちらす
夢まくら断捨離できぬ一周忌
茶瓶ゆげ部屋がほんのり朝の膳
良い予感きれい過ぎます茜雲

四條畷市

吉岡　修

燃えきってないのに水をかけられる
印籠で片づく世ではなくなった
心地よい蛸壺命とりだった
アンケートはよいしょする気でみんなまる
小の虫見捨てるてそれ僕ですか
喉仏ゆっくり酒と踊ってる
この顔にした責任は自分です
こぼしてもいいよ母さんゆっくりで
蓮の葉にころころあれが無の形
丸かった僕をとんがらかした風
そこんとこうやむやのまま好きになる
そこまでは薬そこからお酒です
カタカナ語溢れなんぎなひらかな派
ペットにはローンで買ったこと内緒
アベノミクスわが懐はいつ満たす

藤井寺市

吉田喜代子

オアシスになってと言ったプロポーズ
一鍬を入れて今年の設計図
音痴でも人を唸らす夢は見る
ありがとう誘いに乗れる今が花
ドタキャンにああ念入りにした化粧
花粉症今年仲間になる予感
駅前に葬祭会館ばかり増え
来ない孫手押し車は犬が乗る
一盛りを買って捨ててる独り者
物忘れ誤字空き字あり日記帳
大丈夫三度の食事忘れない
台風に速度規制は付けられず
神無月少し悪さをしてみよう
災が来るのか秋刀魚来ない秋
逝ってから大事な人と気付く冬

鳥取市

吉田弘子

一家族一世代です千の風
いくばくの余生この世に遺すもの
描いてます余生の地図をバラ色に
終の駅わからないから生きられる
便利屋と重宝がられ生きがいに
診察券ポイントカードだったなら
半熟のまんまで親になっている
金魚鉢泳ぐ程度の才能だ
言い勝って風の視線が突き刺さる
情報に埋もれ五感が病んでいる
団欒はいつも子供の目の高さ
巣立つまで遠回りするダム工事
吉報が届いて今日は蝶になる
コンビニの味に騙されているらしい
幸せが空気の様に居てくれる

米子市

吉田陽子

この冬も無事乗り越えた毛玉とる
桜咲き心の傷をこじ開ける
二人三脚雪解けの田は忙しい
子離れにパラリと割れた鬼の面
咲き分ける椿姉妹もこのように
太陽の力で今日も起こされる
朝顔もわたしも朝は身を正す
伸ばしては切るジンクスを持たぬ髪
白々しくも九月に夏は身を隠し
復興はまだかと秋刀魚焼きながら
抱き起こす菊に抱かれてしまうなり
処方箋あなたとはもう切れぬ仲
年金ぐらし雨の中洲に立つごとし
鶴亀は無理でもせめて五輪まで
再起動するまで風と話し込む

羽曳野市

吉村久仁雄

朝カレー今日やることがたんとある
申し訳ないが幸せ顔に出る
座禅半畳宇宙の旅に行くとする
帰ってこいと言わぬが父の祭り笛
トラブルに対処人間試される
生き恥をさらすと見える敵味方
なるようになって自分史華がない
合掌で包みきれない生きる罪
抜けそうな釘に命をぶら下げる
先見えぬあすへ縫いしろ広くとる
遅咲きの人を育てた冬の汗
ぱくぱくと食べてすくすく老いている
きのう何食べたか脳がむず痒い
半分が叶った夢を持て余す
さて今日の命のほうび番茶飲む

大阪府

米澤俶子

子ら巣立ち小さくなった朝の音
太陽に味つけされた旬の味
ストレスを溜めた俎板陽に晒す
競い合うライバルもなし遠花火
アラジンのランプが欲しい介護の手
虫喰いになっても夫婦紙の雛
本性を隠す女の泥パック
ロボットが溢れ人間退化する
民族の血をたぎらせるフラメンコ
遠い日の月夜の海を恋う螺鈿
捨てられぬものに形見とプライドと
明日よりは若い今日撮るカメラアイ
隠そうと蓋をするから煮こぼれる
幸せは笑い袋の中に棲む
限りある時間楽しいいろで描く

東大阪市

米田水昇

山の木で炭焼きをした戦時中
山ふところ祖母もいました母もいた
楠木の正成親子河内野に
権現寺の登ってみたい石の段
戦時中疎開で決別恋終わる
車椅子孫に押されてハルカスへ
大阪の平野広がる高層に
孫卒業次は中学たのもしい
オセロする負けて口惜しい明日もする
手のふるえ脳の薬はかかさずに
デイサービス出るに出れないかごの鳥
雀たちどこへ行ったの雀の巣
残骸は見るもあわれな津波あと
残り福食べたり寝たりわがまます
生かされる今日の命を大切に

奈良市

米田恭昌

被災地の明るく笑う子に泣ける
嗚呼神よ日本が何をしたという
ソマリアの水汲む子等の細い腕
臓器移植子は散り散りに生きている
節くれた指が一途に鶴を折る
東京五輪何か侘しい高齢者
まだ二〇歳のまだに未来がのしかかる
虹を抱くノートの隅の一行詩
瞼閉じれば古都まほろばの風の音
人間不信爪噛む癖がなおらない
刀折れ矢尽きて絵馬の雨ざらし
神様も一途な絵馬にほだされる
アナログの元気をデジタルが笑う
父の日も敬老の日もひそと過ぎ
ピエロいま独りよがりの幕を引く

川西市

米原雪子

春の風リズムに乗った万歩計
絵手紙に友の笑顔を見る思い
噛み合わぬ会話を横で聞いている
頼む迄素知らぬ振りでいる我慢
ほどほどの愚痴も交えてする自慢
逃げそびれ友の代りに叱られる
もう返事くれぬ写真に話しかけ
何処迄も夢を追う子であって欲し
今日も又あかんかったと低い声
失敗談意味深長に語られる
弱いとこずばり言ってはかわいそう
会議もめ迷路さまよう予算額
他人でも嬉しい小言笑み返す
楽しみの帰省の道を断つ豪雨
来年はぜひと言われてはや三年

鳥取市

両川洋々

川柳界の俺は落武者かも知れぬ
古稀だって千里を駆ける馬となれ
充電と放電今日もくり返す
ヤジロベエの揺れが止まらぬ左派と右派
血統書付きの雑種がこの俺だ
シリコンの胸が許せぬ偽装罪
俺の番　近い骨壺選りに行く
軸足がズレる生き様までズレる
再稼動しない脳ミソ持て余す
エビも肉も偽装か知らと箸を止め
戦争は知らぬ九条なお知らぬ
年金を持って楢山行くと決め
等距離を保つ鬼とも仏とも
悪妻はドラフトにでも出しますか
南無阿弥陀　亡夫は浄土のどのあたり

藤井寺市

若松雅枝

参道の樹々の茂みに神宿る
成人式雛の飛び立つ音がする
明日逢う約束をした赤い靴
ペアシューズ先ずは近くのお寺から
酸っぱいが後味の良い母の梅
雪しんしん被災の友を憶う夜
頼られて嬉しい汗を流してる
プライドを捨てたら道が見えて来た
毎日の写経心の糧とする
世渡りが下手で通した固い椅子
気紛れの蝶で待ってる日は来ない
銀杏をゆっくりと炒る秋の音
歳重ね説得力に味が出る
ガラス拭く明日の世情を見たいから
国境を蝶はふわりと飛び越える

奈良県

渡辺富子

花花花白い記憶を埋めにくる
天空まで続く棚田に彼岸花
泣きに来て青い山河にもらう喝
ずぶ濡れのこころに傘を差す仏
淋しくて背中合わせに雨を聞く
続編も黙って海鳴り聞くふたり
瞑想の海でほんのり浮いている
罫線をはみ出る想い抱いて秋
生きてきた証すすけた白になる
ぷかぷかとスマホの海で浮く言葉
たまゆらのいのち光らせ生きのびる
古都一望魁夷の青い雪が降る
すっきりとプライド捨てた冬木立
夜が明ける速さで愛がさめていく
七十億みんな他人でみな仲間

一般

松江市

相見柳歩

火を管理できたら思春期に戻る
みそ汁も作ってもらうからうまい
川幅を拡げるように恋をする
反作用壁に何度も諭された
砂煙あげてあなたを追いかける
愚痴捨てる腕が二本もあるからね
夢食べる今度は何を食べようか
魂に愛をぎゅうぎゅう詰めにする
合格でみんなを驚かせてやれ
方言で話すほっこりしてきます
弁解の気持ちをシャボン玉にする
最高の笑顔で君を掘り起こす
丁寧に書いてよかった丸になる
港へは光るこころを手土産に
いつまでも松田聖子に酔っている

鈴鹿市

青砥たかこ

受取り人払いで春を送ります
妹が病んでくすんで見える空
誰ももうかばってくれぬ裸の樹
小説を書いて時間を浪費する
後まわしにするから重くなってくる
真冬でも無くては困る冷蔵庫
雨の日の落書きにじんでは消える
ゼッケンをつけてこの世を走り切る
お土産は地名が載っていればいい
大金を持つと小心さがわかる
粉々になってもやはり光りたい
書きやすい銀行にあるボールペン
愛されたことだけ忘れないサクラ
来世など信じてバカになりきれず
がんばっているとおまけがついてくる

神戸市

赤井花城

風花が舞う今しばし生きよとや
在りし日の師やまざまざと花隈碑
いくたりか欠けてまた逢う山ざくら
何処にあんな力が潜む凪の海
復興の芽をみちのくに見たい春
一本の松の祷りを眼に刻む
アイディアが渇れると浮雲と遊ぶ
耳哀しまだ足音を聞き分ける
冷めた眼が笑いの渦の中に居る
同じ夢抱いて一つの輪が温し
枯野抄花屋日記の嘘まこと
人恋いの道飛火野に辿る秋
エンディングノートに鏤める秘密
身の去就問い凛々と粉雪舞う
冬立ちぬ怯む心を立て直す

吉野川市

明石幸風

めでたさを集め睦月の風に乗る
長き夜や古き便りの帯を解く
連凧の長さくらべや蒼い空
瀬をのぼる形に鮎の串をうつ
早蕨を採る人影もなき捨て田
折りたたむ杖も旅の荷花すすき
干す布団打たれて午後の陽は伸びる
水の面や落ちてまたたく合歓の花
仕舞風呂至福集めて春の宵
這えば立ち立てばまた這うわらび狩り
捕われし泥鰌揉み合う狭き桶
世の進みどこ吹く風ぞ水車踏む
幾百年耐えし古塔や雪の舞
蒼天に恋燃やすごと冬紅葉
強がりもひとりは淋し日向ぼこ

豊中市

赤松ますみ

瞑想中のレタスの芯でございます
琴線に触れるべからずピンセット
約束を果たそうとする絵ろうそく
つぶやいたことはまぼろし深海魚
三月の雨はにかんで降ってくる
客船に積む朝焼けも夕焼けも
銀杏の葉散る真ん中の哲学書
地球儀の上はすっかり冬でした
前世のことばかり聞く雪うさぎ
日ごと夜ごと桜が夢に出てしまう
化けたってどうせビニールなんだから
たっぷりの真綿で覆う薔薇の棘
オールマイティーになってくる春の酒
パントマイムのうしろで泥を吐きながら
雪渓という哀しみが消えるまで

倉吉市

秋藤敦子

芋飴は昭和煮詰めた味がする
迷わずに背中の青い魚買う
朝鮮のアナウンサーに怒られる
約束を破る理由を考える
年取った証拠素顔が気にならぬ
笑い声電話の中にあり安堵
謝れば済む溝なのに意地を張る
来客に見える範囲の草を取る
もう一杯干したら娘あげましょう
およばれに穿くスカートを広くする
スピーチが短かったと褒められる
ソチ五輪笑顔の裏が燃えている
折り込みの光る値段を見逃さぬ
猛暑日はオレンジ色の息を吐く
拝啓とまでは書いたが続かない

奈良県

秋山喜太郎

香を焚き少し仏になっている
妻の溜息で風船破裂する
歴戦のスーツ弔う古箪笥
愛の片棒ならきっと担げます
こすってももんでも自前には勝てぬ
五感萎え第六感に頼る老い
鬼の面つけて仏になっている
空しくて抱きしめたくて七回忌
両の手の伏せ字に過去が映りだす
悔いて悔いて男の蝉が泣いている
生老病死輪廻を辿る呻き声
欲の皮削ってすっきりしています
居酒屋の隅は狸の指定席
手柄話のつまみにされた深海魚
荒れる大地に辛抱強い生がある

大阪市

浅井公平

年老いて絆の意味が解りかけ
暗い世をはんなり生きる智慧くらべ
一日が長いと思う知恵の無さ
飲んで食べ眠れりゃ他の欲は無い
思い出は一杯受けた恩情け
年とってしなびるよりも派手にする
つきあいをきっちりすれば身もかるい
コーヒーが仲を取りもつ友作り
老人には時代の動き早すぎる
贅沢も貧乏もよし暮し方
燕の巣あれよあれよともう育ち
美術展ふわり心があたたまる
明日検査思い煩い寝不足に
楽しさで飲む酒だけが薬です
句作りの途中で脳がストライキ

丹波市

蘆田利嘉

世に生れ寂光浄土五観の詩
健康は命を守る諭しなり
満願を託すすべてが我が身なり
人生のシナリオ先は神のもの
神なれど詠める心に乱れあり
我が民のすべてを託す運命あり
運命なる喜怒哀楽で暮れ休む
父母の顔何時だって浮ぶ笑みとしわ
母の愛受け貯えて悟す知恵
誓い合う事なきままに共白髪
生い立ちを初心にかえり夢重む
腹の内決して見えぬ胃カメラ
忘却が責める歳なり筆を持つ
恐ろしい地球壊すな核化学
輪の中で暮らす全てが世を育む

寝屋川市

東　竹水

最愛の妻に叛かれ知る苦悩
いつの間に守りが攻めに変ってる
強がりの心の中に風が吹く
バラ匂うおとぎの国に妻と居る
君欲しい云われ恥らううぶな女(ひと)
健気さを前面に出す名子役
不注意なこの一言で座が白け
悪いとこ父の遺伝と母は言う
独り者屋台沈没イブの夜
説教をする人聞く人目に涙
芋芸人と言われた俺が今名人
円満と言われる人にある気骨
誰も居ぬ被災地に咲く花匂う
小心を大胆にした恋心
なりたいな達者自慢でピンコロリ

三田市

足立つな子

一の重春を寿ぐ黒真珠
嬉しそう困る困ると言いながら
和やかに忘れた振りも明日のため
誇りです陣屋のあとに我が母校
負けません貧乏性も病にも
軽やかで内緒話にむかぬ声
まけといて関西人の口癖よ
喧嘩できるおふたりさんが羨まし
戻るなら指輪を交わす頃がいい
五十過ぎ自分がつくるいいお顔
お喋りもほどほどにして始めましょ
和やかに来世につなぐ現世です
電話での人柄わかる受けこたえ
何時までもさせて下さい墓参り
ふるさとは代替わりして遠くなり

茨木市

天根夢草

不美人は一人もいない福娘
雷が落ちることある傘の先
童謡を歌うと見える山や川
靴に石入るとすぐにわかる足
試食して買うはめになることがあり
論点が変わってもいい口喧嘩
見はなしたように地面に置く荷物
電線がないと伝わらない電気
黒猫と仲悪くない白い猫
新しい水がどんどん出る便所
味方でもみんなかたちの違う耳
弱いので徒党を組んで弱くなり
容疑者として動かない顔写真
漠然と死なない予感ばかりする
話しかけられて困っている柩

大阪市　**あまの　とーな**

拭かへんで涙はこぼすもんやから
よう噛んで食べやと母はいまだ言う
右の頬打たれ上手な母といる
あんな子でなかった母の独り言
安らげと風も木もいう母も言う
親孝行ときどき拗ねたふりをする
ベッドには小鳩のようになった母
止まり木を見つけたように眠る母
母さんは嫌い死にそうなんだから
この思い線香いくつ立てようと
花言葉選び柩の顔に添え
通せんぼしますこの母逝く途は
悲しみの涙は四十九日より
この花を手向けヨ好きな額の花
あの世から母よ飛礫を投げて来い

和歌山市

雨野雷坊

十代の海へ漲る僕の春
月曜の君の笑顔をキープする
目が覚めて浮かんだ筈の句が逃げる
かさこそと落葉の会話はずみ出す
母さんの笑顔に魔法かけられる
ケンカする空手ではない無視しよう
負けて泣く僕の弱さへむちが飛ぶ
ショッピング私服でぶらり古本屋
数学が好きで心を軽くする
手作りのチョコだと彼女走り去る
母さんの愚痴を余裕で聞いてあげ
張り切ってバイトへ汗を積んだ夏
いくつまでケーキ囲むか誕生日
流されるまま遠回りして見よう
やれることやる青春の蒼い海

寝屋川市　荒川鈍甲

落日に立つ位置かえぬ寒椿
艶やかに南天の実の雪化粧
石蕗の黄は故郷の冬の色
被災者の慟哭なのかもがり笛
可憐なる少女を変えたのは野分け
官邸に大本営を置くつもり
解釈で憲法変えるクーデター
ＮＨＫ戦モードに仕込まれる
アベノミクスはやはり財界御用達
秘密法心が冷えてたまらない
闇の中から手錠がぬっと秘密法
議論する主権在民こそ命
原発事故で地球と宇宙考える
天地人星のかけらを散りばめる
逝くときは祭り囃子を聞きながら

豊中市

荒木郁子

春風が閉ざした心ノックする
公園に春がひしめくプランター
被災地の雪の下にも春芽生え
ギャル御輿はち切れそうな胸自慢
束の間の帰省にゆるむ母の顔
自家製のゴーヤジュースで凌ぐ夏
主婦の座をお役御免の入院中
あなた知りグラデーションに揺らぐ日々
満天の星が後押しプロポーズ
へそくりが消え残された借用書
若夫婦ワイン傾け除夜の鐘
息子から義理チョコらしいお裾分け
四捨五入その時々で使い分け
何のかの言っても夫を頼りにし
支え合い二人で紡ぐ小宇宙

豊中市　荒巻　夢

束ねるなわたしの命一つだけ
蟷螂の子どもを見たよ風に揺れ
星明かり幾光年を今見てる
忘れたい過去も大事なわたしです
頬杖をついてよからぬ夢を見る
携帯で微妙と言った孫の春
じっくりと煮込んだ大根ほどの恋
今という点の連なり生きてゆく
春嵐のひと日娘の納骨す
つんのめり生死の境ひょいと越え
皺深き農婦の笑みや彼岸花
原発事故違う生き方問うてくる
ずり下がり青春してるズボン達
八十歳今もざわざわ桜桃忌
羽のごと解き放たれて彼逝ける

鳥取県

安藤嘉子

寝て起きて残り時間が減っていく
許し合って生きる茶碗が二つある
耐え抜いた日の思い出は皺の中
連れ添うて愛の湯かげん味かげん
歯科の椅子女の顔を捨てさせる
耳鳴りも生きるリズムに入れておく
マツタケもシメジも喉を通るまで
特産の顔して並ぶ輸入もの
それぞれに合った器の中で生き
ここだけの話が霧の底を這う
酌み交わすうちに和解の味となる
ぼおっとしているぜいたくが家にある
がまんした欠伸が出口探してる
向き合った微笑の中で許し合う
畑仕事満足感のある疲れ

鳥取県

飯野菖子

きっと咲く信じて蒔いた種でした
うんざりと沈む心に朝の陽が
耐えて待つ火種たっぷり胸に秘め
待っていた春の光が肩たたく
調子よい時には悪夢気付かない
息を吹きガラスを拭いて春を待つ
ちぐはぐを甘く合せて五十年
ゆっくりと秘を解いて雲が行く
心の戸開けて世界を見て見よう
人間に青い地球は疲れだす
だんだんと化石になっていく弱さ
デザインのない真心で生きている
鍬を振る腕は夕日も気づかない
宇宙行きキップ手にするまで生きる
お目出度が続き年金間に合わぬ

米子市

生田和之

潮味の髪を洗って生きて行く
支援するためにどんちゃん騒ぎする
男一人こんにゃく甘く辛く炊く
伸び代があった昭和も遠くなり
やれやれと愚痴こぼしても仕事好き
間食に手の出るうちは死ねません
用もなく行くこともない元職場
飲ン兵衛を囲む家庭が下戸ばかり
血管は細る涙腺太くなる
年金が口座を経由して逃げる
子に悩み孫に悩んで老いてゆく
ぼろ糞に言ってもたった二人なり
名刺など持たぬ暮らしも十五年
厄介をこっそり招く招き猫
生きているお陰でかかる金と手間

奈良市

井倉和子

心静か目に映るもの皆愛し
ラストダンス君と踊ろう微笑んで
落としてきた大事なことが山とある
憂きことも忘れ今宵は花に酔う
悲しいね泣きたい時に笑う癖
生きられる余生を照らす愛あれば
シグナルは見落とさないですぐキャッチ
途方に暮れ気分転換する散歩
脱ぎ捨てた仮面あちこち落ちている
しがらみ緩め遊び心の風まかせ
前を向き笑顔で歩く終章も
気がつけばこの世の始末つける歳
迷わずに味わい尽くす好きなこと
百歳になっても未練あるこの世
冴え渡る月と星とに満たされる

米子市

池岡たけし

雨と風油断大敵教えられ
唸らせる唄の基本は深呼吸
川柳であとの生き甲斐一つふえ
長いこと稼いだ手足そっと撫で
金も無くよいしょで生きる粋な奴
背を丸め稼ぐ夜なべの母おもい
食べる物無かった頃を知らない子
自惚れは独り善がりの袋道
買出しの袋は生きた語り種
飢え凌ぎ国を興したご老体
山間の深い懐古都を秘め
拳骨を覚えている人年がばれ
幻のまだ見ぬ古都に思い寄せ
太るなと言っても聞かぬ腹回り
厚いけど祝儀袋も開けるまで

和歌山市

池下京子

初恋の種火が残る里の風
旬野菜今日のレシピは木の芽和え
胃の中で喧嘩する程くすり飲む
笹舟に消したい過去を乗せていく
降ってきたやはりあなたは雨女
わくわくを鏡が笑う試着室
弱音吐く私に勇気くれた友
茶碗割り内緒にしとこ旅の朝
村おこし茶髪の武士もいる祭り
叶う夢かなわぬ夢も運次第
年輪に嘘はつけない疲労感
芋虫もやがて華麗に舞う舞台
横に居るだけで安堵の箸をとる
残り火が愛の重さで燃え上がる
降りかかる火の粉を払い意地通す

奈良県

池田貴佐夫

巣立ちした余熱が残る子供部屋
真夜中のシーラカンスは孫の靴
食材を我が家のシェフは活かしきる
孫たちが編んだ家族史五十年
忘れても平気ふたりで笑ってる
折れても折れてもまっすぐな鉛筆
妥協せぬ角が残っている初心
ストレスで形崩れてくるマスク
この衣脱げば私が消えていく
ぽっくりも長寿も神の掌に
とりどりのコンニャク並ぶ終電車
一条の涙止まらぬ鬼子母神
時空超え古代の空気吐く埴輪
ゆるゆると時が遊んでいる御堂
石筍の天辺で人間を嗤う

岡山県

池田たか子

新年の抱負ポーンと紙風船
さくら散りぽあんと空が広くなる
美田にはもう戻れない丸い背な
ひとやすみ野良着の袖でふくトマト
犬かきを恥じてはいない岸に着く
野の花が好きで花束縁がない
かくれんぼ昭和の路地はこのあたり
目も耳も病んで鉛筆丸くなる
青春の呻きがもれる無言館
消去キー押しても涙乾かない
保護色をまとい私を見失う
さらけ出す勇気が欲しい冬木立
失敗の肩に無言の手が温い
ブレーカー上げてもオフの脳回路
学ぶのは今日から喜寿のスクワット

松原市

井澤壽峰

愛と哀夫婦茶碗にてんこ盛り

星凍てて流れる雲に身を隠す

電飾に写し出された虚栄心

先取りは人にまかせた残り福

極めたと思う驕りにある油断

漁火が照らす男の深さまで

慟哭の海に帰結をした命

満月の空の果てまで千鳥足

媚売って売って男の骨を抜く

嘘に嘘重ね見えなくなる真実

正直の陰にこっそり潜む嘘

中秋の名月抱いた千枚田

晩秋がささやく冬のシンフォニー

線引きの出来ぬ五欲の無限大

一本の芯が律義のド真ん中

鳥取市

石井華蓮

ふるさとの土踏むと霧晴れてくる
化粧したのに訪ねてくれる人がない
ヘラヘラとお花見をする群れにいる
卵割り朝にはずみをつけてゆく
真ん中の骨がもろくてよく揺れる
喜ばぬ犬お洋服着せたのに
茶柱が立ったのに雨降ってくる
納豆の粘りくらいの意地を張る
口角泡を浴びない位置で話聞く
悪口に無理矢理同意させられる
青リンゴ熟して少し生意気に
負け癖がつき悩まなくなってくる
カーテンを閉め魂を解き放つ
忠告が歯ぐきまで染み泣けてくる
釣った魚はそっと海へ返そう

貝塚市

石田ひろ子

読み終えた余韻わたしを食べている
明暗の定めを背負う絵馬が揺れ
水回りぴかぴかにして主婦の自負
大吉を引いて不安になってくる
あっさりと逝く為体鍛えてる
海鳴りが仮設の冬を追い立てる
復興を急かすダンプが日の出待つ
舞鶴の海は昭和を忘れない
今更に一円玉の重み知る
ゴミの中から人間が見えてくる
ひもじさの経験知らぬ養殖魚
大海を夢見て泳ぐ水溜り
三世帯窓開ける部屋開けぬ部屋
縄梯子外されてから道開け
舞い終えて仮面を剥がす年の暮れ

大阪市

石橋直子

身の丈で暮す上見ず下も見ず
父の日も子供は母の肩を持つ
晩酌は二本と妻の煮たおから
世帯主妻の名前にしたくなり
裁縫箱出して時時母に会う
近所の目見ないふりしてよく見てる
実はねえ裏があるのよその話
いい人だいつも周りに人がいる
どれだけの効果あるのか署名する
生きているいつも何かを待ちながら
人生の年輪ですよ顔の皺
人生という旅駅はあといくつ
九十点あと十点は希望です
仁王様座りませんかこの椅子に
春一番愛の言葉をポケットに

豊中市

石橋優明

妄想を形にしたかカリフラワー
ひな祭り午睡の夢がにじみ出す
チョコボール手が触れるように渡す
終電車シートに並ぶ団子虫
折る鶴に折り返されて目がさめる
獅子舞の口がのみ込む定期券
茶を飲んで湯呑みの底に下りてゆく
金色のボタンかわいいくしゃみする
入り際のとろけた夕日すくいとる
空耳か春の小さく爆ぜる音
日焼けの子神の子の目になる刹那
反抗期インターナショナル歌いなさい
まんぼうが寝転んでいる四畳半
月明かり電信柱のびをする
力こぶ入れてもマリモ丸いまま

大阪市

磯島　福貴子

淋しげに主なき家梅薫る
桜散る花びらまとい鯉泳ぐ
青空にすくっと背伸び彼岸花
錦秋の山々今に雪の華
冬日浴び群れて飛び交うゆりかもめ
ガラス越し眠る赤子にようこそと
安らかな童子の寝顔そっと手を
産声を上げて人生ヨーイドン
古希過ぎて願い込めるはＰＰＫ
語り草貯蓄の利子で楽隠居
昔日の面影探す同期会
万一に備えて一つ笛求む
くじ運は無いが夫は大当り
表向きうちの夫婦はやじろべえ
過去は過去けじめをつけてさあ始動

和歌山市

磯部義雄

子から来た荷物の箱は着払い
沈黙し小首傾げている主治医
聴診器当てれば地球虫の息
老いてなお裸眼で通す針の糸
綻びを縫って夫婦の仲直り
歯磨きのチューブ夫婦で絞り出す
まだ杖は要らぬお前が愛の杖
栄転もノルマも棄てた途中下車
勇気ある決断免許証返す
ふるさとが丸ごと届くお中元
スーパーのチラシが妻の愛読書
遺言書僕の名前が抜けている
好きな鬼見つけて欲しいかくれんぼ
母白寿長いドラマが終らない
逃げられぬせめて介護が終るまで

松原市

市川雄太

道行くと大きな松の木があった
今シーズン巨人阪神どっち勝つ
風船がふわふわどこへ飛んで行く
どうしても好きになれない人がいる
いつの日か僕の作詞がカラオケに
未知の旅バッグと共に冒険を
五連休暇を潰せず参ったな
転んでも起きてまだまだ立ち向かう
駅のホーム次次人が駆け込んで
十代のメダリスト達上へ行け
うれしいなブーケが胸に飛んできた
金で買えぬ大事な命捨てないで
人生の大海原を泳ぎきれ
足元に注意しないと危ないよ
わきまえる自分でできる限界を

神戸市

井上忠貞

現代よ速さ競ってどこへ行く
この部屋を終の住処に決めかねる
退職後金を使わぬ知恵がつく
古希すぎて免許返上歩きます
挑戦は家族の傘に守られて
ありがとうこの一言で人育つ
難題をとんちきかせて切り抜ける
善徳を積んで来世の切符買う
朝早く音をたてずに出かけます
一合のお酒に感謝また明日
師をまねてやがて身につく自分流
病癒え明るい色の服を着る
脇役は渋い演技で生き延びる
恥をかきそれからまわり見えだした
遺伝子を継いだ笑顔に感無量

東京都

井上つよし

妻も傘寿相合傘に春の雨
屠蘇雑煮鱈腹祝う平和哉
後の先を取れる自信が受けて立ち
言いたいことを言って好かれるお人柄
パパママ等と呼ぶな父さん母さんだ
カラオケで喉と心の煤払い
停電で一句浮かんだ雪明り
いさぎよく脱いで孤高の冬木立
花びらも月も浮かべて露天風呂
大鍋で肉じゃが炊いてどんと据え
窓際で時々光る生き字引
シルバーパスで東京中を駈けめぐり
連休に弾む揃いのスニーカー
清も濁も円く収めて陽が沈む
行き暮れる旅路を趣味の灯が照らす

三木市

今津隆

この酒を飲まな一日終わらへん
馬が合う笑い上戸と泣き上戸
馬合わぬ二人だけれど続いてる
父親にそっくりなのがどこ悪い
青春はただ待つだけの恋でした
ハンドルを握ると人はなぜ変わる
川柳は運転中は危険です
憲法は空気のように生きている
手を握り最期看取れた親孝行
天災の想定外は人災だ
心配をかけるのもまた親孝行
今起きた出来事がすぐ過去になる
一生に東京五輪二度見れる
生きるのが仕事年金生活は
夢に出るお迎えの声追い払う

枚方市

今村静枝

雑念を払って今朝の祈りから
これからが読書の秋と長電話
怪獣も同じかたちの子が生れ
気まぐれは猫にまかせて人は人
親の欲目ふとい足の娘バレリーナ
忘れな草悲喜交交に胸に咲く
別れ来てほのぼの淡い虹を見る
見舞っても判らぬ友の手を握る
礼拝の聖きこの席クリスマス
心のケア今日の疲れにモーツァルト
コンサート眠りに来たか午後三時
つらつらと悲しいいくさ蘇る
朝あけに燃える太陽月を食い
長い道走った様な昨日今日
生かされて今ある日日や花吹雪

吹田市

岩口翔太

春うらら鼻はムズムズ目に涙
千畳敷流されそうになった僕
受験イヤー家族協力テレビ無し
楽しみは総て受験のあとと言う
合格発表何度も数字確める
ボーダー上合否を分ける運不運
サクラサク家族祝いのカニ旅行
運転のパパありがとう皆ダウン
受験済みやっと運動筋肉痛
合格を拾った運を生かすだけ
期待と不安明日から僕も高校生
坂道を登るペダルも軽い春
いじめずにいじめられずに続け道
合格祝お礼のメール絵文字入れ
バドミントン弟本気で負けちゃった

唐津市

岩﨑　實

登下校最敬礼の奉安殿
軍帽の遺影が守るこの平和
国のため散った兵士はおがもうよ
特例をつくり原則乗りこえる
ブータン王総幸福をひっさげて
漂流物異国の浜べより帰り
渋滞を眺めて動く耕耘機
診察を終えて花見の客となり
気をつけて帰れ降りぎわ父ちゃんも
ころぶなよよろける足に言い聞かせ
玄関に杖が待ってる歩かねば
人間も干される程にうまみ出る
わが行方極楽浄土予約済み
通夜ばなしお棺の中で耳すまし
お別れの言葉はひとつありがとう

池田市　上嶋幸雀

天も地もくるりと春の観覧車
格差などない日盛りの冷や奴
胸襟を開いて煮え湯飲まされる
ロボットのペットにされるかもしれぬ
横風を受けてもデンと首の位置
エアコンがうたた寝させる終戦忌
窓が開く疑心暗鬼の籠の鳥
利き腕に止まった蝶を持て余す
芝を読む真似は出来ても入らない
テーピングしても本音は零れ出る
菊を愛で煙草ポイ捨てする文化
虹消えるまでに握手をしておこう
くるぶしの深さで溺死する驕り
補助輪はそっと外しておきました
会心の笑みはひとりで噛み締める

神戸市

上田和宏

人生は積んで転んでまた積んで
夫婦とはほど良き距離の保ち合い
和み顔人の心を開かせる
微笑めば微笑み返す金魚鉢
線香より冷えたビールを待つお墓
抽斗は昔に還る玉手箱
川柳で心が広く丸くなる
愛しい樹に殻残す蝉の声
見合いやけどいつの間にやら恋女房
太鼓腹熟れた水瓜の音がする
念仏は種も仕掛けもない魔法
元気だよ一言だけの良い便り
喜ばす術を覚えた子が憎し
煩悩を鎮める第九と除夜の鐘
携帯をわざと忘れて骨休め

枚方市　上田　仁

立ち位置を変えて涙に背を向ける
午前零時すべて忘れることにする
満ちて今影の形を整える
結論はまだ筆先が生乾き
ひと粒の涙に我を取り戻す
返盃の底に潜んでいる野心
終章をすんなり閉じた嘘ひとつ
もう責めぬ忘れましたと言っておく
泣くもんか涙を仕舞う胸の奥
外角を攻めると鬼は気を許す
凝固した心に酒の一滴
甲冑を捨てて柔和な顔になる
一呼吸ずらし断ち切る負の記憶
潔く詫びて二の句を継がせない
子を諭す母は時間を惜しまない

三田市

上田ひとみ

あくびして戻ってゆこう人間に
子供たち優しい顔になって来た
真っ直ぐにみつめてくれてありがとう
逢いたくなったら呼んでみて私の名
見極めるあなたの愛の重さなど
立ち止まる勇気ほめてはくれないか
風の強い日はあなたに会いに行く
着ごこちのいいシャツみたい君の声
忙しいひとはたいてい美しい
その門はいつもちょっぴり開いている
ざっくばらんでとてもしんどい人だ
忘れた訳じゃない強くなっただけ
見てごらん楽しい夢はそこここに
だんだんと自分のことが好きになる
散り際は見事でなくていいんです

箕面市　上田陽子

割り込んで話の花になるお人
美しい記事を探している夜長
おはようが覗く病室父元気
束の間の命預ける光の輪
好き放題言える仲間がいてくれる
塾帰り無数の星に見守られ
取り敢えず知ったふりして手をあげる
学校を見るのが辛い子を亡くし
数学がこんなにも好き師のご縁
繰る程の名刺が溜まる選挙戦
賞味期限こだわらないが母元気
末っ子は目立ちたがりですぐ凹む
まだ丸くならない父でほっとする
祖母の口癖頭(かしら)回れば尾が回る
中心で雁字搦めになる主役

東京都

植竹団扇

風呂吹きの湯気に溶けてく味噌の味
元総理軽くいなして真央が舞う
猫じゃ猫じゃの伴奏をする猫の皮
やぎさんも食べずに読んだ喪の報せ
右と言われりゃ右と応えるお友達
一本杉も一本松も村外れ
デパートの屋上にない遊園地
裏は見せぬに向こうが透ける昼の月
もう親が死ぬことはない食休み
後ろ前に着ると左右も逆になる
説得のルーツ歌舞伎十八番
お帰りよりも行ってらっしゃい好きな妻
カゴメカゴメの後ろの正面にあなた
料簡も狸になるという小さん
パンツ穿く片足立ちの稽古兼ね

豊中市　上出　修

かち割りも溶けて流れる好ゲーム
出番待つセミも悩みの変な夏
今が旬待ってますよと紅葉山
顔見世に早や一年と思い知る
同期会株と薬へ花が咲く
久し振り笑顔作るが名が出ない
ＯＢ会卒業しても上司部下
金と暇体力の山擦れ違う
健康を見据え控える甘い物
体脂肪エアロバイクで絞り出す
物忘れもっと頑張れ石頭
大病を抜けて人間丸くなる
人体へ成果待たれるｉＰＳ
古代でも卑弥呼は指輪してたかな
安倍人気支えるキーは円と株

堺市

上野楽生

触れるものすべて更地にした津波
故郷の自然を残すエコが好き
まっすぐに生きた証の本を出す
詩を書いてあなたをノックアウトする
何もかもなくして青い海を見る
隠し事何も出来ない風呂の中
赤ちゃんの笑顔は生きるエネルギー
美しい日本がそこにある唱歌
作文に書いた大きな星になる
中国の大陸棚が伸びてくる
人間の弱さが目立つ宗教画
初セリでマグロの目玉飛び出した
盲導犬は武士道を身につけている
煙突は高い高いは消費税
辺野古の海でジュゴンの涙見ましたか

明石市　上原翔

高禄を食みだらしないクールビズ
当て馬の悲哀を知っている飼い葉
イメージと愈々離れゆく鏡
松原越しに霊峰仰ぐ
腹八分とは含蓄の有る言葉
美しい響きを醸すお蔭様
未だ読めぬ児へひらがなの祝箸
ストライクゾーンを広くする余生
深々とお詫びしている電話口
後期への備え怠ることはない
妻や娘のマウスで凌いでいる肩身
B級のグルメにもあるエースの座
帰りまで青春切符ではもたず
落款の象牙に後ろめたい墨
こだわると相手にされぬから曲げる

池田市

上山堅坊

ふらふらと揺れるが抜けぬ杭でいる
時勢には少し遅れて逆らわず
人の匂い嗅ぎに行きます裏通り
雑魚なりにきりりと生きてこれました
土の匂い付けたまんまで傘寿過ぎ
落ちたい穴塞ぎたい穴あるこの世
アフリカで見ると涙の出る国旗
亡くなってみれば偉大であった妻
いまさらに始めた趣味にもらう夢
間違えた道も楽しむわが余生
逆転無罪ほんとに恐い裁判所
ミスがない人生なんて真っ平だ
一合でふわりと酔える嬉しい日
いい予感すっと朝日がのぞき込む
夕陽浴び突っ立っている物忘れ

大阪市

魚住順子

新年がきっと幸せつれて来る
嫌な事忘れるコツは食べて寝る
震災後いつもの朝に感謝する
暖かな青空見たよ春近し
年令も四年に一つ取りたいな
人生は捨てたもんでもないみたい
紫陽花が梅雨の景色に彩りを
銀婚を迎えてやっとわかり合う
風邪引いて知った元気のありがたさ
七夕の笹に願いをそっと付け
父の背が小さく見えた嫁ぐ朝
前向けばチャンスが側にやって来た
大空に希望と言う字書いてみた
母さんに貰った言葉今わかる
桜舞う景色にしばし時忘れ

生駒市　臼井　淳

思いやる暇もなかった妻の夢
いろいろと水に流して嫁と居る
苔寺に静けさ戻す鹿威し
大江戸を肩で風切るご落胤
カナヅチが恐れず遊ぶネオン川
浴びるほど飲んだ翌日猫でいる
淀みない謝罪会見怒り増す
手術室見送る妻へVサイン
「御仕舞ね」絆解けるこの台詞
アリバイを崩して終わるサスペンス
学歴を眼鏡のように鼻に掛け
不思議だね華奢な体に肥えた舌
凄腕と言われた割に出世せず
嵩張らぬ誇りを提げて生きてきた
五七五が夢の中までついて来る

枚方市

碓氷祥昭

地球儀をゆっくり回す初春の酒
元旦は馬百態の貌と会う
糸口を掴んで独楽が回りだす
調子良い話にいつも刺がある
目立たないように年金減ってゆく
夕陽見る時は詩人になっている
新刊の扉に未知の夢がある
真っ青な空に邪心を笑われる
忘却へ前頭葉が持つ焦り
平凡な父が教えた人の道
人類史戦ばかりを繰り返す
七色の保護色を持ち生き延びる
内戦のシリア眠れぬ二十四時
感動の涙とドラマ綴るソチ
ベストを尽くそう命は短過ぎ

大阪市

内田志津子

想い出の地に蘇る童歌
五輪まで生きる決意のストレッチ
便利さが脳を縮めてゆく恐怖
誠実を両手に下げて走り出す
凛として悲しみ背負い前を向く
真っ直ぐな瞳の奥に見る若さ
子を守る強い決意の母の笛
この坂を越えたら見える初桜
大丈夫三度の飯がまだ旨い
貴方色染まったかしらこの私
駄作でも賛美をくれる友がいる
摘むなかれ旅人癒す野辺の花
良い夫婦秘訣は風にうまくのる
飛び立ったひなどり達の大宇宙
贅沢はしたいが努力嫌だとは

大阪市　宇都満知子

今の歳慣れた頃には一つ増え
くよくよも明日になれば薄れてる
悔しくて亭主の背にあっかんべ
サイダーのシュワシュワシュワが今も好き
ひと言を掛けてもらって軽くなる
嬉しくてうっとり見てる薬指
喜んで安請け合いの孫の守り
三日たち素直にごめんやっと言え
赤ちゃんの足指まるでエンド豆
酒減らす亭主言うけどきっと無理
待合せ十分前に着く努力
私にも残せてるかな母の味
妻として当りでしたかこの私
横道に逸れず育った子に感謝
コラム読み目からうろこや涙まで

西宮市

梅澤盛夫

亭主殿愛は形よルイヴィトン
荒海に放り出されて知る自分
月愛でる二人は違う夢を追い
木洩れ日が森を不思議の国にする
セシウムの川はふる里鮭帰る
疑えば秘密の影が動き出す
亡き父の自慢で生きる母白寿
納棺師母を眠れる美女とする
ふる里は終着駅で始発駅
心地よい広さは僕の四畳半
昨晩も生きた証の二日酔
四斗樽を百も飲んだよ古稀の春
生かされて生きる喜び初日の出
人生は下りの方がよく見える
結局はごめんなさいとありがとう

河内長野市

浦　一夫

長い坂越えて二度惚れ金婚日
根比べ耐え忍ぶこと妻に負け
おしゃれして寂しい顔を消して会う
惑わされ妻と双子の妹に
舌が呼ぶぐっとこらえた酒たばこ
春あらし花粉目や鼻水びたし
ひと眠り老いて食後のリクエスト
子がレフェリーけんか盛んな夫婦仲
古希迎えたくみの技をつかみとる
政治家の言葉に潜むけがの種
あの愛嬌選挙終われば知らんぷり
清濁を飲んで過ごして今辿る
道祖神乱世ですがる迷い道
悔いばかり末期に思う過去の道
七段を飾り孫見て目を細め

羽曳野市　浦　かつ美

人の顔皆穏やかな通り抜け
ネットカフェ寝泊まりするも家がなく
麻生邸小さいお家何軒も
うらやまし学費無料とベトナムは
貧乏人学校行けぬ日本人
9条をリュックに付けしベトナム路
おつけした言われてみれば利子2円
立命館平和を語るミュージアム
環状線京橋空襲忘れまじ
球よりも声がはずんでいる卓球
水やりをする分答える長なすび
結弦君賞金津波復興に
鳩兄弟親が金持東大に
親貧乏継子泣いてる中卒で
捨てられぬ夢と古着はいつまでも

広島県

枝本光子

花筏乗って行きたいとこがある
すっぱりと断捨離できぬ昭和っ子
花稽古あとの会話が楽しみで
同じ干支の曾孫キリッといい女
芋蔓も食べたと諭す食べ残し
花の競演人の競演文化祭
嫁に来てこれほどの花桃畑
黄砂もらってお返し何がいいかしら
労りの言葉を交すストレッチ
首回し体操船が出て行くよ
新学期庭のコスモス淋しそう
ネーム入り孫の湯呑みの茶がうまい
花活けて花に貰っているいのち
小さくとも今の仕合せ温める
松竹梅やっぱり花は弾ませる

松山市

大内節子

テトラポッドの隙間に太陽のかけら
たっぷりの青へ少年逆上がり
君が好き永久凍土溶けるほど
広告で折っても鶴という誇り
タイトルをぼかすと真実が見える
神様の誤算地球が哭いている
ストライクゾーンの中にある野心
一本の楔で点滅が止まる
切り札は出すまい幸せがにげる
感激をマナーモードにしておこう
三原色混ぜて無限の夢を描く
生きる途中若さに句読点はない
未完成だからまだまだかくれんぼ
方舟に乗ろう流れのまま揺れて
ラストシーンわたしは青い空に浮く

箕面市

大浦初音

溜息をつけば幸せ逃げてゆく
愛情も限度越えると怖くなる
老いて今も埋めた胸の火生きている
脳も目もサプリメントが欲しくなる
天寿でも介護は悔いることばかり
春の雪初恋のよに淡く消え
吹く風と花に癒され尾瀬の道
失って気付く若さという宝
さよならを言いたくなくて廻り道
言葉より心にしみるその笑顔
十年を取って書き込むアンケート
隠しても心の闇を照らす月
出ないよう財布のお札さかさまに
まちがえず薬飲むのも仕事です
いい夢のつづき見るため眼をつぶる

大阪府

大浦福子

わたし色染めたつもりがあなた色
蜘蛛の巣に絡まり翔べぬ恋ひとつ
愛嬌で美人に負けぬ妻がいる
遅刻して愛の深さを試してる
山間に虹の懸橋神渡る
白黒を言わぬが花のときもある
恋の怪我効いてくれない痛み止め
ヒョウ柄が私の老いをねじ伏せる
かさぶたが取れてそろそろ次の恋
野良仕事母が誇りの爪の土
オーロラは神が織りなすショータイム
秋連れて吊り橋渡る赤トンボ
卒業の無い主婦業に青い鳥
嬰児をおんもに誘う桃の花
紅葉にあなたと染まる古都の旅

尼崎市　大久保　泰子

一度だけ起こしてみたい妻の乱
時計止めこの幸せを守りたい
人恋し月が私について来る
アルバムに浴衣の似合う君を見る
ゆっくりと選んだ彼はただの人
お世辞だと解っているが顔くずれ
言葉より親の背が効く子の躾
別腹と食べた饅頭胃にもたれ
つい癖で孫にも年をごまかした
同病で話がはずむ待合室
定年が有るといいのにおさんどん
同窓会何故好きだったあんな人
もう一押し本音聞こうと酒をつぐ
彼が好き遠回りする駅の道
のぼり坂そっと差し出す手が温い

大阪市

大治重信

見つめられ見つめ返して恋芽ばえ
満月を誰も入れない部屋に入れ
栄転か左遷か読めず都落ち
つい迷う東は飲屋西我が家
だい好きはいつもこの道帰る道
ＰＭ2.5あれは和製の春霞
落着かぬ上座に坐り喜寿となり
両親が逝って兄弟縁が薄くなり
喧嘩して長寿の夫婦同じ墓
うっとりと下千本に中と上
震災の尺度を変えた核悲劇
支払はビットコインでいたします
暖かや大根味をよう吸うて
生涯を余白残さず締め括り
頑なに生きて上座の孤独知る

竹原市

大下規代

振り向けば線香花火に似たロマン
君が住むこの町が好き風が好き
発想を替えて姑の顔になる
過疎の村桜は誇り高く咲く
独り居も川柳と言う杖と生き
山茶花が一輪咲いて歌になる
残り火を燃やしてみたい港の灯
幸せな女演じていいですか
淋しさは物忘れから始まった
ゆず二つ湯舟で何か話してる
ソッと押す風はやさしい亡夫だろう
人恋うる心の奥にある花火
光る塔亡夫のおかげだと思う
名を呼べど海の広さに消えてゆく
芯のある人は笑顔を忘れない

神戸市　大島　まさる

トロッコと嵯峨野を駆ける花の精
一人居がお掃除ロボに追われてる
すり寄れば老人連も財政苦
生きのびて五輪二度目の幸を聞き
巡礼で昭和の町を母と子で
入社して思わぬ色にそめられる
もたれ合う幸せもある古い町
窓明かり一つ一つに明日を持ち
デパ地下に妻の味付け潜んでる
ティータイム噂話に味をつけ
明日のため信じてみよう綺麗ごと
生きがいの趣味に昼寝の楽を持ち
熟練の技が他国で生きのびる
身の丈に合う生活が道ひらく
笈摺りが緑の山を深くする

大阪市

大島美智代

散り急ぐ諸行無常と言う桜
優しさに溺れない様距離を置く
いつだって原風景に母が居る
梵鐘の余韻慕情を募らせる
知覧から命の叫びおかあさん
腑甲斐無い親には済まぬ名前負け
此の辺であけて見ようか玉手箱
ブランコに淡い思惑揺れている
戦いを止めると老いが加速する
嫁姑ほどほどと言う車間距離
土砂降りの中引き摺っている挫折感
一言が多い女の単細胞
路地裏の奥に残っている昭和
からくりが解けたら何でも無い話
不器用に世渡りをしてマイペース

豊見城市

大田かつら

恵まれた時代生きてるありがたみ
沖縄の終わる果てない不発弾
オキナワの犠牲の上にある平和
タマ除けにされたあげくに基地負担
沖縄で幾万の風吹き荒み
穏やかな日々をつんざく戦闘機
人権がどこ吹く風の基地被害
人間のエゴがジュゴンの海奪い
沖縄の平和遠退くオスプレイ
オキナワを要塞化させてはならぬ
沖縄を犯し続けて来た日本
哀しさが増す真っ青の空と海
アメとムチ抱かされ狂う基地の島
破壊した海は二度とは戻せない
人間もジュゴンも大切な命

大阪市

太田としお

砲弾で祖国を壊すバカと馬鹿
誰にでも愛想いいので困る犬
寝たきりの百歳なんてお断り
分からぬものは座禅組んでも分からない
沈黙は弱者にとって武器になる
人間だものみんな時時エラーする
国家にも賞味期限があるらしい
唸るほど財を成しても暗い顔
飲み放題食べ放題を恨みます
思い出は僕の大事な貯金箱
老人も我慢しましょう国の為
こんなにも悲しい時に腹が空く
大事なものは大事な人にあげますの
笑うのも泣くのも素適マイワイフ
故郷はいつも子供にしてくれる

堺市

太田由子

花つばきピンクはいつも美しい
葉のつやと花の色とが良く似合う
大机生けた椿と話する
つぼみにもピンクの色がにじんでる
犬と猫どちらも負けず甘えんぼう
引出しの整理がいつか物さがし
片付けがちらかしになる情なさ
庭に咲く花々みんなきれいだよ
曇り空庭もなんだかくもってる
約束が不意になったの何でだろ
何思い何考えて生きてるの
向い家の旗はためいて風を知る
庭の木々緑の色もさまざまに
草か苔か緑の色のもり上り
寒いけど自然の風を一寸吸う

川西市

大坪一徳

戦いを終えた男に昼の月
土砂降りもあった人生今は晴
分岐点選んだ道の幸不幸
素数には自主独立の気概あり
担ぎ手を止めた神輿は見てるだけ
邪魔になる負けず嫌いの習い性
満開の桜はどこか他人事
靴の中小石が一つ罪一つ
声高に怒鳴った脛に傷がある
思い出の続き楽しむ夢の中
行き過ぎた市場原理が世を壊す
人生を賭けた会社の名が消えた
給与から羊のように税刈られ
謝罪会見二十数えて頭上げ
孫にする贈与無税は罪作り

奈良市

大西將文

つまらない過去にこだわる脳回路
消えなずむ過去に歯型をつけておく
パンのみで生きた己れの半世紀
今にして自分史決めた紙一重
歌えない詩人が月とコラボする
白黒はつけぬ灰色の哲学
脇道にそれて遠吠えしたくなる
散ることで若葉に託す世の輪廻
時々の節目を祝う歌がない
神様の前で怪しくなる自分
月を見て陽を見て僕のリサイクル
ていねいに生きて小さくなる歩幅
ユニークな道はけものに近くなる
踊り場でなお上階をあきらめず
残された時へこの世のうまい酒

大阪市

大西晴雄

デパ地下で妻の背中を追いかける
日本語を習ってほしい日本人
のっそりと妻の後からカート押す
にっこりと笑顔で活路切り開く
お接待に元気いただく遍路旅
ナビゲーターかわりばんこに二人旅
ドライヤー乾かす髪はひと握り
スーパーのチラシが決める晩ごはん
父の日は何も置かずにすぐ帰る
猫撫で声出しても夫知らん顔
迷ったら妻に言われた通りする
ドラの音が遠く聞こえるトリスバー
復興を絆に頼る政治力
まだ白寿めがねせんかて辞書引ける
先着順一度並んでまた並ぶ

亀山市

大野　たけお

青い蝶ロールシャッハに紛れ込む
玉虫が玉虫色に群れて来る
鳥篭に戻る半券捨てません
些細なことです　一周遅れなど
雨のち晴れところによってビアガーデン
調律を頼む弾き手のないピアノ
告白を音声多重にて流す
タラレバをつけるとみんないい人だ
新米じゃない古米でもないそんな時期
持っている人と言われて立ち枯れる
阿修羅像ほどではないが真面目です
欠片にもプライド残す鬼瓦
この次も大きいつづら選びます
南へ南へふる里目指し伸びる蔓
家系図のみなさん僕で終ります

松山市

大葉美千代

ゆらゆらと狐火ひやひやと過疎化
養殖の天魚が月の舟をこぐ
チューリップいま笑ってはいけません
真実に粉をまぶして私小説
月の夜に羽化を夢みるマスカット
ピチカートあなたがドラマ変えたのね
ふと見せる女の侠気沙羅双樹
ややこしいのはアバウトで繊細で
辻褄を合わす真昼のバスドラム
ひまわりのヨーデル的なリリシズム
むらさきを編む背信という言葉
少し歪な果実を視野に入れておく
芸術至上主義さみどりならば通りゃんせ
するりと馴染む晩学の四書五経
ひめむかしよもぎそのむかし二日灸

鳥取市

大前安子

正論を通すホースがひびわれる
自己主張どこへ捨てたら丸くなる
窓開けば樹々の呼吸が走り込む
花筏世間のくらし見て流れ
点滅を軽く見ていた交差点
身の丈を超えた話に虫騒ぐ
字足らずに二人の会話混ぜ御飯
パニックはあなたの目線逸れたから
目で会話七分咲きほど満たされる
気が急いて非常識だけ顔をだす
かぶりつくリンゴ奥歯が咀嚼する
仲違いこれっぽっちのことばから
ここち良い距離を保った愚痴をいう
駆け落ちが出来ますように介護する
あなたとは混ぜては丸めハンバーグ

三原市

大森昭恵

粛粛とドナーの命つながれる
何を捨て何を足さんと疼く胸
躓いた日から続いている氷雨
シナリオにない人生の浮き沈み
君となら掘建て小屋に住むもいい
結論は明日に持ち越す観覧車
風葬になるやも雪の野に迷う
いい詩を書こう鉛筆尖らせて
いつまでの凪か海路の夫婦舟
閑職の無風地帯でみる夕日
墨を磨るひととき凪の海になる
散り敷いて過去美しく消す花弁
大望を抱いて我慢を苦にしない
曖昧に生きるのもよしロゼワイン
一切を呑んで寡黙な海のいろ

竹原市

岡　﨑　恵美子

ケロイドをかくさず生きて母逝けり
うれしいね皆んな同じ灰になる
病魔たち次は傘寿じゃついて来い
麻酔中の私は私なのかしら
ｉＰＳ死ねなくなっても困ります
赤ちゃんの丸いお手々は佛さま
原発はいらぬと言うは易いけど
日本語の話せるうなぎいませんか
ひとり膳土用丑の日うふふのふ
原発は止まっていても電気来る
鍵のないくらし日本の昔話
時移り鍵っ子私の番となり
雷が鳴っても蚊帳はありません
涼風と書いて窓辺に貼っておく
彼岸花人恋しくて咲くのです

倉吉市

岡　﨑　美知江

花束にならぬ花にも水をやる
傷心の私を誘う里の風
もう一度二人暮しがしてみたい
夢の中夫に呼ばれ墓参り
年金が介護保険に喰われてる
そこそこの金じゃ看護も受けられぬ
「ぼけないで」帰る娘の置き言葉
エンディングノート書き終え背を伸ばす
のど飴をもらいおしゃべりまた続く
愚痴はみな猫にこぼして穏やかに
二人からひとりそれから強くなる
気まぐれに長生きしてるわけじゃない
渋るわけではないけれど金がない
核心にふれると声が震えちゃう
一呼吸おけばやさしい風になる

北九州市

岡田幸生

平凡に生きて流れに逆らわず
ギアはローゆっくり降りる八十路坂
多機能においてけぼりを食う老後
孤独死のニュースしみじみ独り酒
老老介護避けて通れぬ重荷負う
一合を炊いて一日無為徒食
家計簿に絶えず寄り添う赤のペン
子との距離広がってゆくカタカナ語
優しさに触れて心の根雪解け
もの忘れ昨日が書けぬ日記帳
礼服が孫の華燭に弾んでる
三三九度すんで苦労の幕が開く
娘の謝辞に母は微笑み父は泣く
骨のある男に託す娘の未来
円満の秘訣は妻が舵を取る

寝屋川市

岡野一幸

チャイム押すおはようさんが言いたくて
サクラ咲く厨楽しい声はずむ
孫と行く公園馴染みの鳩が居る
春闘に自分を守る拳挙げ
上方に維新の弁士狼煙あげ
詰め放題こぼれる迄も欲で詰め
担がれて五臓六腑がむず痒い
持ち時間過不足なしの名司会
花名刺グラスの底にある打算
くすぶった不信で朝の葱叩く
太鼓判押されてからのプレッシャー
メモ上手そして消えゆく記憶力
喪が明けて亡母の秘密が度肝抜く
生前葬で極楽浄土予約する
亡母の生き様私の生きる道標

宿毛市

岡村千鳥

百点はママを笑顔にするくすり
百歳までいのちをつなぐ万歩計
無視されてすねているのか昼の月
もしもわたしが月ならあなただけ照らす
だとしても夢があるから花も咲く
ほらほらそこにかすかに春の音がする
地球儀が軋む不穏な風ばかり
初恋の欠けらが里でひからびる
ピンクのリボン今日は記念の花結び
お茶目な風水面揺らしてじゃれている
すんなりと騙され電照菊燃える
白紙委任風が本音をあぶり出す
ほくほくの芋ほくほくの顔で食べ
どう咲けばいいのわたくしまだ蕾
灰になるまで女を燃やす罪ですか

寝屋川市

岡本薫

父の日にくれた子供の感謝状
昭和史の鉄道唱歌が耳にある
駄菓子屋の昭和の空気買いにいく
お茶漬けにおこうこあれば平和です
悩みごといっぱいあってよく食べる
流れ星きっとあの子と遇えそうだ
お袋のにおいも添えて芋届く
乗り替えはできぬ行くしかない余生
アンテナを一つ減らしてみる余生
そこそこの距離を保って仲がいい
逃げぬようケータイ持たせ放し飼い
記憶力にもどうやら疲労きた気配
年金にガードされてる定年後
介護の灯さけて通れぬ歳になり
留守じゃないすぐに立てないだけのこと

大阪府

小栢　こずえ

泣いてても笑っていても二十四時
齢忘れ跳べると思った水溜り
朝刊がチラシを背負い今日も来る
自然から学び種まく用意する
柔順に受けてきれいな絵を描く
種袋ふれば春恋う音がする
一日のエキス朝日がさして来る
平凡と言う暖かい日を浴びる
植えるとは大地に命任すこと
神様は今日も私を見捨てる
見る角度変えて良いとこ見つけだし
届かぬと分っていても背伸びする
次の世も人間だろかと気にかかる
苦は忘れ次の喜び探してる
テンポ良く歩けば春の音がする

田辺市

小川イセ

母の椅子丁寧にふき春を待つ
温故知新とても大事な父のメモ
たっぷりの愛で育ったいい笑顔
絶やしてはならぬ先祖が付けた道
命育む土に感謝の飯を炊く
十指みな土の温もり知っている
幸せは三食旨く食べること
年ごとに物干し台が高くなる
好奇心燃やして老いを遠ざける
包丁も鍬も握れる手に感謝
幸せを壊さぬように腹八分
白黒を暈しまあるく三世代
行きたいとこへ行ける足です撫でてやる
初仕事やはり地下足袋はきました
雪の中名もない草も春仕度

尾道市

小川道子

美しい言葉の棘の後遺症
パチパチと心焦して恋花火
あなたには勝てないけれど負けてない
気詰りな席を外れて天仰ぐ
泣きぼくろ寂しい風の吹き溜り
お湯注ぐ急須平和な音を立て
切り札の中にとうとう出た本音
踏みしめる大地へ春が盛りあがる
ひとつずつ唱えるようにこなす家事
形崩れしてもわたしのままである
転寝で見ていた夢の不整脈
生き抜いた昭和を少し片付ける
失敗も笑い話にする度胸
鮮明な記憶が白黒つけたがる
手のひらに少し信じた過去がある

神戸市

奥澤洋次郎

授かった命ででかい顔をする
何の為の日々であったか離縁状
不遜さが送られている送電線
貧しくもあったぬくもり母は逝き
笑え笑え笑ってくれよさみし顔
いつの日もあってほしいなまたあした
ふる里に止ったままの遠い日々
行楽の笑顔に国の隔てない
栄誉賞野茂月見草どないする
体罰に甘え偉ぶる指導力
国の罪を問うことはせぬ留置場
同世代この人も負う時の傷
精いっぱい背負ってきたよ性転換
不満糧に前に向っていく若さ
日に光る若葉息吹の中にいる

池田市　奥園敏昭

たまに会う美人ほほ笑み今日は吉
孔孟の国と思えぬお付き合い
記憶力落ちて戻った夫婦仲
ひと昔前の写真（じぶん）にアホと言い
寂しい時見たモナリザは寂し気に
親孝行するのも彼女出来るまで
未来形たまにゃ語ろうクラス会
入門編何回買った英会話
バーゲンで父と息子のペアは見ず
十五年前の天使が反抗し
神童でなくてマセてただけだった
成績を聞けば阪神ぐらいと子
フトコロが寒くてクールビズ要らず
バカな句を考えてたら大晦日
彼女でき落ち着きなくす俺とカネ

鳥取県

奥田豊枝

夢うつつ長閑な春日午睡時
節くれた指にリングも苦笑い
ど忘れのしどろもどろの立話
立話桜ひらひら丸い背に
古浴衣おむつに替えて育児した
蛇の年老いも脱皮で頑張ろう
忘れまい平和の楯の人柱
不覚にも失言ついに仲間割れ
芽吹き時わが身は少しずつ縮む
氷砂糖ほおばり喉の機嫌とる
顔のない旨い電話にのる愚か
田畑荒れ先祖へ合わす顔が無い
時鳥鳴けば亡母の忌巡り来る
日の丸に武運長久もうご免
ほっとかれ気ままに伸びた鉢の梅

神戸市

長川哲夫

ポトマック老樹しっかり春を咲く
降る雪の白さがこの世眠らせぬ
一滴の血を万緑に溶かせるか
流れ藻にいのち繋げる千の稚魚
幾度も死にそこなってパジャマ買う
もう二度と来ませんナースステーション
よちよちの瓦礫を覗く「ママはどこ」
友が逝くまだいかなごが煮えぬのに
原色の君は琥珀のままで棲む
のぼり坂敵もおんなじ息づかい
躁鬱もやがてジョッキの泡の中
夫婦岩ほどよい距離で頼り合う
道をしへ妻軽やかに坂の街
余り日の喚声は今コロシアム
騒がずに象の時間を信じたい

寝屋川市　長西昭好

名阪の仇き星野は仙台で
宝くじななつ星への夢のせて
ジャジャ馬も振り袖姿成人式
隣国は月に線引く貪欲さ
話し合い延命医療やめにする
詰め将棋解けて嬉しいスポーツ紙
粗酒粗肴年金暮し耐えてます
開運を念じ頬張る恵方巻き
終演ですひと味ちがう星が往く
惜しまれず政界終えた人も有る
思い出の話題つきない通夜の席
才能を発揮せぬ間に時が過ぎ
次が有る沙羅のリベンジ待ってます
世界の目釘付けにして真央の舞
子育てを終えて仔犬と戯れる

米子市

小野鶴子

意外にもオヤオヤ友の裏の顔
秘めごとをモナリザの笑み見抜くごと
零点でも明日があるさと子の陽気
桐植えて箪笥見ぬまま父は逝く
やりくりもママは陽気でへこたれず
雑草も名前を持って生きている
是非もなしポトリと椿世の習い
薔薇の棘枯れても人の指を刺す
軽くて小さな包み似合う年齢
バスツアー目星は君の服の色
手の中で昼の蛍死んだふり
心もち少し足りない腹の虫
山桜一輪咲いて伐り難し
我が春を雑草共が笑っている
蛍こい苦い話も聞いてくれ

岡山市

小野　真備雄

富士山ほど目立たなくてもよいのです
B面で気楽に生きております
もめる程遺産は無いが句碑一基
追いついて足の早さを褒められる
元気そう言われ元気な顔をする
止り木の右と左で出来た仲
川柳と酒酒と川柳君と僕
酒飲める歳には父は居なかった
戦争が続く地球の不眠症
新しい地球を売っていませんか
真心で生きる作戦などはない
年金でメタボになって済みません
なんだって嬉しい時に出る涙
お粗末にする一つしかない命
老いて今夢中になれる趣味に生き

奈良市　尾畑なを江

ほろ酔いで別の自分にめぐり会い
淡々と話す中身の濃い話
人生やシナリオ通り行かぬもの
ルンルンと闊歩の頃が華と知る
輝いて至福の孫は腕の中
来し方を辿ればそこに父と母
持ち上げも落すも早い日本人
天と地の挟間は常に戦あり
夢の中会いたい人は現われず
あったならいいな体の部分品
人生は日々選択の連続で
近況を問い難題を持ち込まれ
人並みに波瀾万丈生きている
政治家の話で御飯まずくなり
報酬は自分で決める主婦である

福岡市

小山マキヨ

廃校の昔の僕に逢った夢
もう一度我が師の恩を歌いたい
リハビリの一歩あの世を遠くする
婆ちゃんと話弾む蕗の薹
昭和史に大根飯のあるページ
御句碑の心にしみる八幡宮
カメルーンの旗を覚えた村がある
かぐやからメール地球が浮いている
迷惑駐車ドミノ倒しがしたくなる
小さき石弥生の夢を語りだす
黄砂かな霊峰おぼろ春霞
ブローチもピアスも負けている笑顔
駅伝に頑張れススキ穂をふらす
過去帳の中に大きな森がある
明日があるサいちども迷わない眠り

豊中市

貝塚正子

脱皮して蝶々になるか蛾になるか
五ツ星私の口に合わぬ味
行かないで布団が止める寒い朝
木の芽どきチョット怪しくなる私
不都合なことは聞えぬふりをする
さそってよ地獄にだってつきあうよ
別れ際ギューとする彼今二歳
分別が止める私の恋　心
料理本広げて食べるカップ麺
借りた傘返しに来たと逢いにゆく
どろどろになれぬ理性が邪魔をする
全部買うズバリ半値にまけといて
口ほどになくて凹んだ検査前
噛み砕くように僧侶は経を読む
ふる里はネオンかがやく繁華街

鳥取県

加賀田　志延

人生の先に見つけた遊歩道
池よりも小滝めざす鯉でいる
入院に虫喰いされる生活史
磨り減った車軸労い歩をゆるめ
踏んばって回し続ける妻の独楽
故郷へ涙スイッチ置いてきた
時どきにタガを抜いてる薬指
子薬が大きくなって毒を吐く
よく通う店へ暮らしが丸はだか
褒められているのは次の誘い水
絵手紙を開墾しては種を蒔く
額の裏夢を形にする資金
抜けようと狙い定める針の穴
ピンヒール足の個性がノーと言う
私まだ輝く時間残してる

東かがわ市　角尾　いさむ

波風を立てず老後を丸く生き
独り住む母が気になる雨の夜
点と線むすんで喜寿の坂を越え
八十路坂心もはずむ五月晴れ
筋書の無い人生に夢つなぐ
少しずつ荷を軽くして坂のぼる
見栄張らず今の幸せかみしめる
高望みせずに人生のんびりと
プライドを捨てると視野も広くなる
あの世まで持って行けない荷を背負う
いつまでも光輝く母の愛
娘や孫へ愛情込めた宅配便
追い風でペダルも軽く喜寿の坂
時どきは耳に詫して丸く棲む
喜寿傘寿こえて余生はポチポチと

宮崎市　**桟　舜吉**

光陰の翳りを探る内視鏡
暗黒物質わが体内の小宇宙
獣性は退化してない尾骶骨
遺伝子の終点竹の花が咲く
儲かれば毒薬も売る核も売る
ウイルスもマッハで世界飛び回る
毎日が厄日のような世界地図
原爆忌ダリの時計も融けている
見えぬ敵線量計が振り切れる
方円の器拒否する汚染水
川蝦（かわにな）が書いてる汚染告訴状
フクシマの廃炉虚しい鳥瞰図
悉皆成仏関係のない放射能
先端は神が仕切っている科学
困ったな核担当の神いない

箕面市

笠田幹治

約束を破って背負う罪と罰
ありえへんおかしな夢や妻土下座
酒断つか命とるかと責める医者
妻旅行夢の庄助三日間
運不運きびしい神の匙加減
ライバルの心をほどく酒二合
意味深な妻の笑顔に見る殺気
釣書の料理が趣味で決めたのに
さよならをメールだけとはひどいやん
惚れたのはあんたおまえで又喧嘩
うっかりと記念日忘れ妻噴火
優しい妻まさか夢かと頬つねる
がたがきた老骨癒す酒二合
ああ無情うすれゆく髪妻の愛
写経終え私の心澄みわたる

三田市

片木雅司

3・11復興祈るハーモニカ
富士山と南海トラフお静かに
温暖化季節外れの汗を拭く
スマホ持ちショートパンツが街を往く
旅しても朝の納豆欠かさない
腹七分運動せよと主治医言う
オリンピック電柱埋めてウエルカム
長寿国日本料理でおもてなし
通勤車新聞雑誌今昔
激動の午年手綱シッカリと
脱デフレアベクロミクスにこりとし
iPS細胞治療神戸から
ソチ五輪飛んで舞ってる世界一
消費税一円硬貨出番来る
観桜会楽しくやろう趣味の会

佐賀県

門井　孝

まだ未熟遠慮します敬老日
今の世は三歩前行く僕の妻
かくれ酒しゃべり過ぎてか妻にバレ
朝チラシ食材さがしの主夫になり
僕の道着いて来るなと子や孫に
年寄りは嫌われます要らぬ世話
敬老日話が合わぬふた廻り
思い出をすてきらずにタンス肥え
ちょっとだけが雑炊までも長話
退院日陽を見る前に準備する
暇まかせ身辺整理一段目
ひな飾り美肌を競う有田焼
古着屋にファッション求める老いの年
届かぬ矢サイフ替えてもだめでした
父母が見てます宇宙近くなり

米子市

加藤正二

一の壁越え又壁に突き当る
生き死には紙一枚が保証する
体温に気温張り合う熱帯夜
夢かけた子ほど遠くに住んでいる
自炊して独りがよいと痩せ我慢
世界一長寿極めて病でいる
年ごとに智恵の在庫が目減りする
独り者呆ける暇などとてもない
明日のことわからないからよく寝れる
八十路きて掘れば病が顔を出す
すたこらと昭和通って八十路きた
赤紙がこないだけでもよい時代
食うこととトイレは人に頼めない
年の功目耳手足がよく騒ぐ
独り者くしゃみとせきは遠慮なく

鳥取県

門村幸子

恐る恐る食べるとあたる鯖の鮨
チャリティーへ気に入りばかり出す勇気
泣ける子はまだしあわせな飢餓の惨
カタログの梅干し見ても唾が出る
当たりくじ今度はわたしかもしれぬ
餅食べてパワー授かるお正月
東京へ東京へ行く旨い桃
勝ち越すといい顔になる相撲とり
土いじり人間らしい顔になる
捨てられぬねむの木の絵のカレンダー
鎮魂の鐘響かせて卯年去る
戦ない国で介護の幸思う
食事介助魚の小骨見逃せず
毎日が母の日母は失語症
老化進むガラス細工のような母

竹原市

金沢節生

六十五代目の蝉が鳴く原爆忌
菊日和一直線の飛行雲
極楽の幻ばかり見る齢
丹精の菊満開は文化の日
百名山十まで登る気力持つ
この干潟なくさないでと鳥が鳴く
にらみっこ猫も負けじとうしろ向く
長生きは税のお陰と気がついた
先ず復興子供に話す税の事
おもてなし気持ちも税も生きている
しまなみを走る姿が映える知事
あの頃は欲しがりませんと言った菓子
白鵬もきっと孫には負けるだろう
生涯学習今日も元気に薬飲む
七十億世界を嘆くか喜ぶか

大阪市

兼田定廣

初恋の胸にピンクの花を抱く
赤い糸掴んだとたん夢がさめ
手綱持つ妻に形状記憶され
女房にブレンドされた枯れ落葉
のっそりと議論重ねてあと戻り
名案を考え抜いて珍案に
網棚へ捨てられ雑誌また読まれ
コーヒ豆ブレンド重ね人の味
芸事へ宣戦布告する覚悟
変人と束ねられてる意地っ張り
喜寿すぎて齢相応に曲がる腰
スケジュール増やす手始め医者通い
孫相手マジシャン気取る八十路坂
面の皮厚うてもええ長寿の系
傘寿来て布袋さんだと自画自賛

西宮市

株元玲子

老夫婦弾む手毬は色ちがい
渋柿も熟れて優しくなりました
あちこちにぶつかり丸くなった顔
コロコロと転がるままに夢を見て
手の平に希望いっぱい握りしめ
今のうちいまのうちにと駈けている
牛歩でもかなりの坂を越えました
エンディングノートはまだ買う気しない
本心に化粧してみる処世術
まる三角四角みないい友だち
一たす一は三正解にしたい
諦めず筆一本に夢をかけ
年寄りと束ねられてはたまらない
いつの日か見事に咲いて散りまする
あの世までのらりくらりと行きまする

三原市

鴨田昭紀

青春を語らん虫食いの辞典
足下は照らさぬにんげんの灯り
指揮棒に逆らう音はわたしです
五線譜をはみ出す青春の音符
何にでも喰いつき雑魚と見抜かれる
狡猾のコツをにんげんから学ぶ
しがらみに塞き止められている小川
饅頭を配って同じ色にする
自分史にまだ落款が入れられぬ
にんげんがいるから窓に施錠する
晩学に射し込む穏やかな西日
黒枠で囲むと男らしくなる
巻き戻す過去にためらい傷がある
葉桜になる人生の並木道
仏壇をひらいて今日を締め括る

鳥取市

川上澄子

老いの背に和紙が友達力瘤
フィルターでこした水には毒がない
砂を噛む思い子の意地親の意地
太い指農に励んだ深い皺
指圧の手心体もときほぐす
擂鉢の底まぎれ込む義理人情
浜風と一緒に届く一夜干
あっさりと掃き捨てられぬ義理人情
老い背に筋金いれて田植する
蟹の膳地酒の栓を抜きたがる
駱駝の背メタボが乗ると身構える
発芽せぬやましい種が底にある
血のかようつなぐ言葉で発芽する
学歴も人脈もない自由席
地産地消わたしの町で笑みも売る

八尾市

川口武

ザクザクザク　ファシストどもの靴の音
海外にいくさに出るぞ覚悟せよ
消費税上がり困る人笑う奴
海外へ移して工場はがらんどう
そら今だどかっと買ってぱっと売れ
札束を枯葉のようにアベノミクス
急降下ジェットコースター乱高下
賃上げはどこ吹く風か派遣人
モンゴルで出逢った孫とその旦那
小兵関くるりと巨人を跳ね飛ばす
皮むけば中は真赤なお芋です
セーターを着たり脱いだり春なかば
ぼんぼりがついたよ早う目を覚ませ
草の根に反戦とりで築きます
波の音宇宙の果てのビッグバン

大阪市　川久保　睦子

空白の白いページで昼寝する
白い刻煩悩一つ陽に当てる
ひとり居の目覚し時計止めてある
独占欲羽根切っておく青い鳥
抜き捨てた大根意地で花をつけ
疑心暗鬼ひたすら私爪を切る
羽化はじめました覗かないで下さい
やさしさを試す大きな波がくる
イベントを家の茶漬けで締めくくる
欠け皿は欠け皿なりの役がある
一合の御飯の湯気に見るいのち
石一つ邪魔で本音が語れない
末席で正論吐いてひとり浮く
嘘のない一直線の白い道
天命を知って余生はわたし彩

寝屋川市

川崎青児

強がっていても女房の尻の下
蓄を傾け友の長話
たっぷりと暇はあるけど金がない
たっぷりと皮肉利かせて褒め上げる
難題は先送りしてうやむやに
油断した私を責める冷たい目
揉め事の火種は何時も貴方です
泣きながら遺産気になる通夜の席
耳寄りな話と噂まき散らす
公約は当選迄の空手形
うっかりをゆるさぬ世間の厳しい目
手を見つめ過ぎ来し方を振り返る
新妻は頬染め朝の御挨拶
アドバイス耳に痛いが身に沁みる
八十路超未来の夢もしぼんでる

枚方市

河田洋子

人並みに生活出来て無事がいい
お誘いがあればこれから何処へでも
出かけても心の隅に夫の顔
雑踏の流れに乗って急ぐ足
雑魚仲間気楽一番鍋料理
欲無いと言って損得選んでる
一日を終えて感謝の床に着く
夫には手製の品を贈ります
五月雨に今日はゆっくり筆を持つ
勇気出し一歩踏み出す晴れ舞台
遠い国地図の上ではひとまたぎ
白旗をあげてつき合う古希仲間
若い日の苦労ゆっくり芽が開く
どん底に生きた時代が宝物
疑いを知らぬ夫の深い愛

倉吉市

河本照子

呼び鈴も性格を出す曖昧さ
病状を電話の話し方で知る
親切も役に立たない物忘れ
本人が入れて弁当ご満足
ただいまと一言だけの息子待つ
気楽とはいえアラフォーも年をとる
にこにことすればにっこりする乳児
荷運びを思って結ぶ十文字
歳月を元アイドルの老いに見る
都構想目差すトップも楽じゃない
口数を加減しながら世を渡る
日本一暑くて県の名が売れる
終点が見えぬ人生欲を出す
受験待つ私も同じ高齢者
墓参り心に句読点を打つ

東京都

川本真理子

過去を向く母呼びもどすここだよと
孫宛ての父の土鈴は二十一
昨晩の豆掃き寄せる小鬼達
春一番犬はためいて青い空
幸福を絵に描いたよう桜散る
ひよどりの胃におさまってハナミズキ
美味しいもの少しとあれもこれも食べ
冷戦中夫の服から飴ひとつ
ケーキやめ俺はかりん糖にいく
口角をみごとに上げて月笑う
昼下がりなぜか無人のまちを行く
勝てないと知りつ戦う時もある
時忘れろう石で描く子の気迫
立ち止まり飛行機雲を見る少女
遠き日に手を振り笑う自分あり

小平市

木咲胡桃

国連が脱皮できない戦傷
数多の友失くし手に入れてる出世
無い資質無理にも作る親のエゴ
有象無象一途に目指す一発屋
失恋へあまりに重い削除キー
ノーベルの足元脅かす偽の字
もう戦はじまっている保育園
全没にポーカーフェイス奪われる
ピーナツや熊手の次に出る言葉
対ロシア歯切れが悪すぎるパンダ
リニアから被災地奪いたいお金
連休でまた冬眠の年金者
定年が葬り去った今に見ろ
何もかも担ぎ出してる甲子園
サラ川から拾い上げたい光る石

奈良県

木嶋盛隆

足でなく手を引っ張ってくれないか
優しくてみんなのためにビリ走る
ころころと変わる心を持て余す
親友に荘子とセネカ釈迦もいる
日々新た昨日のことは削除する
錯覚と戯れている白昼夢
爆弾の捨て場を探すコップ酒
仏像の向こうに見える慈悲と知恵
五感みな楽しみ求め伸びて行く
夕ぐれに咲いた女が灯を点す
異次元の世界へ伸びた爪を切る
人間の器に盛った無限大
愛に生き人には慈悲と思いやり
大人でも歌ってほしい子守唄
無為自然梵我一如之死生観

塩竈市

木田比呂朗

ハイレベルいつも年初の目標値
鬼の面つけてはみたが心地好い
嫁がせて妻を手伝う雛飾り
白線きりりと四月の交差点
職退いて五月の靴が弾まない
予報士も折畳み持ち梅雨に入る
節電とビールを笑う尿酸値
ジョッキから盃にする秋九月
新米と友情交わす生たまご
十月を押し出すように赤い羽根
加齢臭脱臭剤で抜いてみる
十二月虚しさだけをまた残す
オーイお茶今日は無言で熱く出る
パソコンもケータイもありまだ孤独
終章を飾るステージ思案中

寝屋川市　北川　やすの

好きですね目立つ花よりかすみ草
押す力強い母ちゃん家平和
介護終えさびしく残る杖一本
アドバルーンすぼまぬうちにひと仕事
あとひとつ辛抱出来ずこのおなか
寒菊を咲かす父の手あたたかい
講演会迫る眠気に鼻つまむ
目立つ服買っては見たが御蔵入り
気分よしそれでは行こう病院へ
こわい顔孫の話題で目じり下げ
古稀の身に誇りに思う母がいる
異常なし心弾ませ酒を飲む
読めないね明日の我身も天災も
つらい坂なんとかこえて共白髪
いつの世も元気もたらす子の笑顔

篠山市

北澤稠民

年寄りの愚痴を聞きつつ町の医者
お詣りはさておき土産先に買う
待つことがなにもないのにポストみる
いい土だ野菜の声も嬉しそう
気晴らしに居酒屋行って二日酔い
人情も歴史も厚い城下町
すぐ酔って父の遺影に叱られる
ボランティアささやかなことひとつでき
田の匂いやっぱりここが落ち着いて
逆境を何度かこえて今がある
雨の日の床屋農家で持っている
私にも忘れられない恋がある
リモコンに返事をしてぼやいてる
被災地に涙だけして何もせず
ほろ酔いが好き大らかになれるから

和歌山市

北原昭枝

まごころが一番上に置いてある
花野への途中ふたりの日向ぼこ
ふる里のボタ山にある青春譜
ちっぽけな自分を試すかたつむり
斜め読みすれば本音が見えかくれ
少しある勇気で飛んだ水溜り
コツコツと小石を積んで祈る幸
根気よく磨けば光る朝がくる
触れあってみればスープの旨い味
追憶の中の手花火淡いまま
澄んだ瞳の本音に出会う萩の道
迷い道やっと抜け出す月灯り
浮雲がちぢはばになる里の風
最後には楽しかったと終りたい
足跡は明日へつなぐ句読点

大阪市

吉川哲矢

音立てて咲くいちめんの曼珠沙華
朱を入れた罪な十指を洗い切る
砂時計白い記憶の中にある
憂いあり冬の窓辺のオムライス
スプーンにすくえば初恋のプリン
茜雲恩を忘れたわけでない
あいまいな語尾に妬心がはじけ出す
掘りごたつ幼い恋になりました
くたくたの重さよ過労死のズボン
じわじわと言い寄って来るロゼワイン
風船がふくらむようにうぶな恋
いもうとのように妻寝る雪明かり
騙し絵の坂に自慢が捨ててある
看病の氷に温もりをもらう
生かされて来た手の中の小さい運

大阪市

木村青生

コップ酒盛り上がらせて御満悦
ふくよかな笑顔アルバムに置き忘れ
クン付けがさん付けになったクラス会
山彦が見事に英語話してる
茶柱を立ててケンカの倦怠期
写真誌にフォーカスされてカムバック
神主の祝詞は初婚のときのまま
天気図にない隙間風に震えてる
火の出ない調理器具に焦げつかす
物売りは昭和の声を響かせる
愛妻の首輪代わりのペアルック
社交術一番得意で苦情処理
掛け声もなくても延々蟻の列
神様とハーモニーの積りで便器拭く
アルバムでセピア色でも元気です

神戸市

木村忠義

数よりも一輪にある美しさ
憂鬱という字は見ると憂鬱に
缶ビール時々中身見たくなる
日本地図貼ると自分の土地に見え
舌噛まぬよう指さして買うケーキ
まず度胸要るなと思う英会話
惜しみなくありがとう言うことにする
忘れないように楷書で文字を書く
言うよりもまだ言われたいありがとう
老いたとて心に花の種をまく
ミリはぼくセンチはひとのためにある
ややこしいことはすずしくなってから
きくきくとおもえばきいてくるくすり
採算を考え止めたバイキング
楽しそうきっと夫婦じゃないだろう

神戸市

木村勤

謝ると心がほっと軽くなり
生きざまが滲み出ている顔の皺
言えなかった打ち明けた今日本晴れ
円満の秘訣は妻に逆らわず
海峡は思い出浸る詩の世界
ごめんねが素直に言える人が好き
散歩道野の草春の噂する
諄々とばやきが続く老いの会
妻が病み好きな酒断つ夫婦愛
テンポ良くいけば花です人生は
悩み事月に託して今日は寝る
俄か雨傘がとりもつ恋の花
病室に心を込めた嫁の花
やる気出し人には負けぬ粘り腰
夢叶い昨日と違う日が昇る

三田市

木村マユミ

おとめ立つほのかに香る梅の花
五月晴れつつじの花になった母
白内障季節はいつも春がすみ
間一髪神の手が出たありがたさ
ハズレたなぁ転勤ならず役職に
わが亭主定年すぎて花ひらく
パワハラを恐れ上司が萎縮ぎみ
かきもちも時代が代り贈答品
気がつけばわたしあなたのくすり箱
人生も秘すれば花の時空間
色も恋も喜寿ともなれば迷います
欲すてて0に戻れる年となる
断捨離で分けた袋をのぞきこむ
五七五で心のすて場を川柳に
集まればオーケストラになる仲間

奈良市

木村宥子

雹が打つ頬は津波も打った頬
白砂よ海底の子をたのみます
町はずれここにも街があったはず
二万もの同時定命釈迦のミス
集いませ散り逝きし人この塒に
三陸の海で何を写すべき
エクセルの列に書き込むミリシーベルト
ともだち作戦裏の計算ある仲間
蓋を乗せ石も乗せていた神話
黒黒と再稼働決定の文字
ゆるキャラの笑顔復興税でした
セシウムの青がひそんだ大地の絵
大地では包みきれない汚染水
億分の三年目フクシマ歴が明け
三歳(みとせ)目の日裏に仮設の深い雪

東かがわ市

清川玲子

にっぽんの蕾がソチで開花する
寝正月と決めて誤算の靴の数
復興を祈る姿で松朽ちる
渡せなかったチョコは自分の口に入れ
狭き門切り抜け早春の陽にはずむ
人形の老後は誰が看てくれる
気まぐれの剪定に泣く新芽たち
観光のスケジュール替えつゆの入り
ビタミン剤一つ多目にのむ猛暑
荒れ庭をおおい隠して萩の花
思い出の傘もぎとって去る台風
節電と戦う冬はすぐそこに
忘れもの少し残して今日が暮れ
老いの道照らしてくれる趣味一つ
終焉を迎える時に出す答

河内長野市

楠本和代

蝸牛見ててはずれる傘の列
長電話おかげで私遅刻です
雨模様ウォーク行こか止めようか
母手抜きみんな喜ぶカレーの日
筆圧が強くなったね幼い手
いい匂い梅雨の晴れ間のお洗濯
登り坂行く手は遠く膝なでる
駆けてゆく同じ体型同じ服
紅葉に引かれて散歩回り道
落日のフェリー乗り場に冬の風
萌え落葉山道染めて散り積る
楽しいでジジババ集い師走旅
師走空記念ポーズに歴史街
冬旅にビールおつまみ不足無し
故郷の雪の深さが辛過ぎる

羽曳野市

久世髙鷲

人間を渡り歩いて無我の境
人間を渡り絆を太くする
先代に学んだ低い低い腰
天命を全うしたか鶴の首
雪おんなふわり楽しくなる屋台
真っ直ぐに世間を渡る律儀者
消しゴムは決して過去を許さない
日々息災起きて候寝て候
まどろみの底へふんわり落ちて行く
未来図の先に介護の見え隠れ
人の道天寿全う神の道
無学でも母は律儀に生き抜いた
一月四日母の微笑む三回忌
人類を震撼させた負の遺産
3・11　3年前の悍しさ

竹原市

國實カ

隠し芸ひとつ残して職を去る
学歴はとっくに消えたシャボン玉
平均寿命きたら頭突きで追い返す
踊ってる妻はわたしを忘れてる
封筒を舐めるか切手を舐めるか
父が居て賑やか居なくて和やか
義理の通夜ただペコペコとして帰る
植樹祭その日のための作業服
軽トラで街の医者にも祭りにも
湯けむりの中で喜寿じゃよ傘寿じゃよ
よく続いたねどちらも勇気なかったの
日向ぼこしてりゃいいのに杖で出る
音は上げぬまだ九回の裏がある
丸くなれ月も私もまるくなれ
自分への褒美に買った本二冊

高槻市

久保田　半蔵門

薔薇園のばらいっせいに散り始め
唇を尖らす一輪の赤き薔薇
はにかんだ薔薇はぽつりと語りだす
赤き薔薇南無阿弥陀仏の中に消え
霊前の赤き薔薇よありがとう
呻いている興奮のサックス
もの静かベース奏者の指白く
思いきり叩きつけてるドラムジャズ
腰浮かせ鍵盤踊るピアノジャズ
眠そうに気だるく唄う女性歌手
天皇を書かねば日本史にならぬ
準教授どまり反原発の立場
一つの静物として見る頭蓋骨
海に来てバカヤローと叫んでる
本当の重量なんて僕にない

神戸市

久保道子

チョー寒い今日の我が家は草津の湯
裸木に新芽膨らむ春を待ち
春一番路地裏からのくぎ煮の香
忘れてたうっかりなのか忘れたか
面倒なメイクしないでサングラス
もう誰も居ない田舎へ一人旅
ピアノ音の流れ聞きつつ散歩道
ポンと抜くラムネも弾む盆踊り
悩み事忘れ長生きしています
祭りの音まだ星空にきらめいて
自在鍵いろりの湯気にとろとろと
寒椿凍てつく空気赤く染め
汽車ポッポ今は憧れ七ツ星
片手袋迷い子にされて雪の道
お帰りとただ言いたくて待つあした

草津市

久保和友

ゆっくりと揺れる志村喬の木馬なら
原爆忌一本の鉛筆あればよい
勝部火祭ピンクの褌売る女
あの人の八月手話が美しい
飼猫も魑魅魍魎の顔をして
風の町寺山修司が数珠を持つ
きれいな腕きれいなお顔ほとけさま
初日の出仰ぐと生きたくなってくる
よかったよ野菊のごとき君が妻
一人部屋また読み返すグッドバイ
大根干す若狭へつづくほとけみち
落日だすこし黙っていようかな
この人の運命線は笑ってる
夜が明けたらわたし眠ります
祖母は瞽女生家に残る寒鯉汁

和歌山市

倉橋悦子

なんでだろ懲りず人間やっている
水不足若さ蒸発する気配
ルノアールわたし虜にしてしばし
三月の発表に見る浮き沈み
遮断機が下りて足踏み止まらない
寿命だけ買えなかったと富豪逝く
突き詰めてみてもこの世へ解き放す
消費税押し寄せて来た震度七
生きるのに飽きてきたのか生欠伸
お願いはひとつわたしを畳むとき
失敗を置き去りにして拗ねている
思い切り鳥になりたい時もある
テープ切るゴール地獄か天国か
どうしたらあんなに手の平が返る
早送り出来たらいいなこの空気

松山市

栗田忠士

すごいなあ龍を初めて描いた人
真っ直ぐに生きて私の椅子がない
男だな黙って眼鏡拭いている
謎めいた咳を男は繰り返す
その先をぐっと呑み込む喉仏
腕組みを解いた決断したらしい
ほらほらあれよ記憶袋が開かない
ひらめかぬ時は歩幅を変えてみる
爆笑の中でピエロの独り言
そっとしておいてあげようつらいんだ
千年を生きた大樹の根の誇り
冬の竹叩けば冬の音がする
幸せの夕日はゆっくりと沈む
明日開く夢へ蕾の深呼吸
自画像は未完のままに掛けてある

出雲市

黒目英男

青空に未来の夢を描いている
柚の木に何を託すか蝶が舞う
ライバルと同じ土俵に並んでる
いばら道一歩一歩が明日変える
守りたい戦争のない世の中を
ボランティア琴線に触れ奉仕する
愛ひとつ平和な世界築きたい
マイペース自分の道をまっしぐら
廻り道大きな一歩歩きだす
病癒え時の経つのもゆっくりと
やせ蛙世界を股にとんでいる
坂まかせ転がる石はどこまでも
ひとり旅大きな花を咲かせたい
運命を背負って生きる我が縁
バロメーター笑顔の僕が道しるべ

香南市

桑名孝雄

盃をちょっと細目にして八十路
晩酌に飽きて三味の音聞きにゆく
どれを着て行こうか馬子は馬子なりに
孔孟もいいが李白の酒が好き
日の丸が目印うちへ飲みに来い
この指にたかれ幽明隔つともいいよ
ＯＢ会企業戦士の顔で飲む
昭和史がそっくり僕の皺にある
羽搏きをとめてゆっくり輪を描こう
紅葉の中の枯葉を自覚する
長生きの血筋釣り書には書かぬ
至近弾どかんどかんと来る訃報
楢山へ背負子も酒もスタンバイ
終章を飾ろうなんて夢の夢
黙然と八十路の坂を越え行かん

豊中市

源田啓生

日々好日酷暑厳冬耐えながら
許すのも優しさと知る歎異抄
重い荷も大師と分かつ遍路旅
般若心経中の宇宙は謎ばかり
苦難には我は海の子口ずさむ
若い叫び今も聞こえる無言館
数式にあいまいは無いと言う若さ
片減りの靴がマグマを溜めている
ときどきは自分の骸を抜ける夜
叩いても固まる杭と折れる杭
拒否権を持つ顔役のいる世界
老いの気を養うために愚痴を吐く
皿回すそのバランスに乗るいのち
人間は未完のままに終るのか
逝くときの方程式が未だ解けず

尼崎市

小池幸子

摑み取り欲が邪魔して手が抜けぬ
飼い主を探す子猫の声に負け
戦国のロマンを秘めて天守閣
バツイチも平気で言える気楽な世
湿布貼る相手が欲しい届かぬ背
百歳を視野に計画練り直す
一人しか子を産んでない不満足
下校どき児童にもらうコンニチワ
ピンコロリ楽に逝きたい終の欲
かすむ目で余生を覗く老いの日日
やせがまん止めて転ばぬ先の杖
推敲に推敲重ね迷路入り
だんだんと声でかくなる老いの耳
泣きわめく子の虐待が気にかかる
花火師の技の競演空翔ける

寝屋川市

合田蓬生

夏ばても三杯目出す茗荷めし
紅をさし合せ鏡をした昔
萎え紬女三代座布団へ
小さな嘘かさねて持った五〇年
金婚式ローソク消して酸欠に
病んで知る普通の元気ありがたさ
秋刀魚焼きさしつさされつジジとババ
素のままでそろそろ生きていいのかも
靴へだて足を掻くよな出ぬ名前
今達者明日は知らぬがそれはそれ
うやむやに丸く治める老いの知恵
二人なの身軽なはずが支え役
ほっこりとたたむタオルの日の匂い
程のよい距離で保てる人の仲
滋味妙味年相応に出れば吉

大阪市

甲田靖子

ロールキャベツに包んでる妻の愛
影踏みの前後左右にきみがいる
ひとつふたつあなたの記憶さえ洩れる
凧の糸切れて一人の夜をあかす
箱庭の人形だから入れかえる
雪女の涙でとけるチョコは白
衣食足り青虫ひとつ持て余す
冬に入りゆっくり動く猫の髭
満月をかつぎ狼絶滅す
昼寝から覚めた兎に耳がない
未来切りとる原発の不確かさ
地球儀の一点になる被災の地
フクシマを蛙の尻尾にはさせぬ
地底から反原発のデモの声
耳垢に軍靴の音しのびよる

篠山市

上月格男

ガラス戸に映る猫背に背伸びする
親元を離れて親の恩を知り
ひらめいた名案寝間に置き忘れ
ひそひそと内緒話が出来ぬ歳
オムツ替え孫にパソコン教えられ
ジーパンの穴青春を吹き抜ける
大相撲モンゴル国技と改める
溜まってた愚痴不満の長電話
聞き上手そろそろ本音をあぶり出し
低気圧と並んで雨の旅をする
ヘソクリを監視カメラが知っている
青臭い意見に妥協傘寿坂
傘寿坂杖となってる好奇心
耳遠い人ほど大きい声を出す
街路樹にマスクがほしい排気ガス

生駒市　小金澤　貫一

宿敵を見事蹴散らし美酒を酌む
欠員があると初めて掛かる声
味方だと信じた妻が振る反旗
温度差があって結論先送り
人込みで冷や汗をかく瓜二つ
錯覚が大発見の生みの親
感激も以下同文で五割引き
蹲いて男の角が取れてゆく
役無いがみんなが頼る生き字引き
この町がどこよりも好き拾うゴミ
春の陽に干した布団で紡ぐ夢
煙幕をすぐに見破る事件記者
まず褒めて垣根をはずす初対面
感謝込め両隣りにもお裾分け
赤恥をかいて男は脱皮する

青森県

古川博子

しあわせを掴むこの手が小さくて
人間も絶滅危惧種かも知れぬ
あとからね 子等の涙が聞こえない
泣く笑う怒る時々繭になる
時々は日傘ぐるっと脱皮する
納豆をかきまぜ糸はまだ続く
畳まれた洗濯物と離縁状
リセットのボタンを押した地球核
出ることを忘れてラムネ玉になる
いつだって母は無限の石を抱く
どの朝も夕暮になり朝は来る
指パッチン人生なんてコメディーだ
手鏡の白髪の方が生き残る
石ひとつ積んで背を押す風と遇う
も一人のにじんだ僕は青かった

神戸市　**輿水弘**

悲しみは時が包んで笑みに変え
しあわせを掴んだつもり魔女の髪
車椅子妻のうなじを撫ぜる風
鼻ひとつ争い終えて草を食む
パンくずを飲み込む鯉はコーラスだ
怒鳴る癖いつしか萎えて仏顔
擦り減ったハンコの溝に己が貌
好きなこと一心不乱が美しい
雑魚だって小骨がチクリ物申す
でまかせを真面目に受けた亡母に詫び
水底の枯葉さらさら洗う日々
杖の音しっかり命伝えてる
皺に添い涙が横に大笑い
褒められてあっさり抜いた胸の棘
腹の虫怒りを餌に龍になる

鳥取市

小谷賢

ほほ伝う一筋情にほだされる
貴女の心にのぞき見穴をくれまいか
老いてなおこの世に善を積みますか
鏡の中目出度い顔を笑っちゃう
ほほ笑んでなごみ波長を合わせたい
薄紙に透ける人生書き止める
しがらみの命洗濯青い空
亡父や亡母えにしに想い花も咲く
煩悩を持って来るなと亡母が言う
隠し事白内障が見てしまう
丁寧な挨拶はてな誰だっけ
八十路にも涙をもらう五輪です
物識り顔に愛想をしないつむじ風
等高線素直になれぬ景気です
消費増税つましく生きて苦にしない

奈良県

小林和之

誉められてベルトの穴を一つ締め
七十歳影さえ角が取れたのに
不幸には鈍感だから生き易い
柔かな水が慢心たしなめる
喋ったらイメージダウンする達磨
走り回る訳は蟻には分らない
家中を走らす孫の咳一つ
本物の顔して不幸やって来る
もう少し飲ませてくれとほざく猪口
テレビから建前だけが飛んで来る
酒好きはほどほどという字を知らぬ
静寂の闇で寝付けぬ休肝日
今日の酒丸くなるのか尖るのか
気ぜわしい男ビタミンC足りぬ
満ち足りた心の奥にある火種

甲府市

小林信二郎

夕陽落つ今日は何回笑ったか
戦いが済んで明日はゴミ出し日
原発も僕も廃炉になる予定
人間の穴を数えて眠れない
食欲も性欲もある一人鍋
ブータンに行くと昔の僕がいる
紳士だがカレーうどんの染みがある
一石二鳥火葬場に風呂がある
カイゴって書くととっても楽しそう
胎動のお腹に昔ヘソピアス
ゲリラ雨父も紙オムツが濡れる
平和だと困る企業を知ってる
少年法馬鹿な少年まで守る
サクランボ私は好かん芋が好き
モデルの様に歩きたいけどおばあさん

美作市

小林妻子

踊らねば昨日の鬱が身に残る
認知症熱は三十六度五分
決断は曲げぬ磁石は北を指す
土になる覚悟慌てる事はない
人間の都合で味気ない祭り
長男も仕上鉋の列に入る
贅沢が居座っていて火の車
米櫃に米がなかった事も有る
赤紙は老父母残し来た未練
封筒に遺髪遺して特攻機
深海に艦両共の戦友(とも)が居る
靖国の戦友も卒寿の坂を越す
甘言で踊る主張のない案山子
朝霧の中へ消えてく山の父
九条は死守するいくさ経験者

豊中市

小牧信男

さすがプロ代役なのにトチらない
ＡＫＢ48笑顔の裏に火花散る

歴史には反面教師多く居る
お祝は図書券ばかり本嫌い

栗拾いバスが着いたぞ栗を撒く
一人暮し百貨店へと身を移す

三歳児ジッと見つめる猿まわし
精密検査何事も無く友と飲む

昼日中雨戸が示す留守の家
お正月とろりとさせる過暖房

電子辞書ペンを握って手紙書く
占いは凶だったのに桜咲く

時そばは計画通りいかぬ例
破るため世界記録の金の壁

完成のテープカットと謝罪似て

北九州市

小松紀子

おいしいよ夫は野いちご摘んでくれ

家族旅行末期の夫とお花見を

Vサイン遺影の亡夫がカッコ良い

有り難や寒さ気遣う息子いる

死して生きるそうありたいと思ってる

悔いだけは残さぬように今を生き

足し算が苦手通帖やせ細り

子供の芽つんだ私の罪ひとつ

老い猫にそっと毛布をかけてやる

葛藤と折り合いつけて年をとり

ウーンうまい思わず唸る旬野菜

今が旬生きる喜びボランティア

一つ覚え一つ忘れて老いの坂

幸せだ友と笑って日が暮れた

日々好日笑って暮らそ生きる道

松山市

近藤修二

弁解をするたび塩がきき過ぎる
美の極致根っこに潜む愛がある
人間の幹を苦労が太くする
極限に挑めば鬼も福となる
平行線いつまで続く意地っ張り
紫陽花の気遣い人の風を読む
山頭火の頭にはない予定表
虚と実の挟間で揺れる深呼吸
ジョークだろう犬と猿との平和論
信念がぶれると人は軽くなる
虚勢張る心の裏にある弱さ
古都のロマン情感満ちる息づかい
微笑みが歓喜の風を呼び起こす
満月に心の広さ諭らされ
人間のドラマが詰まるエアポート

鳥取市

近藤秋星

天の川織姫様は不老です
向日葵は天道さまの恋人だ
立秋の二字も猛暑と読む暑さ
人生は知恵と勇気と忍耐だ
世が世なら俺も一旗挙げたのに
原発事故いつ果てるやらめど立たぬ
人類の悲願だ核の廃絶は
食料危機必ず来るぞ日本にも
老いと死へ向って今日も歩いてる
逝く年来る年富士山頂で握手する
新しい年よ幸せ持って来い
危険物監視をされて食う雑煮
介護士の君は私の神様だ
新天地で君花になれ星になれ
餞に僕の涙を贈ろうか

東温市

佐伯博一

年金がけずられ乍らたどりつく
シンプルに結んで解けぬ夫婦仲
原稿紙まだ書けますとせきたてる
知る権利守秘義務もある此の社会
知る権利知らせてならぬ事もある
前向けば無限の夢が待っている
残り火の運も手伝い消えもせず
残る火を灯して登る卒寿坂
五七五は心に残る文字となる
ポリグラフ若気の罪も顔に出る
終活のマインド託す柳の友
焼木杭つける火種は花の色
平凡をむつかしくするフィクション
満月に高い空から誘われる
金木犀朝一番に合図する

寝屋川市

斎藤泰子

九条に不戦誓った筈の国
使わない機能は値切っていいですか
手を合わす拝む指から洩れる慾
髪撫でるしぐさで女売っている
失言が続くと影が薄くなる
集まった賛成組は雑魚ばかり
期待する方向に子は進まない
自分だけ生き残ってる古写真
生きてます毎日ドアを開けてます
イクメンがホッとする間の子の寝顔
いやですと言う一言にいる覚悟
ついてこい言ったつもりがついていく
肩の荷をおろした途端物忘れ
言の葉を探して学ぶ五七五
しみじみと言葉が慾しい時がある

寝屋川市

酒井勇太朗

妻に似て優しい子らと生きる幸
丸々と虐待などは知らぬ孫
妻がいて空気ほのぼのする至福
想像が妄想となり夢と消え
一言が多くていつも四面楚歌
傘寿頑張る三浦・石原そして僕
見栄捨てて軽と原付乗り回す
遺言状書くぞと誓い五年経ち
実っても頭を垂れぬ成り上がり
あれこれと暇なお人がお節介
女房に秘密無くなりスリル失せ
大器晩成今は曾孫に期待する
来世も一緒と頼みもういいわ
東京五輪七年生きる希望くれ
スローライフ無理せず歩む白寿まで

坂上のり子（シドニー）

山のロマンを語る瞳に惚れました
留守電の赤チカチカとして無言
新しい土地で出会った厚い壁
正しさの価値の違いが生む戦
邪魔されず花と語って今日も暮れ
手を振った後ろ姿が点になる
物思う哲学猫のいる窓辺
外灯をつけて帰らぬ猫を待つ
一本の線で真昼を見てる猫
そっぽ向きながら返事をするしっぽ
木漏れ日があふれる角の白い家
迷いつつまだ仮の世を通過中
日本の知的財産宅急便
人間のエゴをニヒルに見てる神
お金にはいつも大雑把でいたい

阪南市

坂口公子

叱ってた子に叱られて愛されて
賢くてスープにしたい様な人
百歳に両手の届くこの冥加
あの世とや賑々在すか父母や友
曾孫まで神に給うて掌を合わす
じっくりと見るとさほどでない御仁
馬鹿みたい未だ若者で居る心算
七合目山の素貌に震え出す
冬空にピカリコ光る吾子の星
おばあちゃんじゃなくておおばあちゃん
新品の貌で三つ指突く賀客
御馳走が鼻を擽る裏通り
小雀もランランランで青い空
自然は絵画き雲の流れで空の妙
地球から眼光(まなこ)らせベテルギウス星

西宮市　酒田浩司

一言の許すが言えず自己嫌悪
清濁を呑めぬ器で凡に生き
志半ばの無念墓に住む
上から目線思う心にある引け目
あすを夢見現実に蓋酒を酌む
不況風派遣の首に強く吹き
褒め過ぎた天狗の鼻を持て余す
大根役者挫折乗り越え味を出す
初舞台聞こえは良いが馬の足
長い列そんなに並ぶ味かいな
物溢れ勿体ないが身を縮め
町会長に一言居士を祭りあげ
制服の先入観に欺かれ
いっぱいの湯船溢れる旅の贅
散る花の行方に心遊ばせて

防府市

坂本加代

脱原発方向だけは忘れずに
細胞に学んだすべて組み込まれ
直球をまっすぐ受けるお母さん
片想い黄色の小菊ぽっと咲く
過去の色明かるい色でぬりつぶす
てのひらは無言で言葉伝えます
改憲はもっと詳しく知ってから
順番に忘れてゆこう明日がある
完璧な絵にしようとは思わない
母の愛深いこころの底に満ち
嬉しさに口から花が飛んでゆく
ひさかたの熱のシャワーで躍る恋
子どもらに隠すなみだの母を見た
楽しみの尻尾つかまえひとりゆく
信念はまっすぐ前を向いている

鳥取市

坂本とも湖

学校のいじめ先生なぜ隠す
被災地の天使は弱音吐きもせず
笑うなよ老いには老いの愛芽生え
発車ベル銀河鉄道夢を乗せ
ガソリンが高くて泣くに泣けません
介護する老母の笑顔は天使だよ
核兵器イヤだ平和を望むだけ
宿題が親の能力越えだした
窓を拭くわたしの心拭くように
政治家は笑顔のままで嘘をつく
川柳の卒業証書まだ出ない
文句言う北がミサイルまた試す
年金カット老いの身凍りつくようだ
凍結の滝はピカソも顔負けだ
日本の活路をひらくロボットだ

京都市

櫻﨑篤子

募金箱貧者の一灯ではあるが
ガイガーが西も東も駄目という
新盆に帰る我が家が無い仏
お野菜も空気も町も放射能
募金箱孫も息子も入れに寄る
脱線をしませんように後二駅
まだ生きるはず老人の世は住みにくい
雁渡る季節をつれて行くように
昭和まで取りに帰ろう草笛を
被災地にもこの涼風があればいい
甲子園の熱気よ届け被災地に
沈香を焚きついでいる被災地へ
暑中見舞孫の苦戦の跡が来る
鈴虫がたしかに鳴いたこの辺り
月を恋う一夜の花がいじらしい

高知市

澤村哲史

喜怒哀楽並び替えては墓参り
磨ぎ汁に光るものあり日本あり
聴く耳を持たぬ枝かも伸び盛り
ドルと円狐と狸の森の中
手元には残せぬ時間惜しむ月
ソプラノの音を出してる梅の風
幻の夢ではならぬ港の灯
煩悩を手繰り寄せては舐める塩
水切れの悪いザルだよ昼下がり
あやふやな天気図一生持ち歩く
擬似針の彩をあなたと競わせる
気位の旗を立てては煽る風
裏切りとセットで温い茹で卵
風呂敷にバラを包んで嫁に来る
春の戯れ恋の悩みと花粉症

寝屋川市

柴田敬子

古稀過ぎてやっと夫の箍はずれ
あの世でも使うつもりか貯めてはる
損をする話の輪からうまく抜け
酒が毒誰が言うてる連れて来い
関白にさせる一枚上の妻
五十年たまにもつれる縄電車
まだ見ぬ子神の名簿のどの辺り
ありがとう苦労も包む紙おむつ
へべれけがお家忘れぬのが不思議
鬱と薔薇辞書に付箋を付けてある
手枕が重いそろそろ別れ時
転た寝に毛布を掛ける程の愛
ブレーキの利かぬ女の蟻地獄
屋台酒仏頂面を喋らせる
ああ言えばこう言う妻で恙無し

大阪市

柴本ばっは

零歳の親分家族みな子分
初代にはかないまへんとかしこいな
二度の職芽吹く柳に風すこし
三十六峰火床見てきた大文字
四十年ドラマの如く手弁当
五体満足不細工なんていわせない
六郎の絵の道草に迷いこむ
七三へ役者冥利の見得をきる
八ツ当りが受けたぞ凄い主婦のペン
重陽に父が夢置く菊の苗
十五歳の岐路少年は青を溶く
百歳へ今秒読みの夫です
千手観音指指指が語り出す
万が一ベビーできたらどうしよう
億ションでチワワとしゃべり寝てる友

つくば市　嶋本喬

お歳暮の蕎麦デビューする大晦日
年賀状くれたばかりの友が逝く
老母の居間ルンバの進む道険し
大鯰東奔西走御大事に
常識も元は異端と罵られ
竜巻が吹抜け切った並木道
入学式母放っておき先行く児
遷宮の檜の香気森満たす
団扇持ち扇ぐ孫聞く寒いかと
お昼寝の犬うろたえるイモ虫に
長屋門くぐるとファミレス駐車場
墓地を出て花壇の主役曼珠沙華
ステッキへお先にどうぞ松葉杖
婆株価爺チャンバラのテレビ権
パトカーもコンビニへ来るお昼前

京都市　清水英旺

裁きの庭　温情の花咲くことも
ゼロで生まれ加減乗除をくり返す
鍵握る男　迷彩服着てる
さあやるぞ一日分のネジを巻く
現実と理想の距離は無限大
はんなりが持ち味どすえ京おんな
ことさらに悪振る人は憎めない
ありすぎて結局何もない時代
その刹那正気に返る白昼夢
オンリーワン青い地球を守りたい
まだいけるもっといけると克己心
気持よいこと囁いて風は去る
遠浅のような人生身に合って
老眼鏡拭けばやる気が湧いてくる
後期高齢しっかり余命受けとめる

那覇市

下地安子

百歳の耳へ良いことばかり言う
姑の手摺われが引継ぐようになり
言の葉の海でカタカナ弾んでる
音楽で育てた古酒の味自慢
出番ないドルの切手が欠伸する
若者のメールの海で弾む恋
点滴のリズムで命湧いてくる
冒険はしない命の予備がない
喜寿の坂笑い袋が軽くなる
紙になる森の悲鳴に胸いたむ
どれだけの鳥の涙か羽布団
相槌をうって責任負わされる
限りある命の明日へ投資する
人間のエゴで戦が果てしない
基地の島平和のベルはいつ響く

神戸市

釋　翔空

彼岸には行けず此岸で時を待ち
木に登る魚の目にも庫裏の壁
墨染めの袖ひるがえし花は春
声明を聞いて宇宙の風になる
寝て暮らす我も仏の夢心地
人の世の終わり案ずる大津波
百段を登りつめれば蒼い海
明日来るというて仏の別れなり
遊ぶこと忘れて線香立て直し
限界を感じて菩薩雲の果て
達磨の目あかずに唯の人となり
抜け道は僕の知らない墓の傍
崖っ縁で聞く和尚の般若経
梅の寺和尚の書きし般若経
寺町を通り抜ければ彼岸来る

竹原市

若年幸子

あっけなく指を零れた愛の砂
涙壺秋の雫があふれでる
芒ヶ原少うし羽を休めよう
チョコチョコと娘が覗きに来る安堵
冬日射し今日のあなたは優し過ぎ
遊んでるのいいえ学んでいるのです
薔薇よバラ棘を脱ぎたい事もあろ
火の坂を歩く女を棄てきれず
白い画布私の道がまだ画けぬ
汗キラリ弾んで生きる女みち
森林浴命の伸びを聞きながら
熟れすぎの葡萄は如何オホホホホ
フルムーン交響曲はまだ未完
秋だなあ竜胆ふっとつぶやいた
生かされて幸せの数ひいふうみ

八尾市

新海信二

八月のカレンダー赤丸二つ
出征の日に死んでこい生きてこい
マルクスを語った喫茶古めいて
一番の人を嘲るところてん
真剣に包丁研げば身が痩せる
辛い時つらいなあと声かける
鬼ごっこ人の流れが邪魔をする
豪雪の下で耐えてる蕗の薹
バランスを崩すと風がよく通る
飾っても飾らなくてもわたしです
終着が見えて命の準備する
延命のチューブ入れない薬箱
もういない人探してるかくれんぼ
おとがいの震え止まらぬ訃が刺さる
昭和史のてっぺんにあるきのこ雲

松山市

神野きっこ

晴れ着着て二十歳を祝う車椅子
去年の今日娘は確か生きていた
羊水の中で聴いてる遠蛙
黒田節父の笑顔を思い出す
ダンディーで素敵な父がいた実家
元旦も傘寿の母は休みなし
子育てを終えてわたしがいなくなる
蝉時雨あれは先祖の声だろう
妙心寺龍が飛び出す除夜の鐘
ふぐ刺しに春帆楼が透けて見え
四季の色窓を開ければ詩が浮かぶ
太陽と仲良し茄子の黒光り
新緑の空気を吸って恋をせよ
盲導犬飲みたい水をがまんする
日の丸の下で男が萎えている

大阪府

神野千恵子

距離感が一瞬消えた月の石
しみじみと語り部の声いろりの火
ドレスアップすると心も服を着る
優しさにつっかえ棒がよろけそう
笑い顔人間だけの宝物
鍵穴に合わない鍵をたんと持ち
群れたがるそして名簿が出来上がる
憧れたはずの自由を持て余し
癌告知捻じれたように日が暮れる
深読みはしないでおこう澄んだ空
独り居をもっとひとりにする祭り
カタツムリ走りたい時きっとある
金環食いつもと同じ朝ごはん
とげとげがあって金平糖の味
お月様やっぱり夢を見るところ

竹原市

菅　弘子

知らぬが仏うっかり頭突っ込んだ
止まり木に羽根を休める故郷帰り
宿業を背負い生き抜く蝸牛
脈脈と時を刻んで米づくり
肥料十俵天に祈りを込めて播く
バインダー音軽やかに稲を噛む
万全を期して届くか金メダル
近過ぎて素直な言葉出ぬ夫婦
龍神よ押して下さい道半ば
針穴の光に託す命の灯
七昔越えて優しくなれる今
古里が色鮮やかになる傘寿
母になり母の涙を思い遣る
傷心の母なる海の岬風
諸人の声風に溶け木の根道

雲南市

菅田かつ子

三分咲き急に周りの姦しい
店頭の桃はうぶです触れないで
憧れはうぐいすでした鴉の仔
古里に捨石一つ置いたまま
手を握るぐらいの仲で終りけり
まっいいか明日の風に吹かれよう
恙無し退屈なんて書いて来ず
手をとってホップステップどっこいしょ
面影があると嬉しいことを言う
ちっぽけな事で揉めたり笑うたり
ポニーテールねずみの尻尾ほどになり
今わたしご存じですかオフタイム
夫婦とや小さな嘘の二つ三つ
とか言うて一番待っているわたし
何時帰る行かぬ内から聞くあなた

熊本市

杉野羅天

露天風呂念仏地蔵になりにけり

夕菅（すげ）に宵が来るよと教えられ

汚染水原発事故のままに漏れ

アベノミクス乗った人やら乗れぬ人

あの方の詩には音が流れてる

青大将てっぺんで会う神の山

無記がやはり自分に合っている

ニューファッション老女同志の目が光る

スクワット鏡の中は誰でしょう

雲多き人生　夕焼けがきれい

一と口で一と口カツをギャルは食べ

山彦が絶えて猪天下取り

天災が人災になる世の不思議

薬石もいいが豪酒の華やかさ

思いの届く日雲仙を見つめて

神戸市

椙元世津

佛飯の湯気から明けるお元日
一年を一気に眺め新暦
手を合わす初日の丘に気を貰い
止まってる動いてもいる瀬戸の海
真っ直ぐな道海へ向き山へ向き
さつき咲くばらが咲いたという日記
水やりへ隣同志の久しぶり
外へ出てよかった　こんなに暖かい
好きなもんばっかりという荷が届き
催太鼓腹に響いて夏祭り
伝うように見て流れ絵の大広間
蕎麦啜る今年も無事に終りそう
勢揃い家族写真は若いまま
母呼べば花の庭からくる返事
故郷へ呼ばれて咲いた紋太句碑

岩出市

杉山精子

蹴躓く度に大きくなった耳
再会へ友情の川堰を切る
丁寧に畳み直して返す恩
昭和史を生きた証の父の手だ
水脈に届くと愛が溢れ出る
手のひらに乗る幸せが丁度良い
未完の絵いつか描き足す彩がある
計算はしつくされてる花吹雪
口笛が小さくなっていく別れ
峠まで道なきみちをきた誇り
生き様をさらさら零す砂時計
箱庭で夢の残りを仕上げよう
一羽から祈り始まる千羽鶴
玉手箱みたいな母の笑い声
一歩引いて引いて女の鎧着る

泉大津市

助川和美

蝉の声いまだ終戦忘れえぬ
生きている暑い寒いと言える幸
叱っても言い分けしないポチといる
選挙ですやたらに握手したがる手
ダイエットもったいないに負けている
どこもかも禁煙なのにたばこ売る
女三人呑めば肴は孫亭主
見上げれば愚痴飲みこんだ空の青
深い皺平和を願い鶴折る手
どのコース投げても妻はキャッチする
嫁さんに長生き詫びる母卒寿
旅仕度冷凍された母の味
盆と正月顔見せにくる嫁は客
ありがとう言いそこね母星になる
春一番重いコートを脱ぎ捨てる

寝屋川市

鈴木楽鬼

我儘に生きて悔いなしおらが春
不器用に生きた男にある誇り
嘘一つ言えぬ男になり下がり
鬼は外言っても妻は出ていかん
愚痴話よく聞きゃなんや自慢かい
よろめかぬ様にあなたに凭り掛かる
仲直り男すまんと言えばいい
諦めがあれば夫婦も仲が良い
拾う神いつまで待っても来てくれぬ
孫とした針千本が生きる糧
明日ある子闇に葬る師の保身
立つ位置が変わると黒が白になる
茶友達俺は白寿で君百寿
無駄金と言うな男を磨いてる
妻よ手を離すな坂はまだ続く

尼崎市

酢谷亀与子

そこに居るだけで他人がホッとする
血圧は日々健康のバロメーター
故郷のなまり忘れぬ夢の中
いかなごの釘煮季節の顔になる
女なら一度は着たい燃える赤
病んでみて優しい夫に救われる
テレビから昭和を偲ぶカキ氷
こちらから一言わびて仲直り
聞きあきた自慢話は耳にたこ
背かれてやっと分った子の本音
又メール電話の方が早いのに
手を抜いて寿司屋にたよる不精者
咲き終えたサザンカ梅へありがとう
笑わせて後で泣かせた寛美の芸
娘のぐちをそこそこに聞く母の知恵

弘前市

諏訪夕香

胃の中が「コケコッコー」と鳴く朝だ
干支凧絵「新春川柳」待ち焦がれ
原点は北野岸柳師（ＮＨＫ川柳）へ入門
入門二年目『我洲杯』へ届いた日
五人選（天位）三名から受ける（百名中）
手品師の彼ブラジャーがよく似合い
仏壇の煮干し一匹艶かし
高校準四段亡父の残した宝もの
四面楚歌人生なんてそんなもの
五里霧中逸れはぐれて亡母探す
六大家「明日来ませんか」と記憶術
レモン噛むわが唇を汽車走る
淋しさをハンマーで割るそれも哀
伯龍さん十八歳の我描く
『レモン哀歌』高村光太郎から学び

松山市

仙波八千代

生いたちはひこばえでした千年樹
梢らは饗宴幹の脂汗
ほっこりと秋日一等米実る
円満の薬お酌をしてされて
仏壇の奥の位牌もお人好し
世界遺産へぞろぞろ富士のこそばゆい
遺すものはないが二人の娘を遺す
手ぶらでは帰さぬ母のような森
前を行く姑の歩幅のいとおしい
目標は百歳スリル味わおう
動かない金魚なにやらもの思い
どん底の意地が育てたのは笑顔
世界の目を釘付け魔女になった真央
41歳金を取るまでジャンプする
現住所は宇宙ステーションです若田

和歌山市

髙木敦子

チョコレートわたしの彼はほとけさま
ほとけさまが待っているから起きられる
校舎より吹奏楽が海へ出る
月の山さぞいくつもの獣道
天国と地獄宇宙のどのあたり
落日に眼鏡星人帰りゆく
空耳があるなら空目空耳も
生真面目に偽装していた料理人
お名前を拝借伊勢さま車さま
欄干のかもめ君らも少子化か
わらわらと又わらわらと渡り鳥
自転車でララ噂をふりまきに
逃げたっていいよ囁く風がある
うっかりとしっかりの間にうしが居る
奥の手はお箸でたべるスパゲティー

大阪府

髙木道子

ワンテンポ遅れた人生風に舞う
末席で思い違える多数決
今日もまた大阪弁でカラス鳴く
老犬と夕焼け背負う散歩道
冗談を本気で包むオブラート
今日よりは若い日はなし晴れ舞台
ＮＨＫみたいな人と聞く落語
助手席の口とナビとについて行く
先人の住まいを覗く蔦かずら
やれやれと神も宣う正遷宮
携帯は鳴らん清張サスペンス
手に余る事はお口でカバーする
ひらけゴマ年金日ですＡＴＭさん
クラス会偲ぶ若さをフォルティッシモ
健忘症生き抜いてこそ人の科よ

豊中市

高嶋勝

ひと通り生きてなお夢欲の皮
祖父からのちびた印形護符替り
素通りに如かず苦手な奴がいる
八十年転げて今になお角が
明るさに惹かれた縁ダイヤ婚
これだけは是非と女房の家事指南
行く行くは宇宙の塵と悟り顔
破れない約束忘れまた不義理
君んとこ曾孫まだかと尋ね合い
縁結び神は身近な友だった
照らずとも降らずと踏んで裏切られ
のほほんと生きて苦の種先送り
中るなら惜しい見料でもないが
何処向いて走るにもせよわが祖国
励まされはにかむ孫の顔がいい

大阪市

髙杉　力

戻りたい昭和忘れたい昭和
今年こそ会おうと書いてある賀状
たくろうを歌い仲良くなっている
途中下車美味いタコヤキ屋を見つけ
ガイド本読み過ぎ旅がつまらない
アウトドア役に立たない男です
安ければ苺と買い物メモにあり
青いとこ少し残したままで老い
キタミナミまだ言い出せず阿倍野橋
ポケットに半券君と観た映画
席譲り少し離れたとこに立ち
変換キー押せど変わらぬうそは嘘
仲直りしてはと丸いお月さま
見たい夢あるからそっと目を閉じる
紅葉燃ゆ我が人生はどのあたり

佐渡市

髙野不二

人間を試されている台風禍
ＪＡの南瓜も外国産を売る
犬好きの犬同志迄仲がいい
手の平で女房の意見丸めてる
名が三つ続いて大銀行になる
神様も首をかしげる絵馬がある
婦人公論男に見せる記事で売る
戦争を知らない人の九条論
ネクタイをしている方がガードマン
ドラマ派が延長戦にけちつける
自己申告前科三犯位ある
一桁の利子へ一行とってある
女房に申し訳ない夢を見る
口ばかり達者一級障害者
待合室で見れば事足る週刊誌

奈良市

髙橋敬子

時たてば良き思い出の今でしょう
人気ない家の青梅ふっくらと
華麗なるターン舞いしは夢の中
食卓に二膳の箸がならぶだけ
朝起きてまず見て回る夏野菜
ああ暑い冥土にいなよお岩さん
間違いも暑さのせいと思いあう
コスモスの迷路で子らは隠れんぼ
そうめんがうどんに替わる秋となり
冬布団去年はもっと軽かった
願いごとそっとつぶやくお賽銭
雨だれをつぶやきのごと聞いている
回転木馬カメラをもった親走る
木曽駒は六頭身の愛らしさ
妙高へ訛も聞かず旅終える

奈良市

髙橋仁志

本物の具材を使うおもてなし
文殊院花の大絵馬春の駒
温度計零度までにはまだゆとり
建築費追加追加で大赤字
追加して刷った賀状が無駄となり
ハルカスやグランフロント他の世界
入試では当りはずれも運のうち
日当りに鳥たちも来て花を賞で
恵方巻き寿司屋の門に福来たる
つぶやきに恨みつらみが隠れてる
梅の花つぶやくように二三輪
寒空につぶやくような猫の声
日本中寝不足にするソチ五輪
証券界ＮＩＳＡＮＩＳＡとお祭り騒ぎ
かなしみの寒中見舞いじっと読む

松山市

高畑俊正

今を書く男のペンが夕焼ける
指人形どの子も泣かせてはならぬ
子の熱い球だがっちり受けてやる
街で拾ったレモンが明日を語りだす
白桃のしたたり母よ娘よ妻よ
父の器に溜まった哀が澄んでくる
ボヘミヤンの恋を雪月花が笑う
無になると神の朱筆が読めてくる
人間臭く生きると毒も光りだす
サンタマリヤの祷りは雨を白くする
弥勒菩薩の掌には有情の海がある
無骨に生きた樹いっぽんを子に遺す
ちぎれ雲の白さをボクの遺書とする
死ぬまで尖っていたい男の自尊心
真人間のラストは神が添い寝する

鳥取市

髙　原　かおる

何度でも習う六十路の旅ごころ
鳥巣立つ来てもいいよと次女の部屋
食べごろのサクランボ見て鳥がくる
恋びとの名を浜辺から掘りおこす
風紋を何度も魅せる砂の丘
つまずいた石を撫でてる母性愛
あの世にを楽しく詠んでおく句集
婆ちゃんの着物などなど流行り年
買い物のたびにクシャミをする財布
立春の小鳥へ花芽まだ起きず
脇みちの新芽摘まれて春うたう
さわやかな昔ばなしを春の風
ばっちりと咬んだ歯形はポチのもの
パトカーになってる猫のネズミ捕り
夕涼み蚊遣りを焚いて母を呼ぶ

大阪市

田口和代

わたくしの椅子取りゲームまだ佳境
満ちたりた日は橙に塗りつぶす
酔ったかな酒と男と川柳と
好き嫌いどういう訳か女偏
手触りでわたしの良さは解らない
おかげさまケンカ相手のいる暮らし
肝心な話になるとトイレです
遠隔操作されているのかマイ財布
あの世では格差ないかと釈迦に問う
傾いているのは家かわたくしか
蝉しぐれいっしょに泣いていいですか
父さんはチョウチョになって逝ったんだ
仏彫るボクも仏の顔になる
神様の筋書き通り咲いている
だいじょうぶ生年月日まだ言える

鳥取県

田口清帆

空澄んで目指す望みが叶いそう
幸せを招く笑顔で今日も生き
半ドアの恋にアクセル踏み切れず
あの時を下さい妻がいた春を
いらついた心静める茶の渋味
女ですヤバイ男のネジを巻く
鉛筆が折れて遊べる五七五
八十路坂今日もいい汗除雪する
腹の中吐き出したくて筆をとる
三世代負けるが勝ちに波立たず
喜寿終えてギアはスローに切り替える
桜ツボミ笑顔の春をはこびくる
気をつけようううっかり乗って裏がある
無駄づかいタンスのこやしいっぱいだ
ゆっくりと寒さしのんで咲く桜

愛媛県

竹内いつみ

ひぐらしの声で別れる立話
梵鐘の余韻にひたる花遍路
あちこちにも我慢があった日々平和
辞書繰って繰って詩境をふくらます
今度こそ上位を目指す粒揃い
梅雨晴れ間寄って行きなよ妻もいる
その先を言うな聞くなと焦らせる
言いわけはよそう瞑想かも知れぬ
ひとつまみやっぱり母に無駄がない
春一番ちょっとおしゃれの紅を買う
まだ温い骨の軽さに泣かされる
風だろうか戸を叩くのは亡父だろか
晩学へせめて守りの電子辞書
記憶力にぶりノートが友になる
花道ではないが一本道でした

河内長野市

竹田芙美子

生まれ来る国を選べぬ戦火の子
隣国の恐いニュースに身が震え
秘密保護裏で何かが匂ってる
泥酔し落ちた線路に勇気の手
手も足も出さず目力運だるま
梅一輪猪口に浮かべて春を呑む
惚れ惚れとだんじり屋根の舞い姿
来る来ない花びら千切る淡い恋
若き日に貰った手紙桐箱に
見ぬふりが出来ず子猫を又拾う
ひとり寝の枕に浸みる泣き笑い
歳重ね純な心の子に還る
家財なく身軽な暮し性に合い
熱戦を見たく頑張るあと七年
ひとりになり悲しみ封じ凛とする

鳥取市

武林里美

焼いたれど心は残るラブレター
包みたい心の奥を見透かされ
あっさりとばっさりやられシュンとする
暖かい陽気に浮かれ舞う蝶々
起死回生計る一手をちらつかせ
96条の改正阻止にデモの列
老いたババ孫可愛さに席譲る
出直しと心洗濯してかかる
細やかに破れ繕い柄となる
執刀の白衣の医師が神に見え
喧嘩して負けた子母に八ツ当たり
無いかいな心の痛み除くメス
またしても上がる無情の消費税
基地移転反対の声激化する
名月を鳴く虫の音に心酔う

吹田市

竹森雀舎

約束はまだ果たせない砂の城
火と水の修業を終えて里は春
三月を送ることばがあたたかい
水澄んで仏の御手に生かされる
蹲いてよろけて母の涙拭く
寂しくて陽気な鬼と手をつなぐ
面壁へ道を求めている孤独
十字路で味方のいろに媚びている
微温湯の中でわたしの正義感
無口だが存在感は持っている
魂を探しに行ったまま冬に
理想論父は上手に年をとる
やり直す決意へ風が後を押す
残照へ明日の自分を模索する
無に還るとても静かな風が吹く

池田市

多田契子

鈍行が通ったあとは温いです
ハローとは言ってくれない職探し
ストレスがたまっただけの医院出る
急いでもあの信号はイケズする
質の良い睡眠とれという羊
いつからか静かにしてるハイヒール
噛み合わぬ拉致問題に明日が揺れ
やはりきた恐い改憲速度増す
淋しくて心の底に母を置く
子等継げず母の漬物消えたまま
良き友に恵まれている午後三時
一呼吸知らぬ性格汗を噴く
開けゆく未来急かすかランドセル
時々は銃撃つ私評論家
又明日虹をさがしに参ります

三田市

多田雅尚

頑固でも脳は豆腐の柔らかさ
蝋梅の香り届かぬ花粉症
合コンが少子化防ぐお膳立て
辞書を引き閉じた途端にまた忘れ
熱帯夜樹氷の絵でも貼ってみる
手術前同意書も取る手際良さ
父の日が無ければ良いと母子家庭
バカモンと昭和の父の声が消え
助けたい人に渡らぬ義援金
復興に保護法通す早さ無く
格安の運賃だけで乗る不安
青春の夢を運んだ列車消え
値上げだとチラつかせては再稼働
原発をノーと言えない被爆国
政治とは中流以下の幸せ度

藤井寺市

田付絹枝

花よりも一石二鳥の夏野菜
四季自然旅の醍醐味まだ尽きぬ
旅仲間絆深まる珍道中
女ですダイナミックな男文字
慣れたのにまた新機種のＡＴＭ
ひさしぶり夢の亡夫と痴話喧嘩
生き甲斐を増やせば財布軽くなり
リフォームで我家の神も御遷宮
母の日に包丁研いで息子が帰る
日焼けした麦藁帽子暇をやる
墓に蜂亡夫の化身かついて来る
棘抜いて睨み返せば朽ちた杭
愚痴減って素直に言えるありがとう
八十近し中庸の良さ解りかけ
もう師走医者も治せぬバタバタ病

大阪市

立蔵信子

前略から始まる女子会のいつも
日常の暮らしが地味で笑いそう
その時は笑うオンナになりましょう
駅にいるだけでドラマの一部です
走ったら今も間に合う駅がある
底抜けのアホになります空の下
煙突のあこがれハルカスの天辺
ハルカスの上から眺めたい正義
嫌われようきらわれようとするお国
さらさらとしてます昔話です
いたずらはハーフタイムの過ぎた頃
貪欲に時を拾っているのです
図書館の裏でサボっている日差し
甘酸っぱい記憶なんかは捨てました
ポケモンと出会って子どもらと遊ぶ

大阪市

館野加奈美

女から卒業しない紅をさす
好意だと渡されました白髪止め
待ってるよ傷を話せて笑える日
どなたさん訊ねる父に娘だよ
父笑う家族が来たとわかるのね
遺産なし使いきるのも祖母の愛
お帰りと言える毎日続くよう
就活のトンネル抜けて弾む声
王子待つ根気ありすぎ婚期なし
初恋は時が過ぎても色あせず
目でサイン落ち合う場所は二人だけ
鼻歌で単身赴任家具選び
背中ならごめんなさいが言えるのに
愛あればしびれも我慢膝枕
妻の声納得よりも天の声

鳥取県

田中幹啓

貴婦人の皿から洩れるバイキング
靴下にオシャレのセンス見え隠れ
愚痴ひとつそれが喧嘩の火種とは
カメムシも生きて行くぞと武器を持つ
苗投げてわが家の田圃春になる
廃校と知らず今年も桜咲く
よみがえれ留守と空き家のあの村よ
東北へ少しの気持ダンボール
東京の真ん中思想やめなはれ
やめなはれ右へ右へと行くだけは
しみじみと曲がった母の背を撫でる
息子には背骨で教え目で話す
ついに来た息子の嫁に出逢える日
少子化よ泳いで欲しい鯉のぼり
日本中ふところばかり気にしてる

岡山県

田中恵

幼な日の夢が転がる泥団子
花吹雪無口な父の肩車
貧しさに負けない母の子守歌
野仏の前で会釈をして通る
手ぬぐいを被れば母と間違われ
天命と愛しみながら菜を間引く
方角が悪いと牛が拗ねている
ふるさとの石は重くて温かい
石清水ふくめば命ほとばしる
山頂に立って静かに掌を合わす
山好きの笑顔裏切りなど知らぬ
苦も楽もみんな夕日が持って行く
前を行く尺取虫のいい歩幅
美しい言葉に出逢う四月馬鹿
ふるさとの地図を一周して眠る

竹原市

田中敬子

八起きめに掴んだ塩で立ち直る
しみじみと父の昭和を聴く夜釣
寝たきりの鏡に母の朝が来る
少年のマグマ未完の息づかい
流木のほっとくつろぐ常夜灯
火と煙哲学がある鰯焼く
つながりの脆さに金が見え隠れ
ふる里を捨てふる里の川を恋う
神々の里の太鼓が天を突く
無学だが男の貌の極まれり
国境の不安地球の裂ける音
議事堂をザンブリ洗い天日干し
飲んだのんだ地酒よ母の手料理よ
おそろいの水玉母の好きな夏
マニキュアの指がとまどう夏みかん

鳥取市

田中天翔

真赤な嘘と知って許した母の愛
脳なしと言われて楽に生きて来た
夫婦ゲンカ奥の一手は伏せてする
あと五分ひと廻りして値引き待つ
くべる物拾い集めた退職日
古傷がヘコんだままでついて来る
そこそこの脳で折り合いつけ生きる
九十度折れてモンペの母恋し
旅立ちのみやげは川柳と決めている
おみやげにとびきりの笑み持参する
井戸端の話が絆つよくする
前髪を確と掴んだ筈なのに
何たってチョット不幸な話好き
難題は宿題にしたマニフェスト
愛犬のあくびがうつる午後三時

松山市

田中のりお

満開のサクラに風が立ち止まる
心頭を滅却しろと鬼瓦
泡沫の幻を追う秋の蝉
毒舌を抜かれた鬼の冬ごもり
断ち切ってマリオネットは明日を追う
建前と本音が同じ友と酔う
この男噛めば噛むほど味が出る
G線上に偽りの月ポツリ
挙げた手を白い空気が闇に消す
合掌をほどいて見れば欲の五指
この意地が高圧線を引きちぎる
足かせを葬る魂の化身
じゃんけんのパーから嘘が発芽する
三猿に陽はあたらぬと鶴彬
いつになれば逝ってくれますお義母さま

和歌山市

田中尚

一年をおみくじに聞く紀三井寺
まだ二月いやな日が来る鬼なみだ
迷よてならうちに来てえな福の神
賑やかに音符が踊る春の池
深海魚一度は浮いて青い空
万札も茶碗も割れば戻らない
居るんだろ返事せんかい貧乏神
水平線陽の沈む音聴いている
古希と言うシーズンオフに恋をする
雨音が幼い頃のトタン屋根
虫歯ゼロ実は上下みな入歯
目には蚊を耳には蝉を飼っている
ニコチンに見透かされてるあまい意志
甲子園トラが戻って秋を呼ぶ
湯上がりのスッピン可愛小ジョッキ

東かがわ市　田中弘

揚雲雀村の出来ごとみな喋る
赤い糸褪せてつないで喜寿の旅
京を恋う清少納言山けむる
縫いおさめカチッと母の糸切歯
泣きやんだ音痴男の子守唄
テル坊主作った坊やもう夢路
嫌いだがえらいと言われ食べて見せ
耕せば銭で買えない陽の恵み
共白髪誓った妻は髪を染め
違和感はやっぱり釦のかけ違い
生かじりの趣味が退屈遊ばせる
躓ずいた石に油断を諭される
蠅一匹昼寝の顔に悪さする
陽光の梅一輪が杖を止め
懲りもせず高嶺を目指す亀の足

岡山県

田中道博

冬の雨哲学的な貨車の音
勝ち負けはどうあれ貨車の平常心
汽笛も貨車も地を這ってくる
塩と水持って貨車は出て行った
下り坂少し乱れた貨車の列
金のない貨車にも届く花吹雪
夜を走る貨車よ涙は拭いておけ
長い汽笛だ貨車よ前を向け
過去のある貨車も繋いだ長い列
行先を忘れた貨車を待っている
コトコトとただコトコトと夜の貨車
一番でなくていいんだ貨車の音
この坂を登ると貨車よ茶屋がある
夜を走る貨車には遠い夕餉の灯
無人駅貨車は静かに来てとまる

大阪市

田中ゆみ子

咲いて散るただそれだけの野の菫
サービスの過剰に少し草臥れる
大切な人に貰ったガラス玉
弱点を見せて互いに支えあう
あり余る善意飛べない鳥になる
毒舌をください走り出すバネに
方程式解く楽しさで逢っている
見たいなあ私の背にある答
子守唄うたう穏やかな時間
何よりもこの沈黙は雄弁だ
夢を見る自由ときどき目を瞑る
アンテナを磨く飛びたつのは今だ
動けない花へ私が水をやる
切裂いて刻んで焼いてああ旨い
生きる意味解らないけど朝ごはん

八尾市

田邊浩三

遠回りしたが見つけた百合の花
白魚が紅葉を生んでくれました
本人に言えぬが妻は拾い物
補聴器をくれた息子の愚痴を聞く
幸せな墓場だったと孫を抱く
円高に女房地球儀回してる
いつからか判らぬ妻の白髪染め
ハグの時屈んでくれる孫娘
二次会はタバコの吸える店にする
女房も上司もいない縄のれん
生きていて良かった朝の迎え酒
井戸端会議あくびして待つ散歩犬
心地好く通勤靴に追い越され
どこからがボケか判らぬもどかしさ
美しく枯れてゆくのも技の内

松山市

田辺進水

メイドインジャパンを誰か知らないか
あれは嘘でしたと赤い陽が沈む
欲と嘘混ぜると人間が出来る
真実が見たくて画素数が増える
一本の刺を座右の銘とする
ちょうどいいところに浮いているわたし
正面に太陽恥じるものはない
何の罪だろうか種のないぶどう
幸せはまだ恋人でフルムーン
四万十で洗った手だな美しい
塩の甘さを知った蛍が生きのびる
輪廻転生メビウスの輪の中で
右腕をやがて恐れるようになる
究極の美だろうゼロという形
正体はニンゲン舌が二枚ある

奈良県

谷川憲

少年の原点辺り竹とんぼ
夜露吸い花の命が甦る
千枚田流した汗が染みている
雨傘のしずくをそっと切り乗車
前任者の苦労しみじみ分る椅子
夜なべした母の手縫いは捨てられぬ
酒好きの蚊は飲兵衛を知っている
激安品まず産地見る癖がつき
煩悩の淵に溺れて足掻いてる
被災地の重い声聞く濃い時間
お願いねあっさり言うて妻は旅
期限切れのクーポンもある遺産分け
予報士のバストも揺れて晴れマーク
満員車メールが喋りゃうるさかろ
ひとときを生き適うなら千の風

鳥取市

谷口回春子

正面だけを見ても真実見抜けない
欲望の大河に堰は築けない
欲望が渦巻く日々はエンドレス
訂正をすればするほど悪くなり
金と欲心の中でタッグ組む
仰天というが本音はごく普通
横着は夫へ妻の倍返し
札束もあの世へ行けば紙屑だ
残高の黒字が繋ぐ夫婦仲
降らなけりゃ降れ降れ降れと人のエゴ
欲望に白旗上げるのは早い
したたかな心が覗く二枚舌
理解するふりをしながら老いてゆく
ぬくもりを抱いて絵手紙やってきた
聞く人によっては違う同じこと

大東市

谷口東風

「春雨じゃ濡れていこう」と思わない
天王寺の河馬いつ見ても水の中
上と下釣合いをとる靴磨く
寝癖なし手間も要らぬという魅力
当て付けのようにゴキブリ叩く妻
二階の妻が動くと震度二を越える
おばちゃんが「オー・モーレツ」とビル谷間
干柿になったと笑う元ボイン
顔以外バッチリ決めて電車待つ
ハルカスを見上げる前にストレッチ
昨晩のおかず即答今朝も食う
社長だけ正しくやがて社を潰す
劣勢の虎より負ける巨人観る
八頭身それが何だと蛇ダチョウ
原発のおねしょは神も音を上げる

和歌山市

田畑宏

ほろほろとこぼれたかった落椿
水たまり跨ぐと夏が立っていた
十五夜を過ぎると月も気が抜ける
ここからがヤマ場十二月の暦
セーターを着て日溜りを着るごとし
原子炉にまだ慟哭を止めぬ鬼
政界の森にはてなの樹が繁る
嵐など呼ばぬ男でまるくいく
好きな子の手前で終わるオクラホマ
胎内の姿勢はジャンプする準備
ミニスカートの脚は未来へ伸びている
未来行き列車はすべて自由席
釣鐘も悩みかかえた鈍い音
サイレンは生きろ生きろと救急車
夕焼けの隅から明日が覗いてる

尼崎市

田原寛十郎

ようおこし取りあえず出す渋いお茶
女房に甘え甘えて来た八十路
親馬鹿やピアノ弾く子が偉く見え
孫が来た西瓜や西瓜とりあえず
初物はいの一番に妻食べ
旧姓で呼ばれ嬉しい同窓会
巣立つ娘に時どき顔を見せに来い
よしやるぞ勢いつけたコップ酒
アロハ着てあのホノルルに思い馳せ
話さねば僕の気持は解るまい
負け試合機嫌なおせよ明日がある
作業着に明けの明星キラキラと
なんのその我慢強いは親ゆずり
世の中の荒波越えたこれからや
雨の日もいとわぬ朝の一万歩

新居浜市　玉井公恵

新しいこと始めようときめこう
迷う道いっぱい持っている若さ
ランクから外れて見えて来たわたし
締切りがあってメリハリある暮らし
きれい事言うてまさかのハプニング
泣き切ってきれいな心取り戻す
一本のバラが私を泣かせた日
煮詰ったようだ真赤なバラが咲く
振り向けばあちらこちらに恩がある
振り切った手の温もりを悔いている
結び目を確かめ合っていく夫婦
カルチャーショック文化の壁に突き当たる
ライバルを越して飛べなくなってくる
引き際の泡が目詰りして困る
点滅を赤信号にして生きる

守口市

玉木あさ子

年金日久々に逢う諭吉殿
年金前昨日も今日も冷奴
年金日国産の肉久しぶり
お利口もそうでないのもあんたの子
神童と言われ成人今普通
父母の歳越えていつしか八十路生き
あんな坂こんな坂でも越えた足
八十路でも飛び越えさせて恋の溝
絹漉しの角度にそっと箸を入れ
ケーキ切る角度見ている子沢山
流し眼の角度にママが舞い上がる
婆さまのパーマネントを見に郷里
郷里からのメール真白雪ばかり
夜行バスで寝惚け眼のまま郷里
郷里から土の匂いと草団子

那覇市　たまき　さちこ

久し振りハグで贅肉たしかめる
同期会ずらりと並ぶ勝負服
生命線長いと困る年金課
コンビニが息子の婚期遅らせる
コーヒータイム彼岸の父と差し向い
万歩計今日一日を指図する
温暖化ふところだけはいつも冬
予報士がウチの洗濯日を決める
徘徊の足の速さに追いつけず
味噌汁の冷めない距離にケアホーム
いい日和明日の分まで歩き溜め
哀しみのがれきを隠す銀世界
動かない基地の根っこを蟻が咬む
列島の温度差雪とオスプレイ
知事の椅子辺野古の海へ流したい

和歌山市　**たむら　あきこ**

ペンにぎり締める回遊魚の時間
とても大きな網に掬えたものがない
まだ匿っているわたくしの中の新
手のひらに咳を落としている不安
いつまでも哀が這うから髪を切る
どう吊るしてみてもわたしというかたち
流行りコトバには実弾を込めやすい
すこし爆ぜるためにしじまに置く背骨
亡父の貌から風景が濡れてくる
あなたという毒秒読みで効いてきた
いわし雲聴かぬラジオが鳴っている
忘却だけがいつか叶えてくれている
哀惜の皺をひらいてゆく回忌
叶うならあなたにわたくしを植える
追伸のひと言日だまりになった

西宮市

田村ひろ子

ジャンプして古い鱗を落とす春
どの窓も四角で肩がこっている
描きなおす今日には今日の絵描き歌
ぽこぽこと湧きでるものをさがす耳
きっぱりと言いきる文の墨の色
象だってもっと大きくなりたいさ
浮いたのは一瞬月を見た魚
ひとつずつスイッチ切って夜になる
約束を守って石になりました
忘れゆくことも忘れた花の道
目を凝らし不思議ふしぎと生きてます
ギンナンをゆすり愛することの罪
温もりの消えゆくものを囲んでる
バラバラとどんぐり落ちる喪があける
やわらかな指が開いてゆく未来

岡山市

丹下凱夫

おかあさんおかあさん牡丹雪です
命終のとても静かに桜咲く
うしろ姿で人が逝くなり花ぐもり
母の骨拾う　宝石のように
ポカポカうきうきそわそわ桜咲く
春愁の山の向こう海の向こう
春惜しむちょっとたれ目の観音さま
いちご畑から呼んでいるママーぁあ
オイラクの恋ヲシテイルいちごぱふぇ
そっとしてあげたいまさこさまあいこさま
しりもちをついてもころんでもあいこさま
ペンペン草優しい雨に泣いていた
泣いております一生懸命だったから
わたくしの知らないキミが泣いている
未来世のわたしが泣いている影絵

岸和田市

次井義泰

がみがみと妻がちゃがちゃと轡虫
どうにでもなる一本の藁の価値
植えてみて知る玉葱の育て方
アルコールが回るとラ行増えて来る
天秤に掛けた彼女が揺れている
ライフラインオフの時だけ騒がれる
だんじりの狂想曲に酔い痴れる
受取人名義で気付く母の愛
拾っても捨てても怖い核のゴミ
途中から卵が先になる持論
曲線をすぐ直線にする若さ
太陽の塔で時代を考える
とんとんとエスカレーター左側
同意書に必ず書いてあるリスク
てっぺんに人類いるという驕り

東かがわ市　辻　上　よしみ

幾山河越えて摑んだ今日の幸
ここだけの話次つぎ種を蒔く
空振りもあるさ人生長い道
お世辞だと分かっていても踊る胸
病んで知る人の心と思いやり
逆転もあるかと余生夢を追う
笑っても笑っても来ぬ福の神
他人には感じとれない血の絆
孫抱ける幸せ一つ娘に貰う
継ぎはぎの小っちゃな夢を縫い合わす
叱っても逃げ道少し開けておく
ガン末期見舞う笑顔が崩れそう
魂胆があるから深く頭下げ
コップから顔を出したい水中花
倖せの明日を信じて米を研ぐ

竹原市

辻岡末雄

オスプレイ下のさわぎを知らぬ顔
懐かしい教え子見つけ明日めざす
命あるうちカープよ早く優勝を
保存食山ほどもあるよい時代
盆灯籠父母のかたちにうつります
平凡に馴れて報恩忘れまい
冬が来た炬燵を出すと動けない
百歳を前にみかんを味わって
外に出て新聞を待つ歳になる
豊かなる希望をもって長寿です
終章の老いと向き合う娘は喜寿に
挑戦も楽しいものにする白寿
えびす顔老いの集いに花咲かす
念力の通じないとこ虫生きる
白寿なり人に守られ感謝する

弘前市

辻口風来坊

ヘタがいい絵手紙一輪とどけたし
さえずりを目覚ましとするわが日課
栗蟹の茹で立てしゃぶり待つ開花
雨の香に馴染み佇む傘の中
贅沢に海胆盛り上げて笑み満面
違えずに遡上見事な郷帰り
天空をペガサス駆けたとお腹撫で
オリオンの三ツ星妻と子らに見え
吹き荒ぶ西風さえも吾子の声
孫が来て弾む会話に回る寿司
子等守る妻の形見の七福神
放物線描く背中に手を沿わせ
夢に見る母の手打ちの十割蕎麦
解禁をグラス磨いて待ちわびる
ボンノーと鐘鳴り響き掌を合わせ

岡山県

恒弘衛山

人一人斬る日の氷雨降りやまず
害虫を除き組織が崩れかけ
脇役を光らせ先を読んでいる
その先をどう生きるのか夫婦船
老春を舞い幸せな朝の膳
ナイターを見ながら聞いて忘れてる
てれくさく旅の小雨の夫婦傘
癌の娘の側を離れぬ母の顔
晩鐘が響き廃屋散る紅葉
忙中閑仏と旨いお茶を飲む
宗教の壁は戦車で崩せない
極楽へ行こう皆んなで寺を掃く
これからは神に好かれる人生譜
薄味に慣れて失うものがある
後期高齢悲哀も担ぎ春の道

鳥取市

津村律子

川柳のリズム覚える古稀の坂
バラの咲く垣根回れば君の家
土に生き誇りに思う太い指
青田の風が好きで村から出られない
暑い日はビールの泡が美しい
故郷を知らないまんま熱帯魚
夫からあんたも白髪増えたなあ
御飯炊き忘れて走るコンビニへ
無駄というゆとりが笑いつれて来る
目をつむる見えないものが見えて来る
ＴＰＰ譲れぬものは譲れない
稼動拒否青い地球を守りたい
普天間の基地固定化を避けるべき
落ちたら分かる落ちても困るオスプレイ
すまんのうこれも勇気のいる言葉

深谷市　てじま　晩秋

続編は女のやさしさに負けた
ボクとキミ遠い存在ジャン・ギャバン
陽炎の裏でドミノが媚びを売る
天秤座逃げてばかりじゃ駄目でしょう
風船にギリギリ入れる免罪符
夢積んだトロッコ男が燃えていた
おじさんも書いてる職務経歴書
原色の街諸派もついでに生きている
金太郎飴どこを切っても罪と罰
休園日駱駝はコブをみんな取る
天安門軋んだ骨の憤怒が消えぬ
太陽嫌うボーヴォワールの花時計
変りはないさ男の戦さ女のいくさ
三日月が照らさぬヒトの主義主張
写経千巻夫が釈迦になりそうだ

箕面市　(故)

寺井幸女

大根の花に飛び交う蝶二匹
子育てにはげむ雀にパンのくず
雨上り一きわ映える額の花
くちなしの夜目にも白き庭の隅
朝露に漏れしつゆくさここかしこ
畦道に夏蝶の舞う昼下り
灯を消せば網戸の外に夏の月
朝まだき甲虫(かぶと)獲る子の登り来る
到来の草餅美味し主と居て
サルビアの残暑の名残り色あせて
青ざくろ枝にしっかと秋を待ち
砂あびの雀並べて秋日かな
皮むけば秋匂いたつ青みかん
萩すすき並びてそよぐ夕月夜
風鈴のせわしく鳴りて野分かな

箕面市

寺井柳童

生きているナースコールに手が届く
小さい秋見つけた胸の赤い羽根
「また来いよ」敗者に惜しみない拍手
球拾いさせたらチームナンバーワン
銀傘に響く青春メッセージ
球音がまだ青き春連れてくる
一点をリードしてから胃が痛む
勝ってると長く感じるロスタイム
横町の居酒屋大将ばかり来る
パン屋まで春の新作発表会
お湯を入れ待つ3分の食文化
グルメにも飽いて究極冷やっこ
大阪が目指す未来に賭けてみる
政界で常識という非常識
核廃絶ひたすら祈る子の寝顔

愛媛県

土居新山

おもてなし3分半のレンジちん
おもてなし社交辞令の猪口急ぐ
装うもガラスの靴は入らない
影絵から艶を匂わす匠のわざ
おいでやす芸妓の扇子艶を舞う
猪口つまみそっと夢千代艶注ぐ
このスリル貧乏神の押すチャイム
俎板で暴れる鯛を茶化す鯉
告白で決めた台詞の語尾あがる
松坂や神戸じゃねーよ俺ミート
リクルート面接用の眉を書く
顔よりも値段が魅力お雛さま
地図帳に遍路道記すお接待
マドンナと地図から消えた下宿先
どきどきがカラオケ歌詞を遅らせる

竹原市

土井輝恵

子を育て孫と生かされ財は無し
幸せになれよなれよと耳掃除
誉められて孔雀は羽を閉じられぬ
水車小屋世はゆっくりと進むべし
夜ぐらい閉じたかろうに胡蝶蘭
直球しか投げない妻でごめんなさい
命とや麻痺の体に鞭を打つ
レシピから外す芋づる大根葉
閻魔への土産を作り今日も暮れ
一万歩ノルマこなしに午前五時
ピーポーで行った日のまま日めくりは
ジーパンの臍のあたりが寒そうだ
紙コップ乾杯そっと音立てず
渋滞に母が危篤の人も居る
洗濯機のティッシュ脳天遣られたり

大阪市

土井舞蹴

目で合図今日も行くねとカラオケに
じわじわと出番近づく初舞台
亡き父の歳に近づくじわじわと
いつまでも一緒に行こう老夫婦
若い子がスノーボードで宙に舞う
この季節少し雪降りおおあわて
明日には無いが今日の試合で故郷かえり
夏来たらやぐらの上で運だめし
タイガース真のエースを待っている
まだ早い二ツの孫は左投げ
うっとりと見てはいけない物を見て
看護師の笑顔一つで楽になり
桜花六輪咲いて開花です
全世界カムサハムニダ仲良しに
生きて来て感謝あふれる老いた春

広島県

藤解静風

暮れなずむ浜辺は神の領域か
立ち止まり影を時時たしかめる
白黒の映画きれいなお辞儀する
今日生きるわが足音を聴いている
花柄の杖とデイサービスへ行く
ハヒフヘホ笑うけいこもするホーム
見詰められると妻にザンゲがしたくなる
褒めてくれるたったひとりを見失う
折鶴よ無理を頼んで済まなんだ
音たてて秋　赤とんぼいわし雲
仏事みな済ませて今日を折りたたむ
何故ひとりなのか解らぬ朝がある
薔薇はバラ薊はアザミ僕はボク
生きてゆくかなしさをふと寒椿
さびしくはないぞと炊いた豆ご飯

那覇市　渡嘉敷　唯正

遅刻した罰は一番前の席
老人の偶数月に出る元気
お世辞かと聞けば頷く憎らしさ
ハッキリと断る言葉暗記する
悪がいて人間ドラマ盛り上る
ほどほどにと言いつつ酒のお中元
紙おむつ親子の絆薄くする
熟すれば人もバナナも班がでる
辛酸を舐めて備わる人間味
飴と鞭沖縄哀史まだ続く
騒音が金をばらまく基地の島
建前に本音が揺れる基地撤去
思いやり予算は基地の美化強化
爆音が平和の鐘と音合わせ
札束を寄せては返す辺野古波

鳥取県

土岐昌子

都市砂漠老いの命を置き忘れ
不登校ごめん特効薬が無い
ほのぼのと人は情の海で生き
温暖で地球なみだの雨が降る
苦も楽も介護がわたし変えて行く
鬼が棲む心の奥を掃除する
ふと洩らす弱い私がそこに居る
新鮮な明日があるから生きられる
山家弁名刺がわりにラッパ吹く
我が心鬼も仏も共に住み
被災地に届け皆の応援歌
喜怒哀楽じんせい幕を下ろすまで
病いえ千羽の鶴と搏いて
がっちりと行かぬこの世の浮き沈み
手探りの世紀はどんな色で来る

大阪市

栃尾奏子

この柵を越えようペガサスになろう
思春期の恋は孤独なオルゴール
契約はむらさき魔女に声を売る
命がけの羽化はあなたに見て欲しい
パンドラになる私の好奇心
だまされたまんまで指切りのかたち
美しい錯覚でしたありがとう
まだしがんでるのは幸せの尻尾
春を待つ辛夷よここが正念場
わだかまり溶ければ小さじ一と半
赤い実よ思うところへ落ちなさい
愛ひとつ極めて月下美人咲く
ゆっくりと等身大を受け入れる
私と居れば優しくなれますか
臨月の宇宙を抱いている祈り

竹原市

富田汎美

孫も来て春爛漫の誕生日
川柳と俳句の違い孫が問う
四歳の大阪弁と福笑い
求めない責めない子にも夫にも
それぞれに課題抱えて人生よ
我慢するわたしの中の抑止力
忍という意識お互い老夫婦
釣り上げた夫の魚がカルパッチョ
釣り日誌五年も続く夫の意気
でこぼこと誤算も有って人生よ
わたくしの周り善人ばかりなり
眠れぬ夜終章のこと生きること
過去は過去今を生きてく力瘤
富士登頂十年前の快挙なり
至福の日孫らとカープ大歓声

神戸市　冨永恭子

うんと言ったのは確かに私です
誘われるまま泥舟に乗る不覚
間に合えば絆今から縫い合わす
真実をわざわざ問うて落ち込むな
年始めまだまだ雑煮食べられる
丸い背の後ろ姿で歳わかる
目が覚めて今日も生きてる隣見る
脳に良いと聞いたらチョコが好きになる
噛み合わぬままの夫婦が共白髪
除夜の鐘覚悟促すように鳴る
落ち葉踏む音聞きたくて遠回り
古希きても城の主はよく動く
すぐそばに居たよ頼れる旗頭
三つ折にしてかくしたい腹の肉
心にふた鍵までかけて機をのがす

札幌市

富永恵子

頑張った鉛筆語るちびている
紅差して今日も元気にボランティア
無意識の帽子のつばが身を守る
会いに行く余分な言葉などいらぬ
思い切り笑う　寂しくなった時
風邪抜けて春の日差が肩に乗る
背を伸ばし術後の足は頼りない
曖昧な返事を返す古時計
のんびりと趣味三昧の山路行く
今年こそパークの試合ホールする
素振りして緑の芝に恋してる
雪解川ごろんどすんと人生譜
素振りする緑の風にハイタッチ
無為にして過ごす時ほど右脳冴え
筆を持ち続く草書筆のあや

高槻市　鳥居　宏

初太鼓日の出と共に天に満つ
大津波耐えた根っ子は語らない
消息を断った水平線静か
雨音が作ってくれる僕の城
蝉しぐれ読経のように八月忌
鎮魂のラッパを遠く珊瑚海
戦せぬ国のモデルである誇り
透き通る梨の愁いがこぼれそう
だんごでは不足でしょうと月と酌む
人生の秋だポロンと歯が落ちる
仁王さん笑えばきっとチャーミング
いつまでの命十年日記買う
ぐいと描く子供の丸が生きている
煮炊きする妻の背中が母に似る
来ぬバスをモアイのように待っている

大阪市

永井縣笹

躓いた小石に老いを教えられ
ちゃっかりと沈まぬ船に乗り換える
上品に喋ってみれば舌を噛み
寝入り端今日一日を手繰り寄せ
寝入り端あの一言が点滅し
定年の日には棄てた備忘録
下戸だから何時しか下座が指定席
保険証のコピー鞄に独り旅
一服の場所も肩身も狭くなる
人生の知恵の輪解けず現在地
近未来ＤＮＡも登録制
ぼつぼつと徘徊してみる秋の街
古希迎えひとまず此処でリニューアル
日記帳白紙の日だって有っていい
何事もとことんやらねば気が済まぬ

堺港市

中井虎尾

ウインドにうつる老人顔は俺
パトカーの後に長い車列
日本はスパイ天国秘密保護
識別圏関係ないと鳥は飛ぶ
一流は偽装し高い二流食
人間は電波の海で生きている
同窓会個性自慢の顔そろう
アベノではハルカス人気ミクスより
ああ浦和レッドカードの無観客
靖国に咲いた桜は兵の顔
たいくつと無人ぶらんこ揺れている
春のボケはっきり咲いた紅い色
落ちてなお笑ってござる椿花
笑う花集いて山は大笑い
春うらら鳥はさえずり花笑う

米子市

永井三津子

崖っぷち神に委ねた靴を履く
生き様を束ねた母の髪を梳く
簀一枚夢見るポッケあたたかい
火ダルマと気付かず燃えた恋がある
共に泣く子供の様な母宥め
何もかも忘れた母を抱き締める
母の背を拭くたび涙溢れだす
逃げだしたい母の我が侭知る奥歯
延命は誰の為かと神に問う
豆を撒く穏やかな日々願いつつ
リハーサルなどない今日の幕が開く
貧乏神籍が無いのに腰を据え
跳ね上がる物価赤ちゃんさえ産めぬ
命日が来る度亡夫（つま）の歳数え
母の味今も厨で受け継がれ

加西市　中川　修

妻早出今朝もアラーム俺にさせ
熱帯夜妻は階下でオレ二階
憧れた夫婦暮らしも楽でない
マスクしたナースは皆美人顔
ナースコール聞こえぬ振りのキイボード
病院のベッドで聞いた除夜の鐘
かずら橋揺すらなくとも千鳥足
真夏日にズボンの並ぶ股のぞき
官兵衛の幟に託す町おこし
約束をさっきしたのに早や忘れ
出会ったが名前出て来ぬもどかしさ
もう少しならずにいよう茹で蛙
婚活の息子待ってる黒い靴
婚活はオヤジに任せオレ仕事
ちゃんとしたリケジョの嫁がやって来る

大阪市

中里はこべ

ソロモン沖22歳と墓碑が言う
広い海どこかに父のシャレコウベ

戦争ノーこれがすべての根っこです
戦争にでかい釘さす九条で

鉛筆で一票に描く未来絵図
怯まずに生きたい今朝の霜柱

戦ない世に生かされて古希があり
虹見える場所はゆっくり登り坂

受け止める大地があって綿毛飛ぶ
原発は止める見据えるのは未来

平和の世座して待たない蝉しぐれ
印画紙を揺らせば浮かぶ村祭り

鋭角の新芽太らす春の雪
湯上りの喉越し明日の切符くれ

我顔に母を見つけてそっと撫で

神戸市

長島敏子

逢えますか白木蓮の開くころ
菜の花になお忘れ得ぬ風の抄
解脱には遠く身を伏す桜闇
合歓が咲く打ち直そうか句読点
いろはにほ　ここから先は春の雨
帆を揚げよ　風真向かいの半夏生
果ててなお葉裏に縋る蝉の殻
誰が為に灯す今宵の絵ろうそく
もう絵にはならぬか薔薇を抱いたとて
夏の夜を長いと思う独りと思う
冬の樹に吊るす　私という鎧
枕木に小雨　遠いなあ故郷
あれからを思えば永し詩の道
立ち上がる気配へ春のポテンシャル
着地まで空の広さを楽しもう

守口市

中園　功

三世代かたい絆で初詣
年女今年は飛ぶと妻は言う
幼な児に効き目抜群褒め言葉
ピカピカのスタートライン一年生
介護する母の枕に花一輪
元気です笑い飛ばして苦が逃げる
松茸を膳に酒のむ至福時
停年後酒も控えて長寿坂
年金にすがりし糸が細くなり
九条を微妙に変化国の策
ありがとうこの一言で安堵する
どやねんと一張羅に胸を張り
黒縁のメガネの奥のやさしい目
実行が記録を生んだ良い結果
風邪ですか花粉のマスク間違われ

八尾市

中薗清

おかげさま教えてくれた躾糸
灼熱の恋老いらくのロスタイム
食べて寝る日々平凡という非凡
世界一愛して百万本の薔薇
好感が湧く制服のお巡りさん
我武者羅に生きてきました少年期
手探りの人生だから面白い
私をイの一番に呼ぶ酒席
帰省して裸で呑める酒の友
真実をツルリと言った釜うどん
人知れず村のはずれの彼岸花
世界中天変地異の近未来
餌ねだるお辞儀欠かさぬ奈良の鹿
万札も長い旅してシュレッダー
歌もある終着駅は始発駅

堺市

中野健吾

犬掻きの老いへＩＴ容赦なく
どの犬も吠える怪しい顔である
人間にゴマする犬を笑う猫
ぼちぼちどう猫なで声で墓セール
猿でない恥かくときだけ赤くなる
親戚とゴリラがおもっているあんた
恐竜の卵も星の一雫
奥様は蛇かも知れぬきれいすぎ
象の背にゆらゆら砂漠蟻の旅
トラ好きの仲良しばかり甲子園
鰯雲今夜のおかず秋刀魚です
昔泥鰌今空き缶のいる小川
ゴキブリも鴉も市民権主張
蝉ポトリ羨ましいなポックリ死
ビキニなど似合わぬ臍の無い蛙

糸満市　名嘉真　静子

許す心を癒してくれる島言葉
黄昏てやっと呼吸の合う二人
どの世代にも合う手拍子もち歩く
スランプを抜けると星が見たくなる
初歩き孫の一歩は無限大
負けたのは私の中にいる他人
愛の花しあわせ色で咲いている
ロマンスを入れて帰ったガラス瓶
草花のほほえみ探す散歩道
電子化の海で溺れる好奇心
輝いて名演技去る放浪記
指定席空けて待ちます福の神
三世代梅田花月のような日々
介護しにロボットが来る近未来
体力を無視して気分空回り

山口市

中前幸子

残照の指から漏れるカリカチュア
記憶の底に落ちているパンの耳
思考ゼロ突然豆の木が枯れた
時の無い街で気ままな花時計
レモン輪切りに空白の刻を埋め
まぼろしの森造反の鳩が棲む
風の噂が好きです夜の観覧車
断片的に漂う自分史の海よ
主語を忘れた海峡の青い闇
群れて咲く淋しがりやの彼岸花
絵のない絵本青いカラスが棲んでいる
葦原の夕陽の中へ無になって
聖書を閉じて少し淫らになるわたし
雲のメルヘン天空に描く白い街
薔薇を呑む渦潮華麗なる挽歌

岡山市　永見心咲

枕木の様に覚悟を敷いて往く
冠毛は委ねる風を思案する
輪郭は鮮明なのに「もうむかし」
口止めをした柘榴から爆ぜてくる
春嵐モンローになり立ちつくす
群青の海を器に厳島
母のフォト水仙嗅げるように挿す
紅筆の運びを学ぶ吾亦紅
溺愛の実がコンベアーから落ちた
十年日誌わたしに学ぶのは私
肩の荷をおろして軽くなる切符
傾いたままで平均値に並ぶ
良い話だけ運びます花吹雪
蝉時雨みんないきてるなと想う
産声はトツキトオカのファンファーレ

和泉市

中南杏子

お年玉座敷の角で数える子
鰭酒や女したたか饒舌に
従姉妹会長生きしそう杯重ね
虎落笛一人旅にはさびしすぎ
父の日に形見の筆で父と書く
子供の日鐘馗子から早や孫に
卒寿の母雛の由来をひとくさり
父の忌に貴船の床を予約する
Tシャツの胸に飛び込む子の藪蚊
カラフルになってすててこ市民権
秋夜長仏に本音のひとりごと
からぜきで本音わざわざはずしとく
ジエンド来るまで気儘に生きていく
四月馬鹿かけられ孫と大笑い
大晦日どろんと消えたい大所帯

交野市

中村喜樂

餅3つ去年と同じまだ行ける
燃えながら楽しく歩む老いの坂
老いの坂ちょっと一服茶と遊ぶ
久し振り春闘旗は生きている
職探し大変だろうくじけるな
大阪に日本一のビル開業
天候の不順地球が泣いている
四季のある日本大好き春近い
人世坂上り下りの月明り
大相撲和式横綱芽を期待
早寝した妻の寝言の相手する
プロ野球オープン戦の腕試し
漁師の子魚さばけぬ残念さ
後の数かぞえず今日を精一杯
九十周年みこしを担ぐ我が一句

富田林市

中村恵

カンバスをはみ出すほどの笑い顔
食卓を彩る大盛りの笑顔
とびっきりの笑顔で味方また一人
慈母ひとつ演じるふくよかな笑顔
あそばれているなと笑う秋の風
意味ありげな含み笑いをする女
ルールなどなかったことにする笑顔
その上に笑顔いっぱいおまけする
幸せと勘違いしそうな笑顔
箸二膳転がりたわいなく笑う
思い出し笑いはほどほどの幸せ
本物になるまで笑顔崩さない
印象が今も変わらぬ温い笑み
ありがとうその時華になる笑顔
笑うだけ笑って沈んでゆく夕陽

倉吉市

中村毅

人柄が見える野菜を買いに行く
善い人が増えた気がする震災後
古稀前に古いレールを敷き直す
血液の型で私を決め付ける
役所にも少しは欲しいおもてなし
休耕田揺れる稲穂に嫉妬する
松茸が今年も僕を素通りし
無職です仕事始めは未定です
甘い汁吸えば悪人顔になる
心地良い刺激もとめて美術館
道楽でないと言い張る習い事
試着する前に値札をそっと見る
定年後休み疲れを知りました
年金と祝儀袋が仲違い
散り残る花は余所見をしていたか

上尾市

中村伸子

ライバルが優しい電話掛けてくる
午後の紅茶今日はショパンと飲んでいる
欠席の理由迷っているハガキ
なぐさめてなぐさめられて物忘れ
悲しみは真実少しまぜた嘘
たしなめて抱きしめ忙しいばあば
言い訳はしない空には昼の月
二百歳ショパンが生きていたらです
惜しいなあ俳句も出来るやろうにと
あの礫回り回って我が胸に
ハミングを夫に聞かれてうろたえる
目を閉じてあるはずのない桜の香
娘が少し優しくなってきた不安
間違えはった皆んなで知らん顔をする
言ったけど思ったけれど忘れるの

箕面市

中山春代

アルバムに美人の私ばかりいる
熱の目にうふふ一キロダイエット
自分史の恋のページをふくらます
知っている単語で二歳よくしゃべる
図書館へ通うミニバス桃ルート
お風呂場のようにはいかぬト長調
遅桜わたし一人にバスが来る
手づかみのランチほわーんと野のみどり
狛犬にららワンデイパスポート
券売機うしろの人が口をだす
畦道に赤を極める曼珠沙華
採血の練習台にされている
くちゃくちゃの地方紙を読む野菜便
ちちははが祖母が帰っている　土筆
雪見舞故郷の訛になってゆく

和歌山市

鍋嶋澄子

トルコ石静かな青にこころ寄せ
銀花舞うしんしんと夜は閑なり
まるっこいやさしさ贈る紀州雛
絵手紙ではひふへほほほ贈られる
奥様と呼ばれた頃がなつかしい
降りつづく雨も楽しい母娘たび
おつかれさんと迎えてくれる椅子もあり
旅先のフォトが素直に笑ってる
春の息吹あらたないのち萌えいずる
春浅く山吹の芽はまだ起きず
夢おおく若さ漲る空の青
山法師空にむかってしろい渦
荒波を背にし佇む無人駅
うぬぼれて夕陽と競う曼珠沙華
閻魔さえ慈悲のこころは持ち合わす

倉敷市

難波扶実子

早咲きの花運命を変えられず
十代の波長がうまく読み取れぬ
食材がだんだん母と似てきだす
うす味に心を盛って食卓に
味音痴きっと長生きするでしょう
間隔を十分取って見る鏡
仏壇をきっちり閉めて着替えする
押しかけてみたが金目の物は無し
仕事する形に背すじ丸くなる
両方が支えてきたと思ってる
座右へと置いた初心が見つからず
充電をかぎつけてくるお邪魔虫
書道展誉められたのは額の方
鍵握る人は無言のままで居る
溢れてる肩の力を持て余す

篠山市　二階幸子

ふらふらとしながら要の火を掴む
血管をいろんな薬旅をする
目が物を言ってる母を介護して
家解体遺品でタイムスリップし
永遠に疑問は続く空の青
豪華メンバー意見も中々ゴージャスだ
親し友楽しい毒舌温かい
旧友と喋ればロマン蘇る
世の波に背を押されつつ喜寿に入る
ちらっとでも裏見せる人の温もりが
老い先のもやへ家族が虹くれる
老いた今いろんなブーム頭上とぶ
多趣味持ち満たされ八十路へ良き友と
老い進み野菜畠が従わぬ
玄関に自己満足の花植えて

枚方市　西　きぬ子

虹の橋渡って彼岸へ行きたいな
雨あがり虹が出たよと母が呼ぶ
プライドも優しく抱いて介護され
卒寿迄父は元気に欄間彫り
年金と医療のお蔭で米寿生き
悲しみも苦労も時が幸に変え
初曾孫離乳のおかゆ炊ける幸
台風一過ピッカピッカのお月さま
星野さん予告通りに空に舞う
腹の虫押さえなければ角がたつ
走る事出来ずとも良い歩ければ
地震津波来れば走って逃げるかな
墓参りひととき父母と話合う
流されずノーとはっきり言う勇気
気まぐれに整理しだしてギブアップ

奈良県

西川國治

生と死のクイズ解けないまま米寿
創造の神もおろおろするバイオ
現実のどこを切っても修羅ばかり
むらさきの夢を見させた花名刺
袋から出すと粗末な美辞麗句
深追いをしそうジョークにしておこう
中心を少しずらして言う小言
年上の面子裏から意見する
まっとうに生きた野良着を子に誇る
鬱の日の糸は団子になって行く
あやふやな男へ太い釘を打つ
張りつめた長い二日を脱ぐ喪服
にんげんの底で繋がる愛と憎
悪友がそろそろ来いと言う浄土
七坂を喘ぎつつ来たダイヤ婚

大阪市

西川更紗

前向きに生きて仲間を振り向かす
うれしいな本気で私しかる人
泥くさい父の作業着干してある
わだかまりとけない儘に四季めぐり
故里に歌と絵になる川がある
浜風の香りも入れて里の便
たのしみがあるからプラン立てられる
峠越す命の重さ眩しすぎ
職もなく今日一日の重い風
手抜きして家族揃ってカップ麺
背伸びして暮らす女のヨイトマケ
おばさんのお古が似合う年になり
ガタガタの道でも母は怯まない
出来ちゃったわざわざ親に言って来る
さりげなく褒める言葉に刺があり

四国中央市

西村寛子

遮断機の向こうは流れ急になる
先送りした問題に辞書を買う
立ち入った事を聞きたいのは女
感動を積んで私の一ページ
下駄箱のラジオ昭和が聞こえそう
美容室女の欠片拾てくる
流れ雲追って夫婦の箸二膳
完璧の嘘をからかう赤トンボ
かさぶたを消去しますと菜種梅雨
幸せはこんなものだと第二章
雑魚なりの理念を抱いて立ち眩み
ジャガイモの種に暮らしの慈悲を見る
回れ右すれば明日の風にあう
大根が血になる私の栄養素
振り出しに戻ると雲が割れてくる

鳥取市

能見慶一

自分から作った迷路で生きている
目立たない花車な蔓だが意地がある
木漏れ日の邪気を古道は寄せ付けぬ
祝い事続く美空に振る財布
気が付けば親を追い越す歳と成り
適当に歪んで強い首の骨
寺の鐘半時早い昼告げる
立つ歩く基本動作も異状無し
細やかな気遣いほかに何が要る
ずぼらする暮しがばれる血の検査
座礁せぬように小舟に乗り移る
汚染されなお愛しさの増す星よ
僕よりも血液型に蚊が惚れる
木枯らしが冬めく種を言づける
遠距離の半分ずつの待ち合わせ

三田市

野口晶子

飲み込んだ言葉が胸で浮き沈み
夢一つ叶えば次の欲が出る
達筆で読めぬ悔しいラブレター
好き勝手言わせないわと阿弥陀クジ
渋抜きで柿も私も甘くなる
ささくれた心と頭そっとなで
新生児不安なパパの風呂デビュー
つまずいて弱気な骨を叱る朝
カロリーオフと聞いて追加のビヤホール
反省をする暇もなく明日が来る
写経して仏にすがる難儀な日
泣きわめく事も許した母の膝
どうなった芽生えた恋の行き所
利き酒も5杯目からは同じ味
針の穴あちこち逃げる糸通し

三田市

野口雄次

君と行く光と影のまわり道
夢置いて旅立つ友に送る歌
おいそれと騙されるのかの電話口
停年後飛ぶ鳥落とす友を見る
目も耳もとぎすまされて勝負する
還暦も逃げ足だけは三十代
年金者どこでやりくり消費税
味おんち質より量のバイキング
着ぶくれと言い訳してる妻がいる
帰り道足どり重い負け試合
元とれぬバイキングだと古稀の人
流れ星願いをかけるヒマもなし
陽の当る道に出たいとあせる日々
前世は裸の王と笑う妻
デジタルの波にのれない中高年

神戸市

能勢利子

私の歩く道老母が歩いてる
長生きの母の家系はよく歩く
光る海きっとあそこに神が居る
わくわく感大事に今日も生きている
守る人出来て息子は強くなる
かあさんが留守だと子供寄りつかぬ
子の投げるどんなボールも受け止める
みどり児のこぶしの中にある未来
誰に似た大声で我を通す孫
水族館孫の一声おいしそう
仏壇に飴ドングリがいつの間に
満点の妻になるのは諦めた
ごめんねと言えずに靴を磨く朝
亡夫より素敵な人が見つからぬ
一日の記憶辿って床に着く

南あわじ市

萩原狸月

山もなく谷底もなき夫婦旅
婚活にガラスの靴を持って行く
開拓の汗が泣いてる放棄田
里帰り飲めない婿が気に入らぬ
大安に娘の姓を変える式
老害が椅子を離さぬ名誉欲
家族葬喪中葉書で知る訃報
年賀状ジングルベルを聴きながら
ウール着て風邪のワクチン打って冬
誘い合い投票率を上げに行く
平穏を乱されうれし三ヶ日
巧言に投票をして四年悔い
褒賞の謝辞は決って身に余り
裏門の鍵は諭吉が持っている
苦労などしたくなかった指の節

鳥取県

橋谷靜江

喜びは孫と同行できた旅
海外へでかけ日本の良さを知り
愛犬の散歩朝夕一万歩
水入らず暮していると惚けそうだ
開けずの間沢山できて二人住む
少し暇できて文庫の本に触れ
余生こそ隣近所を大切に
七坂を越えたがまだまだ坂がある
受話器から曾孫の声に癒される
出合っても別れが辛い孫帰る
晩酌で無口な夫が喋りだす
穏やかで平和な暮し望む春
張り切って自分の出来ることをする
エネルギー溜めて山菜取り歩く
また今日も張り切りすぎて肩が凝る

大阪市

橋本典子

散る桜ぼんやり母と空仰ぐ
歳月を母は笑顔に塗り替える
遠まわりだったが妥協の道見える
新しい風を余生に熾したい
探しものこんな所にある不思議
寂しさに耐え古里山海向う足
海に問う我が人生に悔いないか
不器用に手を握られて恋をした
踏み外し踏み外しての今日生きる
認知症母は仏の笑みになり
人生に恋という名の落し穴
エキシビジョン爽やかに舞う天使達
好きなもの最初に食べる癖がある
真央ちゃんの結実の舞い胸刳る
迫りくる山の緑と風の声

大阪府

畑中節子

ボケ水仙我の出番と春を盛る
木の芽和えほんのり淡い春の味
なんでだろ読んでも読んでも消える脳
人生はシナリオの無いある苦労
愛猫の放浪ぐせに梅匂う
初蝶に心惹かれて庭の花
風さえも息をひそめて雪の舞う
誕生日重ね重ねてゆく加齢
独り居の昼餉静かな箸の音
眠られぬ夜のスズ虫子守唄
錦絵の如き城山昼の月
天国の夫待たして日々謳歌
老眼鏡外して脳も一休み
彼岸花暦通りに土手飾る
我が儘な人生ドラマ自主自演

堺市　羽田野　洋介

大声で笑えば福も立ち止まる
酒止めてしみじみと聴く酒の唄
副作用なければ酒もいい薬
あの頃にやる気を出せば今頃は
息抜きはいいが手抜きは許せない
四六時中いい顔出来るはずがない
落し穴掘って自分がはまり込み
ここまでと自分で線を引いておく
有り過ぎても少な過ぎても困る暇
白けるね催促されてする拍手
ここだけの話たちまち羽根が生え
新天地人縁地縁何もなし
正論も時代と共に揺れ動く
耐えること譲る心が生きる道
自分史は凡人のままフィナーレへ

大洲市

花岡順子

万歩計ある日詩人になりすます
辞書を読む目から鱗が落ちてくる
遠浅の海に油断をしてしまう
雑草の強さに夏も冬もない
倦怠期虫はさなぎに成っていた
花が咲くまでに答えを見つけよう
けらけらと笑って桜風に乗る
空を飛ぶのは蝶の姿になってから
温かい言葉にふっと気がゆるむ
笛を吹く母へ逆らったりしない
選択の余地など持たぬ黒は黒
見ないふりばかりしてきた自己嫌悪
自我捨てるなんて自分を捨てること
リセットへ女はときに髪を切る
咲いた日が最後と花火知っている

羽曳野市　濱　口　フ　ジ

孫曾孫だんだん増えるお年玉
わたくしも月と一緒にリバウンド
どっしりの大根足でふんばれる
命がけ蝉も負けてる選挙カー
口実は妻の勘には負けました
ベテランと言われる迄の血の涙
タッチの差犬が助けた事故現場
バイキングまだ子に負けぬ食いっぷり
二度とない今日という日をお大事に
雲間から後光の様な光さす
地蔵様寒さ予防の赤帽子
健康でお世話が出来る有難さ
世話かけず惜しまれて逝く向う岸
今のうち元気な時と旅に出る
働いて余生は趣味で万々歳

吹田市

早泉早人

押し切った主張冷たい風になる
夢のある話をしよう誕生日
脇役も主役もいないボランティア
品格は民ひとりにも国家にも
電池切れ居場所がどこか分からない
本箱に生きた証の僕が居る
少しずつ私を食べてゆく時計
寸分の狂いもなくて発車ベル
釣り舟で浮世の外に転んでる
貧乏もバブルも耐えた力瘤
振り向くと影がやさしくなるのです
飲み物を極めて水にたどりつく
真っ直ぐ生きてきたので折れやすい
持て余すものに自分というこころ
からっぽになればどんなに楽だろう

尼崎市　林　昭三

寒の雨三日続いて孫も見ず
振度計出ない程の恋をする
目立たない通院の道枇杷の花
難問も妻の笑顔で解決す
素っ嬪を自己申告の人気者
転んでも感謝している小難を
貧しくて両親も居て満ちていた
ばあちゃんとお風呂と祈りもみじの手
留守番を猫同情し横に寝る
湯疲れと酒で帰りのバス静か
師の影を踏まず並んで歩いてる
お見舞に気楽に読める本二冊
親子です叱られながら世話になる
春が来た下着のゴムが皆緩い
リーダーはあの人らしい髭が生え

河内長野市

針生和代

七度目の龍年迎えてる元気
老優の表舞台を去る笑顔
点滴へゆっくりいのち喋り出す
初対面なのに息合う屋台酒
修羅いくつ越えてきたのか母米寿
出不精が更新してるパスポート
雑草が天下取ってる大屋敷
廃校となる黒板にありがとう
隣席へすぐ打ち解ける国訛り
原発ゼロ子子孫孫のために待つ
純白の魔物吹雪いて人を呑み
嘘少し散りばめながら生きている
世の中の色に染まった喜寿傘寿
里帰り待ったあの日の上野駅
父母逝った故郷はもう旅の駅

篠山市

稗島照代

縁あって銀髪光る夫婦道
目に見えぬ心の杖が身を守る
善悪の誘い心が寄り分ける
少子化で翁媼の町になり
富士登山お鉢巡りも叶えられ
とことんに勇気出させる褒め言葉
ネクタイが男の誇り背負ってる
御馳走が心の平和盛り上げる
人生の相棒他界趣味に生き
アルバムに家族の歴史詰まってる
雨上がり万緑が冴え眼に褒美
人間が犬に引かれて散歩する
脳散歩辞書と遊んで心満つ
年月が刻んだ皺を伸ばす朝
叱るより諭す言葉に勇気要る

三田市

東内美智子

環境が野暮とハイカラしみこます
じっとしていたら刺される鰻の身
極悪の人にもおふくろさんが居る
寝つけぬと羊数えて尚覚める
顔に布シャンプーされてる生きてます
診察券婦人科だけは隠してる
世の中は謎のトンネルかも知れぬ
まあまあの旦那と家と子供達
友の会全員友とは限らない
星占い恋は実るとこの婆に
きまぐれは寝てる子起こすこともある
人だかりサクラも人か我も人
松茸を手には取ったが又戻す
耳鳴りが好きよ好きよと聞こえたら
落葉でも器量がよけりゃ額の中

生駒市

東山康江

一片の優しさあれば立ち直る
親だからここはへの字で押し黙る
相談もいつか遠のき子の自立
一途だった直向きだった母だった
神様は絡む小指が好きらしい
押し合いで釣られ買いした日の空ろ
なびいては無色になっていく私
私にもこんなに青い空がある
荒れた日は夜がゆっくり降りて来る
膨らんだ餅に昨日を包み込む
千年の大樹もそっと鬱を吐く
雨戸開け絡む昨日を解き放つ
言い訳を積んでこの世を渡り切る
夢積んで積んで明日は黄金色
キラキラが弾んで毬となる明日

橋本市　火口彦太

敬老会フォークダンスでみな笑顔
まずまずの生活出来る有難さ
冬空に領土広げる野心熱
新婚の余熱残して五十年
献金が医療機関を汚染する
老い二人命縮むよ消費税
年金を上げる話は内緒やて
優しい世造るためだと消費税
顔やない優しい妻に生かされる
祭りの夜二人の罠が成就して
安全を売り物にして原発屋
掛けた罠五十年後に倍返し
全力で命を守れＪＲ
目の前の上司とメールする浮気
案山子さんボトル二本で足りまっか

奈良県

菱木誠

海鳴りも地鳴りも越えてきた桜
あの日から私の芯が震えてる
干乾びた臍の緒からも叱られる
生きてきた証しを見せる手術跡
どの的に当たるか銃に聞いとくれ
幸不幸回転ドアで行き違う
戻らない時間スマホに食べられる
湯たんぽの彼がわたしの冬を抱く
切腹の果てはお家の畳替え
青空へ逃げて風船嬉しそう
なぜなぜを言わなくなった大人たち
ぬばたまの夜の匂いに狂わんか
咲けば散る花に嵐のあるように
濃くもなく薄くもなくて汚れてる
下塗りを重ね重ねて艶になる

尾道市

日谷寛

尾道は猫の細道路郎句碑
尾道に俺に似ろよと比翼句碑
かあちゃんがいるんだ鬼もにんげんも
あすを見据えているんだ鬼もにんげんも
根っこはねやさしい鬼もにんげんも
人と鬼おふくろさんの夢を見る
人と鬼いささか遊びすぎてます
戦争はごめんと鬼もにんげんも
死を悼む心は鬼もにんげんも
にんげんに戻ろう雪が降りしきる
にんげんに戻ろう父が哭いている
にんげんに戻ろう母の温い胸
にんげんに戻ると海が凪ぎはじめ
愚痴全部聴かせて妻は逝きました
ありがとう妻には主演女優賞

大阪市

平賀国和

初夢は天馬に乗って富士の山
気休めに引いたみくじに励まされ
ぼんやりと休みを過ごし生き返る
出身は切支丹の地大村市
矢の如し故郷を出て半世紀
留学し日本の良さを思い知る
時巡り輝きを増す彬の句
回り道ぼつぼつ歩き虹に会い
前置きは威勢がよくて尻すぼみ
一人でも味方がいれば生きられる
子のことに思い馳せつつ親子丼
文鳥も籠を出たいと待っている
肩の力抜くと世の中丸く見え
人生のピークは今とネジを巻く
煩悩は生きてる証し鐘を撞く

鳥取県

平木公子

ゼロ歳がにっこり魔法かけてくる
母の日はやっぱり期待してしまう
墓参り残った人に会いに行く
一番の苦労を知らぬ雑魚の中
延命は要らぬと元気だから言う
七十も悪くはないな医者安い
証明書なくても歳に見てくれる
切符買うだけのボタンに時間くう
時間たちメモはパズルになっている
フルムーン服も着馴れたものを着て
バスツアー名刺代りのアメ配る
山桜あんなとこにも居たんだね
退屈の先に退院日が見える
弱点もひっくるめての私です
まあまあの運ではないか皆元気

川口市

福井綾子

おにぎりを若葉の風がうまくする
作者の顔想像しながら読む句集
夏の宵アジサイ色に変化する
生きるとはマヒを背負って車椅子
嘘ついてノミの心臓縮こまり
古希だってまだ青春のど真ん中
どろんこの孫が目指すは甲子園
お昼寝をしようとすればノックあり
老健の転所不安と淋しさと
朝六時施設に起床ベルが鳴る
手押し車押して廊下を行き来する
補聴器の二人の喧嘩面白い
ふる里の餅の形にあるいわれ
不随の身テレビの旅で満たされる
錆止めの五七五に苦労する

和歌山市

福重美子

家訓一妄に人を信じるな
気安さに押した拇印の重さ知る
神様の手から平和が漏れている
笑顔絶えぬ家族と居る至福
仏像の瞳に心覗かれる
賽銭で神の力を借りにゆく
もう一つ欲を出したら踏みはずし
買物をしたが迷子になった杖
時刻表途中下車などしておれぬ
卒寿まで頑張ろ八十路終の坂
遺影にと撮った写真が若すぎる
介護の手ポッカリあけて夫が逝く
本能がスリル求めている隙間
写経した筆で心を洗いたい
黙祷の一分間にある歴史

寝屋川市

福嶋虹舟

冗談にスパイスが効く皮肉
落書に子供心の彩使い
悪がきの鎧の中にある素直
風船の糸が切れそう第九条
梅干になっても女化粧する
よそ行きを着ればオカンもお母様
卒寿まで鬼に会わずに救われる
彼岸花野生の赤で自己主張
しがらみを捨てると明日見えてくる
諦めず磨いて居ます鍋の底
開け閉めに滑がいります古門扉
ご免をば咽で止めてる骨がある
痩蛙錦を飾る夢を見る
長生で知った世間の裏表
よく笑う私に貧乏ついて来る

西宮市　福島弘子

機嫌よく遊んで居てと子に言われ
いつの間にか子等にはらはらさせている
明日がある思うゆとりで楽になり
愛嬌なしせめてとえくぼ呉れた親
凹まぬと月に誓った通夜帰り
捨てる前に洗濯またも捨てられぬ
大家族笑い声さえ五重奏
金平糖ほどの角でも古希の意地
親子だな同じ所で意地を張る
亡母譲り溜めては捨てる包装紙
上品そう言われる白髪悪くない
明暗は予告もなしにやって来る
人伝に亡母を褒められ倍嬉し
ご近所に支えられてる安堵感
春色に染めたい余白まだあまた

高槻市

福田勝治

那智の滝新注連縄に神を喚ぶ
伝統の呼吸を刻む箱根山
故郷に愛の巣作りトキの声
秋祭り棚田の里に笛太鼓
暦見て年賀書く日も脳トレに
除夜の鐘静かに明ける過疎の村
護摩壇の炎と消えろ我が悩み
年男寒ぞら駆ける初恵比寿
ぽつぽつと漁火揺らぐ春の海
世界駆け新鶴マーク活き還る
稀に見る明るい話富士の山
謝罪する雁首揃え悪びれず
パンダの子異国に夢をのこし逝く
ソチで金我が子の様に自慢する
静けさにせせらぎ凌ぐ旅の夜

和歌山市

福呂秀子

梅の花心待ちして凌ぐ寒
思いやり心にゆとり持たされる
白梅に亡父面影庭に見る
今朝もまた亡母エプロン動きだす
携帯が鞄の中で隠れん坊
思い出し笑いで福を呼んでいる
ふかし芋昭和の味が今も好き
謎解きが年重ねても彼方此方と
修正液いらない日日を目標に
ハンカチと共存してる夏の日日
お花見でなごやかさ増す寺の鐘
感情をぶつけた後は苦い水
五七五湯舟の中に置いて来る
同窓会昭和の頃を巻き戻す
夜桜にまだ早過ぎる盛上り

篠山市　藤井　美智子

もう少し燃えていたいな七十路
友がいてライバルも居て元気出す
甘辛を舐めて人生いい味に
聞く耳を大きくみんなの中に居る
ありがとうその一言に心詠む
おもいきり生きたと母は百を越え
みかん色やさしい心にしてくれる
楽あれば苦あり人生百面相
夫婦道筋書き消えた千の風
もう一度聴きたい亡夫の二人酒
愛犬を看取ってつらい雪が舞う
目の中にいつも入れてる孫四人
春風が合格乗せてうちへ吹く
光る朝孫人生の大海へ
古希も越え暮らし小さく老い構え

大阪市

藤田澄子

うらうらに夢の花舞う桜まう
温めて悩んで捨てて忘れゆく
因と縁巡る車の両輪か
空想なの　だから夢なの迷いなの
善と悪鞄につめて櫂を漕ぐ
淡い恋そっと咲かせてそっと散る
言の葉を仏とかわす夜の月
かげろうの影に寄りそう母子草
無常の世傘を閉じたり開いたり
香りさえ水面に映す華の影
過ぎてゆく時間へ影を刻みこむ
口縁をきゅっと結んで言葉噛む
迷い人遊んでお行き癒えるまで
御仏へとつとつ語る胸のうち
芥の日に心のごみも捨てましょう

豊橋市

藤田千休

早春譜樹々はおしゃれのスタンバイ
トンネルを抜ければ春の雪しきり
集落に主役がいない子供の日
目に青葉露出過剰の夏が好き
躍り食い胃からきこえる断末魔
饗応の皿に盛られた下心
満腹の翻意うながす三の膳
温暖化秋がのんびりやってくる
ポケットに紅葉のキップ箕面駅
腑に落ちぬ話に咀嚼くりかえす
連立を利権の糊でくっつかせ
簡単に破る誓いをまた立てる
堅実に生きてチャンスをまた逃がす
適齢期過ぎて規制を緩和する
全没の錆びたナイフを研ぎなおす

大阪市

藤田武人

寅さんも飛び出して来る3D
男は子供いつまでもはしゃぎたい
飲み会のマークで埋まるカレンダー
物言わぬ見本手本がある現場
産声が男を父の顔にする
イルカから嬉しいキスのプレゼント
マニキュアはピンク魔王とデートです
漁火の誘い人魚とすごす夜
触角を立て顔色を探る蟻
情熱が僕の本音を炙り出す
乱筆で書かれた文にある想い
民族を塀で遮る右左
正直な影でそっぽを向いている
結論はもう出ましたかやじろべえ
信じてる止まった針が動くのを

尼崎市

藤田雪菜

ありありと花芽が伸びる雨上がり
ゆっくりと休んだ夜に大地震
ど忘れが私メモ魔にさせました
電池切れハットメールは溜息に
同級生に逢うと自分の歳を知る
春に似合わぬこだわり捨てました
ささやかにユニクロのシャツペアルック
半額のコート私を逃がさない
きらきらと光る恋まだ追っている余生
わざわざに行く当てもない靴磨く
一時は夢を見ました絵画展
合掌で嫌な思い出始末する
コロコロと鳴く虫の音は愛の声
背を越され孫の存在頼もしい
ありがとうこの一言で円満に

河内長野市

藤塚克三

明暗が失せて単調日が長い
読経する迷いしんしん浄化する
痩せ我慢意地っ張りです御手の物
運の良さまず悪友に自慢する
墓地勧誘にまだ元気だと電話切る
えらいこっちゃ悩みの種に芽が出てる
プライドの殻脱ぎ捨ててておむつ穿く
青虫よ俺も消毒されそうだ
都合よく物忘れする茗荷植え
年金を保険枕に妻昼寝
同窓会あのマドンナが杖で来た
懐メロはお経のテンポ有り難や
昔の駄菓子忘年会は盛り上がり
侘びしいねシャッター街に猫二匹
ご破算で願いましては秘密法

岸和田市　藤原昭

幼い日の夢が老後の趣味となり
大当り要らぬ空くじなしが良い
八百万の神だ何とかしてくれる
十代遡れば千人親の親
幸運が私の留守に来たらしい
もっともっと険しかったろ父の山
夢は夢十年前の十年後
亡き友の見られぬ未来生きている
衛星が見た明かりつく日本地図
湯上がりの腕に一本ゴムのあと
白無垢は新郎が着る新世帯
てにをはで揺れる日本語の妙味
空焦がす夕陽に一人大公望
様々な色見えてくる水墨画
浮世絵を油で描いたモネの技

鳥取県

藤原鬼桜

笑えないときも笑って生きている
にんげんの事で悩んでいる夕陽
夢という強いお酒に酔っている
最強の敵はわたしのニヒリズム
泣くがいい笑うがいいと冬の海
破滅する方へわたしを呼ぶわたし
手のひらをかえす私も運命も
うぬぼれた指を一本ずつ洗う
真実になろうなろうとするコトバ
魂へふる哀しみという黄砂
ニンゲンという肩書きの他はなし
他人にはなれぬ私を曳いてゆく
冬銀河　地上はひとの呻き声
いちにちに一度は終の日を思う
思い出をたどれば愛の人ばかり

羽曳野市

藤原大子

ありがとうはマジック人を和ませる
就職が決まり明るい子に戻る
花の香に誘われ少し遠まわり
心まで沈まないよに赤い浮き
ほどほどに忘れて楽になれと天
ミステリー私の明日は天まかせ
どちらとも取れる言葉が味噌らしい
向かい合う目が傲慢を指摘する
年重ね上手になった自己主張
浮き沈み慣れたが頑固変わらない
正直な人なんだろう口ごもる
雑草は根っこに強い意地を持つ
恐いのは私自身にまとう影
お小言も生きてる証栄養剤
明日しょう明日にしょうと嫌なこと

富田林市

古田千華

反戦と平和はいつも一セット
甕の中藍すくすくと育ってる
ざわめきのない街でした無題です
志炎を上げて華の舞
聞分けのよい冬でした晴れ続き
一流の舌でないから騙される
姫脱いで果敢に挑む金メダル
繚乱の薔薇復活の道標
直向きに生きて損得考えず
木枯しのジャズ聴いている胡蝶蘭
定位置に靴を揃えて脱ぐ躾
巻紙はあらあらかしこよく似合う
母さんの小言私の宝です
ソプラノの話声する花の径
遠くても一番近い親心

竹原市

古田比呂子

母さんあのねこんな響きをなつかしむ
お経読む心に飽かけるよう
だいじょうぶ私にかける魔法のことば
おかけなさい切り株そっとささやいた
正念場空限りなく高い
水いっぱい湛え心の海満ちる
子育ては楽しかったよさくらんぼ
墨を磨る心はいつも中庸に
梵鐘の音色ほどけていく心
うなずいて聞いてもらってありがとう
シナリオはみ仏様にいただいた
連凧を心の空に揚げてやる
いいわけをしてると濁る空の青
雷鳴へ肚をすえてるところです
菊薫る日本の秋に起立する

竹原市

古谷節夫

里山に愛さんさんと日が昇る
激流を乗り越え昭和の川を恋う
どん底を愚直に生きて戦中派
ほめられた手相と今日も日なたぼこ
平凡な妻のサインは見落せぬ
6Bで詠む川柳が俺は好き
自画像に掛けてやりたい金メダル
昭和史を生きた証に鶴を折る
休日が続いて後期高齢者
以下余白譲れぬ意地は持ち続け
新聞の活字を拾うメガネ拭く
ふるさとに帰ればこころ満ちる海
教科書を越えて元気に子は育つ
おかげさま今夜も飲めるうまい酒
今日の絵は夕焼け空にきっと着く

河内長野市　穂口正子

オペ室へおっと涙がこぼれそう
長い夢覚めて点滴落ちる音
見舞客沙婆の匂を撒き散らす
病越えブラのしめ付け心地良い
連れ添って希薄になった夫の顔
意気地無し私を盾に生きる夫
怒鳴ってる亭主も老いた風呂上がり
許さへんぶつける石はたんと有る
揉めちゃって前後に座るバス旅行
諸共に老けて夫婦の気味悪さ
乱切りの大根みんな旨く煮え
試着室自分の顔が気にいらん
鏡見てこれが私と言い聞かす
孫帰り無言で食べる日が戻り
気のせいか悲しみ含み咲く桜

大阪市

堀田温子

父は森でかい胡坐の中に居た
割烹着背なのちょうちょが似合う妻
反抗期壁に三つの穴がある
花の下少女おんなの目をしてる
子の方にいつもアンテナ向けている
信号で待つ母さんに日よけ傘
止まらない涙の訳はペットの死
仕入帳ここをこうしてこれで良し
通い帳義理や人情あった頃
人生は曇り八分で晴れが二分
叶うなら愛の賛歌のような恋
ひとつまみ塩で甘さが増す不思議
森ほどの心あの頃あったなら
気にいらん男ばっかり寄ってくる
日が昇る二礼二拍の父でした

倉吉市

堀　かずこ

老いという魔物を箱にカギかける
年の瀬に心が寒い財布まで
さんま焼くねこが一ぴきねらってる
あきらめた心の弱さ身にしみる
ひとり身に秋の夜長は淋しいよ
一人酒淋しすぎます私には
若いねと言われうれしいお世辞でも
少女の絵まるで生きてる目が合った
よくしゃべるうれしい事がありました
四季がある地球は生きているんだね
愛という言葉は甘くせつないね
ささやかな夢を買います宝くじ
陽がのぼる今日もいい事ありそうだ
叱るより許すことばが身にしみる
笑顔っていいねきらきら光ってる

枚方市

堀川静香

音のせぬお金奮発募金箱
長命の手相うらめし資金繰り
御ゆるりとして行きなされ諭吉殿
紙おむつ貰って置こう試供品
長寿国六十・七十・青二才
堂々とバージンロードマタニティ
庄助もユニットバスは絵にならぬ
路上抱擁上げる地球の温暖化
終の住処の庭にロマンの花が咲く
物忘れ談義我も我も盛り上る
連日のお見舞いきっとひまつぶし
腹の虫に三時のおやつせがまれる
デメリットルーペなしでは読めぬ文字
産休育休戻れば冷えた椅子が待つ
菜種梅雨敢えて散歩も粋なもの

松山市

堀部ゆき子

ほのぼのとコラムが醸す人間味
にこやかに闘志は秘めている握手
意気投合価値観ピタリ合ってから
健やかな寝息泥んこだった靴
伸び盛り皿までかじりそうな音
結果より努力の跡をほめてやり
子には子のポリシー妥協線ゆれる
うれしい日に取って置きたい空の青
いい話になって部屋の戸開け放ち
心強いお隣りがいてひとりの灯
乾杯へ下戸のグラスはゆれただけ
ふっ切れぬ迷い磁石は北を指す
明日へ向く靴ピカピカに光らせる
恋を語る老いらくなどと言うなかれ
燃え尽きる迄をおんなでいたい紅

福岡県

本田さくら

幾何学を誰が教えた蜘蛛の網
雷音に沖縄の基地ふとよぎる
花嫁の服に妖精見えかくれ
傷心のわが身に刺さる鎌の月
言い訳のあとのコーヒーほろ苦く
古希すぎる牛歩でたまに傷を負う
愛し子を見るママの瞳はちひろの絵
放射能見えず匂わずサスペンス
竿の蜘蛛ごめん洗濯干す時間
安保反対若い情熱燃えた日々
任務終え案山子一服お茶を飲む
亡父亡母は元気かでんわしてみたい
原発事故想いこけしの目に涙
朝日さす廊下の汚れ陽が叱る
孫が好きときどきタマの方が好き

大阪市

本田智彦

山頭火旅に宿って詩が生まれ
静と動加齢が動を遠ざける
輪になって温い扉を開けて呑む
二月堂二人仲良く火の粉あび
欲の皮走る野心に鈴つける
アベノミクス欲ボケしてはいけません
連れ合いも近頃旅に出たがらぬ
講演よりもアドリブが受けている
二次会は肩の凝らない仲間たち
ふっくらは私の魅力毒も棲む
試されているとは知らず自慢する
うぬぼれを積むと自分を見失なう
浮き立った仮面の男見抜けない
日本人春夏秋冬生きる知恵
ときめきをさまざま抱いて生きている

寝屋川市

本田みちる

もう飼わぬ言いつつ三度犬供養
遊んでる時の時計はよく進む
ほどほどを選んで一日を生きる
楽な方へ傾いていく不精者
煩悩がまさか余生で増えるとは
波立てぬ秘訣私が貝になる
ぽっかりと記憶が飛んでうろたえる
赤ちゃんの一歩が天下取るさわぎ
乳呑み児のまわり空気が丸くなる
おみそ汁気分次第で味微妙
まっすぐな願いサンタがきっと来る
背負うもの減らすと暮し楽しめる
見ないふりする優しさで長つづき
天使にも鬼にもなってする介護
人間に忘れるという得意技

寝屋川市　本間陽

おとり置き大事にしすぎ馬むすめ
つい欲が走って買った福袋
宝くじ当たれば未来バラ色だ
キリギリス遊んで生きて蟻の餌
シーソーにはしゃいで乗る老いた私
老いらくの恋が実るかグラウンド
ひそかなる願いこの恋実るかな
孫が云う好きと嫌いは紙一重
流れ星ながめて祈る宝くじ
夜そっと私を撫る母は去(い)ぬ
時すぎて辛い別れも想い出に
ダイエットたてた誓は夢の中
おさい銭あつめて神も笑ってる
あーいやだ夫の顔のうす笑い
悪乗りでついしゃべった隠し金

神戸市

前川千津子

みちのくの冬を案じてますかしこ
瓦礫みて軽い口など慎もう
菜の花が咲きましたよ仏さん
いっぱいの祈り重たい絵馬である
一・一七忘れることのない姿
好日の珈琲第九を聴きながら
まぼろしの袋から出す旅プラン
一輪の梅は祈りの香を放つ
山桃も終わり静かな城下街
野球なら故障リストの中でした
青空に美人と並ぶ六地蔵
星空を私の脳へお借りする
踏みしめて登る山ガールの気迫
エネルギー使い果した日曜日
珈琲が沸きましたペンこの辺で

大阪市　前川善之

健康の秘訣笑顔と教えられ
東北に鎮魂込めた夏祭り
節電か熱中症か熱い夏
アベノミクス言葉踊るも見えてこぬ
改憲と増税僕のアレルギー
黄金色にマイク光ってカネ三つ
原発の恐さ知りつつ再稼働
夢を見て夢を掴めず捨て切れず
原発は無ければ無いで知恵が出る
極楽なら行って見たいがお呼びない
維新の会国を変えるとよう言うわ
バスツアー一粒の飴癒す友
五輪の和世界を結ぶ夏祭
無い知恵を絞って見ても出るは汗
美人でも喜怒哀楽が顔に出る

岡山市

前田恵美子

旅の夢綿毛に乗って空を飛ぶ
過去形で話をするのはやめました
干し柿に祖母思い出し皮も干す
自信まどまったくなくて度胸だけ
四十年同じおせちで味伝え
ゆっくりと自分の歩幅通したい
迷ったら沈まぬように力抜く
ピンチにはチャンスの新芽のぞいてる
主婦として家族の隙間埋めて生き
無駄でいいやりたい事をやってみる
幸せは普通の事ができること
子守唄歌って婆は眠くなる
安心は家族の笑顔見てる時
生き方は上手じゃないが本気です
第六感信じ今年も歩き出す

八尾市

前田紀雄

梅香る日差しに映える大阪城
花満開税は蕾のままで良い
改革は痛みと変えて読んでます
晴れて句碑大阪城に鶴彬
この不況風見鶏では治らない
箪笥預金遺言には書きません
父の背に優るものなしありがとう
花は色人は心で生きている
ロボットのコピー私は認めない
梯子して無重力になり帰宅
裏切られ全島民が燃えてます
弔辞は丁寧に祝辞は元気に
心地よい眠りのために布団干す
毎日が暗いニュースに昼寝する
これ以上捨てれば自分が残らない

和歌山市

前田真弓

天と地の距離あたためて慕い切る
絞り切る檸檬でこころ落ちつかせ
錯覚であろうと夢を抱きしめる
耐えてなお咲いて椿は朱をこぼす
深爪の疼きへ愛が包めない
約束の小指も揺れて髪を梳く
偲ぶほど春の底から突きあげる
身の丈に添えば波紋も気にならず
春風よ心を読んでくれますか
遭遇の思わず息を呑む夕陽
気高くて知的な祖母の香を偲ぶ
刻々と激しく動き出す鼓動
淡雪のような余韻が頬に棲む
ぬくもりが伝わってくる絵手紙よ
炎の風に片道切符あずけよう

日置市

前田洋子

大人かと改められて口ごもる
言い合える友とおんなじ舌になる
居留守だね第六感の苦笑い
常識を盾に空気が澱みだす
引き出しに入れた秘密が落ち着かぬ
胸の戸をこの人ならば開けていい
父ちゃんは呑気だけれどやはり核
抜け殻の大きな家に母ひとり
姿見はこの頃ヘソを曲げている
三日後に律儀にやって来る疲労
役目終え葉っぱ自由な舞い姿
新薬が点してくれる希望の灯
百歳のマシュマロみたい童歌
おはようは路地を明るい彩にする
青空をいつもポッケに入れてある

篠山市　前中勝

農閑期貯めてみちのく二人旅
流行を追って今年は裏に着る
妻と娘の他は呉れない義理のチョコ
旅行会足と腰とに聞いてから
銭稼ぐ人嘘をつくのが上手い人
無駄話しながら鼻毛読んでいる
後五つ孫のサービス肩叩き
満面の妻の笑顔が眩しすぎ
老いてなお初心忘れぬ若作り
憧れたとおりになった我が人生
生真面目で酒も女も不得手です
定年は専業農家の始発駅
猫の手が単身赴任で一人減り
一輪の花が嬉しい無人駅
焦らずにぼちぼち行こうぜ八十路坂

佐賀県

真島久美子

ピンクよりピンクになって逢いに行く
予防接種のような恋なら済みました
指切りという曖昧な契約書
花嵐小さくなってゆく人と
生きてゆく上手に尻尾振りながら
クエスチョンマークの形して眠る
取り外し可能と書いてある背中
窓開けて月に私を覗かせる
どれくらい憎いか聞いてくる雨だ
折り紙の白が迷ってばかりいる
ライオンになろうなろうと痩せてゆく
淋しくて後片付けが出来ません
人嫌い雑音ばかり拾う耳
ピノキオになった哀しい嘘だった
太陽の高さで笑う生きている

大阪市

増田啓次

居酒屋で二人の仲を覗きみる
混浴で女の気配につい長湯
壇蜜の紅差す口に我忘れ
手を上げてかけ寄りみれば知らぬ女
新しい門出を祝う赤い飯
二人してサインで走り甲子園
添い寝して孫より先に眠り込む
住吉の桜の名所犬も知る
寄せ書に日の丸背負い涙かれ
妙齢の美女に見とれて乗り過す
日溜りの梅一輪に鶯も
阪神は草食系の虎を飼い
縁結び信じる人に赤い糸
ウインクに見惚れていれば睫毛落ち
震災で咄嗟の断に生死わけ

岸和田市

増田隆昭

赤ちゃんの笑顔は神の姿かも
子に注ぐ愛は見返り求めない
治療より予防へ日々の一万歩
断捨離へ未然ばっさり切り捨てる
逃げなくて良かったやっと薄明かり
延命措置不要と遺書に書いておく
税関に行李覗かれ旅終る
手入れした汗に応えるナスの艶
幽玄の世界に浸る古寺の庭
人間の都合で神を弄ぶ
伸びたゴムお前も元に戻れぬか
禁煙の決意に唇が愚図る
明日も又予定老いてる暇がない
無常感ひしひし友の通夜帰り
桜見る人の足音アンダンテ

山口市

増田めだか

人間をランク付けして軋み出す
風評が過熱していくペンの先
ゼロからのスタート恐いものは無い
落書きに人間の原点がある
人間を信じ一本の道がある
農の道父の背中にある未来
真央ちゃんの四回転に挑む意地
母の胸飛び立つ子らの助走する
飽食でメタボになったかぐや姫
躓いた石をにらんでいるカラス
ラジオ鳴る一人笑いが多くなる
薬ならもう飲まないと孤独な背
自分から逃げ男に明日はない
一人居命の音を聞いている
裏切りの時を刻んだイヤリング

堺市

増田わこう

ローン済みぼちぼちけじめつける歳
子が先に残る荒家老い二人
三パーで大山鳴動走る客
正義漢ぶりっこ借金八億円
軍事費は何処も白蟻巣を作る
民主政治ねじれがないと独裁だ
政治批判できる川柳醍醐味だ
新議員野次と拍手はうまくなり
少子化は歪んだ政治写してる
血税を籠で掬うかざざ漏れや
アベノミクスそろそろボロが見え隠れ
川柳に情けも針も隠されて
軍隊は新型兵器持ちたがり
大阪都カジノが看板さびしいね
老いた木も若葉青葉にかこまれて

米子市

馬田みどり

幸せをつかめるように腕鍛え
きっかけを求めあちこち糸をたれ
初日の出違うお日さま顔を出す
雪道のどこかに春のドアがある
お開きに名残惜しげなふりをする
空っぽの弁当箱が無事帰宅
日本の医療費憂いうがいする
大山を飾っていますうちの窓
安物の時計も同じ大晦日
音痴でも上手な歌はよくわかる
気休めを避難袋に入れておく
腹の虫逃げたか呼吸楽になる
神有月覗いてみたい会議録
一日が過ぎて余命が減っていく
運悪い魚が皿に乗っている

神戸市

松井文香

雅号付けて飛躍信じる夢想花
尊敬がいつしか淡い片想い
細い目でモナリザよりも良い笑顔
マイデスク素敵なポエム湧く泉
もう一人の自分に出会う遍路旅
一呼吸待てば心が凪いでいた
踏み台になってあげますお人好し
被災地の未だ不明に痛む胸
幸せになるため生きているのです
短所だとずっと思っていた長所
八方美人ピント合せはお手のもの
念ずれば花開く事知りました
派手な服吊るせばパッと春が来る
スマイルが合言葉ですマイホーム
満願は夫婦遍路の一〇八寺

岸和田市

松浦英夫

薄れゆく視力最後に見た夕陽
障害を受け入れそしてリスタート
指先から広がる世界点字読む
白杖にこの身託して無人駅
カッコーに守られ渡る交差点
伴走のロープとフルのゴール踏む
見えぬのに自転車に乗る夢をみる
音声のワープロで書く年賀状
初孫の顔の輪郭なぞる指
凛として信念曲げず彬の句
自分しか出来ないものを模索する
まだ残る反骨が世にもの申す
バイキング胃には無断で皿に盛る
父ここで泣くと書かれた式次第
原風景唱歌の中の山や川

山鹿市

松岡純子

ふる里の野山に母の笑顔あり
あの時の母のひと言今もなお
煮ころがしとてもかなわぬ母の味
鏡見て笑顔こしらえ出かけ行く
省みて言えぬ身なれど小言いい
我心紫陽花色に七変化
麦の秋いちめん黄金の豊かなり
しあわせを喉で奏でるミケとタマ
人よりも子供の躾上手いミケ
良かったな平和日本に生まれおち
五十肩夫の手借り帯結び
淋しさを意地でかくした男の背
お出かけを徘徊してると言われてる
徘徊じゃないのよ実は恋してる
夕日あび足長になる影ぼうし

寝屋川市

松熊克衛

父のごと老いを生きんと見る遺影
頷いてくれる人いる望み持つ
部下のミスわが身に鞭を打つけじめ
乗り越えて神の存在知るピンチ
消灯の枕に今日の罪が待つ
一歩出て見つけた明日へつなぐ道
懐の淋しさ見せぬえびす顔
普段着のままで出かける初対面
転ぶたび大地に根づくど根性
盗み取れと誰も秘訣を教えない
繁盛する店から学ぶ処世術
偉い人になれとは言えぬ親である
相棒の両手が包む僕のミス
ありがとうごめんで解いていくねじれ
昇る日の光にふわり包まれる

尼崎市

松下比ろ志

花と人春待つ心が通い合う
翔ぼうよ友よ綺麗な空が待っている
春雷や友情に酔い酒に酔う
さっぱりした男で過去を振り向かぬ
花と会い友と出合って風光る
花見宴友良し花佳し酒も好し
友だから真正面から物を言う
ＯＢ会枯木に花を咲かせ合う
古写真と禿げた頭が繋がらぬ
同じ昔を語る仲間がいて楽し
廃校に偲ぶ師の影友の影
雨垂れは心を癒す雨の歌
友情は真っ直ぐ胸へ伸びて来る
寒月に浮ぶ友あり震災忌
ふる里の駅に変らぬ空がある

四日市市

松蔦聖一

風は友　冷たさも僕には優し
季節だって切れているのかもしれない
ロックンロール踊る背中で膝を抱く
散らかした思考にかかる夜の霧
蝙蝠になれない闇の入り口
箒星消えて　ひび割れた孤独
負けたりはしないたった一人のコンクール
千里眼で覗いた先にひきこもる
邪魔です　そこは私の滑走路
いまさら変えられるものじゃないワタシ
走るだけ走ってその後はさくら
立ち場なんていらない甘えない　きっと
脱ぎすてて気付く真っ白なプライド
塩少々足してありがとうの手紙
君がいたから綺麗な灰になれました

大阪市

松田聰

信号を守らぬ親を子が見てる
幸せがどこにあるのか気づかない
飼主を従え散歩してる犬
好かん人に優しくされて身構える
油断して腰のまわりは浮き袋
気がつけば湿布の香る妻となり
映画館隣のおやつ耳ざわり
良い意見出るのは会議済んでから
からまれてからみかえした酔っぱらい
飼主と同じ顔しているペット
大掃除アルバム見つけ終わらない
マスクして化粧ごまかす主婦の知恵
頑張れと言うだけの人無責任
九条をアンパンマンも愛してた
ロボットに掃除を任せ昼寝する

大阪市

松本あや子

縄文杉生きる力をくれました
まなうらに摩文仁の丘が離れない
ランララン命が唄う春の坂
錯覚を笑ってくれた内視鏡
あたらしい服だな恋をしているな
やんわりと褒めてお尻を叩く妻
地下街で迷い地上で又迷う
ハンドルを取られましたと酒が言う
オレオレの汚い手からのがれよう
いじめかな沈んだ顔で子が帰る
チョー怖い誰でも良いというナイフ
百均で今風も買うエトセトラ
花は咲くテレビと合唱しています
高根の花です鯨肉もわたくしも
生き方の薬となったみつをの詩

雲南市

松本はるみ

毒舌が恋しくなった冬の天
無職です春を満喫して居ます
この辺で浮いた話を聞かそうか
わたしにはわたしのリズム花を択る
書きとめた話の一行罪と罰
誤算でも明るい日和りの回り道
舞台では喜劇役者という辛さ
返り咲く桜に罪は更になし
昭和一桁昔の地図に責められる
不足言う隙もなかった戦中派
人の世へ媚びは売らない山桜
白い雲基地と言う名の負の掟
ほどほどの幸せと言う膝頭
かけひきのいらぬ友情星月夜
羽搏いて鳩はしずかに雲になる

倉吉市

松本理子

子育ての広場で知恵が行き来する
できること明日に日延べはやめておく
「あと頼む」崩れた文字のメモに泣く
抑え利かないどよめくハート放り投げ
支え合う心のボタン離せない
中七に味噌利かす技塗り潰す
大豆パワー弾けた味噌が胃に染みる
腰据えぬ動くハートに押さえなし
核のゴミ処分の行方つかめない
死刑囚遺族の涙拭えるか
ゆるい仲片意地張らず心地いい
レッテルの一人歩きが部下潰す
背に刺さる寒のもどりが身にこたえ
口にせず辛い思いを灰にする
舌を焼き加減がわかるさめぬ距離

守口市　真鍋心平太

肉筆の母の手紙が宝物
見晴らしはなけれど君と吉田山
後がない半年定期明日から
図書館を電子の箱で持ち歩く
あうんとは信ずることぞ南大門
天平のタイムカプセル正倉院
左手の痺れは老いの始まりか
完歩した守口四条十里かな
ひらパーも菊人形もサバイバル
おけいはんどんどん変わる中之島
タコならば八本足で抱きしめる
笑顔から涙に変るいい話
北斎の富士に来るなと書いてある
まどろんで余は百獣の王である
ほんものの息子は電話して来ない

加東市

丸山一之

新成人未来の的に矢を放つ
過疎地にも春来る水車回る音
ファッションの夏を彩る海開き
老いひとり労いに来る赤トンボ
花束の置かれた路肩冬の風
独酌で一人つぶやく年の暮れ
春夏秋冬しっかり守る鬼瓦
炊きたての新米ですよ仏さま
薬より効くお見舞の温かさ
頂点に立てば四方の風当り
心がけ次第で決まる運不運
言訳の奥に笑みあり峠あり
それぞれの人には人の守備がある
悠久のあしたに生きる道なかば
泣き笑いあなたお前と五十年

伊那市

丸山健三

太陽の采配両手で受け止める
健康を下さい空へでかく書く
胎内に大きな朝陽ありがとう
戦いはこれから新芽は伸びている
奇妙だね人に疲れて人恋し
生きづらい赤エンピツをまた削る
歳月が甘い渋いを選り分ける
色のない微生物かもウツ社会
嘘嘘嘘長くつかれた一日
言い訳のその先にある綿ぼこり
悲しみが混み合っているカレンダー
語り部の波に祈りの炎を埋める
信号は黄色一人の風当り
満月も虹も遠いが誕生日
掌の冬が去ったら笑おうか

宝塚市　丸山孔一

面影を映す水面に石投げる
恋の鍵捨てて閉め切る過去の窓
絶対に妻に研がせぬ出刃包丁
記念日を覚えていたと褒められる
この蟻も空飛ぶ夢を見るのかな
想い出を遠くへ流す舟が欲し
漂流の心を寄せる港欲し
脚注を追いなるほどと思う秋
設計図画いて生れた子でもなし
おい女房長生きしては本心か
想像は無限の世界落語聞く
子に語る程の背中と思えるか
下を向く友の背中へ無言の手
亡き後を言えば平気ですと妻
忘れ得ぬ人の名そっと水で書く

阿波市　三浦千津子

大泣きをするには空が青すぎる
生きて行く限りは虹を抱き続け
立ち直る背に追風という味方
歳月がふんわり頑固丸くさせ
天気晴朗疑うことは止めにする
一抜けを思う虚ろな時間帯
ちょこまかな男と恋は語れない
恋序曲愛の怖さはまだ知らぬ
有る振りも無い振りもして内助の功
客扱いせぬ持て成しが温かい
奥の手はまさかの時の安全牌
春よ来い温い話を手土産に
私に応援歌花の芽が伸びる
粗方が終り静かな波がしら
人生の肥やしとなった回り道

神戸市

みぎわはな

思案蛇行わたしも蟻も蛞蝓も
花は散る愛を流してとめどなく
苦悩する色かピカソの青の時代（とき）
豊満な胸は知らずやモジリアニ
耳の孔ほじり真実聴きわける
鼻の穴ひらき真実嗅ぎ分ける
目の玉を磨き真実見きわめる
腕鍛え強きを挫き弱者抱く
鯉幟胸に一物なき潔さ
酒やよし酒に男は磨かれる
飽食と飢餓の狭間に草生う田
駆けて来る夏熱い風の接吻
十人十色ひとの色には染まらない
配色の工夫人生の彩り
別々の色を合わせて虹の橋

熱海市　三谷圭角

梅まつり足湯に浸かり憂さ忘れ
お帰りと迎えて呉れる幸せよ
脹ら脛一里歩いて七日腫れ
便りなどせぬがポストは覗き見る
敬老会衣裳で若さ競い合い
わらべ歌叙情を唄う会楽し
家宝です妻の家計簿五十年
脛に疵持って人間丸くなる
健康を自慢した友先に逝く
老医言う化粧と懸想で元気出る
巧言の不仁が仕切るこの世かな
夜半目覚め昼寝し過ぎの老いの床
同期会八十路過ぎても世を嘆く
恒産は無いが赤心だけはある
白内障術後の景色別世界

高槻市　三谷白黒

聞こえるよ耳遠いのに鼾だけ
寝ない児の睡眠菓子は無いものか
困るけど無いのも不安反抗期
何事も便利過ぎるとすぐ故障
二人だけ平穏無事なお正月
今日もまた眼鏡捜して五分間
孫達は立ってるだけで名役者
ちょっと待て孫が先です何事も
お二階に何しに来たか忘れてる
多過ぎる高齢ランチ頼みたい
孫多く楽しみ多い老後です
婆ちゃんは子離れできず忙しい
パソコンに口三味線は効かぬ囲碁
おはようは金のかからぬ潤滑油
おしゃべりが一対十の夫婦です

山鹿市

三谷直男

お前らに昭和ひとけただまされぬ
安倍のウイルス日本国中恥知らず
心からお詫び毎年流行語
政治屋の低劣加減想定内
アメリカにへつらう外交もうやめろ
日の丸の裏にはためく星条旗
俺は俺政府は政府好きにする
楽しみは家族以外と家族風呂
喜寿過ぎて不倫とされずあら元気
まるまると太ったノラが大あくび
この街はよってたかってノラにエサ
どう見てもノラのほうが一枚上
春らんまん桜ばかりがえばってる
一年中満開なのは姥桜
この日本まともな男俺ひとり

高知市　三谷待太郎

一滴も大河も神の涙から
集落も大河もさすが冬枯れて
アユ達よ清流返せと言ってみて
古池や基準値超えて跳び込めず
庭狭くセミも激しく切ながり
ニュートンさん腹や臀肉引っぱらないで
年重ね化けてきた身をなぞる齢
黒は白赤信号は青信号
負け惜しみそれが酒肴のいごっそう
小病みして空の青さよ過去映す
齢老いて長いえにしに似合う旅
惚けごっこいずれ本番スリル満喫
他所の孫そりゃそうだけど宝もん
年明けて花咲かそうか繭しよか
地の果ての旅も慮外に里住まい

河内長野市

道上芳子

紅葉であなたの瞳紅く燃え
鏡からはみ出し過ぎる妻の顔
間違って薬飲みすぎ救急車
洗濯をしてもとれない恋のしみ
口元気足腰だけがけがにあう
くじ引で使いたくない運の量
我が人生行く手さえぎる男運
道はずれ妻ある人に思い寄せ
太りすぎボタン外れて中身出る
盗み食いそっと戻して知らん顔
しおらしい愚妻のはずが最強へ
どろ縄で楽をしょうとて間に合わず
ばあちゃんが遊び盛んと孫ねたむ
計算を間違えていた離婚劇
こわいなあ夏が近づく電気代

鹿島市

光武悦子

イニシャルを刻んだ幹の育ち過ぎ
野仏に一礼をして朝散歩
のび上る事は思わぬ福寿草
まるくなる事です芋の露が言う
つゆ草の露に濡れたくまわり道
年輪を豊かに重ね友すずし
飄々としてユーモアの人老いず
孫が張り切るひと言だけのほめ言葉
クラス会消息通がいて弾み
都より八十路乙女の長電話
友を迎えうからを迎え鄙に老い
燗番もほろ酔いごこち宴は半ば
下り坂とは言え海の景開け
鉢植えに日暮れ水遣る孫と住み
山びこは嬉しごめんね　ありがとう

井原市

光守たもつ

ただいまと帰れる家がある平和
妥協するつもりで窓を少し開け
心のすき間のぞき込んでる内視鏡
記念切手から飛び出してくる夕陽
いい訳の向こうから見えてくる本音
皮むけば本音が出ますゆで玉子
空海と二人で歩く遍路道
小窓から笑いがもれてくる平和
物差しで時どき測る幸福度
銃口が新聞の穴からのぞく
スイッチを切っても続く妻の愚痴
左遷地の酒がうまくて帰れない
胸のすき間に無策をくいるホッチキス
新聞を開くと洩れる血の臭い
散骨を予約している宇宙船

豊中市

南　正代

噛めぬ歯と聞こえぬ耳の共白髪
パンに座を譲り渡したお味噌汁
ママチャリの籠で揺れてるバースデー
せっかちもとろり弱火の京料理
ストレスの芽吹きも知らぬ泥あそび
手のひらに母と同じのしわがある
金木犀帰らぬ人を待ちつづけ
部屋の壁春待ち色に貼り替える
曾孫まで私の背丈越し傘寿
缶詰に戦後の鯨眠っている
小春日に日なたぼっこの足の裏
そら豆の湯気のむこうに母の顔
年賀状犬も家族に名をつらね
てこずった子が孫連れて墓まいり
ローソクの炎が過去を呼びもどす

尼崎市

宮﨑咲貴

花は愛で梅は熟して膳で咲く
咲く花いっとき催花雨寝ててんか
贅と見たか膳の馳走にびびる夫
万人の揺らぐ心を花はみる
偏屈と拗ねて生きるも小気味よし
生来の怠惰いいかと来世まで
咎められ済まぬ済まぬと口先で
買いあさりいつか我が身も骨董品
内気だと前おきしつつ本音言い
余生かけ手づくり年賀しみじみと
吐いてみて弱音どころか意志頑固
たまさかで如何程歴史変ったか
この世をば悔いなく生きて蓮華の座
おさえても隠せぬほてりもしかして
速贄を狙うやからはどこの誰

豊中市

宮田輝

うちの時計癖で一点多く打つ
やっぱりな静かにゃ過ぎぬ暮し向き
六十年のクラス会には五人しか
ぐい呑みか猪口か相手の眼で決める
マー君の記録日本の破天荒
寄ると触るとガンか保険か年金か
割り切れる偶数ちょっと優しげに
広島長崎そこがぎりぎり日本国
自分史とぴたり重なるあの昭和
そこから先は触れるな俺の沽券だぞ
粒よりと聴いて背筋が固くなる
約束を守り切れずに今があり
禮節を知って暮しが成り立たぬ
かしこみは申さず拍手のみ届け
焼野原敗戦勅語盂蘭盆会

岸和田市

宮野みつ江

チャンス今滾る思いの紅を引く
守りから攻めへと鮮やかに女
ああしんど皆に元気を上げすぎて
断捨離は出来ずごちゃごちゃ生きてます
光らないままにラストが近くなる
雲はいいなあシナリオの無い風が吹く
どんくさい彼の一途にほだされて
いい話だけを詰め込む箱である
縄を綯うように夫婦の歴史編む
とって返すことは出来ない水車
君の住む方角淡い虹かかる
じれったい私に影が前を行く
覚悟きめその他大勢から抜ける
待って待ってドライフラワーになる私
あの日から宝石箱が歌わない

米子市

見山温子

言い返し後の言葉はごめんねと
うぐいすが片言で鳴き春告げる
雪解け水春だ春だと歌ってる
雪が止みしだれた竹が背をのばす
点滴が明日へと命つないでる
破れ障子当張りをする年の暮れ
フルムーン期待するほど事もない
朝帰り無口な男よく喋る
一言すぎ三日も口を閉ざしてる
彼岸の入り雪掻きもする墓掃除
梅干しとラッキョの夕餉いい暮し
客が来る玄関に花生けておく
来世も女がいいと母が言う
施設の母せめての絆爪を切る
家計簿を赤く染めるは消費税

亀山市

宮村典子

玄関を開けると広い海だった
肩の力抜いても泳げない時が
体内時計が極限を指している
人脈の深いところにある痒み
汚れたら拭く簡単なことなのに
リアルな影だあかんべえをしている
泥を吐くとき何杯も水を飲む
死んだように眠る空気のない部屋で
風向きが変わった　箸は箸置きに
しあわせも不幸も冬の滑り台
いのちの坂をいっしょに降りてゆくニトロ
心療内科に通うG線上のアリア
ポケットの夕陽が沈むことはない
人間が写ると熱くなる鏡
愛が降るいのちの森に帰りたい

河内長野市

宮守正博

またとない妻が三日の旅に出る
線香の煙が染みる親不孝
クラス会幸せ芝居する彼女
紙おむつ母のプライド一つ捨て
噛み合わぬはずだあいつが噛んでいた
百均へベンツで何を買いにきた
ボーナス日妻の日傘が弾んでる
好きになることと愛との違い知る
咳一つかけよる妻がいてくれる
午前様ポチは吠えない妻吠える
すきま風背にして愚痴も言わぬ母
銭ですむことなら話聞きましょう
孫のチョキおくれてパアを出してやる
鍵穴の向こうに妻が正座する
別れ際またねと軽い嘘を吐く

泉佐野市

向井　清

公平に分けても揉める遺産分け
正論を吐くばっかりで踊ってる
太っ腹と言われた頃は交際費
うちの鬼薬十個も飲んでいる
じっくりと聞くと息子も悩んでる
あいさつの中に天狗の手前味噌
一万歩ストップさせる藤の花
年金を目当てに孫が顔を出す
汗流す顔は一番男前
人間の器量が分かる揉めた後
済んでからいつもガタガタ言う男
シナリオは夫が先に逝く予定
手を休め虹を見上げる作業服
仲良しも金が絡んでから疎遠
軽い気で受けた話が重くなる

岐阜市

武藤敏子

杖曳いて咲く薄墨に背を正す

鈍行に乗り換えました古希の駅

ああ夫婦ときには愛がショートする

ゼロ歳を百寿があやす家族の絵

ヘルパーと握手介護と言ういくさ

モンペ脱ぐ母にも白いふくらはぎ

野良着にも朝寝をさせた雨の音

刈り終えた安堵夕陽を目に仕舞う

雑草に似たしぶとさを武器に生き

お洒落してみてもニッコリせぬ鏡

明日の絵に足そう円空佛の笑み

老い確かびっくり水を注ぎ合い

荷崩れを直し金婚折り返す

リハビリへ妻が手を添え檄も添え

生かされてまだ役割のあるいのち

今治市

村上久美

源流の一滴ながーい旅になる
木の葉ひとひら蹤くほど渦の中
癒し合える筈で重ねるさみしい手
えんぴつを酔わせ本音を吐かせよう
愛も憎も枯れてしまえばこれっぽち
朽ちて尚結びなおしてきた絆
唇に異郷の雨のほろ苦し
身を庇う傘は斜めに半びらき
生乾きで仕舞った過去のカビ臭さ
幻影が今も手を振る無人駅
追憶の塵を掃えば枯葉いろ
夕日さえ沈む刹那は空焦がす
焼き捨てて心に積もる灰の嵩
消しきった筈の火種がまだ熱い
生きんとて今日も繕う蜘蛛の網

神戸市

村上氷筆

うまれでたいのちをひしとだくいのち
安珍が清姫を追うハイウエー
落丁にする失恋の一ページ
冬は嫌い黙祷ばかり連れてくる
ひとひらの雲がつないでゆく輪廻
ロンドンは雨かテレビを消して寝る
$\sqrt{3}$の数を連ねるハイボール
砂時計男ひとりを過去にする
きらきらと愛を奏でる無限花序
無礼にもボクを輪切りにCTスキャン
掛け替えない過去が瓦礫の底で哭く
更地にも明日を信じる草芽生く
無機質の砂がいのちを語り出す
重さ深さ北の大地の雪月花
百骸九竅(ひゃくがいきゅうきょう)さすらいの果て臥す花野

奈良県

村山佳子

笑うまで老母と桜を見て歩く
母の愚痴聞いてあげればよかったな
亡父の倍生きて迎える夏の坂
重い荷を下ろすとたぶん淋しかろ
クレープの皮に包まれたい傷だ
心配を両手合わせて和らげる
遣り繰りが下手で膨らむ小銭入れ
矢印が時どき消えるから怖い
抽斗にいっぱい溜めてある未熟
私がわたくしなりに挑む日日
年金がもっとあればと誕生日
鬱捨てて光差し込む瓶の底
仕合せを普通電車で噛みしめる
荒塩へ生命線が太く浮く
命名に幸多かれと祈る筆

つくば市

毛利由美

最寄り駅三つもあって皆遠い
心臓に悪いＥＴＣのバー
日常で懲りております３Ｄ
証明写真700円の顔が撮れ
投手戦見ている方はつまらない
お隣の犬がお隣より頼り
あくまでも偽りのないペットの目
自首をするように出てきた探し物
廃業と書いた潔い閉店
おばさんに呆気なくなる立ち姿
乗り越した非日常の駅に立つ
学校もしずかに歳をとっている
ＬＥＤも電気がないと光らない
ネット上みんな上から目線だね
世界共通語を喋る０歳児

東京都

望月良太朗

桜舞いこころ浮かれる通学路
流れ星眺めた君を見つめてた
水たまりはしゃぐ子どもに頬緩め
七色の虹の架け橋渡りたい
星たちに願いを込めた復興へ
桜並木立ち去り難き春の宵
春の陽が小さな愛を注いでる
振袖に包み込まれた雛鳥よ
一輪の花はどこかで誇ってる
空見上げ都会じゃ霞む星たちよ
色褪せた時の螺旋を巻いてみる
大海の先の大地に思い馳せ
澄んだ水人の心もこうあれば
山中に響く歌声木霊たち
「ここはどこ？」さざめく風に道訪ね

竹原市

元吉慶子

父の椅子座れば父の見た景色
我が街をしみじみ歩くすでに旅
父の遺産かふるさとの顔温かい
真っすぐに今日に向き合う眉をひく
車椅子かこむ絆の温い風
陽だまりへ話題豊富な孫と居る
絹ずれの余命大事に亡母を着る
負けて尚礼の深さがいとおしい
夕やけも封書に入れて出す手紙
ちぐはぐな話静かに聞く介護
大地に足踏んばり育つ被災の子
訪ねたい古寺映像の落葉ふむ
山茶花満開掃く花びらも温くいる
ふくらみはきっと花芽だ恋人よ
花冷えも温い仲間と春の句座

和歌山市

森口美羽

ほろ酔いで思いの丈を吐いている
苦労したことは言わないくすり指
丸くなりたいとあなたを見て思う
忙しく生きているのも幸だろう
人間もさまざま私色で溶く
我慢した月日今では懐かしい
渡り鳥とはわたくしのことですか
ぼろくそに言う人褒めてくれる人
満面の笑顔わたしのおもてなし
愛情があるからきついことも言う
面目を両天秤にかけておく
幸せのゲーム長くは続かない
わたくしを走らせている見栄一つ
一票の重さへ汗を滴らす
大阪の人人人の渦に酔う

和歌山県

森　下　よりこ

柿もみかんも熱中症の痕がある
今は昔今度あの世で待ち合わせ
うやむやに丸くおさめるのもヒト科
妹に兄ちゃん初のお年玉
孫の振袖仏さまにも見せてあげ
友だちはあるとも思うないとも思う
大関の相撲見ようと早じまい
ラジオ体操老いの身体を目覚めさす
事故多い田舎高齢ドライバー
のりまきに牛蒡入れたら母の味
しがらみの深さをちょっとずつ変える
夏バテせぬゴーヤの夢を褒めてやる
七十の妹今も甘え過ぎ
いつまでも私の中の青い思慕
梅雨明けて茗荷畑が賑やかに

青森市

守田啓子

失った深さを埋めるように　雪
友達でいようと海が立っている
叫んでいるのは海ですか死者ですか
少年が引き摺ってゆく防波堤
生きていく海岸線を巻きつけて
あの海鳴りはレイ・チャールズのピアノソロ
東電が海月になってゆく過程
荒野行く背黒鰯をぶら下げて
捲り切れない三月の黒い海
哀しみのえぐれたとこに海を置く
Re:Re:Re:Re:Re:胸には刃物らしきもの
人を許した夕焼けのみみずばれ
交番に届くわたしの欠けたとこ
アメイジンググレイス　海は吹っ切れた
ほんわりとこの世の隅に置くガーゼ

鳥取県

盛田康秋

傍目には平和に見える夫婦仲
八十路来て明日は我が身の送り人
ワクワクと目先ちらつく茸狩り
ありがたや虫歯にゃならぬ総入れ歯
茄子キュウリ鹿に食われて貰い食い
ドタバタと婆に急かれて寺参り
空き腹に勝る料理はありません
ギシギシと小川で回る芋車
我が家にもおいでください福の神
宇宙にも今に交通事故が出る
くたぶれて地蔵の膝で一休み
医者の門くぐれば治る子の痛み
休耕田ふえて河辺にホタル舞う
妻の酌あとでお高くつきそうだ
口喧嘩してバランスをとる夫婦

摂津市

森　中　恵美子

にんげんを誘うかたちにしだれ咲く
いさぎよく散るために今咲くのです
美しいはなしに油断してしまう
音たてて淋しきものよ飯茶碗
布団干す両手を大切に思う
枕からときどき宇宙までとんだ
父の音する母のおとして樹が太る
温泉が大好きという深い仲
こいぶみの発想もよし省略も
カリスマの女をしのぶ有夫恋
ぞうのはなもきりんのくびも愛だろう
つまずいた石にもおかげさまという
順番を崩す長生きしたようだ
ことばを編むとありがとうさようなら
痩身の樹々よ昭和を遠くする

奈良市

森中博一

逆光で見る人生の奥深さ
満ちるより少し欠けてる方が良い
神さんにお任せしたら楽になり
道徳に心を添えてが難しい
黒幕は一人静かに蜜なめる
ほんのりと温い幕引き家族葬
一万歩越すと褒美に飲んでいる
焼酎で渋を抜かれた様になる
スパークの火花でできた私の子
遷宮は千年の智恵守りつつ
いそいそと八咫の鏡も新殿へ
はじまりは朝の鏡の笑顔かな
星の夜妻横に居るこの不思議
永らえて東京五輪ご一緒に
生き延びて良いことくつあったかな

松原市

森松芳香

母の日に母が生きててくれたなら
欲しい物それはみんなの笑顔です
豆ごはんとても美味しく炊けました
かげろうの向こうやさしい母がいる
自分から謝る事に決めました
神様にすがりつきたい時もある
幸せの音が聴こえてきましたよ
まんねりの夫婦でいつも笑ってる
あなた見て女の脈が揺れました
ときめいて春の日ざしに飛び立とう
プライドをいっぱい詰めて貝になる
逃げていく記憶がとても悔しくて
流れ星わたし叱りに来たのかも
計画を立て直そうよ明日がある
しくしくと泣いた日があり今がある

尾道市

守　本　トヨコ

福は内鬼も子連れで来ておくれ
負けるなよやれば出来ると父の声
しゃきっとせえ夢の中まで父の喝
村中を集めて父の盆踊り
母が居る雨の日うれしかしわ餅
好きなだけ食べろと祖母の手打ちそば
古里の納屋に置かれし五升釜
飲みっぷり好きだと父が惚れた夫
守られてひとりぼっちも二十年
倖せは湯舟に肩まで沈むとき
わが腕に形見の刻をきざむ音
グイ呑みと美味いお酒を亡夫に買う
一億の中のひとりと夢で遇う
まだふたつ越えたばかりの八十路坂
川柳は浄土へ還えるその日まで

米子市　森脇麗

ノーメイクではおんな戦に勝てません
振り向いた私に風が恋をする
ピンク着て春を一手に引き受ける
ひと彩を刷いて私を染めあげる
死ぬるまで女おんなの炎を抱いて
揺さぶられ燃えるものありまだ女
弱いからすがる大樹の身を案じ
幸せは元気な夫が居てくれる
休肝日無いままに来た夫の酒
安堵して笑い袋が弾けだす
美しく響く言葉に騙される
サービス過剰受け手もどっと疲れ出る
こどもの目いつも向いてる親の背な
日本語をきれいに話す友が好き
頑張れと言わないそっと肩を抱く

大阪市

門野隆司

ウルトラマン立てよ地球のてっぺんに

派手かしら妻の口癖外出着

ひっそりと暮してたのに鳴る電話

大原女が売れば絵になる京野菜

楽しむの白髪を染めて爪染めて

妻来たも娘行ったも木の芽時

坊さんもレジャーとやらで日が合わず

禁煙は孫と誓って出来たもの

ネクタイを締めて親方解説者

金の無いのが強味やと痩せ我慢

振り袖の孫見て辿る二十年

スーパーのチラシ睨んで朝の妻

意地悪なクイズ考え孫を待つ

おもろいな大阪弁の言い訳は

幸せはもっと身近にほら其処に

神戸市

矢沢和女

無頼派の胸襟ひらく花一枝
自画像の汚れを剥がす現在地
咳ひとつ遺して風にさらわれる
十指ひらくぽつんと騙し絵の欠片
水面ざわざわ噂ばなしが好きらしい
山の端からするりと堕ちる偽善者よ
生い茂る不穏へさらりジョークなど
極めれば白　春の序曲の予感して
深刻な話を拒むマグカップ
日向ぼこ　ひねもす遠い日のうつろ
葬列を見送るウグイスの喚声
辞書にない想いが溢れ出る山河
極上の言の葉とかすさくらさくら
春芽吹く　綴ってもなおファンタジー
敗けた日は少し多めのバルサミコ

鳥取市

安場紫音

春なのに涙がホロリ恋かしら
しかられて畳むしって涙して
不足分私の愛で足りますか
今が良い今が大事不足なし
新年も畳も妻も前のまま
エテコ顔喧嘩の後の仲なおり
問いただす口も体もふるえてる
足が触れ新婚みたいこたつ中
また来るよ母のまなざし手が振れず
ジダンダをぶつけられるは夫の胸
紅をさす素顔も良いが薄化粧
ポケットにいっぱい詰めた甘い夢
不平など言わずにかれた庭の花
反対の意見にそって耳をかす
手のひらで遊ぶあなたは嬉しそう

羽曳野市

安本美喜

百歳まで頑張りまする寄り添うて
恨みなし夫に貰った風邪なれば
人生の無駄な時間は物探し
土筆摘む杖をどこかに置き忘れ
散り落つるポピー炎の色のまま
音信を問うてもみたし薫風に
メールでは心をこがす文打てず
夏負けを防ぐ食前酒はピンク
三日三夜通し家出のうかれ猫
酔い足らぬままに凋める酔芙蓉
飾られて聖樹眠れぬ木となりぬ
どんぞこに落ちてもボール跳ねあがる
思いきり漫画の読める春や春
泣くかも知れぬのにハンカチを忘れ
背筋しゃんとおばあさんに見えるわよ

松山市

山内郁代

百花繚乱この世の愛はまやかしか
母の岸へ迷わず還れ流し雛
遠会釈こころの春に触れました
泣いて笑ってお伽噺の中にいる
キラ星の女に迫る曲がり角
許せない言葉は月で浄化する
わたしより淋しい鬼と手をつなぐ
あどけない話の底に棲む智恵子
心のエステ白洲正子の粋に酔う
風の盆赤い蛍が逢いに来る
過去はもう振り返るまい流灯よ
人に飽き人に溺れて黄昏れる
後の祭りの笛をオンナが吹いている
命とは何たらい回しの世が寒い
火の河を越えてエデンの園で逢う

鳥取市

山岡紀子

難病を個性に変えて振り向かず
看護師の笑顔も添える介護食
呼吸器に朝の挨拶忘れない
しゃべれないわたしに代わる伝の心
（「伝の心」とは瞬きなどで操作できる障害者用パソコンの愛称）
リハビリで歩いた十歩宝物
おしゃべりもおしゃれもしたいまだ女
ばあちゃんのうれし涙はピンク色
病院で初春を迎えて三年目
好奇心すこし残して古稀となり
初笑い孫の笑顔で倍になる
文字盤でナースに告げる電池切れ
春の海詩人になってしまいそう
ほっぺたが緩んでしまういい知らせ
心地よい夢を貰ったコンサート
お荷物になってごめんと息子にわびる

三木市

山口ヨシエ

菜の花の真ん中春の陽を掬う
春の海ほろほろ揺れる去年今年
こころ無にさくら吹雪を浴びている
柿若葉炎えるわたしの小宇宙
許されて笑顔弾ける春の風
そこそこの幸せに酔うはるの酒
平和っていいね華麗な大花火
太陽がいっぱい抱きしめる命
炎昼の森に童話を拾うてる
断ち切れぬ思い沸沸桐の花
ゆったりと背伸びしないで輪に入る
こみ上げて途中下車する赤い靴
百態のドラマに沈む流れ雲
道半ば真摯に生きたおんなの賦
翳りない一日感謝の箸を置く

鎌倉市

山崎修二

新しい出合いに靡く老いの靴
ときめきが老いの旅路に灯をつける
老い忘れタンゴのリズム刻んでる
余命表趣味が支えの絆です
原石を磨くあなたの腕次第
生き方を叩き込まれた戦中派
全身で歩いた道に悔いはない
人柄が滲む親父の立ち姿
怠けると遺影の父がくしゃみする
褒められて人間かどが取れてくる
耐えるのもチャンスを生かすのも勇気
童話には夢を育む森がある
ふる里へ命の音を聞きに行く
天命が油断を突いて来る怖さ
大落暉今日という日を締め括る

大阪市

山崎珠生

あなたとの絆深まる愛の鍵
情事にはほんまに鈍い私です
待っとくと言われときめく恋心
学舎も生徒が減って廃校に
奇妙とはあんたと一緒になったこと
この顔は劣性遺伝と親うらみ
大自然何もせんけど腹は減り
国宝富士いつも見ている銭湯で
退職後ひとり生活海外で
外は雪中は囲炉裏でキリタンポ
月明かり猪口に花びら落とす影
ほっといて喋りはわての身上や
初デート初めて貰った甘いチュウ
命懸け私を守る言うたやん
イケメンは普通にしても目立つ人

東かがわ市

山崎はつ恵

緊張が解けて笑いが止まらない
ふり向けば笑い話になった過去
じれったい話畳があくびする
不覚にも心積りが出来てない
僅差なら少しアクセル踏めばよい
生きている空がこんなにきれいです
許したら空まで碧く澄んできた
深呼吸生きる力を肚に溜め
自己嫌悪寝返りうつ度また募る
巻きついた小指の糸が身をしばる
親切が過ぎてお茶まで出すはめに
どの顔も博士に見える新生児
甘いもの食べて女はよく笑う
飛ぶ鳥よ人間何に見えますか
自由とは紙一枚の軽さかな

寝屋川市

山　下　あや乃

セラピー馬我が子に笑顔ありがとう
のぞくのは帰宅拒否の古本屋
欲がすぎとどのつまりが貧乏くじ
つらい事笑いに変える友がいる
古写真片づけられず眺めてる
病む母に抱きつきたくて肩なでる
ささやいているつもりでも聞こえます
親しけりゃ親しい程に言いづらい
気配すら感じなくなる老夫婦
未来の子大事に育てといわれてる
誓約書夫婦の間で増えていく
年の暮れ宅急便はお隣りへ
亡き母に聞けない気持ち悔しがる
つれあいは桜咲く頃そわそわと
あの人とは卒業したと言わせたい

富山市

山下功

わたくしの器を読みに来るお酌
父の日は栓の抜けない酒が来る
入れない私を急かす自動ドア
地境も知らずに継いだうちの山
台風が来て尖閣の海静か
干し物のように点滴替えて行く
似た仕草この子が僕になる予感
みちのくの幸ひとつ足す市場籠
蕗蓄もすこし朧なハイボール
ゆるキャラの涙を知っている日陰
眠る子へひと足遅い大花火
誓詞など読んだかなあと共白髪
黄砂さえ自由の国が良いらしい
君が来るただそれだけで良い土産
譲り合う雪の小道にある昭和

鳥取市

山下凱柳

川柳の世界に嵌りボケ防止
息抜きに始めた趣味で息抜けず
ぬるいお茶無言ですする老夫婦
何時の間に話ずれてる老い二人
加湿器の力借りたい夫婦仲
今日の日を妻の支えで生かされる
うたた寝の妻に毛布をそっと掛け
満ち足りた心になぜか隙間風
ケンカしてグッと飲み干す渋いお茶
疑惑取れやっとこさ妻口をきく
羽伸ばしたいなのに亭主がまとい付く
女房の鋭い勘にびびるなあ
妻と子が固まり何か謀
まあいいか揃わぬ眉のまま出かけ
気取ってもＤＮＡは嘘つかぬ

阪南市　山田　かよこ

祝い箸神も一緒にめしあがれ
労いの言葉世間を丸くする
赤ちゃんの匂いが包む新家族
さいならの後で気が付く思い遣り
ほかしたの何んであんたは拾うのよ
へこむほど蹴ったバケツに恨まれる
この口が激し過ぎたと悔い残る
黄昏を遅らせたいと焦る日々
そないしな虫にも命あるんやで
早よしいやいらちが個性叫んでる
かまい過ぎ後で気に病むお節介
出ししぶるケチが服着たような人
七十五せやな言わない反抗期
リズム感無くてカラオケ盛り上げる
生き延びた昭和平成次は何

東京都

山田こいし

おっ早うと元気な声で来る患者
水盤に男を生ける花鋏
経験は無いが妊婦は辛そうだ
人間も最初は裸だったのに
六年間成長しないランドセル
母さんがわらべ歌から戻らない
父さん指母の乳首のように吸い
一輪車少女は空を翔けている
いっすんのむし　いっすんで生きている
梅が咲き仏間の窓を少し開け
胃カメラが桜並木を通り抜け
ドライブは私に　世渡りは妻に
肉太の宛名で父がやって来る
母さんがをの字になって針仕事
津波を憎み海には感謝する漁師

奈良市

山田順啓

熟年という今人生の旬にいる
幸せの振りして福を呼び寄せる
買い物が楽しい内は大丈夫
喝采の嵐に過去がこみあげる
本番に弱い男の助走癖
ていねい語磨いて強かに生きる
王様の裸を誰も知らせない
天国は指定地獄は自由席
近道をされて不満な万歩計
惚れ直す余地を残している小皺
ものづくり蛻の殻になる日本
脱原発叫ぶ乳房を尖らせて
旗日には気負わず旗を日に晒す
地球史に束の間ヒトの泣き笑い
青空を一枚神の処方箋

松江市

山根邦代

健康は笑いを誘う孫といる
励ましがあるからつらい坂登る
電話には弾んだ声で出ています
災害の地に太陽を戻したい
まだまだと顔に心に薄化粧
塩梅でおいしいと言う目分量
年重ねおしゃれ心を取り入れる
大口で笑うと元気湧いてくる
比べてはならぬと思うても比べ
時々は自分を褒める事にする
褒め言葉どんな薬もかなわない
慰めも在り来たりでは掛けられず
新調の服は心をおどらせる
感謝です夢中になれることがある
プラス志向これで行こうと決めている

神戸市

山根弘子

日暮道えんえん続く愚痴話
ワンテンポおくれた老のもどかしさ
才能を生かす宇宙は無限大
叱るより褒めて育てた母の智恵
老二人ただ今傘寿通過中
友が来て夫婦喧嘩もそこそこに
疑問符を捨てて八十路の坂を越え
踏まれてもくじけず生きた戦中派
ライバルと鎬削った古机
したたかに昭和を生きた子沢山
九十九の父の泳ぎに血が躍る
愛してる一言信じ五十年
冬衣も一枚脱いで春を着る
旧姓で私呼んでる里の道
苦労など忘れちゃったと母笑う

安来市

山根雪代

生き残り賭けて雑草石の下
樹の幹にロマンがあった蝉の殻
遺伝子が間違いないとだんご鼻
突然で神も慌てる恋の花
天狗にはならないように履く草履
晩学の辞書に出てくるケセラセラ
信号の流れに向きは変えられぬ
国会に色とりどりのカメレオン
好奇心歩く方へとついてくる
横車押して一人の闇となる
太陽に勇気貰ったにぎり飯
頃合いを計り掬った人魚姫
人生を研いで砥石にあるくぼみ
無位無欲本番だって怖くない
電報のようなメールで足る世相

倉吉市

山松みち子

忘れ物したように鳴く秋のセミ
ぽちぽちと歩幅に秋が進んでる
青空が哀しい色に見えてくる
半額のアイスを詰めた胃が冷える
月は黒色ストレスの長い夜
書籍から一冊を抜く指に熱
移動販売皆さまを飢えさせぬ
女子だってほしかったのに鯉のぼり
被爆国平和描けぬ「核の傘」
握り拳をひらいて熱を下げている
甘い水呑んだホタルは早く死ぬ
日ノ丸にあすの太陽入れたはず
天国は海の底にもありますか
いまいまし一茶の雪が降ってきた
バケツの中に降る雪が丸く積む

弘前市

吉川ひとし

母の骨振りむくたびに脆くなる
雨降りも亡父の樹だけは濡れてない
負の遺産背負って歩く金次郎
過疎の地に住んでよかったナァー蛍
大らかで愚痴を言わない丸い石
自分史の色が微妙に薄くなる
ポケットの拳は何も掴めない
恩返し出来ない鶴は紙のまま
親切にされた焔はよく燃える
妥協して新たな水の臭い嗅ぐ
妻の手が僕のポケットまで探る
藁一本老いの反抗期は長い
一粒の涙が人を裏返す
一夜漬夕陽も少し混ぜてある
瓦礫から未だに熱いメッセージ

大阪市

吉川弘泰

走ってもゴールが無いのよ八十路には
人生もプラン燃えたら年を取り
ジュニア等を褒めて伸ばして大人にし
ハイカラな時計に合わすネイルして
娘とてその時が来る嫁ぐ日が
我が妻よ乙女の気持ち引きずるな
ちょっと言うないしょ話に花が咲き
夫婦とて褒合いすれば共白髪
夕焼けで道に画いた二人影
愛しいな妻を抱く夢白い雲
酒好きとますます運ぶ斗酒の膳
一杯の酒に目刺しが食に合い
覗いたら財布の中は諭吉留守
遺書を書くそれでも揉める遺産分け
八十路来て金箸使う長寿かな

大阪市

吉田知之

夫婦共耳遠くなり喧嘩ごし
井戸塀の議員今では語りぐさ
旗日には休み取っても旗出さず
きつかった父母の躾で今がある
院号もお布施次第という話
大事件大さわぎしてすぐ忘れ
名を忘れ軽い会釈で急ぎ足
整体師の耳学問に癒される
天変地異の多さ地球のぼやきかも
笑顔もらい笑顔返せば知らぬ人
ひいじいちゃんと呼ばれて名前出てこない
梯子して旨い旨いとリポーター
馴れぬ家事薬つけても皹だらけ
立つたびによいしょよいしょで苦笑い
犬散歩手ぶらで平気非常識

貝塚市　吉道　あかね

頼らない寄り掛からない第二章
甘えると風はするりと裏返る
そんなに弱くないが強くもないのです
諦めがいいのは長所かも知れぬ
母の歳になって答を貰ってる
日向水私の冬が消えてゆく
老眼になって世間が見えてくる
笑顔には笑顔あなたが振り向いた
感謝する心でいれば吉となり
それからを笑い話にして夫婦
口角を上げて呼び込む福の神
この人の側で生涯米を磨ぐ
黒を着てカトレアになるバラになる
未使用の笑顔をひとつ持っている
六十五年金貰う顔になる

竹原市

六田半徳

名優は帽子残して風になり
人形が話してくれた夢を見た
何一つ出来ない人の理想論
おみくじは無理はするなと末吉で
春蘭は古里はなれ庭で咲き
孫の靴大きくなって笑み交わす
三月経ち絵具発する春の色
暗雲を掃き清めるか強い風
忠告の後でゆっくりマスクする
我が家でも箱物処分実施中
留守居して妻の働き思い知る
食べるほど薬を飲んで今日を生き
大津波日本列島試される
茶柱の立ち上がるのを待ってみる
胸を張り祝祭日に日章旗

大阪市

若本安代

横町は素敵な出合いある予感
三千院雪舞う中で恋さがし
杉玉で新酒知らせる三輪の里
きき酒の大きめ器笑みこぼれ
青い実は赤く熟すを怖がらず
手のひらでやさしく運をつつみ込む
野の花は咲く喜びで媚はない
前向きに生きる女の帯の位置
荒れる子に体を張って諭す母
見返りは貰うことなし母の愛
懐メロは場をなごます術を持つ
苦も楽もカバンに入れて旅佳境
深夜便眠れる夜の子守歌
初めての感動ツアーナイアガラ
めきめきと見えてきそうなｉＰＳ

熊本市

鷲頭白頭

トントントン母の味へはほど遠く
眉間とは相反してる胸の内
見せ浴衣花火に祭り超多忙
高齢者のびのび生きて白寿待つ
嫁ぐ娘の写真一枚額に入れ
酒酔いです健忘症じゃありません
キャロライン国民酔わせ馬車で行く
節分の鬼にもなれず独り撒く
人生のヤマは還暦過ぎてから
大脱走子ジカは山で新仲間
当たり待つその日々こそが至福なり
ひばり舞い物価も一度に上がる春
ハプニングスリルもあったね金婚式
朝市で野菜売るより笑顔売り
また来てね背で聞く母の足弾む

鳥取県

和田三郎

本日の特価商品だけを選る
廃校舎幼い頃の影キラリ
天罰を待てずマナーに期待する
うどん飲むことで胃カメラリハーサル
道順を教えて後ろ姿追う
苦労かけたなスコップのような手だ
弱者には要る小銭すら拾えない
紫外線カットの服を着て暑し
休日の雨はゆっくり寝るチャンス
炊き出しの米粒ほどのボランティア
老人の知恵に長寿のヒント得る
食卓へ伝い歩きの子が迫る
一杯の仕草が誘う飲み仲間
活力が失せるライバルとの別れ
初せりの礼儀をつくす最高値

河内長野市　渡邊　修

池ポチャで大入袋逃げて行く
ドラフトで一位どうしが投げて打つ
色分けで夫婦で書いた通院日
きれいだよ言えば母さんその日ハレ
誰にもやらん貯めた小金は使い切る
パパ野球ママはドラマでボクゲーム
マジックショウ貸した千円消えたまま
iPS常識超えた宝物
使いましょタンスの諭吉風邪を引く
えべっさん賽銭眺め渋い顔
二五度のいもと一緒に夢枕
二度も枯れ三度目咲いたすごい花
くすりづけ飲んだつもりが数合わず
ナツメロは過ぎし私の玉手箱
よそゆきにママを間違う幼稚園

静岡市

渡辺芳子

よくもまあここまで生きて来たものよ
これでいい思わないけど変れない
当り前みんな違(ちが)ってみんないい
ぐちは皆一人言ですＯＦＦにする
心の中見すかすメガネ無いが良し
悲しいな年相応で生きている
生きられる親友がいる八十路坂
もう鏡この年以上見たくなし
何事も心おだやか受け止める
老の日は心で思い出楽しんで
振り返りふと立止る愛に逢い
久し振り一瞬虹にめぐり逢い
ありがとう何度も言って今日暮れる
何事もなく過ぎし日に感謝
まだ白紙今日の日記に何書ける

尼崎市

渡辺柳明

合格の祝い色紙に駿馬描く
戦略を秘めた菓子箱二重底
年新た地球踏まえて背伸びする
三寒四温住めばよい街あまがさき
先を読め株の先など誰が知る
停年後急がず騒がずマイペース
今日も雨相合傘で脈乱れ
誕生日ふだん伸ばさぬ腰伸ばす
貧乏と淋しさ染みる年の暮
霧の朝金閣寺より東山
天高し地球に活きて感謝です
ひとりよし二人なおよし秋日和
恥らいも色気も捨てて似合う齢
横道で学んで帰る芸の道
どの席も勝手に眠る夜行バス

光武　悦子…… 711
光守たもつ…… 712
南　　正代…… 713
宮﨑　咲貴…… 714
宮田　　輝…… 715
宮野みつ江…… 716
見山　温子…… 717
宮村　典子…… 718
宮守　正博…… 719
向井　　清…… 720
武藤　敏子…… 721
村上　久美…… 722
村上　氷筆…… 723
村山　佳子…… 724
毛利　由美…… 725
望月良太朗…… 726
元吉　慶子…… 727
森口　美羽…… 728
森下よりこ…… 729
守田　啓子…… 730
盛田　康秋…… 731
森中惠美子…… 732
森中　博一…… 733
森松　芳香…… 734
守本トヨコ…… 735
森脇　　麗…… 736
門野　隆司…… 737

〔や～よ〕

矢沢　和女…… 738
安場　紫音…… 739
安本　美喜…… 740
山内　郁代…… 741
山岡　紀子…… 742
山口ヨシヱ…… 743
山崎　修二…… 744
山﨑　珠生…… 745
山崎はつ恵…… 746
山下あや乃…… 747
山下　　功…… 748
山下　凱柳…… 749
山田かよこ…… 750
山田こいし…… 751
山田　順啓…… 752
山根　邦代…… 753
山根　弘子…… 754
山根　雪代…… 755
山松みち子…… 756
吉川ひとし…… 757
吉川　弘泰…… 758
吉田　知之…… 759
吉道あかね…… 760

〔ら～わ〕

六田　半徳…… 761
若本　安代…… 762
鷲頭　白頭…… 763
和田　三郎…… 764
渡邊　　修…… 765
渡辺　芳子…… 766
渡辺　柳明…… 767

火口　彦太…… 645
菱木　　誠…… 646
日谷　　寛…… 647
平賀　国和…… 648
平木　公子…… 649
福井　綾子…… 650
福重　美子…… 651
福嶋　虹舟…… 652
福島　弘子…… 653
福田　勝治…… 654
福呂　秀子…… 655
藤井美智子…… 656
藤田　澄子…… 657
藤田　千休…… 658
藤田　武人…… 659
藤田　雪菜…… 660
藤塚　克三…… 661
藤原　　昭…… 662
藤原　鬼桜…… 663
藤原　大子…… 664
古田　千華…… 665
古田比呂子…… 666
古谷　節夫…… 667
穂口　正子…… 668
堀田　温子…… 669
堀　かずこ…… 670
堀川　静香…… 671
堀部ゆき子…… 672
本田さくら…… 673
本田　智彦…… 674
本田みちる…… 675
本間　　陽…… 676

〔ま～も〕

前川千津子…… 677
前川　善之…… 678
前田恵美子…… 679
前田　紀雄…… 680
前田　真弓…… 681
前田　洋子…… 682
前中　　勝…… 683
真島久美子…… 684
増田　啓次…… 685
増田　隆昭…… 686
増田めだか…… 687
増田わこう…… 688
馬田みどり…… 689
松井　文香…… 690
松浦　英夫…… 691
松岡　純子…… 692
松熊　克衛…… 693
松下比ろ志…… 694
松蔦　聖一…… 695
松田　　總…… 696
松本あや子…… 697
松本はるみ…… 698
松本　理子…… 699
真鍋心平太…… 700
丸山　一之…… 701
丸山　健三…… 702
丸山　孔一…… 703
三浦千津子…… 704
みぎわはな…… 705
三谷　圭角…… 706
三谷　白黒…… 707
三谷　直男…… 708
三谷待太郎…… 709
道上　芳子…… 710

田村ひろ子…… 581
丹下　凱夫…… 582
次井　義泰…… 583
辻上よしみ…… 584
辻岡　末雄…… 585
辻口風来坊…… 586
恒弘　衛山…… 587
津村　律子…… 588
てじま晩秋…… 589
寺井　幸女…… 590
寺井　柳童…… 591
土居　新山…… 592
土井　輝恵…… 593
土井　舞蹴…… 594
藤解　静風…… 595
渡嘉敷唯正…… 596
土岐　昌子…… 597
栃尾　奏子…… 598
富田　汎美…… 599
冨永　恭子…… 600
富永　惠子…… 601
鳥居　　宏…… 602

〔な～の〕

永井　縣祚…… 603
中井　虎尾…… 604
永井三津子…… 605
中川　　修…… 606
中里はこべ…… 607
長島　敏子…… 608
中園　　功…… 609
中薗　　清…… 610
中野　健吾…… 611
名嘉真静子…… 612
中前　幸子…… 613
永見　心咲…… 614
中南　杏子…… 615
中村　喜樂…… 616
中村　　惠…… 617
中村　　毅…… 618
中村　伸子…… 619
中山　春代…… 620
鍋嶋　澄子…… 621
難波扶実子…… 622
二階　幸子…… 623
西　きぬ子…… 624
西川　國治…… 625
西川　更紗…… 626
西村　寛子…… 627
能見　慶一…… 628
野口　晶子…… 629
野口　雄次…… 630
能勢　利子…… 631

〔は～ほ〕

萩原　狸月…… 632
橋谷　靜江…… 633
橋本　典子…… 634
畑中　節子…… 635
羽田野洋介…… 636
花岡　順子…… 637
濱口　フジ…… 638
早泉　早人…… 639
林　　昭三…… 640
針生　和代…… 641
稗島　照代…… 642
東内美智子…… 643
東山　康江…… 644

坂口　公子…… 515
酒田　浩司…… 516
坂本　加代…… 517
坂本とも湖…… 518
櫻﨑　篤子…… 519
澤村　哲史…… 520
柴田　敬子…… 521
柴本ばっは…… 522
嶋本　喬…… 523
清水　英旺…… 524
下地　安子…… 525
釋　翔空…… 526
若年　幸子…… 527
新海　信二…… 528
神野きっこ…… 529
神野千恵子…… 530
菅　弘子…… 531
菅田かつ子…… 532
杉野　羅天…… 533
椙元　世津…… 534
杉山　精子…… 535
助川　和美…… 536
鈴木　楽鬼…… 537
酢谷亀与子…… 538
諏訪　夕香…… 539
仙波八千代…… 540

〔た～と〕

高木　敦子…… 541
高木　道子…… 542
高嶋　勝…… 543
髙杉　力…… 544
高野　不二…… 545
高橋　敬子…… 546
高橋　仁志…… 547
高畑　俊正…… 548
高原かおる…… 549
田口　和代…… 550
田口　清帆…… 551
竹内いつみ…… 552
竹田芙美子…… 553
武林　里美…… 554
竹森　雀舎…… 555
多田　契子…… 556
多田　雅尚…… 557
田付　絹枝…… 558
立蔵　信子…… 559
館野加奈美…… 560
田中　幹啓…… 561
田中　恵…… 562
田中　敬子…… 563
田中　天翔…… 564
田中のりお…… 565
田中　尚…… 566
田中　弘…… 567
田中　道博…… 568
田中ゆみ子…… 569
田邊　浩三…… 570
田辺　進水…… 571
谷川　憲…… 572
谷口回春子…… 573
谷口　東風…… 574
田畑　宏…… 575
田原寛十郎…… 576
玉井　公恵…… 577
玉木あさ子…… 578
たまきさちこ…… 579
たむらあきこ…… 580

〔か～こ〕

貝塚　正子…… 452
加賀田志延…… 453
角尾いさむ…… 454
桟　　舜吉…… 455
笠田　幹治…… 456
片木　雅司…… 457
門井　　孝…… 458
加藤　正二…… 459
門村　幸子…… 460
金沢　節生…… 461
兼田　定廣…… 462
株元　玲子…… 463
鴨田　昭紀…… 464
川上　澄子…… 465
川口　　武…… 466
川久保睦子…… 467
川﨑　青児…… 468
河田　洋子…… 469
河本　照子…… 470
川本真理子…… 471
木咲　胡桃…… 472
木嶋　盛隆…… 473
木田比呂朗…… 474
北川やすの…… 475
北澤　稠民…… 476
北原　昭枝…… 477
吉川　哲矢…… 478
木村　青生…… 479
木村　忠義…… 480
木村　　勤…… 481
木村マユミ…… 482
木村　宥子…… 483
清川　玲子…… 484
楠本　和代…… 485
久世　高鷲…… 486
國實　　力…… 487
久保田半蔵門…… 488
久保　道子…… 489
久保　和友…… 490
倉橋　悦子…… 491
栗田　忠士…… 492
黒目　英男…… 493
桑名　孝雄…… 494
源田　啓生…… 495
小池　幸子…… 496
合田　蓬生…… 497
甲田　靖子…… 498
上月　格男…… 499
小金澤貫一…… 500
古川　博子…… 501
輿水　　弘…… 502
小谷　　賢…… 503
小林　和之…… 504
小林信二郎…… 505
小林　妻子…… 506
小牧　信男…… 507
小松　紀子…… 508
近藤　修二…… 509
近藤　秋星…… 510

〔さ～そ〕

佐伯　博一…… 511
斎藤　泰子…… 512
酒井勇太朗…… 513
坂上のり子…… 514

石田ひろ子…… 385
石橋　直子…… 386
石橋　優明…… 387
磯島福貴子…… 388
磯部　義雄…… 389
市川　雄太…… 390
井上　忠貞…… 391
井上つよし…… 392
今津　　隆…… 393
今村　静枝…… 394
岩口　翔太…… 395
岩﨑　　實…… 396
上嶋　幸雀…… 397
上田　和宏…… 398
上田　　仁…… 399
上田ひとみ…… 400
上田　陽子…… 401
植竹　団扇…… 402
上出　　修…… 403
上野　楽生…… 404
上原　　翔…… 405
上山　堅坊…… 406
魚住　順子…… 407
臼井　　淳…… 408
碓氷　祥昭…… 409
内田志津子…… 410
宇都満知子…… 411
梅澤　盛夫…… 412
浦　　一夫…… 413
浦　かつ美…… 414
枝本　光子…… 415
大内　節子…… 416
大浦　初音…… 417
大浦　福子…… 418
大久保泰子…… 419
大治　重信…… 420
大下　規代…… 421
大島まさる…… 422
大島美智代…… 423
大田かつら…… 424
太田としお…… 425
太田　由子…… 426
大坪　一德…… 427
大西　將文…… 428
大西　晴雄…… 429
大野たけお…… 430
大葉美千代…… 431
大前　安子…… 432
大森　昭恵…… 433
岡﨑惠美子…… 434
岡﨑美知江…… 435
岡田　幸生…… 436
岡野　一幸…… 437
岡村　千鳥…… 438
岡本　　薫…… 439
小栢こずえ…… 440
小川　イセ…… 441
小川　道子…… 442
奥澤洋次郎…… 443
奥園　敏昭…… 444
奥田　豊枝…… 445
長川　哲夫…… 446
長西　昭好…… 447
小野　鶴子…… 448
小野真備雄…… 449
尾畑なを江…… 450
小山マキヨ…… 451

山崎　武彦…… 324
山下　節子…… 325
山田　耕治…… 326
山田　葉子…… 327
山中　康子…… 328
山根　妙子…… 329
山野　寿之…… 330
山室　光弘…… 331
山本　蛙城…… 332
山本希久子…… 333
山本　半錢…… 334
山本　三郎…… 335
山本　正光…… 336
山本　昌代…… 337
山本　義子…… 338
雪本　珠子…… 339
横田　春名…… 340
横山　捷也…… 341
吉井菜々子…… 342
吉内タカ子…… 343
吉岡　　修…… 344
吉田喜代子…… 345
吉田　弘子…… 346
吉田　陽子…… 347
吉村久仁雄…… 348
米澤　俶子…… 349
米田　水昇…… 350
米田　恭昌…… 351
米原　雪子…… 352

〔ら～わ〕

両川　洋々…… 353
若松　雅枝…… 354
渡辺　富子…… 355

一　般

〔あ～お〕

相見　柳歩…… 358
青砥たかこ…… 359
赤井　花城…… 360
明石　幸風…… 361
赤松ますみ…… 362
秋藤　敦子…… 363
秋山喜太郎…… 364
浅井　公平…… 365
蘆田　利嘉…… 366
東　　竹水…… 367
足立つな子…… 368
天根　夢草…… 369
あまのとーな…… 370
雨野　雷坊…… 371
荒川　鈍甲…… 372
荒木　郁子…… 373
荒巻　　夢…… 374
安藤　嘉子…… 375
飯野　菖子…… 376
生田　和之…… 377
井倉　和子…… 378
池岡たけし…… 379
池下　京子…… 380
池田貴佐夫…… 381
池田たか子…… 382
井澤　壽峰…… 383
石井　華蓮…… 384

福西　茶子…… 256
藤岡　りこ…… 257
藤井　宏造…… 258
藤井　寿代…… 259
藤井　則彦…… 260
藤井　文代…… 261
藤井　正雄…… 262
伏見　雅明…… 263
藤村　亜成…… 264
藤原　桂子…… 265
藤原ほのか…… 266
古川　奮水…… 267
古久保和子…… 268
古田　太虚…… 269
坊農　柳弘…… 270
星野　育子…… 271
細田　裕花…… 272
堀　冨美子…… 273
堀　正和…… 274

〔ま～も〕

前　たもつ…… 275
前田　楓花…… 276
まえでとよこ…… 277
牧野　芳光…… 278
牧渕富喜子…… 279
政岡未延子…… 280
増井ヨシ枝…… 281
升成　好…… 282
桝本　宏子…… 283
俣野登志子…… 284
松岡　篤…… 285
松尾美智代…… 286
松尾柳右子…… 287
松尾　和香…… 288
松川　行男…… 289
松原　寿子…… 290
松村　里江…… 291
松本知恵子…… 292
松山　芳生…… 293
三浦　強一…… 294
三島　淞丘…… 295
水谷　正子…… 296
水野　黒兎…… 297
宮尾みのり…… 298
三宅　保州…… 299
三宅　満子…… 300
宮崎シマ子…… 301
宮園射月芳…… 302
宮西　弥生…… 303
宮本かりん…… 304
三好　専平…… 305
村上　玄也…… 306
村上　直樹…… 307
籾山　隆盛…… 308
森　茜…… 309
森井　菁居…… 310
森松まつお…… 311
森村　美花…… 312
森本　弘風…… 313
森山　盛桜…… 314

〔や～よ〕

八木　千代…… 315
矢倉　五月…… 316
安田　忠子…… 317
山内　房子…… 318
山岡冨美子…… 319
山口　不動…… 320
山口　光久…… 321
山口　美穂…… 322
山崎　君子…… 323

辻内　次根…… 188
津田シルク…… 189
土屋起世子…… 190
恒松　町紅…… 191
津村志華子…… 192
津守　柳伸…… 193
鶴田　遠野…… 194
出口セツ子…… 195
寺井　弘子…… 196
寺川　弘一…… 197
堂上　泰女…… 198
遠山　可住…… 199
遠山　唯教…… 200
徳山みつこ…… 201
都倉　求芽…… 202
土橋　　螢…… 203
飛永ふりこ…… 204
富田　美義…… 205
富田　保子…… 206
富田　蘭水…… 207
冨山ルイ子…… 208
鳥越　鬼一…… 209

〔な～の〕

内藤　憲彦…… 210
中井　アキ…… 211
中居　善信…… 212
中井　　崩…… 213
長井　善純…… 214
中﨑　深雪…… 215
仲谷　弘子…… 216
長浜　美籠…… 217
中原　章子…… 218
中原比呂志…… 219
永原　昌鼓…… 220
中村　金祥…… 221
夏目　一粋…… 222
成田　雨奇…… 223
西内　朋月…… 224
西川　和子…… 225
西口いわゑ…… 226
錦織　禮子…… 227
西谷　悦子…… 228
西出　楓楽…… 229
西村　益子…… 230
西村りつえ…… 231
二宮　山久…… 232
二宮　紫鳳…… 233
仁部　四郎…… 234
根岸　方子…… 235
野下　之男…… 236

〔は～ほ〕

萩原　大朔…… 237
波多野五楽庵…… 238
早川　遡行…… 239
林　　瑞枝…… 240
原　　章峰…… 241
原田すみ子…… 242
原　　洋志…… 243
春木圭一郎…… 244
春城　年代…… 245
板東　倫子…… 246
肥山　一文…… 247
平尾　菜美…… 248
平嶋美智子…… 249
平田　実男…… 250
平松かすみ…… 251
福井　菜摘…… 252
福士　慕情…… 253
福田　好文…… 254
福永ひかり…… 255

桑田ゆきの…… 122
桒原　道夫…… 123
源田八千代…… 124
糀谷　和郎…… 125
古今堂蕉子…… 126
小島　蘭幸…… 127
小白金房子…… 128
小谷　小雪…… 129
小谷　集一…… 130
古手川　光…… 131
後藤　宏之…… 132
後藤美恵子…… 133
小西　雄々…… 134
小林　わこ…… 135
今　　愁女…… 136
近藤　　正…… 137

〔さ～そ〕

斉尾くにこ…… 138
坂　　裕之…… 139
酒井　紀華…… 140
酒井　真由…… 141
坂上　淳司…… 142
坂部紀久子…… 143
坂本　蜂朗…… 144
佐々木満作…… 145
佐藤　忠昭…… 146
澤井　敏治…… 147
澤田　定子…… 148
志田　千代…… 149
島田　誠一…… 150
島田千鶴子…… 151
島　ひかる…… 152
初代　正彦…… 153
白川　淑子…… 154
新家　完司…… 155
杉本　義昭…… 156
鈴木いさお…… 157
鈴木　一弘…… 158
鈴木　公弘…… 159
須磨　活恵…… 160
関本かつ子…… 161
関　よしみ…… 162
瀬戸まさよ…… 163
左右田泰雄…… 164
相馬　一花…… 165

〔た～と〕

田浦　　實…… 166
高島　啓子…… 167
高杉　千歩…… 168
高瀬　霜石…… 169
高田　博泉…… 170
髙田美代子…… 171
髙野　宵草…… 172
髙橋　宏臣…… 173
多久和敬子…… 174
竹口　清信…… 175
竹治ちかし…… 176
竹信　照彦…… 177
竹村紀の治…… 178
武本　　碧…… 179
竹山千賀子…… 180
伊達　郁夫…… 181
田中　章子…… 182
田中　一眸…… 183
谷　久美子…… 184
谷口　　義…… 185
玉置　当代…… 186
丹後屋　肇…… 187

大内　朝子…… 56
大川　桃花…… 57
大久保眞澄…… 58
大隅　克博…… 59
太田　　昭…… 60
太田扶美代…… 61
大谷　篤子…… 62
大橋　政良…… 63
緒方美津子…… 64
岡本　花匠…… 65
岡本　　昇…… 66
小川　注湖…… 67
小川てるみ…… 68
奥田みつ子…… 69
奥谷　彩子…… 70
奥　　時雄…… 71
尾崎　一子…… 72
小澤　幸泉…… 73
小沢　　淳…… 74
小野句多留…… 75

〔か～こ〕

加川　靖鬼…… 76
柿花　和夫…… 77
籠島　恵子…… 78
笠井　欣子…… 79
笠嶋　恵美…… 80
梶原　弘光…… 81
柏原　夕胡…… 82
加島　由一…… 83
片岡智恵子…… 84
片山かずお…… 85
片山　　忠…… 86
加藤　茶人…… 87
金子美千代…… 88
神夏磯典子…… 89
亀岡　哲子…… 90
鴨谷瑠美子…… 91
加門　萌子…… 92
河井　庸佑…… 93
川上　大輪…… 94
川崎ひかり…… 95
河内　月子…… 96
河内　天笑…… 97
川端　一歩…… 98
川本　　畔…… 99
菊地　政勝…… 100
岸本　　清…… 101
岸本　宏章…… 102
岸本　孝子…… 103
喜田　准一…… 104
北野　哲男…… 105
北村　賢子…… 106
北山　絹子…… 107
橘高　薫風…… 108
木下　敏子…… 109
木見谷孝代…… 110
木村貴代子…… 111
木本　朱夏…… 112
楠見　章子…… 113
久保田千代…… 114
熊代　菜月…… 115
藏田　光子…… 116
倉益　一瑤…… 117
栗田　久子…… 118
黒岩　靖博…… 119
黒田　茂代…… 120
黒田　能子…… 121

索　　引　(50音順)　数字は掲載ページを示す

同　　人

〔あ～お〕

秋元　てる…… 6
浅田　隆樹…… 7
浅野　房子…… 8
足立　　茂…… 9
安達　忠央…… 10
安土　理恵…… 11
阿部　紀子…… 12
安藤寿美子…… 13
池澤　大鯰…… 14
池田　純子…… 15
石倉美佐子…… 16
石田　隆彦…… 17
石谷美恵子…… 18
石橋　芳山…… 19
石原　歳子…… 20
石原　淑子…… 21
伊勢田　毅…… 22
板尾　岳人…… 23
居谷真理子…… 24
板山まみ子…… 25
市坪　武臣…… 26
伊藤アヤ子…… 27
伊藤　寿美…… 28
伊藤　玲子…… 29
稲見　則彦…… 30
井上　桂作…… 31
井上じろう…… 32
井上　照子…… 33
井上　森生…… 34
指宿千枝子…… 35
今井　弘之…… 36
今井万紗子…… 37
井丸　昌紀…… 38
岩切　康子…… 39
岩佐ダン吉…… 40
岩崎　和子…… 41
岩崎　公誠…… 42
岩本　笑子…… 43
岩本　浩二…… 44
岩本美智子…… 45
上垣キヨミ…… 46
上田　紀子…… 47
宇都宮ちづる…… 48
内海　幸生…… 49
宇野　幹子…… 50
江島谷勝弘…… 51
榎本日の出…… 52
榎本　舞夢…… 53
海老池　洋…… 54
江見　見清…… 55

おわりに

川柳雑誌・川柳塔創刊九〇周年記念行事の一環として、合同句集を皆さまにお届け出来る事を感謝申し上げます。

わが川柳塔社のみならず、川柳界を取り巻く状況は厳しさを増しております。川柳愛好者の高齢化、活字文化が衰退傾向にあること、各世代の楽しみごとの多様化などで、結社所属の川柳人口は減少しているのが現状です。

そんな空気を払拭する一助にと、平成二五（二〇一三）年三月の常任理事会で合同句集第六集発刊を決議、準備に入りました。

早速応募用紙を作成、平成二五（二〇一三）年一〇月一二日の「第一九回川柳塔まつり」で配布することからスタートしました。なお第三回「春の誌上大会」は翌年に見送り合同句集に全力投球です。引き続き全国の傘下句会の代表者に応募用紙を発送、その間各地の句会や川柳大会で積極的に応募用

紙を配り、全国の他柳社の方々にも多大のご協力をいただくことになりました。

平成二六（二〇一四）年二月一四日の川柳塔社各地句会代表者・役員拡大会議では役員の皆さんに、一人でも多くの参加者を募っていただくよう改めてお願いした次第です。三月二〇日前後には四月一〇日の締切に備え、応募がまだの同人・誌友にハガキを一斉に投函しました。こうして役員・同人一丸となった結果、順調な応募を得て、ここに合計七七一冊の注文を頂戴出来ました。

ご応募下さった皆様には、珠玉の句が掲載されたこの合同句集は、子々孫々に誇りを持って伝えて頂けることと信じています。

あとになりましたが刊行を手伝って下さった皆さん、及び美研アート様には一方ならぬご協力を厚くお礼申し上げます。

川柳塔社　理事長

西出楓楽

○今回の句集参加者は七六〇名となりました。

○本書の体裁は平成一六（二〇〇四）年刊行の『誌寿古希記念句集』と同じく　同人・一般の二部に分け、それぞれ五〇音順に配列いたしました。今回は特に各柳社の主幹、幹部の方も御参加いただきましたが、すべて同様に扱いましたことを、おことわりいたします。

○校正は出来る限り原句に忠実に、万全を期しましたが、不行届がありましたらご容赦ください。

（川柳塔社）

担　当

西出　楓楽／江島谷勝弘／奥田みつ子／木本　朱夏
鈴木いさお／森松まつお／山岡冨美子／山本　義子

2014年（平成26年）7月1日発行

川柳雑誌・川柳塔創刊90周年記念句集　**川　柳　塔**

発行所　川　柳　塔　社

〒543-0052　大阪市天王寺区大道1－14－17
花野ビル201号室
電話・FAX（06）6779－3490
http://www.senryutou.com/
振替口座　00980－4－298479